

令和5年度  
定着支援地域連携モデルに係る調査事業  
**事業報告書**

令和6年3月29日  
特定非営利活動法人  
全国就業支援ネットワーク

## はじめに

令和5年度の「定着支援地域連携モデルに係る調査事業」では、前年度に引き続き、障害者就業・生活支援センター（以下、「ナカポツ」という。）が地域において果たす役割について、「基幹型」というキーワードのもと、地域の就労系障害福祉サービス事業所に対するスーパーバイズや困難事例に対する個別支援、地域の就労支援機関との連携について、全国の多様な地域における実践の取組をモデル的に取り上げ、その取組の過程を調査して取りまとめていった。

具体的には、まず、モデル的取組を実施するセンター（以下、「実施センター」という。）を公募により6センター選定し、その取組に対して二人三脚で指導的な役割を果たす6センター（以下、「応援センター」という）を前年度にモデル的取組を実施したセンターの中から選定し、それぞれを地域の事情やセンターの課題に応じてマッチングして、ペアを組んでいただいた。6つのペアはお互いに訪問し合い、お互いが主催する会議や研修会に参加するなどして、ナカポツとしての理念や支援の工夫・ノウハウを、半年間にわたって共有しあった。この相互の取組は、実施センターだけでなく、応援センターにとっても新たな気づきにつながり、同じナカポツとしてお互いに学び合う貴重な機会となった。

ナカポツ事業が始まってから20年以上が経過している。この間、ナカポツの果たすべき基本的な役割は変わっていないものの、障害福祉サービスや障害者雇用の状況は大きく変わり、また地域ごとの差異も大きく広がり、結果として、ナカポツに求められるものは地域によって変化してきている。これまでは「なんでも屋」と言われ、就労を軸に地域の中で必要とされるさまざまな支援を提供してきたが、本事業を通じて、ナカポツの業務の棚卸しを行い、各ナカポツが残すもの、周りに渡すものを整理・検証し、地域の中で必要とされるナカポツのあり方について改めて考える機会となれば幸いである。全国337か所のナカポツが自分たちと自分たちの地域のことを知り、地域と向き合いながら自らの役割を考えるヒントが、今回のペアによるモデル的取組にはたくさん散りばめられている。

最後になりましたが、本事業を実施するにあたり、モデル的取組を実践していただいた実施センターおよび応援センターのみなさま、意識調査にご協力いただいた就労系障害福祉サービス事業所のみなさまには、お忙しいなか多大なるご協力をいただき、誠にありがとうございました。心より感謝申し上げます。

# 目次

はじめに

1. 事業概要	5
1.1 事業の背景・目的	
1.2 事業の内容	
1.3 実施体制	
1.4 実施スケジュール	
2. 検討会	11
2.1 委員構成	
2.2 実施内容	
3. 前年度事業の分析・再精査	13
3.1 目的	
3.2 モデル的取組からの知見	
3.3 意識調査からの知見	
4. モデル的取組実施センターの公募と選出	19
4.1 目的	
4.2 公募	
4.3 実施センターおよび応援センターの選出	
5. モデル的取組の実施	24
5.1 目的	
5.2 実施スケジュール	
5.3 実施の進捗	
5.4 実施内容	
6. 就労支援機関意識調査	26
6.1 目的	
6.2 実施方法と調査項目	
6.3 集計結果	

7. 事業報告セミナー	72
7.1 目的	
7.2 開催方法と参加者	
7.3 参加者アンケート結果	
8. 事業のまとめ	94
8.1 定着支援地域連携の現状について	
8.2 ナカポツに期待される基幹型の機能・役割について	
8.3 地域のネットワークの連携を実効ある就労支援の体制に変えていくための提言	
9. 参考資料	97
9.1 モデル的取組エントリー依頼状・エントリーシート（サンプル）	
9.2 令和5年度『定着支援地域連携モデルに係る調査事業』事業概要	
9.3 実施センター自己紹介シート	
9.4 オンラインミーティングメモ	
9.5 就労支援機関意識調査依頼状・調査用紙（サンプル）	
9.6 事業報告セミナー案内フライヤー	
9.7 事業報告セミナー映写・配布資料	
9.8 検討会委員からのメッセージ	
9.9 検討会議事録	

## 1. 事業概要

### 1.1 事業の背景・目的

#### 1.1.1 事業の背景

令和4年度の民間企業における障害者雇用者数は19年連続で過去最高を更新し、障害者雇用はその量的な面において着実に進展してきている。一方で、多様な障害特性や背景をもつ方の雇用が一気に進んだことで、就労後の定着に向けて、各人が地域において必要な支援を受けられる環境の整備も急務となっている。

そのために、平成30年から「就労定着支援事業」が新設されたが、「就労定着支援事業」利用者の、事業利用後の支援ニーズに関しては、就労定着支援事業所その他の就労支援機関と障害者就業・生活支援センター（以下、「ナカポツ」という。）との間で、それぞれの役割の果たし方、および役割の違いを踏まえた連携の在り方に、様々な現場課題が生まれてきている。また、この事業を利用しない人たちの生活面の支援についても現場の支援ニーズは増大している。

全国のナカポツが、それぞれの地域の拠点として、総合的な調整機能を果たし、地域の就労支援機関の支援力向上に取り組むことは急務である。

令和4年度に当法人が受託した「定着支援地域連携モデルに係る調査事業」においては、ナカポツに期待されている「基幹型」の機能について、地域の実情に応じた自立的なスタイルのモデル的取組の先進事例を多数明示し、同時にそれらの取組の中に凝縮されている各センターの理念や、各地域で長年にわたって積み上げられてきた工夫やノウハウについても提供した。令和4年度の調査事業を通して、以下の課題が確認できている。

#### 1. 就労支援機関（就労移行支援事業所、就労定着支援事業所）の「量」の地域格差

調査事業の全国悉皆アンケートにおいて、大多数のナカポツが「圏域内の就労支援機関（移行・定着）は少ない」と回答しており、とりわけ都市部と地方の格差は当初の想像をはるかに超えていた。この地域資源の極端な差が、ナカポツの立ち位置や生活面の支援に関わる日々の活動内容にまで多様性をもたらしている。

#### 2. 就労支援機関（就労移行支援事業所、就労定着支援事業所）の生活面の支援の内容

就労支援機関が取り組んでいる生活面の支援の内容に関しては、「現在の支援」と「将来を見据えた支援」の間に、自己評価・客観評価ともに大きな偏りがあり、ライフステージの変化に備えた支援には取り組めていないと感じている就労支援機関が非常に多かった。就職と初期定着以降、就労定着支援事業終了後を見越した計画的な支援取組が不足している実態が見て取れる。

#### 3. 就労支援機関（就労移行支援事業所、就労定着支援事業所）とナカポツの連携に対するお互いの認識の温度差

ナカポツの地域に対する様々な取組に関して、提供している側の認識と、対象となっている就労支援機関側の認識との間に大きなズレが確認された。個別には連携の成果が顕著

なケースもあるが、全般的にナカポツが地域内で実施している取組についての周知が不足している実態がある。とはいえ、ナカポツの指導やサポートに期待する声も多数あることから、地域の就労支援機関の実際のニーズに的確に応えるための一層の工夫が求められている。

#### 4. 地方行政機関や他の公的機関との連携の在り方の地域格差

地域の連携ネットワークを安定的に持続発展させるためには、個々の事業所間の関係性構築に留まらず、地域としての就労支援体制の整備が不可欠であるが、地域によっては、自立支援協議会、特に就労支援部会の設置有無や、その実質的な機能に関して多大な格差がある。また先行設置された他の公的支援機関（市単・区単の支援センター等）との連携の在り方にも再考が必要である。

##### 1.1.2 事業の目的

上記の背景を踏まえ、令和5年度の本調査事業においては、基幹型としての機能・役割に関して、これまで十分に組み立てていなかったナカポツが、上記の先駆的なロールモデルから得られた知見を参考にしつつ、新たに基幹型の役割に取り組んでいく実践の課程を個別に調査・検証することで、さらに多様なモデル的取組の現在進行形の実施事例を広く提示していきたい。

ナカポツの役割の深化が、地域の就労支援ネットワークの強化につながり、それがひいては、各地域における障害者の就業に伴う生活面の支援ニーズへの対応力の底上げに資することを目指して、本調査事業を実施するものである。

本事業実施によって期待される効果は以下の通りである。

1. ナカポツに求められる「基幹型」の機能・役割に関して、地域の特色を活かした具体的な取組を複数提示することで、各ナカポツが自地域の実情に応じた事業運営に取り組む際の指針を示すことができる。
2. とりわけ今年度事業では、これまでに経験や実績が少ないナカポツにおける、約半年間の新たな実践の過程を時系列に沿って調査・検証するため、同様の状況にあるナカポツにとっては、極めて有用な情報を習得する機会が得ることができる。
3. コロナ禍や直近の雇用情勢の下での最新の支援取組を広く共有することで、全国のすべてのナカポツが、生活面における支援ニーズの実情を再認識し、自らの支援力の向上を図ることができる。
4. 複数の地域において、就労支援体制の整備に関わる実績を作り上げることで、地元行政機関を含めた安定的なネットワーク構築の具体事例を示すことができる。
5. 以上のように、より多くの地域においてナカポツの基幹型の役割の深化が図られることで、それぞれの地域の就労支援機関の支援力向上につなげることができる。

## 1.2 事業の内容

本事業の内容は以下の通り。

- ① 障害者就業・生活支援センター（以下、「ナカポツ」という。）における以下の取組について、その取組にあたっての課題を分析し、基幹型の機能・役割を整理する。
  - 就労定着支援事業所その他の就労系障害福祉サービス事業所（以下、「就労定着支援事業所等」という。）に対するスーパーバイズ（個別の支援事例に対する専門的見地からの助言及びそれを通じた支援の質の向上にかかる援助等）に係る取組
  - 困難事例に対する個別支援の取組
  - 地域の就労支援機関との連携に係る取組
    - ・令和4年度「定着支援地域連携モデルに係る調査事業」においてモデル的取組実施にご協力いただいた10センターの取組を再度精査し、各センターの取組の特徴、取組実施に至った経緯や背景要因等を総合的に分類・整理する。
    - ・上記10センターの圏域において実施した就労支援機関を対象とする意識調査の個別記述を再度精査し、就労定着支援事業所等がナカポツに期待する支援ニーズを具体的に把握する。
- ② ①を踏まえ、これまで①の取組を充分に実施していなかったナカポツにおけるモデル的取組を6箇所の地域で実施するとともに、当該センターが属する地域の就労支援機関に対し、障害者の就業に伴う生活面の支援に係る意識調査を実施する。
  - ・上記10センターを除く全国328センターを対象に、今年度のモデル的取組実施への協力を希望するセンターを公募する。
  - ・応募があったセンターの状況や応募理由等を確認したうえで、地域の多様性を勘案しつつ、モデル的取組を実施するセンター（以下、「実施センター」という）を全国各ブロックから6箇所選定する。
  - ・同時に、それぞれの実施センターの取組に対して指導的な役割を果たすのにふさわしい6センター（以下、「応援センター」という）を、上記①の総合的な分類・整理を基に選定し、各実施センターと個別にペアを組んで取組実施のサポートをしていただく。
  - ・当法人のブロック担当役員もしくは事務局が実施センターを訪問し、取組実施についてのアドバイス・指導を提供する。
  - ・圏域内の就労支援機関意識調査は、モデル的取組期間の前半に実施し、調査結果の内容を後半の取組に反映させる。
  - ・事務局がセンターごとのオンラインミーティングを3回開催して進捗を管理する（取組開始時、中間、終了時）。
  - ・新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止対策が必要とされる場合は、訪問は取り

やめ、オンラインにてサポート・指導を実施する。

【モデル的取組サポート実施例】

(1) 実施センターが応援センターを訪問し、具体事例を通して取組のポイントについて学ぶ。その際に可能な限り、地域連携の会議や研修会等を見学する。

(2) 実施センターが(1)で学んだノウハウを活かしてモデル的取組を実施する。

(3) 応援センターが実施センターを訪問し、取組の進捗や成果を確認・共有する。場合によっては、地域連携の会議や研修会等に参加する。

(4) 当法人のブロック担当役員もしくは事務局が、(2)もしくは(3)、あるいはその両方の段階で実施センターを訪問し、進捗の確認や追加の指導を行う。

③ ②のモデル的取組及び意識調査の結果を踏まえ、基幹型の機能・役割を再整理し、基幹型としてのナカポツについて、以下の内容を調査報告書としてまとめる。

● 就労定着支援事業所等に対するスーパーバイズの在り方

● 個別支援の関わり方・在り方

● 地域の就労支援機関等との連携の在り方

・実施センター、応援センター、ブロック担当役員からの報告書に基づき、事務局が調査報告書を作成する。

④ ナカポツの職員、就労系障害福祉サービス事業所の職員その他就労支援機関の職員を対象としたセミナー等における取組内容の周知、啓発を実施する。

・ウェビナーによるオンライン形式の事業報告セミナーを2月下旬に開催する。

・実施センターの事例報告者は極力配信会場に集合し、シンポジウム、ディスカッション等を通じて情報の共有を図る。

・新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止対策が必要とされる場合は、登壇者もオンラインにて参加する。

・令和4年度同様、行政、教育機関等の関係者にもセミナー参加を広く呼び掛ける。

⑤ 定着支援地域連携モデル事業検討会の開催・運営

・事業の具体的内容・方針を検討するため、関係者・有識者による検討会を開催・運営する。



### 1.3 実施体制

本事業は以下の体制で実施した。

責任者 藤尾 健二 全国就業支援ネットワーク 代表理事

副責任者 酒井 京子 全国就業支援ネットワーク 理事

- ・ 事業の総括
- ・ 検討会、事業報告セミナーの開催
- ・ 就労支援機関意識調査の分析・総括
- ・ モデル的取組実施センター・応援センターの選定
- ・ モデル的取組実施センターのサポートおよび現地指導
- ・ 調査報告書作成の監督

事務局 小澤 公嗣 全国就業支援ネットワーク 事務局

飴野 優 全国就業支援ネットワーク 事務局

- ・ 事業の調整
- ・ 検討会、事業報告セミナーの運営
- ・ 就労支援機関意識調査の実施・集計
- ・ モデル的取組実施センター・応援センターとの連絡調整
- ・ 調査報告書作成の実務

担当役員 野路 和之 全国就業支援ネットワーク 理事

鈴木 康弘 全国就業支援ネットワーク 理事

野口 弘行 全国就業支援ネットワーク 理事

- ・ モデル的取組実施センターのサポートおよび現地指導

## 1.4 実施スケジュール

本事業の実施スケジュールは以下の通り。

第一回検討会	令和5年6月16日
令和4年度事業の再精査	6月～7月
モデル的取組実施センターの公募開始	6月27日
実施センター・応援センターの選定完了	8月3日
モデル的取組の実施	8月～12月
・初回ミーティング	8月上旬
就労支援機関意識調査の実施	9月～10月
・中間ミーティング	10月下旬
・最終ミーティング	令和6年1月中旬
調査報告書取りまとめ	1月～3月
事業報告セミナーの開催	2月28日
第二回検討会	3月15日
調査報告書・事業報告書の提出	3月29日

	令和5年							令和6年		
	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
事業	開始	←								報告書提出
検討会	第一回									第二回
前年度事業の再精査	前年度モデル的取組の整理・分析		応援6センターが実施6センターの取組をピアサポート					報告書まとめ		
モデル的取組実施	公募		選定	6センターで取組実施						
			初回MT		中間MT			最終MT		
就労支援機関意識調査				実施		集計分析				
事業報告セミナー									オンライン開催	

## 2. 検討会

### 2.1 委員構成

本事業の検討会委員は以下の通り。

#### (学識経験者)

朝日 雅也 埼玉県立大学保健医療福祉学部社会福祉子ども学科 名誉教授  
島村 聡 沖縄大学人文学部福祉文化学科 教授

#### (障害者就業・生活支援センター)

野口 弘之 長崎障害者就業・生活支援センター 所長

#### (就労移行支援・就労定着支援事業所)

酒井 大介 特定非営利活動法人全国就労移行支援事業所連絡協議会 会長

#### (就労継続支援 A 型・B 型事業所)

久保寺 一男 特定非営利活動法人就労継続支援 A 型事業所全国協議会 理事長

#### (相談支援事業所)

矢野 太亮 大分市障がい者相談支援センター コーラス

#### (労働局)

日高 幸哉 兵庫労働局 職業安定部 部長

#### (企業)

大滝 容子 株式会社王将フードサービス 人事本部ハートフル事業部 課長

#### (厚生労働省)

古田 詩織 社会・援護局障害保健福祉部障害福祉課 課長補佐  
佐藤 大作 社会・援護局障害保健福祉部障害福祉課 就労支援専門官  
鈴木 大樹 社会・援護局障害保健福祉部障害福祉課 就労選択支援専門官

#### (実施事業者)

藤尾 健二 特定非営利活動法人全国就業支援ネットワーク 代表理事  
酒井 京子 特定非営利活動法人全国就業支援ネットワーク 理事  
野路 和之 特定非営利活動法人全国就業支援ネットワーク 理事  
小澤 公嗣 特定非営利活動法人全国就業支援ネットワーク 事務局

## 2.2 実施内容

検討会は、以下のスケジュール、内容にて実施された。

### 第一回

日時 令和5年6月16日（金） 13:00～15:00

場所 オンラインによる開催

- 議題
- (1) 事業の内容・実施方法および全体スケジュールについて
  - (2) モデル的取組実施センターの選定について
  - (3) 今後の事業進捗報告について

### 第二回

日時 令和6年3月15日（金） 15:00～17:00

場所 オンラインによる開催

- 議題
- (1) 調査事業の実施状況について
  - (2) 事業報告セミナーの開催について
  - (3) 就労支援機関に対する意識調査の結果について
  - (4) 事業報告書・調査報告書作成にあたっての留意事項について

### 3. 前年度事業の分析・再精査

#### 3.1 目的

本事業を展開していくにあたり、令和4年度「定着支援地域連携モデルに係る調査事業」において、モデル的取組実施にご協力いただいた10センターの先進的かつ多様な取組を再度精査し、各センターの取組の特徴、取組実施に至った経緯や背景要因等を総合的に分類・整理することで、実際の取組過程でのポイントや注意点、基本的な指針となるものを明らかにし、今年度のモデル的取組実施に役立てる。同時に、前年度の意識調査の回答結果の傾向を事前に確認しておくことで、地域の支援事業所がナカポツに期待する支援ニーズを大まかに把握し、モデル的取組の方向性や計画の参考とする。

#### 3.2 モデル的取組からの知見

##### 【令和4年度の各モデル的取組のポイント】

##### ● スーパーバイズに係る取組

###### 障害者就業・生活支援センターみなと

- ・『ステップアップ講座』の開催 = 支援の現場で行う実践的なOJTの効果を高めている。(講座前に必ず受講生の事業所を訪問して受講生・支援者との面談を実施し、講座終了後も事業所に出向いて3者で振り返りを実施している。)
- ・センターと事業所の連携の始まりになり、受講生一人一人を具体的に知るアセスメントの場にもなっている。
- ・次第に定期的な助言を求められるようになり、結果として、地域の支援力の底上げにつながった。

###### 障害者就業・生活支援センター香取就業センター

- ・圏域内の資源が少ないため、近隣圏域の事業所と常日頃から連携して、企業同行や面談同席を通じて事業所に支援の調整やアドバイスを実施、またセミナーや意見交換会も開催している。
- ・ナカポツが担うところ、他支援機関に協力を得るところの役割分担を常に意識。
- ・就職後の支援よりも就職前の準備や支援(アセスメント)を重視。

###### あいらいさ障害者就業・生活支援センター

- ・『B型から一般就労へ移行したケースの事例検討会』の開催 = 顔の見える関係づくりと現状確認(アセスメント)に取り組んでいる。
- ・必要なタイミングで必要な支援につながるができるように、それぞれの機関の役割・連携を意識し、地域全体で支える視点を重視。(一般就労へ移行するケースが少ない)

という課題認識から、圏域内 60 事業所に対して事業所訪問受け入れに関するアンケートを実施し、賛同のあった 32 事業所を現地訪問して就労移行支援事業所連絡会の開催につなげている。)

キーワードとして、「課題認識の共有」、「アセスメント」、「企業同行」、「面談同席」、「横並び」、「顔が見える関係」、「必要に応じた助言」があげられていた。圏域内の就労支援機関が比較的潤沢にある地域では、ナカポツには各機関の役割分担をコーディネートしながら適宜助言を提供していくニーズが高い。一方、資源が少ない地域では、直接支援の役割も担いつつ、就労支援機関と横並びで動きながら現場でアドバイスしているケースが多い。

#### ● 困難事例に対する個別支援の取組

##### 障害者就業・生活支援センターみなと

- ・チーム支援：点ではなく面で支える。
- ・時には太く、時には細く、継続し続ける。基本的には足で稼ぐことを重視。現場に向いて支援をする「顔と顔が見える関係」の構築・維持。小さな課題の早期把握。必要時には即応的な支援を実施。
- ・企業単体では対応できない内容を、地域の社会資源を結びつけることにより解決した。
- ・協力関係機関とは日頃から連絡を取り合っていたので、課題解決に必要な関係機関をコーディネートすることができた。

##### 障害者就業・生活支援センターピア宮敷

- ・社会資源が少ない圏域のため、中核地域生活支援センター・社会福祉協議会との役割分担を意識した上で、短期集中的に局所的な対応をしている。
- ・他圏域の就労定着支援事業所との連携のため、常日頃から情報共有のため一緒に動くように心がけている。
- ・社会資源の少なさから、関わろうと思えば際限なく関わってしまうが、常に必要最低限の支援で最大限の効果を出せる支援方法、頻度について都度話し合い、情報共有を密に行なっている。

##### 清流障がい者就業・生活支援センターふなぶせ

- ・『家族全体に関わる全ての機関が集まるケース会議の開催』 = 入り組んだ課題を全関係者で共有し、各機関の役割を整理した。
- ・利用者の方に多くの関わりがあった方がいいと判断した場合は、各支援機関に繋げるコーディネーターの役割を果たし、連携を図る必要がある。その際は情報共有を密に取りな

がら連携を図っている。

- ・面談時には家族との面談も行うケース（世帯を支援）が増加している。

#### 障害者就業・生活支援センターわーくわく

- ・様々な関係機関を交えたケア会議を定期実施して支援をしている。
- ・ナチュラルサポートを重視しつつ、生活環境や会社環境の変化を、伴走しながらさりげなく確認している。
- ・長いスパンで関わることでライフステージの大きな変化に対応している。
- ・支援の連携をウエルカムにし、支援の経過を継続して共有する。
- ・ナカポツが中心だと勝手に決めない。ナカポツを選ばない人も歓迎し、他機関につなげている。本人主体の支援を最優先。

キーワードとして、「日頃からの密な情報共有（一緒に動く・足で稼ぐ）」、「各機関の役割整理」、「短期集中的・局所的」、「意識のずれの解消」があげられていた。検討会では、何をもって困難事例と捉えるかという点において、本人の困難性に焦点をあてるのではなく、①連携先不足（地域資源の少なさ）、②経験不足（事業所や支援者のスキル・経験の乏しさ）からくる困難さにも留意するようにとの意見が出された。

#### ● 地域の就労支援機関との連携に係る取組

##### 札幌障がい者就業・生活支援センターたすく

- ・社会資源の多いエリアでは、ナカポツ単体で動くより、地域課題を共有しながら協働した方が地域の就労支援の底上げや質の向上に繋がるとの考えから、様々な集まりを共催し、活動実績を広報誌で発信している。
- ・定着支援の連携要請があった際は、アセスメント情報を共有して裏方的役割で動く。支援機関には中心的役割を担ってもらい、ナカポツとの役割を分担しながら連携を進めている。（背景：初回相談まで2ヶ月待機の常態化から直接支援の限界を感じたため。）

##### 障害者就業・生活支援センターCSA

- ・『雇用を前提としない職場体験実習』や『就労移行支援事業所等情報交換会』等を通じ福祉事業所職員のスキル向上や非公開求人等の情報交換をしている。（背景：登録者数が増加する中で直接支援に限界を感じた。情報交換会は就労可能な方の掘り起こしや福祉事業所との情報共有が目的。）
- ・連携のポイント：引き継ぎの半年前にケース会議を開催することを圏域内でルール化。
- ・支援機関の職員と共通言語で話せる地域にしていくために、個別支援を通じたスーパーバイズに力を入れていく必要がある

#### 障害者就業・生活支援センターぼらんち

- ・福祉事業所、ハローワーク、特別支援学校、県の職場開拓員、企業向けに様々な研修や会議を開催し、助言と情報を提供している。
- ・地域の連携機関全てのレベルアップを図り連携していく。
- ・他機関に繋ぐ際は必ず同行し、ともに支援する意識で行う。(背景：たらい回しになる当事者。つながること・レベルを上げることは自分たちを楽にする。企業から見るとわかりにくい仕組みをクリアにしたい。)
- ・引き継ぐ人にはサービス終了前の3ヶ月間、一緒に企業訪問する。

#### 北播磨障害者就業・生活支援センター

- ・『北播磨モデル』を策定し、圏域内における支援の大まかな時系列の流れを各機関と共有している。
- ・「就労パスポート」普及活動を展開し、福祉系サービス事業所職員及び企業担当者をサポート。
- ・「渡す」ではなく「つなぐ」。連携は重なり合う期間が大切。
- ・誰が職業準備性を確認し（アセスメント）、誰が定着支援を組み立てるのか（コーディネーター）。(背景：限られたマンパワーを現場で効率的に活かす仕組みが欲しい思いからのスタート、企業に入り乱れないようにするため、移行・B型・JC・ナカポツでの役割を再確認し図表化した。)
- ・支援経験の浅い就労定着支援担当者に対するOJTでの支援ノウハウの伝達や、圏域の代表が一堂に会する場で研修を実施し、事例検討内容の拡充を図っている。

#### 障害者就業・生活支援センターわーくわく

- ・圏域内で地元の企業ネットワークと協働して、交流会や研修会を開催している。
- ・チーム支援を意識し、ネットワーク（顔が見える関係）だけではなく、フットワーク（足でかせぐ関係）、チームワーク（同じ方向を見る関係）の構築を重視。(背景：少ないスタッフ数で有効な支援を構築するためには、いろんな機関の人たちと手を組んでいく必要があった。)

キーワードとして、「地域課題の共有」、「チーム支援の際のルール化」、「重なり合う期間」、「直接支援の限界」のほか、他のモデル的取組同様、「裏方的役割」、「足で稼ぐ」等もあげられていた。支援の連携の課題については各圏域での地域差があることから、全国一律の対応ということではなく、圏域内で一定のルール化を図りながら連携していくことを発信しているセンターが複数あった。検討会においても、はっきりと役割を明確に分けることは難しいが、連携を図っていく過程の中で、お互いの働きを尊重しつつ、お互いの負担を軽減していく必要があるのではないかという意見交換がなされている。



### 3.3 意識調査からの知見

#### 【令和4年度意識調査の代表的な自由記述】

- スーパーバイズに係る取組に対して
  - ・情報が少ないので周知が必要、情報をどこで手に入れたらいいかわからない。
  - ・「こういったケースだと受けられる」などの具体例を示してほしい。
  - ・受けてみたいが日常の支援の中で時間を作ることが難しい。
  - ・責任のない立場からのサポートは必要とできない。
  - ・本人にあった研修という形で個別対応をしてほしい。
  - ・作業現場に出張してアセスメントを受けられるとありがたい。
  - ・メンタルや健康・体力を向上させる目的のプログラム援助を受けてみたい。
  - ・障害者を受け入れてくれている企業との勉強会などの企業側の意見や気づきなどを直接聞いてみたい。
  - ・企業との連携等、専門的な見地からの助言を受けてみたい。
  - ・企業マッチングをお願いしたい。
  - ・支援力アップや一般企業が求める人材の勉強会を受けてみたい。
  - ・担当者によって支援方法や考え方に違いがありすぎる。
  
- 困難事例に対する個別支援の取組に対して
  - ・どのような場合にサポートを受けられるのか明確になっていない。
  - ・企業への対応に苦慮した時や入社困難者への対応の助言が欲しい。
  - ・緘黙傾向のある方への定着支援方法の助言が欲しい。
  - ・電話相談のみでそれ以上の発展につながらなかった。
  - ・通院や服薬等に問題を抱えている方への支援、医療機関との連携等についてももう一步入り込んだ支援の方法を学びたい。
  - ・困難事例が発生したときに協働で支援してほしい。
  - ・生活面になかなか立ち入れないため学びたい。
  - ・そもそも何をもちいて困難と捉えるかに差がある。
  
- 地域の就労支援機関との連携に係る取組に対して
  - ・「連携」がそもそも何を指しているか理解ができていない。
  - ・情報不足から、そもそも取り組んでいるのかどうかも知らない。
  - ・そもそも登録のタイミング等もよくわかっていない。
  - ・連携のための基準や目安があればご教示していただきたい。
  - ・離職した利用者など、次の行き先が決まるまでの就労が伴わなくても、見届けサポートのような支援を受けてみたい。
  - ・定着支援事業利用中はナカポツが直接支援できないと聞いているが、役割分担しつ

つ柔軟に関わっていけるとありがたい。

- ・マンパワー不足からナカポツセンターへの登録や依頼に躊躇してしまう。
- ・離島や僻地での資源が少ないエリアでの連携の仕方を知りたい。
- ・連携は何を目的に行うのか不明瞭。

付記：以上の前年度事業から得られた知見のポイントは、今年度のモデル的取組を開始するにあたって開催した第一回オンラインミーティングにおいて、実施センターおよび応援センターと共有した。

## 4. モデル的取組実施センターの公募と選出

### 4.1 目的

ナカポツの基幹型の機能・役割を整理するために、以下3点のモデル的取組を実際に実施するセンターを全国公募し、その中からセンターの状況や応募理由等を確認したうえで、地域の多様性を勘案しつつ、モデル的取組を実施するセンター（以下、実施センターという。）を全国各ブロックから6箇所選定する。

- 就労定着支援事業所その他の就労系障害福祉サービス事業所に対するスーパーバイズ（個別の支援事例に対する専門的見地からの助言及びそれを通じた支援の質の向上にかかる援助等）に係る取組
- 困難事例に対する個別支援の取組
- 地域の就労支援機関との連携に係る取組

同時に、それぞれの実施センターの取組に対して指導的な役割を果たすのにふさわしい6センター（以下、応援センターという。）を選定し、各実施センターと個別にペアを組んで取組実施のサポートをしていただく。

### 4.2 公募

#### 4.2.1 公募の方法

6月27日、全国のナカポツに対して、今年度の「定着支援地域連携モデルに係る調査事業」の概要およびモデル的取組へのエントリーを依頼する案内をメール発信した。発出文書の内容は、参考資料9.1「モデル的取組エントリー依頼状」、「エントリーシート（サンプル）」、9.2「令和5年度『定着支援地域連携モデルに係る調査事業』事業概要」を参照のこと。

#### 4.2.2 公募の結果

申込期限の7月10日までに、中国・四国ブロックを除く全国各ブロックの9センターより申込み・問合せがあった。中国・四国ブロックに対しては、申込期限を7月20日まで延長して再度公募の案内をメールにて送ったが申込みはなかった。

### 4.3 実施センターおよび応援センターの選出

8月3日、申込みがあった9センターの中から、センターの状況や応募理由、応援センターとのマッチング、地域の多様性等を総合的に検討し、モデル的取組を実施する6センターを選出した。中国・四国ブロックからの選出がなかったため、関東ブロックより2センターを選出した

モデル的取組実施が決定した6センターは以下の通り。下段括弧内はペアを組む応援センター。

1. 北海道：石狩障がい者就業・生活支援センターのいける  
(鹿児島県：あいらいさ障害者就業・生活支援センター)
2. 群馬県：障害者就業・生活支援センタートータス  
(青森県：障害者就業・生活支援センターみなど)
3. 茨城県：水戸地区障害者就業・生活支援センター  
(千葉県：障害者就業・生活支援センター香取就業センター)
4. 三重県：津地域障がい者就業・生活支援センターふらっと  
(静岡県：障害者就業・生活支援センターぼらんち)
5. 奈良県：なら中和障害者就業・生活支援センターブリッジ  
(徳島県：障害者就業・生活支援センターわーくわく)
6. 沖縄県：障害者就業・生活支援センターブリッジ  
(埼玉県：障害者就業・生活支援センターCSA)

各実施センターの圏域情報、モデル的取組への応募理由、個別に応援センターを希望した理由は以下の通り。



実施センター								
ブロック	都道府県	センター名	担当者名	人口規模	移行 事業所数	定着 事業所数	A型 事業所数	B型 事業所数
北海道 東北	北海道	石狩障がい者就業・生活支援センターのいける	吉田 志信	420,000	14	9	19	81
	活動圏内の就労支援機関については、協力的な機関が多い印象ではあるが、一方で、地域の社会資源として機能していないと感じる機関も散見される。それらの機関に対するスーパーバイズを具体的にどのように進めていくかという点で苦慮することが多い。基幹については、当センターの介入で解決に向けていく手法と、当センターとしては、“地域づくり”をテーマとして活動する中、基幹の役割の理解を目指すために、各種研修会や会議を通じた間接的な介入で、機能の向上を目指しているところであるが、効果を感じることが少ない。“地域づくり”の視点で、他の地域やセンターの活動から参考とさせていただきたいと考えています。							
関東	群馬	障害者就業・生活支援センタートータス	佐藤 あゆみ	131,533	2	1	3	13
	人口や社会資源は少ないが、評価できる点として圏内の自立支援協議会（就労支援部会）の部会長を任されており、地域のニーズに応じた研修やイベントの企画はスムーズに取り組んでいると思っています。一方で、関係機関（移行、B型、A型、地活、医療機関等）と連携した就労支援では、課題がいくつか感じられる場合があります。例えば一般企業への就職に繋ぐタイミングにズレがあり、関係機関側は一般企業への就職へ、こちらとしては地活→移行、またはB型→移行と判断するケースも多いです。どの段階で一般企業への就職が可能か、支援スタッフの見立てや支援力向上のために、ナカボツが主体となって研修会の企画が必要であると感じています。また、個別の支援ケースでは、世帯全体が障害者で支援が必要なケースや、攻撃性の強い傾向のあるケース等、困難ケースが増加している傾向の中で、どのような機関とどのように役割を分担しながら支援をしていくことが望ましいか、センター全体の支援力を高めていく、地域とのさらなる連携を強化していく必要性を感じております。							
関東	茨城	水戸地区障害者就業・生活支援センター	塩畑 義孝	470,000	60	6	15	90
	現状としては個別に機関とのやり取りはありますが、基幹的な役割を考えた場合、就労支援機関との連携や、スーパーバイズ機能について強化する必要性を感じております。							
中部 北陸	三重	津地域障がい者就業・生活支援センターふらっと	後藤 勇介	271,747	5	4	9	52
	就労定着支援事業所、就労移行支援事業所とは連携を頻繁にさせていただいているが、スーパーバイズを行うような関係性とは違い、横並びの連携する関係機関といった関係性になっています。その必要性がないのであれば、それはそれで良い形なのかなとは思いますが、今後の地域の就労支援力の向上の視点で見ると、新規立ち上げ事業所や経験の長い事業所の新入職員等にナカボツとして伝えられることがあるのではと感じています。またネットワーク会議の必要性を感じていながらも上手く実施できていない状況です。ここは主体的に関わっていただける運営の仕方のノウハウ不足を感じています。							
近畿	奈良	なら中和障害者就業・生活支援センターブリッジ	青木 孝至	380,000	9	5	19	55
	いずれも課題ではありますが『③地域の就労機関との連携強化に向けた能動的な役割の発揮』が、優先順位の高い課題と感じています。地域全体が、就労支援に対する関心や意識が低く、個々それぞれで取り組んでいる状況です。障害者自立支援協議会を軸に、ネットワーク会議などの開催や、地域ニーズに即した協働イベントに取り組み、相互理解を深めてきましたが、上手くベクトルを合わすことができず、効果的なネットワーク構築とまでは至っていない現状です。実践されているセンターからこの点についてお伺いできればと思います。							
九州 沖縄	沖縄	障害者就業・生活支援センターブリッジ	國吉 利生	280,000	16	3	20	68
	就労定着支援事業所は少ないのですが、就職に向けた支援を実施していない就労移行支援がある地域です（直Bのため）。そのため、各就労移行のヒアリングを行い、ともにスキルアップを目指せる雰囲気を作れたらと考えています。また、きちんと就職に向けて支援ができる機関が増えることで、ナカボツへの過剰な負担を軽減できればと思っています。若く少人数のナカボツであるため、負担の配分を考えながら前向きに検討したいです。							

応援センター							
都道府県	センター名	担当者名	人口規模	移行 事業所数	定着 事業所数	A型 事業所数	B型 事業所数
鹿児島	あいらいさ障害者就業・生活支援センター	永山 亜紀	235,000	4	1	14	48
主に「地域作り」という視点がある。また、基幹型センターとしての役割を担っているセンターとして選択させていただきました。それぞれの課題等に関して、参考にさせていただければと思います。							
青森	障害者就業・生活支援センターみなと	工藤 玲子	311,858	5	2	23	62
左記に記載しました圏域の状況やセンターの課題の中で、青森県のみなと様は、障害者ステップアップ講座を開催しており、利用者と支援者を対象として就労に対する意識を深める先進的な取組をされているところが、とても参考になりました。							
千葉	障害者就業・生活支援センター香取就業センター	岡澤 和則	105,000	2	1	2	9
スーパーバイズの実際とあり方、またその関係性に至るまでのプロセスなど、学ばせていただければと考えております。							
静岡	障害者就業・生活支援センターぼらんち	夏目 芳行	446,002	2	5	19	59
人口規模は「ぼらんち」さんの方が多いのですが、就労系福祉サービスの資源の数が当センターの圏域と近いなかで、様々なネットワーク会議や人材育成に関わる研修をされているので、そのノウハウを学べたらと思いました。							
徳島	障害者就業・生活支援センターわーくわく	佐野 和明	520,900	17	5	28	60
誰であっても働くことにチャレンジされる方のお気持ちを大切にしたいと考えており、そのためにも「就労支援の可視化」（障害のある方・企業・支援者それぞれにとっての）を図りながら、地域の中で仕組み作りを行っています。わーくわく様は、当センターが目指す実践に近い取り組みをされているため、直接ノウハウを受けながら地域に還元したいと考えています。企業とのネットワーク作りや、当事者を中心としたネットワークを構築されているため、どのようにベクトルをすり合わせながら実践されてきたのか、参考にさせていただければと思います。							
埼玉	障害者就業・生活支援センターCSA	木全 美幸	534,000	16	7	4	35
CSAさんが実施している就労移行支援事業所等情報交換会は当圏域で目指している姿であるため、参考にできる点が多いと感じています。							

## 5. モデル的取組の実施

### 5.1 目的

多様な地域性や条件の下で基幹型としての機能・役割を果たしていくにあたって、地域の支援ニーズやナカポツに求められる取組を具体的に調査するために、全国各ブロックから選出された6センターでモデル的取組を実施し、各取組の実施過程における課題やそれらに対する工夫について、ナカポツ同士のピアサポートを通して検証する。

### 5.2 実施スケジュール

以下の基本的なスケジュールに沿って、6センターにてモデル的取組を実施した。

#### 1. 第一回オンラインミーティング

- ・自己紹介（実施センター・応援センター・担当役員・事務局）
- ・今年度事業の概要説明・昨年度事業の振り返り
- ・応援センター訪問予定・意識調査送付先について打合せ

#### 2. 応援センター訪問

実施センターが応援センターを訪問し、具体事例を通してモデル的取組のポイントについて学ぶ。その際に可能な限り、地域連携の会議や研修会等を見学する。

#### 3. 第二回オンラインミーティング

- ・応援センター訪問の振り返り
- ・モデル的取組実施に向けたポイントの整理
- ・意識調査結果（速報ベース）の共有
- ・実施センター訪問予定・事業報告セミナーについて打合せ

#### 4. 実施センター訪問

応援センターが実施センターを訪問し、取組の進捗や成果を確認・共有する。可能な限り、地域連携の会議や研修会等に参加する。担当役員もしくは事務局が同行し、進捗の確認や追加のサポートを行う。

#### 5. 第三回オンラインミーティング

- ・実施センター訪問の振り返り
- ・モデル的取組のポイントの共有
- ・意識調査結果の分析
- ・事業報告セミナーについて打合せ

第一回オンラインミーティングにおいて共有した実施センターの現状課題については、参考資料9.3「実施センター自己紹介シート」を、オンラインミーティング各回の内容については、参考資料9.4「オンラインミーティングメモ」を参照のこと。



### 5.3 実施の進捗

各センターにおけるモデル的取組実施の進捗は以下の通り。

実施センター			応援センター		進捗状況					
ブロック	都道府県	センター名	都道府県	センター名	第一回 MT	意識調査	実施⇨応援 訪問	第二回 MT	応援⇨実施 訪問	第三回 MT
北海道 東北	北海道	石狩 障がい者就業・生活支援センター のいける	鹿児島	あいらいさ 障害者就業・生活支援センター	8/9 (水) 14:00~15:00	9/4 (月) ~29 (金)	9/26 (火) ~27 (水)	10/24 (火) 13:00~14:15	11/20 (月) ~21 (火)	1/10 (水) 13:30~15:00
関東	群馬	障害者就業・生活支援センター トータス	青森	障害者就業・生活支援センター みなど	8/7 (月) 13:30~14:45	9/4 (月) ~10/13 (金)	8/22 (火) ~23 (水)	10/12 (木) 11:00~12:15	12/26 (火)	1/16 (火) 14:30~15:30
関東	茨城	水戸地区 障害者就業・生活支援センター	千葉	障害者就業・生活支援センター 音取就業センター	8/16 (水) 13:30~14:45	9/11 (月) ~29 (金)	9/25 (月) 10/6 (金)	10/25 (水) 10:00~11:00	12/14 (木) ~15 (金)	1/22 (月) 15:00~16:00
中部 北陸	三重	津地域 障がい者就業・生活支援センター ふらっと	静岡	障害者就業・生活支援センター ぼらんち	8/10 (木) 17:00~18:00	10/10 (火) ~31 (火)	8/30 (水) ~31 (木)	10/18 (水) 13:00~14:00	12/1 (金)	1/16 (火) 10:00~11:00
近畿	奈良	なら中和 障害者就業・生活支援センター ブリッジ	徳島	障害者就業・生活支援センター わーくわく	8/9 (水) 10:30~11:30	9/11 (月) ~10/16 (月)	9/11 (月) ~12 (火)	10/20 (金) 13:00~14:00	12/13 (水) ~14 (木)	1/17 (水) 13:00~14:00
九州 沖縄	沖縄	障害者就業・生活支援センター ブリッジ	埼玉	障害者就業・生活支援センター CSA	8/9 (水) 13:00~14:00	9/11 (月) ~29 (金)	9/12 (火) ~13 (水)	10/17 (火) 11:00~12:00	12/5 (火) ~6 (水)	1/11 (木) 10:00~11:15

### 5.4 実施内容

各センターにおけるモデル的取組実施の内容は以下の通り。

## 6. 就労支援機関意識調査

### 6.1 目的

定着支援地域連携のモデル的取組を実施した6センターが属する地域の就労支援機関に対して、ナカポツの取組に対する就労系障害福祉サービス事業所側の受け止め方や評価を確認するために、障害者の就業に伴う生活面の支援に関する意識調査を実施した。

### 6.2 実施方法と調査項目

#### 6.2.1 実施方法

実施期間：令和5年9月4日～10月31日

調査対象：モデル的取組実施6センター圏域内の就労支援機関 478事業所

配布方法：手渡し、郵送、メール発信

有効回答：164事業所（回答率 34.3%）

都道府県	センター名	配布方法	回答	回答率
北海道	石狩 障がい者就業・生活支援センター のいける	センターより発信（44） 事務局より郵送（66）	40	36.4
群馬	障害者就業・生活支援センター トータス	センターより手渡し（17）	16	94.1
茨城	水戸地区 障害者就業・生活支援センター	事務局より郵送（123） ※茨城県より周知メール	42	34.1
三重	津地域 障がい者就業・生活支援センター ふらっと	自立支援協議会より 郵送（72）	30	41.7
奈良	なら中和 障害者就業・生活支援センター ブリッジ	市町村より発信（45） 事務局より郵送（35）	20	25.0
沖縄	障害者就業・生活支援センター ブリッジ	市町村より発信（76）	16	21.1
		合計	164	34.3

### 6.2.2 調査項目

- ・ 事業所の事業内容について
- ・ 圏域内のナカボツが行なっている取組について
  - 個別の支援に対するスーパーバイズ
  - 困難事例に対する個別支援
  - 地域の就労支援機関との連携
  - 上記以外の取組
- ・ 一般就労に移行した障害者の定着に関わる支援全般について

(以下の項目は、過去3年間に企業への一般就労の実績がある事業所を対象)

- ・ 一般就労に移行した障害者の定着に関わる支援について
  - 概ね充分に取り組んでいると感じている支援の分野
  - 不足しているのではと感じることがある支援の分野
- ・ 一般就労に移行した障害者の定着に関わる支援に対する考え方や取組について
  - 定着に関わる支援に取り組む期間について
  - 定着に関わる支援をするにあたって連携している機関について
- ・ 一般就労に移行した障害者の定着に関わる支援で課題を感じる状況や局面

調査依頼の内容については、参考資料 9.5 「就労支援機関意識調査依頼状」、「調査用紙(サンプル)」を参照のこと。

### 6.3 集計結果

意識調査の集計結果は以下の通り。

回答結果をセンターごとにまとめたシートを添付する。

## 就労支援機関意識調査 集計結果

障害者就業・生活支援センターにおける基幹型としてのモデル的取組を実施した6センターが属する地域の就労支援機関に対して、障害者の就業に伴う生活面の支援に関する意識調査を実施した結果は以下の通りである。

実施期間：2023年9月4日～10月31日

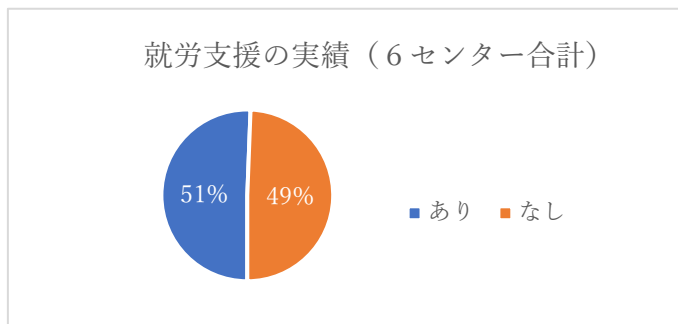
調査対象：モデル的取組実施6センターの圏域内にある就労支援機関478事業所

調査方法：参考資料9.5「就労支援機関意識調査依頼状」「調査用紙（サンプル）」を参照のこと

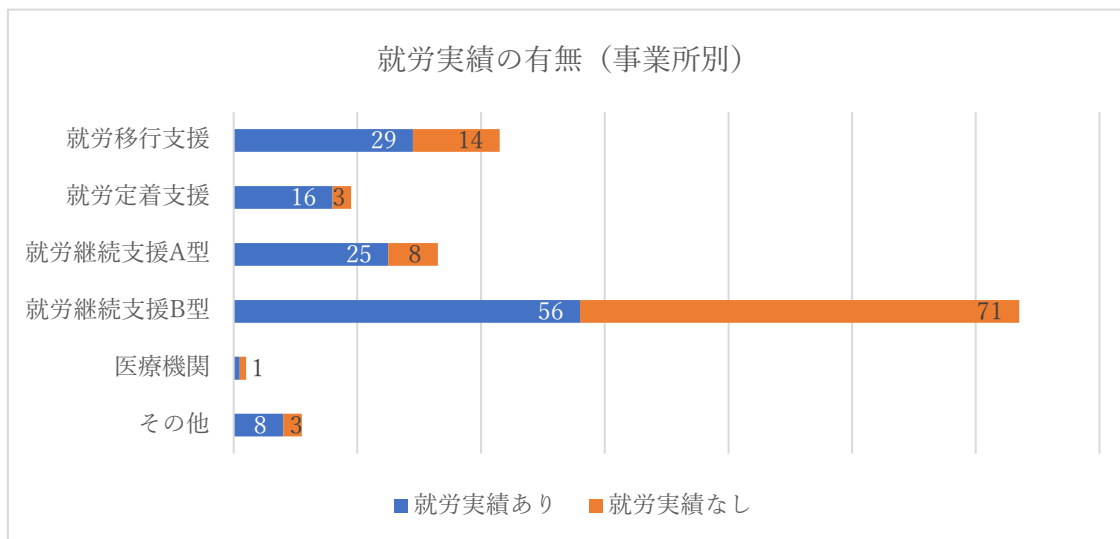
有効回答：164件（回答率34.3%）

### 1. 定着支援の取組状況について

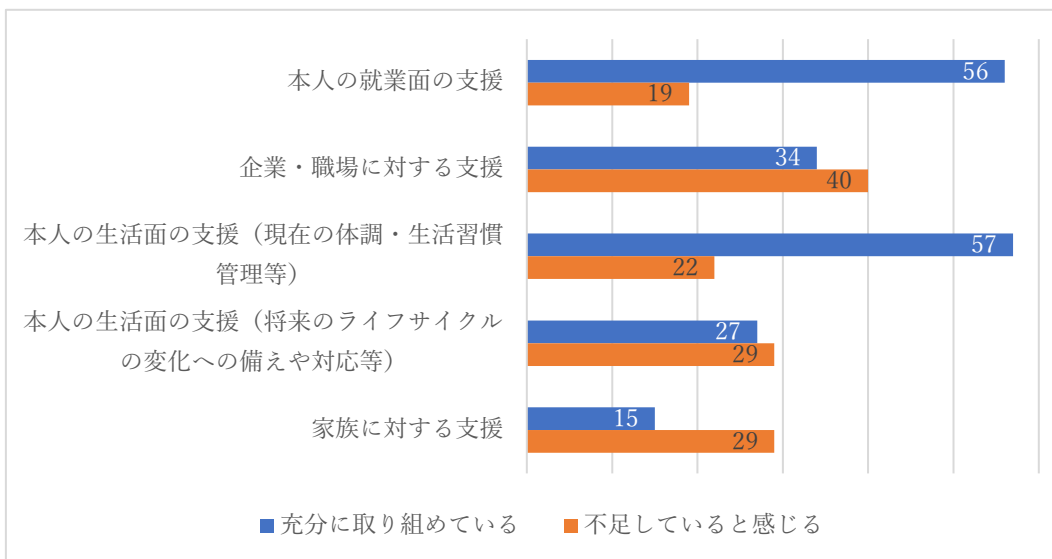
過去3年間の就労支援の実績の有無（実績あり83件、実績なし81件）。



就労実績の事業所別の回答状況は以下の通り（複数回答を含む235件）。

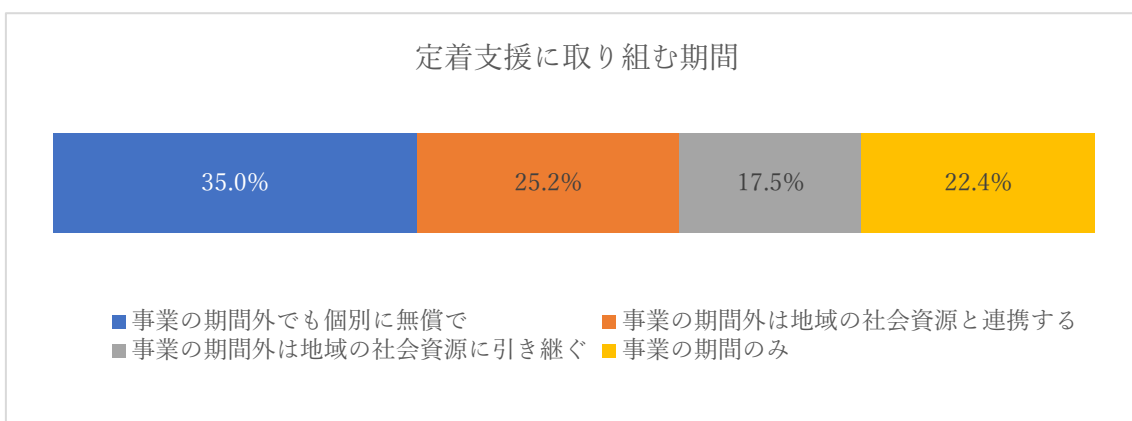


□ 取り組んでいる支援についての自己評価



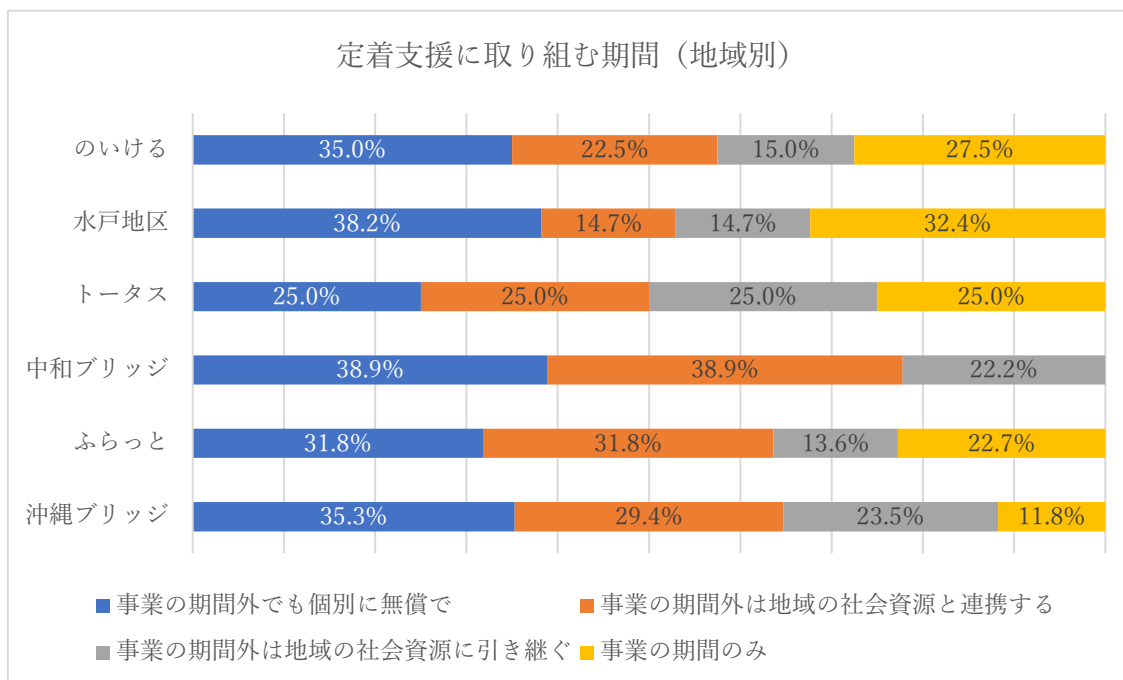
本人の就業面、および現在の生活面（体調や生活習慣の管理等）の支援に関しては概ね取り組んでいるとの回答が多数あった一方で、企業・職場に対する支援、将来のライフサイクルの変化への備えや対応に関する支援、家族に対する支援は、充分には行き届いていないと自己評価している状況が見受けられ、これは令和4年度調査と同様の傾向であった。

□ 事業所として定着支援に取り組む期間

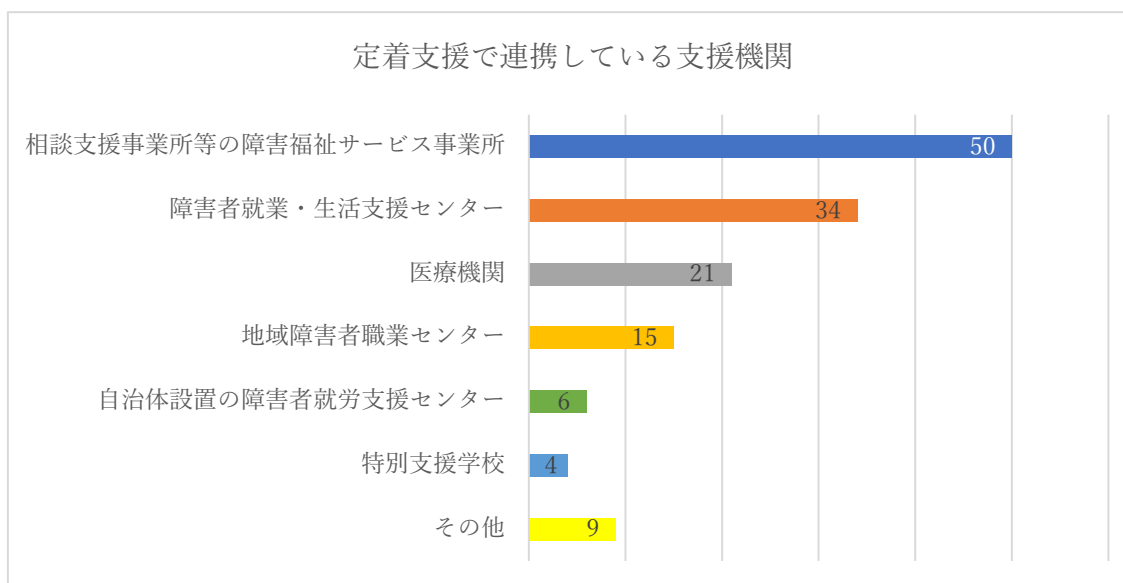


定着支援のニーズが発生した場合、35%の事業所が、事業として定められた期間（移行：就職後6ヶ月間、定着：最長3年間）に関わりなく、個別に無償で対応していると回答しており、地域の社会資源と連携して支援を実施しているという回答と合わせて、6割以上の就労支援機関が、定められた事業の期間外でも支援ニーズに対応している。一方で、22.4%の事業所は、事業として定められた期間に限って支援を実施していると回答している。この項目も令和4年度調査と同様の傾向であった。

地域別の集計結果は以下の通り。



□ 定着支援をするにあたって連携している機関

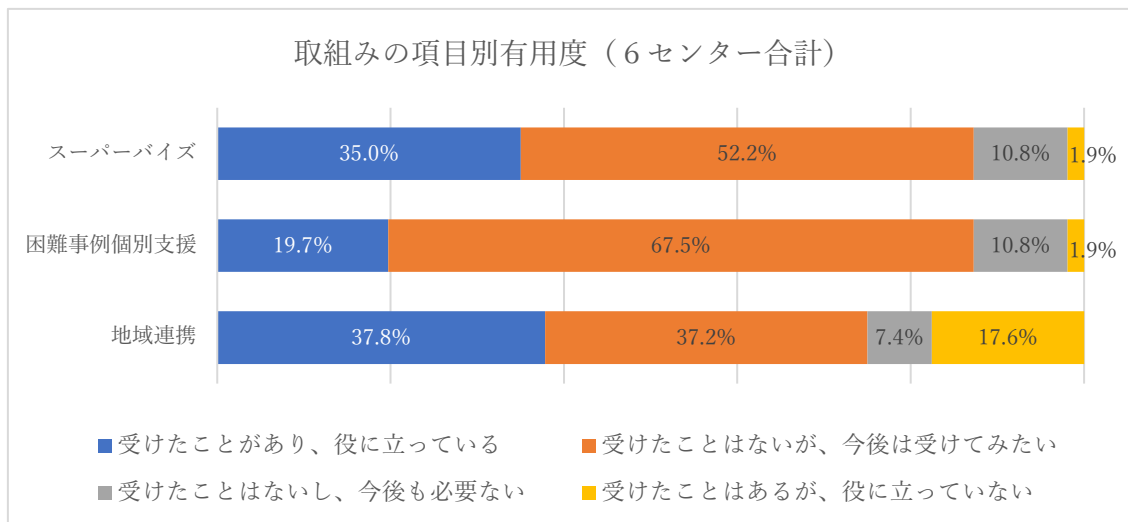


定着支援において連携している地域の社会資源としては、相談支援事業所等の障害福祉サービス事業所が最も多く、次に障害者就業・生活支援センター（ナカポツセンター）が続いている。地域障害者職業センターとの回答は、ナカポツセンターの半分以下であった（回答総数 139 件）。

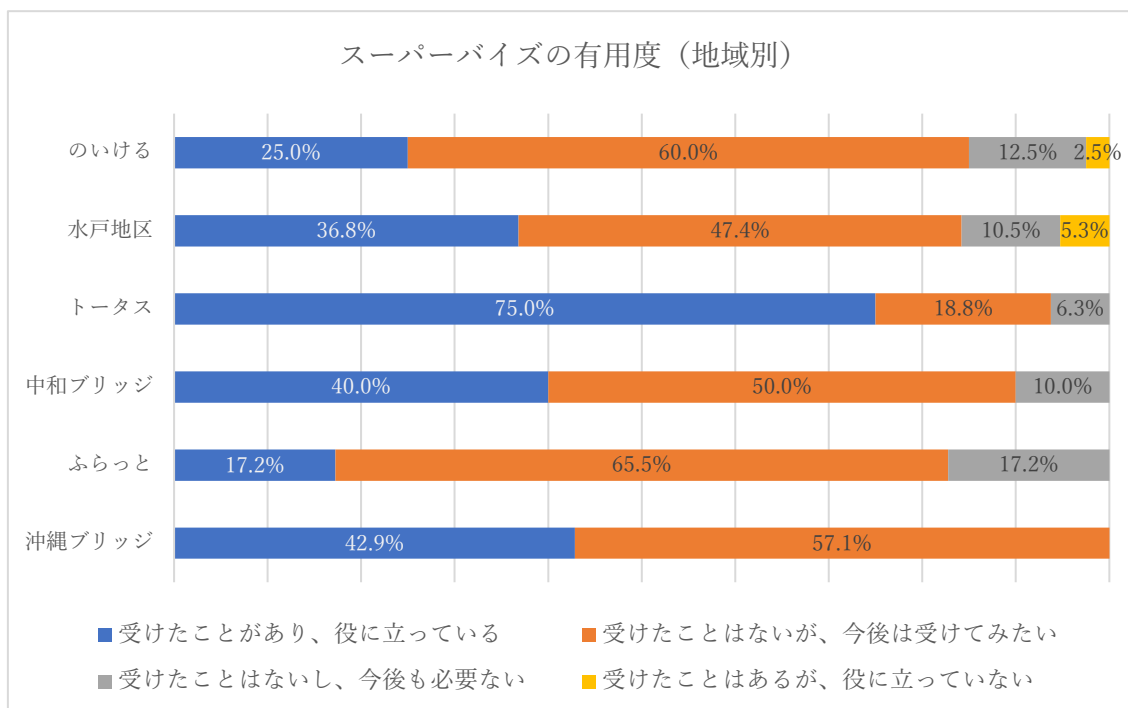
## 2. ナカポツセンターの基幹型機能・役割について

ナカポツセンターの基幹型機能・役割のうち3項目の有用度について、就労支援機関側の意識を調査し、157件の回答を得た。

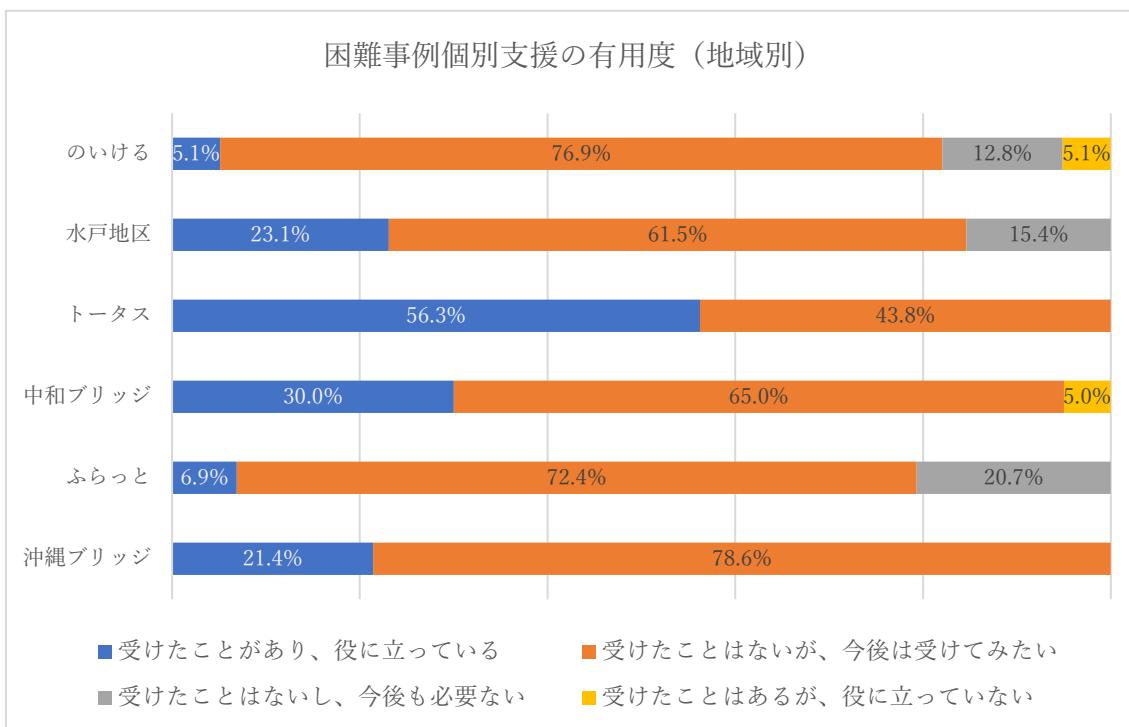
### □ 基幹型機能・役割の3項目の有用度合計



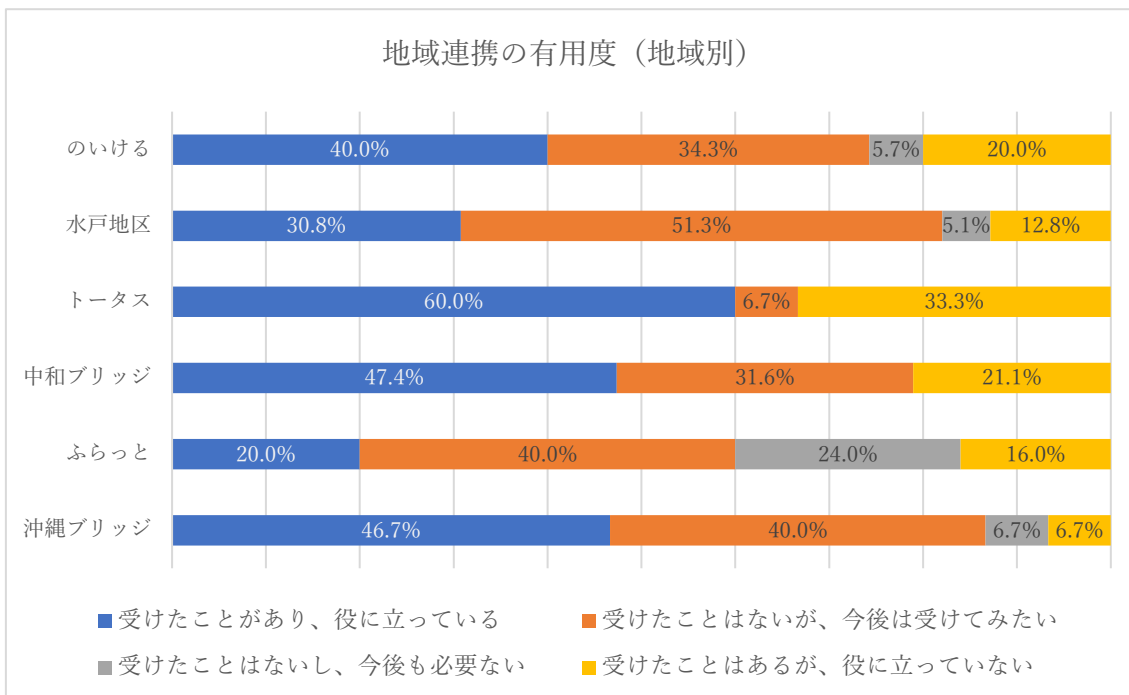
### □ 就労定着支援事業所等に対するスーパーバイズ



□ 困難事例に対する個別支援



□ 地域の就労支援機関との連携



以上



## 石狩障がい者就業・生活支援センターのいける（北海道）

配布 110 事業所 回答 40 事業所 回答率 36.4%

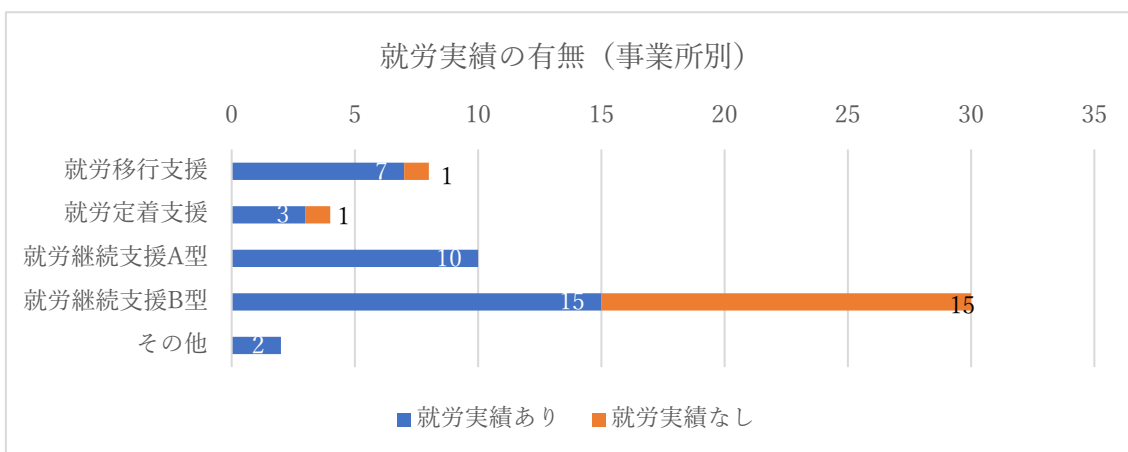
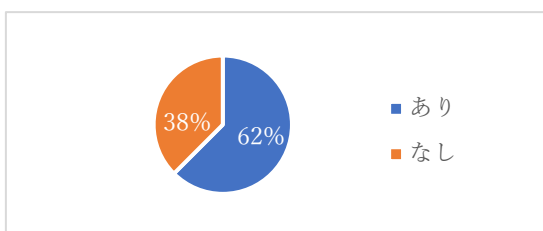
実施日 2023 年 9 月 4 日～29 日

事業所別の回答状況

人口規模	移行	定着	A型	B型	その他	移行+定着
420,000	14	9	19	81	—	23
回答数	8	4	10	30	2	12
回答率	57.1%	44.4%	52.6%	37.0%	—	52.2%

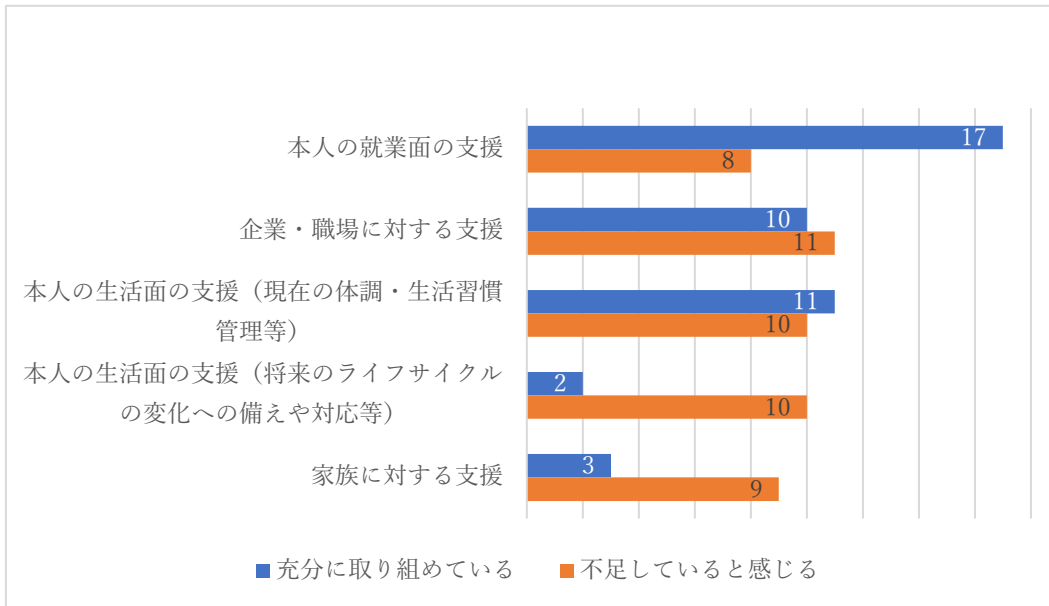
回答率は 36.4% で、全体の回答率（34.3%）と同程度である。移行支援事業所および定着支援事業所からの回答率は 52.2% で、定着支援事業からの反応は比較的良好であった。圏域の事業所としては B 型が多く、全体の 6 割を占めている。

### 1. 就労支援の実績



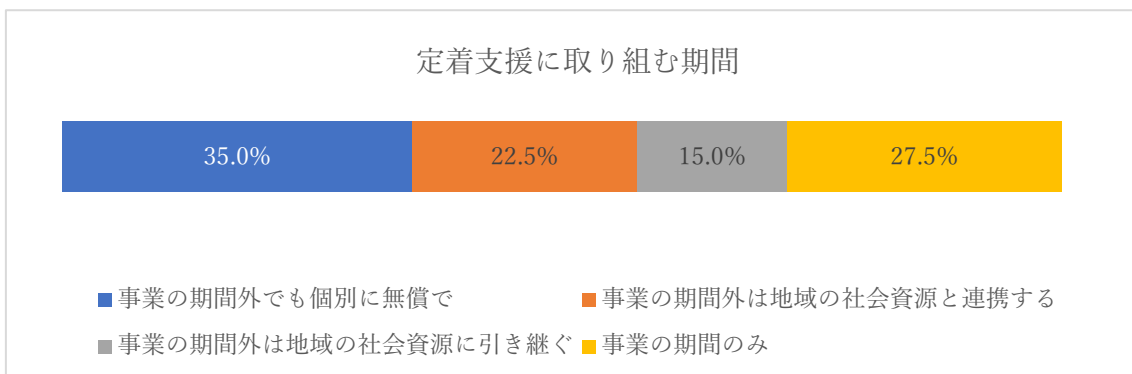
回答事業所のうち、62%は過去3年の就労支援実績があると回答している。就労実績が全くない移行・定着支援事業所が存在する一方で、A型事業所においては、すべて就労実績がある10事業所が回答している。B型事業所においても回答事業所の半数に直近の就労実績があることから、A型やB型から就労へと繋がるケースが一定の割合で存在している。

## 2. 取り組んでいる支援についての自己評価



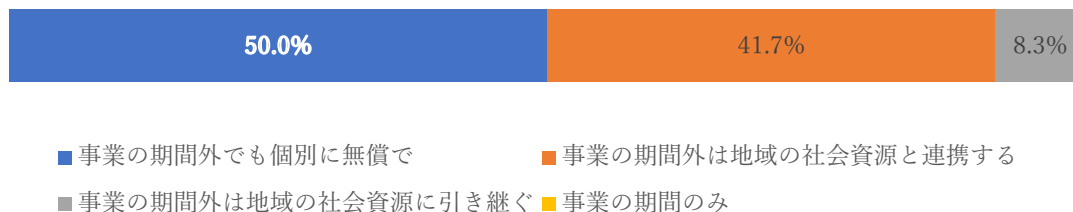
本人の就業面の支援には充分に取り組んでいるという自己評価が多い反面、就労後一定期間経過したのちに生じやすいライフサイクルの変化や家族に対する支援については不足しているという回答が目立った。

## 3. 定着支援に取り組む期間及び連携先支援期間



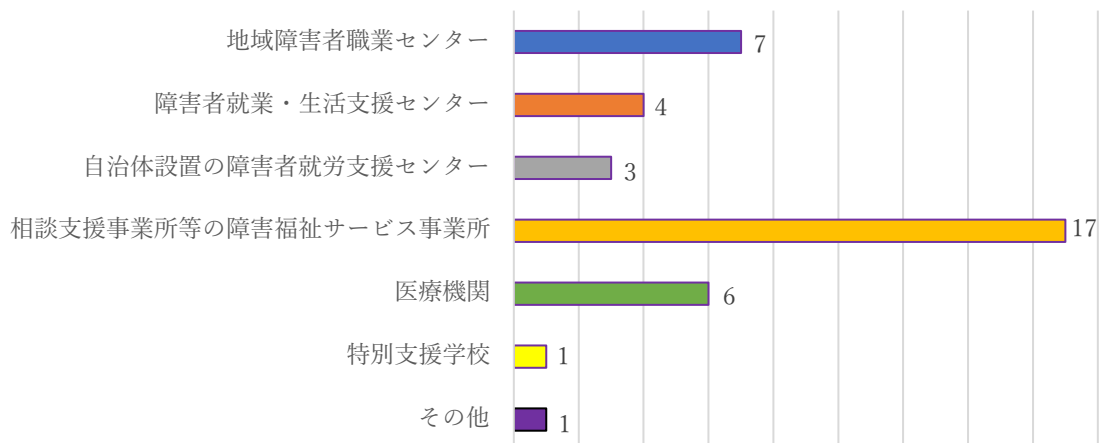
定着支援の事業期間終了後も個別に対応しているとの回答が35%あり、自施設からの就職者を長期間支援している実態が読み取れる。一方で、事業期間を過ぎた以降の状況は不明であるが、引き継ぎや連携をせずに事業期間のみ支援するとの回答が27.5%あることから、のちに支援が必要となる可能性が潜在的に存在している状況が想定される。

### 移行・定着支援事業所における定着支援に取り組む期間



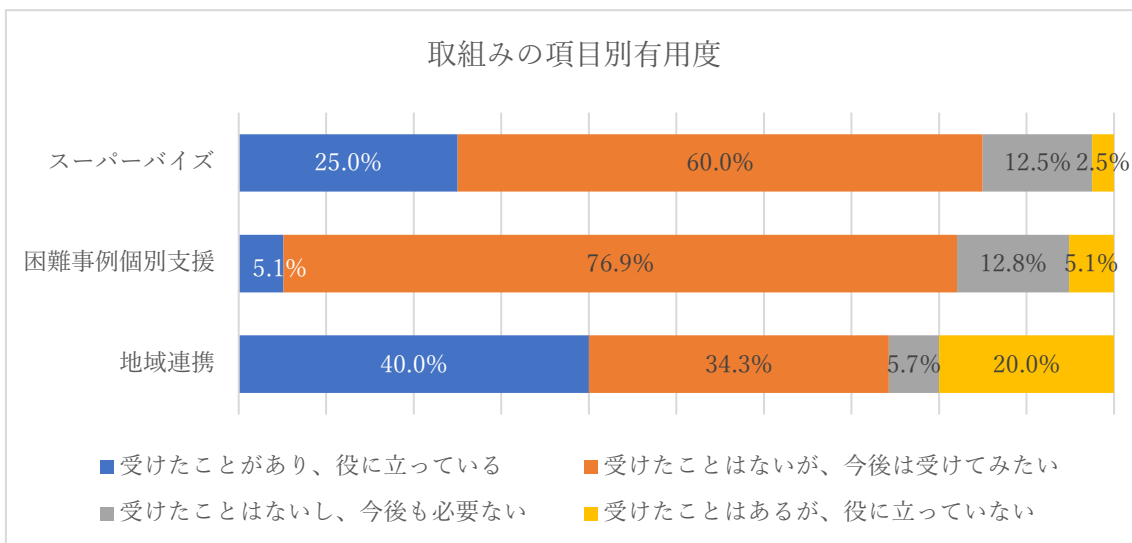
就労実績のある移行支援事業所および定着支援事業所に特化して定着支援に取り組む期間を分析すると、定着支援事業の事業期間のみと回答した事業所はゼロで、半数の事業所は自法人内において無償で個別支援を継続、残りの半数は地域の機関と連携、もしくは引き継ぎをしながら定着支援を継続していることがわかった。

### 定着支援で連携している支援機関



定着支援事業の期間終了後に、連携や引き継ぎを行っている事業所は 37.5%であったが、連携する対象として一番多い回答は相談支援事業所等であった。就労面の支援というよりは生活面等での連携・引き継ぎが予測される。就労系の連携先としては、先ず職業センター、次いでナカポツセンター、自治体設置の就労支援センターという順番となった。

#### 4. スーパーバイズ・困難事例個別支援・地域連携に関する取組みの有用度



実際に役に立っているとの回答が多かったのは地域連携に関する項目であったが、一方で、役に立っていないという回答が最も多かったのも地域連携であり、その自由記述にはナカポツの機能自体がよくわかっていない、状況がわからないといった内容もあり、それぞれの機関における「地域連携」に対するイメージの不明瞭さが際立つ結果となった。

以下、自由記述回答を記載する。

##### 【就労定着支援事業所等に対するスーパーバイズについて】

###### ○ 受けたことがあり、役に立っている

- ・就労サービスとして生活面にどこまで関わる事が必要なのか基準を示すような勉強会があるとよいと思います。
- ・北海道障害者職業センターの利用の話や GATB についてなどの研究は勉強になった。
- ・勉強会に今後も参加したい。スーパーバイズ等個別のケースに係る援助の必要性は、今は感じていないが、多機関が連携すること自体は重要と感じる。
- ・先の就業後の課題である就職者の集いや研修会に参加し、事例などから酷似したケースの相談等を受けて頂きました。また、地域資源についてのアドバイスなどをいただきながらその方にあった資源利用に繋げることができています。
- ・ジョブコーチ養成研修。
- ・職業適性検査をしてもらい、どのような職業が合っているかなどアドバイスをいただきました。
- ・企業への同行は、利用者本人も相談できる場所が増えて助けられている。

○ 受けたことはないが、今後は受けてみたい

- ・一般就労に向けてのサポート。
- ・好事例、好ではない事例など。
- ・支援の質の向上や、支援方法の幅が広がるような助言。
- ・就労継続支援事業所を利用しているものの、就労意識が希薄な方（生活介護よりは能力が高い程度の意識）へのモチベーション構築に向けてのアプローチ等。
- ・一般就労先の環境のアセスメントと就労継続支援B型のサービスを利用されている利用者のケースを確認して頂きながらの支援員からの相談も受けて欲しい。

**【困難事例に対する個別支援について】**

○ 受けたことがあり、役立っている

- ・以前勤めていた会社の社内研修。
- ・以前私どもの事業所では、なんでも作業ができる利用者様がいたのですが、職業適性検査をして頂いたところ、該当しないと結果が出ました。その後、就労されたのですが、あんなにできていた方が就労されるとリセットされ、ゼロからのスタートになりました。職員の意識改革に役立ちました。

○ 受けたことはないが、今後は受けてみたい

- ・協働で対応することが効果的だと感じるケースであれば受けてみたい。
- ・身体拘束、虐待、クレーム対応など。
- ・パーソナリティ障害に対するアプローチ。

○ 受けたことはあるが、役に立っていない

- ・トラブル等があった際に、早急に対応しなくてはいけない場合の都合が付かない。

**【地域の就労支援機関との連携について】**

○ 取り組んでいて、役立っている

- ・就労支援と児童の意見交換会等もあり、それぞれの課題や求める支援についてより理解が深まった。
- ・自立支援協議会の参加。
- ・相談事業所からのアドバイス等。
- ・新規利用へつながる方の紹介をいただいた。

○ 取り組んでいないようだが、今後は期待している

- ・今いる地域では自立支援協議会の開催もままならいし、就労推進部会などの部会もない。
- ・状況を把握できていないためわかりません。

**【上記以外で、障害者の就業に伴う生活面の支援力を向上させるために行なっている取組、今後期待する取組】**

- ・ 定着サポート。
- ・ 逆にどのような機関なのか知れるような、スタッフ向けの資料があると嬉しい。
- ・ もう少し情報発信していただけると良いのかな、と思います。
- ・ 今まで生活面でお世話になったことはなかったのですが、異性問題に対する支援など教えていただきたいです。
- ・ ナカポツ主催の当事者の定期的なコミュニティ・憩いの場の開催。
- ・ ナカポツにあまりどのような機能があるのかわかっていません。
- ・ 就労意識の改善を図るための取り組み・事例等教わる機会。
- ・ 一般就労先の環境のアセスメントと就労継続支援B型のサービスを利用されている利用者のケースを確認して頂きながらの支援員からの相談も受けて欲しい。

**【一般就労に移行した障害者の定着に関わる支援を行う際に、課題を感じる状況や局面】**

- ・ 特性や配慮点について、本人のプロフィールシートなどを持参した上で面接採用となっているものの、一般の方と変わらない事を求められてしまう。配慮事項については理解されていない場合が多い。あえて、苦手とする仕事を要求され、1度間違えるとダメだしが酷いなど、現場では一般の求人内容と変わらない人を望むケースが多い。
- ・ 地方になると就労定着支援事業所がない、中ポツからも遠いといった問題がある。今までの支援の経過から本人や家族、企業が就労移行支援事業所の定着支援を望むケースも多い。
- ・ 企業によって支援体制が低い。
- ・ 本人が関わるのを嫌がるケースがある。
- ・ 障がい者雇用をしたいという企業があっても、ある程度の企業の理解や、配慮が無いと厳しいと感じる。
- ・ 生活面への支援には限界がある。
- ・ 比較的長期に伴走者が必要なのではないかと思う。
- ・ 不満や悩みの自発的相談スキルに課題がある方への支援は難しい。こまめな対応での信頼関係作りがポイントと感じる。こまめな対応をするにはマンパワーの問題もあるので他機関で連携する必要性を感じる。
- ・ 事業所を長く利用していた方は比較的人とのコミュニケーションを楽しむことができている方のように思われ、就職後数カ月過ぎて手順を覚えたころに人恋しさから「疲れた。休みたい」との言葉が聞こえ始めています。就業中も気にせず集える場所があると改善していけると思います。
- ・ 就労系サービス以外、生活相談だけを利用していた方が一般就労すると生活相談が切れてしまうところ。

・グループ内に移行 B 型の多機能事業所があるので、基本はそちらにステップアップしてもらう手順で連携している。が、そうではなく直接一般就労する利用者が発生した場合、事業所の役割やノウハウの面で定着の支援が難しい。

・自法人に一般就労した方については関わりが多く持てるがそれ以外で一般就労した方は事業所との関係が切れてしまい、全く関わりがなくなることがほとんどである。

・ご本人が人見知りのため、企業様にご本人の思っていることなど伝えられなく、企業様は、障害者雇用が初めてでどうしたら良いかわからなく、コミュニケーションが取れていない状況で、本人は辞めたいがご家族が反対されているケースがあり定着支援に難しさを感じています。

・支援スタッフの不足。

### 【その他自由記述】

・雇用主の障害者理解と支援についての理解が進む様な取りくみが欲しいです。

・就労 A や移行支援、一般就労もそうだがその他の福祉から「優しくない」と思われ、少々の困難で B 型へ移動を提案されてしまったり、福祉の中でも理解をしてもらいづらい。障害者の働くことをどのように応援するのかアセスメントを合わせていくのが難しい。

・専門性の高い人材による安定した事業運営を行うための制度設計に課題。

・既存の社会資源をいかに上手くネットワーク化出来るかが課題。

・一般就労された方の就労意識の低さ、社会性の薄さなどどう支援していったらいいのか教えていただきたいです。

・ガス抜きが出来る、家族・GH 職員・利用者等以外と過ごす事の出来る場の提供。

## 障害者就業・生活支援センタートータス（群馬県）

配布 17 事業所 回答 16 事業所 回答率 94.1%

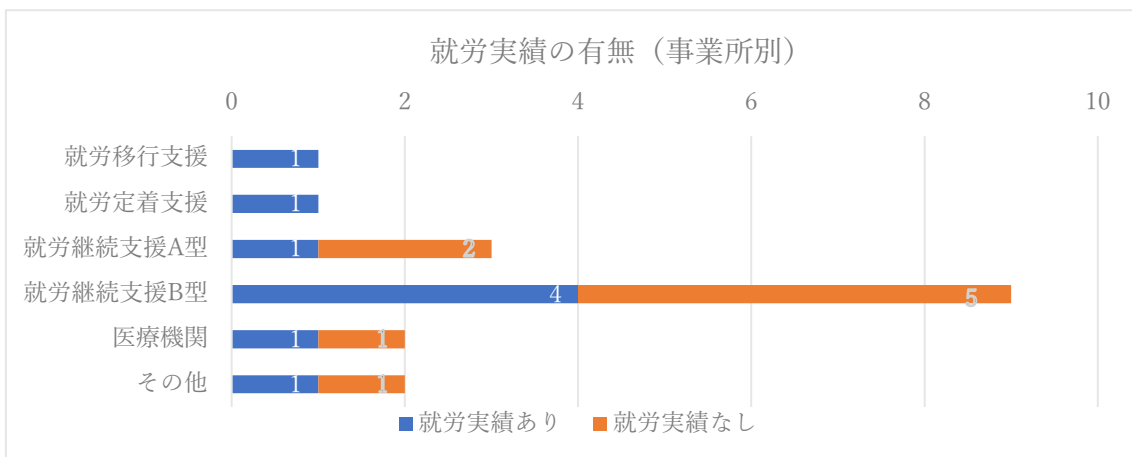
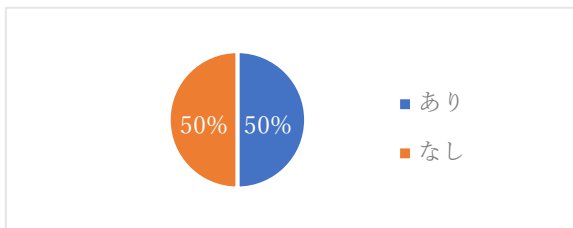
実施日 2023年9月4日～10月13日

事業所別の回答状況

人口規模	移行	定着	A型	B型	その他	移行+定着
131,533	2	1	3	13		3
回答数	1	1	3	9	4	2
回答率	50.0%	100.0%	100.0%	69.2%	—	66.7%

回答率は94.1%と極めて高く、全ての事業所に手渡しで依頼した効果や、すでに顔の見える関係性が築けている実態が現れている。

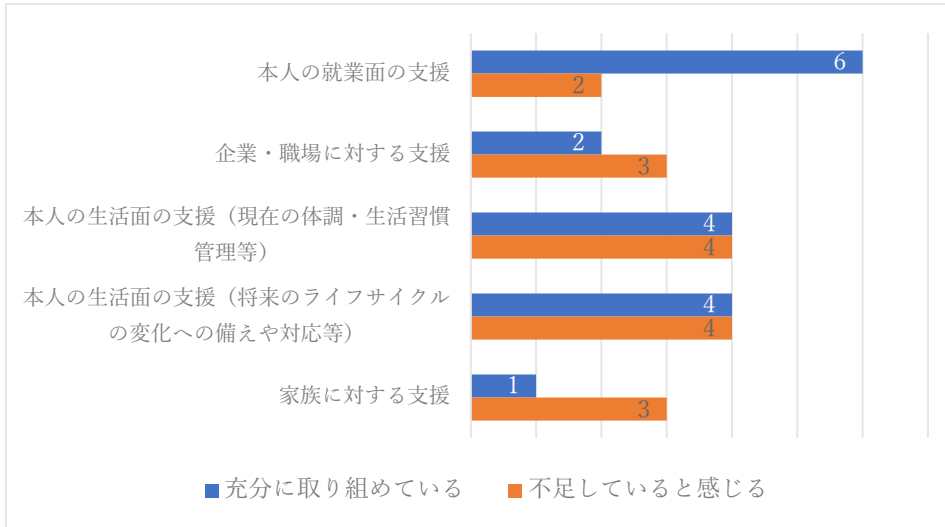
### 1. 就労支援の実績



回答事業所のうち、過去3年の就労実績の有無は半々で標準的ある。A型・B型事業所から就労へと繋がるケースも一定数存在している。

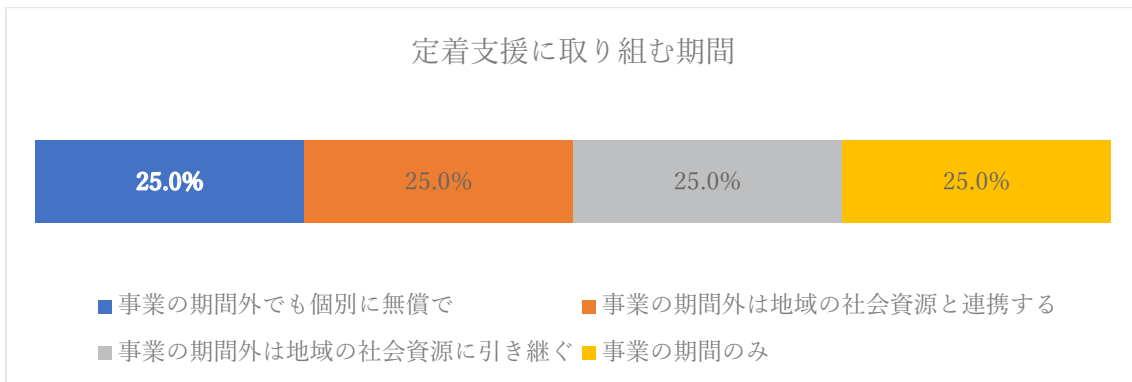


## 2. 取り組んでいる支援についての自己評価



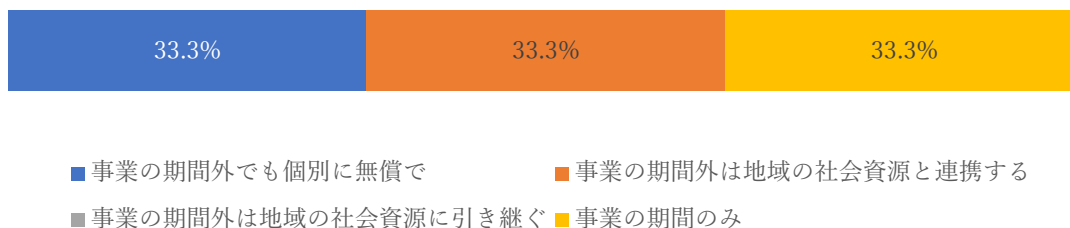
充分・不足の割合は全体的な傾向とほぼ似通っているが、本人の現在の生活面への支援力は平均より低い。

## 3. 定着支援に取り組む期間及び連携先支援期間について



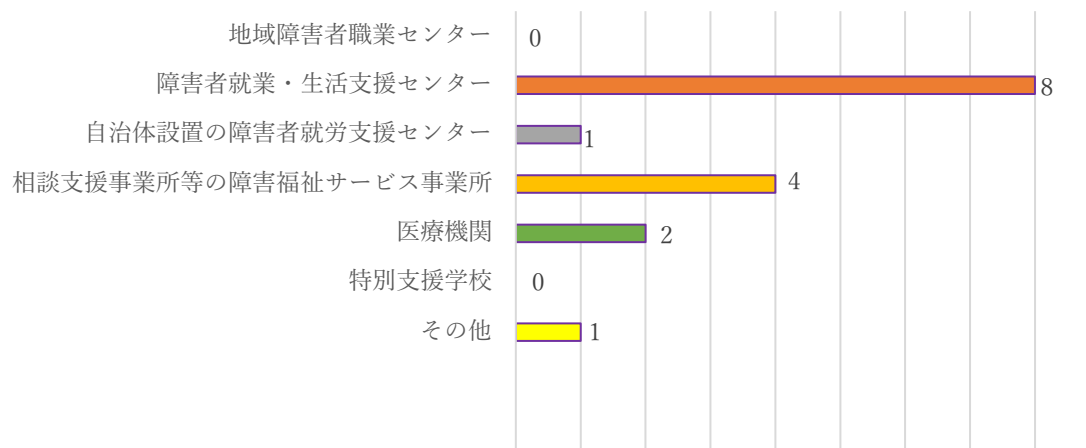
定着支援事業の期間終了後の支援については、自事業所で個別単独で取り組むケースが比較的少なく、他機関に引き継ぐとの回答が若干多い。

### 移行・定着支援事業所における定着支援に取り組む期間



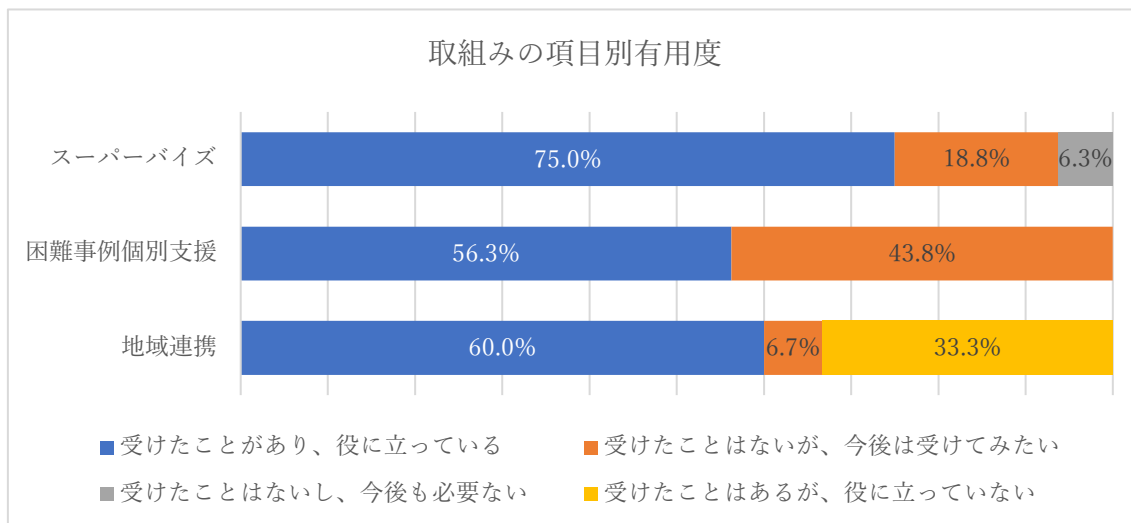
移行・定着の事業所に特化して集計すると、「引き継ぐ」との回答は皆無であった。

### 定着支援で連携している支援機関



連携している支援機関として最も多かった回答は、圧倒的にナカポツセンターであった。

#### 4. スーパーバイズ・困難事例個別支援・地域連携に関する取組みの有用度について



実際に役に立っているとの回答が非常に多く見られた。すでに関係性ができあがっており、支援に有効性があることが確認できる。地域連携で「役に立っていない」という回答の中には、そもそも参加したことがないという記述や、しばらく一般就労できた利用者がないといった記述もあり、選択した回答と記述内容にずれがある場合も含まれている。

以下、自由記述回答を記載する。

##### 【就労定着支援事業所等に対するスーパーバイズについて】

###### ○ 受けたことがあり、役に立っている

- ・ トライアル雇用のサポート 企業見学、実習で大変お世話になりました。
- ・ 個別指導をして頂いている。今後は、事業所全体として支援力向上のための勉強会をと考えております。
- ・ 企業見学を取り付けることや、そこから実習への流れをエスコートする等、様々な点でサポートいただいています。
- ・ 企業側との調整については、間に入ってもらった方がスムーズだと感じる。
- ・ 就労先や実習の場の紹介を頂き、一般就労できた方がいます。また、定着支援もナカポツセンターと協力し進めていました。
- ・ 面談の同席、企業への動向など。
- ・ 企業が求めている、精神障害者への就労。精神障害者への特性、対応の手段。
- ・ 食品関係の仕事で、身だしなみが出来ていないこと(制服がきちんと着られていない)やトイレの使い方が悪いこと(トイレ休憩の時間が長い、汚れがひどい、便やトイレットペーパーでトイレを詰まらせる等)の注意を度々受けた利用者に対して、企業へ同行してもらい、

現場で指導をしてもらった。

- ・障害を持っていたとしても社会人として福祉の場所であれ、しっかりとした考え方をもち接し一緒に支援し前に進めるようにして下さるのでとても助かり、勉強になっています。

○ 受けたことはないが、今後は受けてみたい

- ・支援力向上の勉強会。

**【困難事例に対する個別支援について】**

○ 受けたことがあり、役立っている

- ・特に企業との連携は当所では至らないところもあってその部分のサポートは大変助かっている。
- ・第3者から専門的な話をしてもらったほうが、患者さん本人も納得しやすいと感じる。
- ・自力通勤の対応（訓練）当事者の特性を企業側へ伝え、作業安全面について考慮頂きました。
- ・ハローワークのサポートをしてくれる窓口に繋ぎ働きかけていただいたことで本人の就労意欲を維持できた。
- ・食品関係の仕事で、身だしなみが整えられず企業から度々注意を受けた利用者に対して、制服の帽子のボタンをマジックテープに変更する案や着方を絵図で表す案を提案してもらい、それらを用いて支援対象者本人に着方の指導をもらった。

○ 受けたことはないが、今後は受けてみたい

- ・利用したいと考えている方の中で、問題行動を起こしてしまったケースや（かなり問題を起こしているケース等）対応方法など情報を共有しながら支援が行えたら良いと思います。（相談員さんが情報を隠していたり後から伝えたり、関係ないとなってしまう正しく支援できないことがあるので）良い方法で支援していくのいいかと思うので。

**【地域の就労支援機関との連携について】**

○ 取り組んでいて、役立っている

- ・勉強会、シンポジウム開催や販売機会の提供は利用者・職員共に勉強になり大変ありがたかった。
- ・市の就労支援部会において、障害者雇用面接会を主導しており、地域の連携に尽力されています。
- ・ネットワーク会議で横のつながり（地公体、福島サービス事業所、学校など）により情報共有できる。
- ・精神障害者の就労状況。
- ・地域との連携や様々な情報を頂けるので引き続きお世話になります。

○ 取り組んでいるようだが、役に立っていない

- ・事業所としての定期的なネットワーク会議開催に参加したことがないため、上記の回答としました。
- ・一般就労を希望する利用者があり、その方に合った求人情報の提供。
- ・自立支援協議会などで活躍されている様子だが、そこに参加できる機会がないので役に立っていないと感じている。

**【上記以外で、障害者の就業に伴う生活面の支援力を向上させるために行なっている取組、今後期待する取組】**

- ・今後、金銭管理に問題のある方を対象に専門家を招いて講義をする予定です。
- ・障害者基礎年金取得する前の講習の取り組みがあり、利用者が安心して準備できる。
- ・休日の余暇活動、集まり。
- ・引き続き、就労先や実習等の情報提供をお願いしたい。
- ・就労と生活リズムの重要性。
- ・忙しい中、利用者さんのために活動して下さっている事に感謝しています。引き続き宜しくお願い致します。

**【一般就労に移行した障害者の定着に関わる支援を行う際に、課題を感じる状況や局面】**

- ・客観的にみて継続支援が必要だが、本人が必要ではないと希望される時、どうしたらよいかと思う。
- ・人事担当者と、実際の現場担当者との課題共有ができていないか、できていないときどうすれば共有ができるか。また、現場担当者が常時現場にいない場合、同僚スタッフにどの程度障害を理解してもらい、障害特性などを甘えやワガママという印象を与えないようにするにはどうしたらいいか等に課題を感じています。勿論、支援者側の立場から求めすぎれば現場も迷惑でしょうし、どの程度理解や時間を求めているのか判断に悩むところです。
- ・医療機関所属の我々と職場の方との考え方や意識の差を感じることがある。ただ、一般社会の認識を我々も理解して合わせていく努力も必要と感じる。
- ・支援をする際に、利用者様との支援の区別が曖昧になってしまう場面が出てしまうことがあります（雇用している立場として）。
- ・環境の変化（休憩時間の過ごし方）。

**【その他自由記述】**

- ・定着支援について、当事業所の動きは適切なかどうか確認するような機会が無いので、他所の参考事例などをみられるような場があるとありがたいと思います。
- ・就労支援の現場で感じることとして、会社組織、特に現場の末端の方々にまで、障害者雇用への意識を高めていただくことは難しいということです。何故なら現場の方々には障害

者の方に親切にする義理はなく（近親者に居る場合は勿論ちがいますが）、メリットも無いことが理由として挙げられるからです。理想としてはトップの方々から現場の末端の方々まで、障害者雇用への意義を見出してもらうことだと思うのですが、残念ながら良くも悪くも多様性のある人間社会、良い人もいればそうでない方もおり現実的ではありません。そこでやはり障害者が長期に渡り勤め続けられることへのインセンティブを現場職員に与えることが重要ではないかと考えます。現在、様々な障害者雇用へのインセンティブがありますが、主な対象は会社本体であり、実際に面倒を見る現場職員には無いように思われます。これを直接的に現場職員がインセンティブ（例えば、具体的には一か月勤務継続ごとに成果報酬として数万円を得られる、もしくは減税措置を受けられる、半年・1年継続でより大きな成果報酬を得られる等）を得られるようになれば、渋々上司からの指示で取り組んでいた方などの意識を変えられる可能性はあるのではないかと思います。場合によってはインセンティブ目当てに担当希望者が続々と名乗りを上げるという可能性すらあるのではないかと思います。今回の意見はお金の流れを変えるだけであり、ある種お金で解決しようとする短絡的な意見ではありますが、逆に言えば実行し易い面もあるのではないかと思います。拙い意見ではございますが、最後までお読みいただき、誠にありがとうございました。

- ・病院職員という立場だと、資格者の配置や専従要件などがあり、なかなか外にでていくことが難しい状況がある。そこで、トータスに入ってもらうことで支援の幅が広がっていると感じる。とても助かっているの、これからも連携していきたい。

- ・定着に関しては時間がかかるものと考えており、雇用している立場としては支援の難しさがありますので、何かしら対策及びサポートがあればと思っています。

- ・企業の求める特に精神障害者の採用条件（精神状態がどのような状態ならば採用出来ると考えているのか）具体的な考え。支援者（医療従事者）と企業のギャップの差があること。

- ・定着以前の問題で、しばらく一般就労できた利用者さんがいません。本人や家族が就職を望まない例が多いのですが、就職希望者がいても採用枠を争う他の候補者に負けています。発達障害の人たちが優秀で人数もそれなりに多いため、知的障害や精神障害で就労継続支援B型に通所している人たちが満足できる条件で一般就労するためには、よほどの運が必要な気がしています。

## 水戸地区障害者就業・生活支援センター（茨城県）

配布 123 事業所 回答 42 事業所 回答率 34.1%

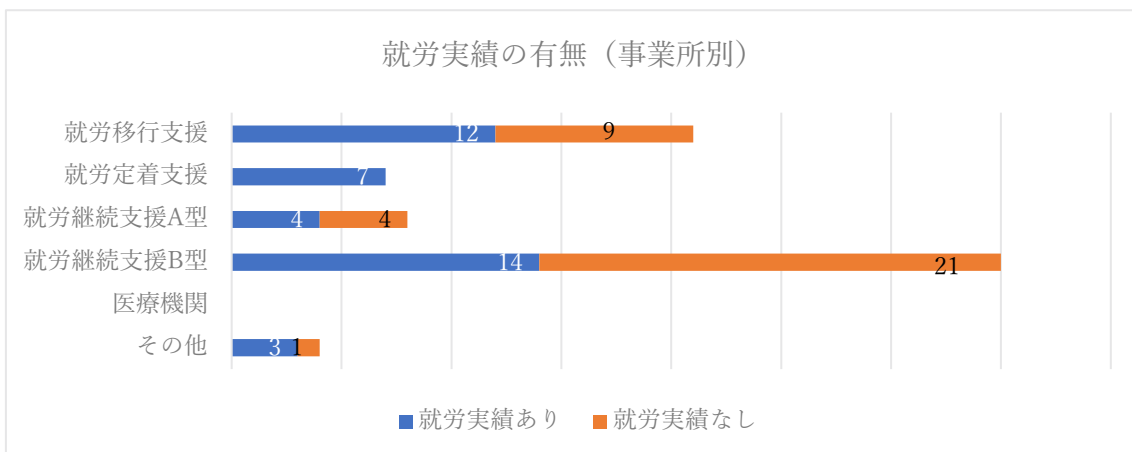
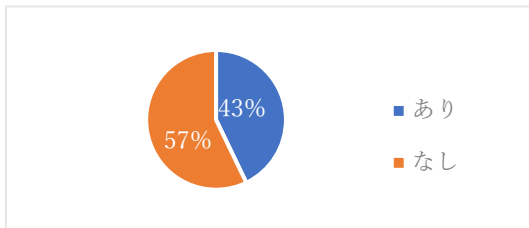
実施日 2023 年 9 月 11 日～29 日

事業所別の回答状況

人口規模	移行	定着	A型	B型	その他	移行+定着
470,000	60	6	15	90		66
回答数	21	7	8	35	4	28
回答率	35.0%	116.7%	53.3%	38.9%	—	42.4%

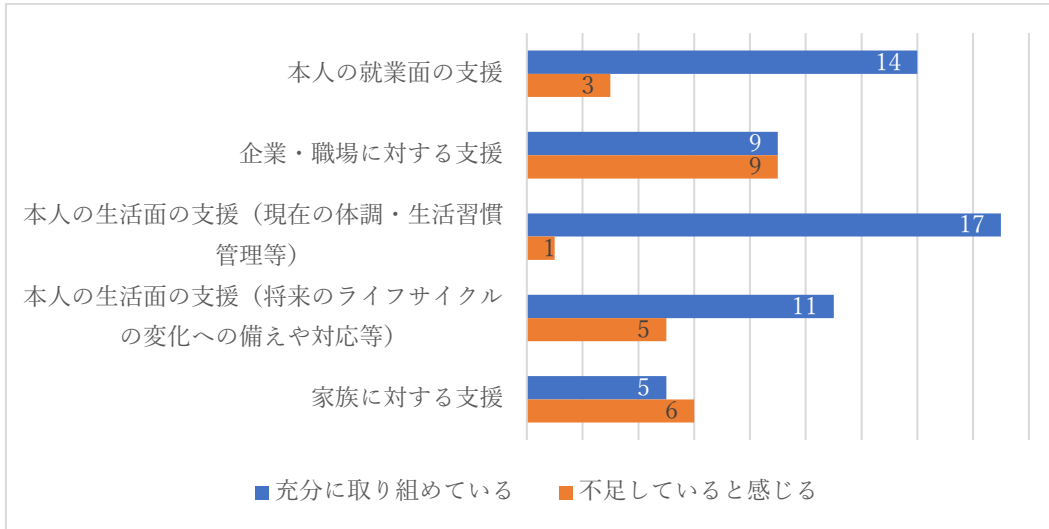
回答率 34.1%は、全体の回答率 34.3%とほぼ同等であった。但し、移行及び定着支援事業所からの回答率は 42.4%で全体平均を若干下回った。

### 1. 就労支援の実績



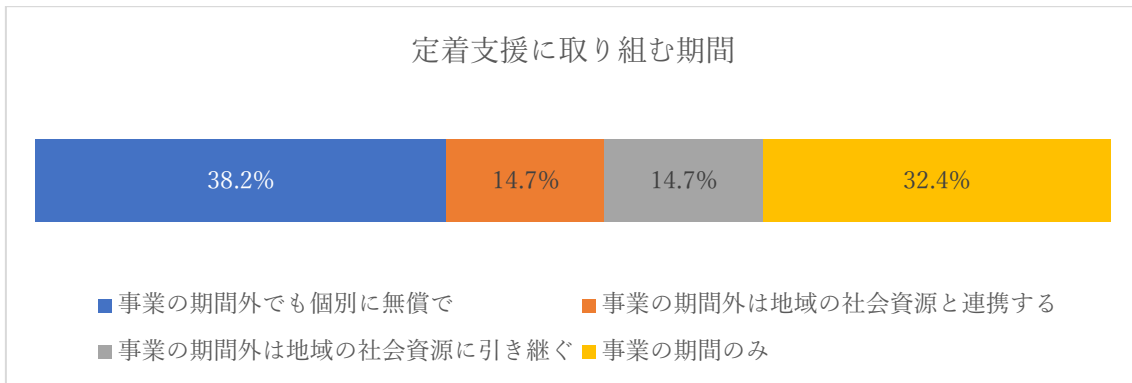
回答事業所のうち半数以上が過去3年の就労実績なしと回答している。とりわけ、実績ゼロの移行支援事業所は他圏域と比べて極端に多い。

## 2. 取り組んでいる支援についての自己評価



本人の生活面の支援には、現時点でも、長期的な視点でも、充分に取り組めているとの回答の割合が非常に高いことから、生活面の支援に力を入れている事業所が多いことが確認できた。

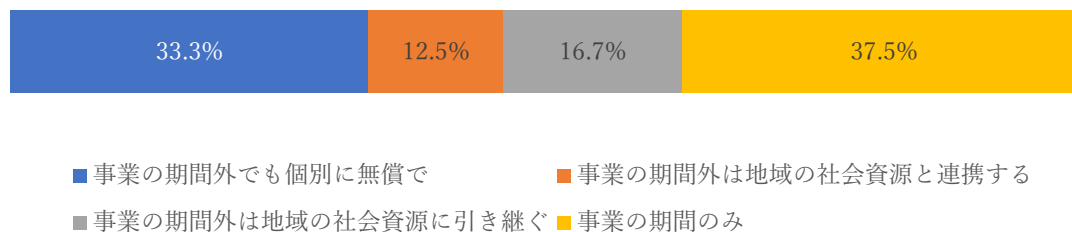
## 3. 定着支援に取り組む期間及び連携先支援期間



定着支援を事業期間のみで終了しているとの回答が3割以上あり、6圏域の中では最も多い。一方で、個別に無償で支援を継続しているケースの割合も非常に高く、連携や引き継ぎはせずに自組織内で支援をしている事業所も多数ある。事業所ごとの方針によって、定着支援の取組に大きな違いがある圏域の実情が読み取れる。

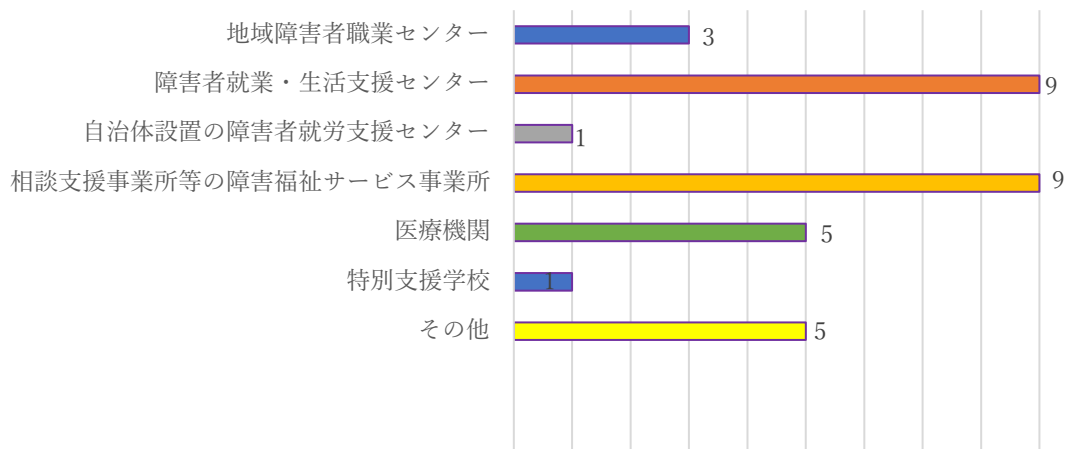


### 移行・定着支援事業所における定着支援に取り組む期間



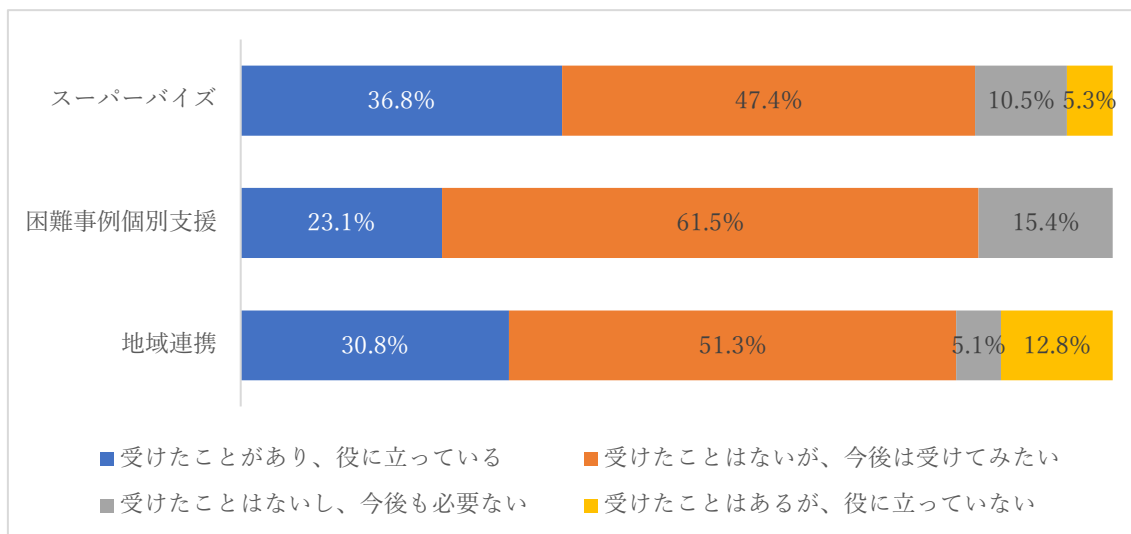
移行・定着支援事業所に限定すると、事業期間のみで支援を終了すると回答した事業所が4割近くまで更に増加している。

### 定着支援で連携している支援機関



連携している支援機関としては、相談支援等の福祉サービスと並んでナカポツセンターが最も多く、圏域内には既に関係性ができている事業所が多数存在していることがわかる。

#### 4. スーパーバイズ・困難事例個別支援・地域連携に関する取組みの有用度



取組み 3 項目の中で、スーパーバイズ・困難事例個別支援の有用度は平均並みだが、地域連携については全体平均を下回っていた。但し、今後受けてみたいという回答は最も多く、今後への期待感を感じ取れる結果であった。

以下、自由記述回答を記載する。

##### 【就労定着支援事業所等に対するスーパーバイズについて】

###### ○ 受けたことがあり、役に立っている

- ・企業への訪問は定着就労するにあたり重要であると感じる。
- ・就労支援事業所だけではかかえきれない問題等を、共に考えていただきサポートしていただけるとありがたい。
- ・定期的なモニタリング。
- ・強度行動障害の方の支援方法。

###### ○ 受けたことはないが、今後は受けてみたい

- ・一般就労に向けたスタッフの知識向上や心構えなど。

###### ○ 受けたことはあるが、役に立っていない

- ・担当する利用者が多いので仕方ないのかもしれませんが、ナカポツは「担当者が変わります」の名刺交換のあいさつのみで利用者との信頼関係や聞き取りの機会が少なくこちら側の資料をそのままファイリングしているだけ。障害者就業・生活支援を出来ていない。

### 【困難事例に対する個別支援について】

○ 受けたことがあります、役立っている

- ・企業が苦戦していることに関して助言ができる（これまでの就労移行での思考や行動を見てきているので）。
- ・家庭環境等で支援が難しい利用者様へのサポート。

○ 受けたことはないが、今後は受けてみたい

- ・個別支援の具体的なケース（事例）など。

### 【地域の就労支援機関との連携について】

○ 取り組んでいて、役立っている

- ・障害者就労・生活支援センターとの連携が多くそこが開催する就労系の催しは参加する。
- ・自立支援協議会の部会等。
- ・地域の障害分野、介護分野の方が来て、企業と障害者雇用の実現に向けて話し合うこと。
- ・他事業所より仕事先を紹介していただき受注できた。

○ 取り組んでいないようだが、今後は期待している

- ・実際にサポートが成功した事例等のお話を聞いてみたい。
- ・具体的連携のイメージを知りたい。

### 【上記以外で、障害者の就業に伴う生活面の支援力を向上させるために行なっている取組、今後期待する取組】

- ・ナカポツセンターとは就活の段階で連携し、その後は当方独自の方法で障害者の方 ←（当方）→ 企業（雇用者）の間で調整し、企業とも連携できている。
- ・当方が定着が終了したあと、中ポツセンターに引き続きお願いできれば良い。
- ・就労している所の見学をして、どの程度の就労レベルでできているかみる機会、サポート。

### 【一般就労に移行した障害者の定着に関わる支援を行う際に、課題を感じる状況や局面】

- ・障がい者枠での一般就労にて就職したあと、就職先の企業で支援を受けられていない場合がある。
- ・事業所と企業側（現場）の定着支援に対する理解に温度差を感じる。
- ・就労 A 型から一般就労した場合、一番定着支援が必要な時期に（就職後 6 ヶ月以内の期間）定着支援を行えない事に疑問を感じる。
- ・本人の精神的な落ち込みなどに対し、外部の企業内の状況の把握が難しいケースが予測される。
- ・就職直後の 6 か月が一番重要な期間にもかかわらず、定着支援が 6 か月後なのが問題。

- ・職場（同僚）の理解、精神面のケア。
- ・大企業だとやりとりしている人事、総務の方が転勤や異動をしまいほとんど引き継ぎもしてくれないところもある。
- ・半年後に A 型事業所へ報酬が入るシステムだが、サポート中の報酬がない。
- ・就職した先の会社に、障害者の立場になって考えてくれる方がまだまだ少ないと思う。

### 【その他自由記述】

- ・ナカポツの相談支援員の就労移行事業所への派遣 現場ではどのような支援や相談を受けているのかを見て勉強してほしい。担当者が 3 か月で変わってしまったのは利用者との関係性は築くことは出来ない。
- ・送り出す側としての支援には限界があると感じている。受け入れていただく企業様も含めた世間的な障害への認知度向上が必要。
- ・繰り返すが、就職直後の 6 か月間が重要なのに、就労移行支援については事実上無償のフォローアップ期間とされ、報酬算定できないのが疑問。就労定着支援を就職直後から利用できるように制度改訂するべき。
- ・当事業所より、一般就労について利用者様の多くはハローワーク水戸の精神障害者雇用トータルサポーターの方々のお力添えだと思っています。就職後も定着支援に同行して頂き、継続して就労出来るように利用者様に親身になってアドバイスをして頂けるのでありがたいです。
- ・まだまだ企業側の意識が薄い（口ではいいこと言うが、心がない人が多い）。
- ・一般就労された方がその後、一人ぼっちにならないようにする事が大事である。ボイス社では就労者が参加できるレクなどは参加 OK にしている。ご本人の努力ももちろんあるが、レク等に参加している方は定着して働いているケースが多いと思う。
- ・就労系の施設は学校を卒業してから直接 A 型事業所へ入れないシステムのため、若者が入りにくい。
- ・企業のルールに沿った中で、体調により思う通りに仕事が行えない方に対しての支援に難しさを感じる。
- ・定着支援期間終了後のご様子等が、事業所がどこまで関わっていいのか悩みます。
- ・就労に定着し、障害者の勤続が続いている割合。
- ・一般就労の成功例や事例をお聞きしたい。

## 津地域障がい者就業・生活支援センターふらっと（三重県）

配布 70 事業所 回答 30 事業所 回答率 41.7%

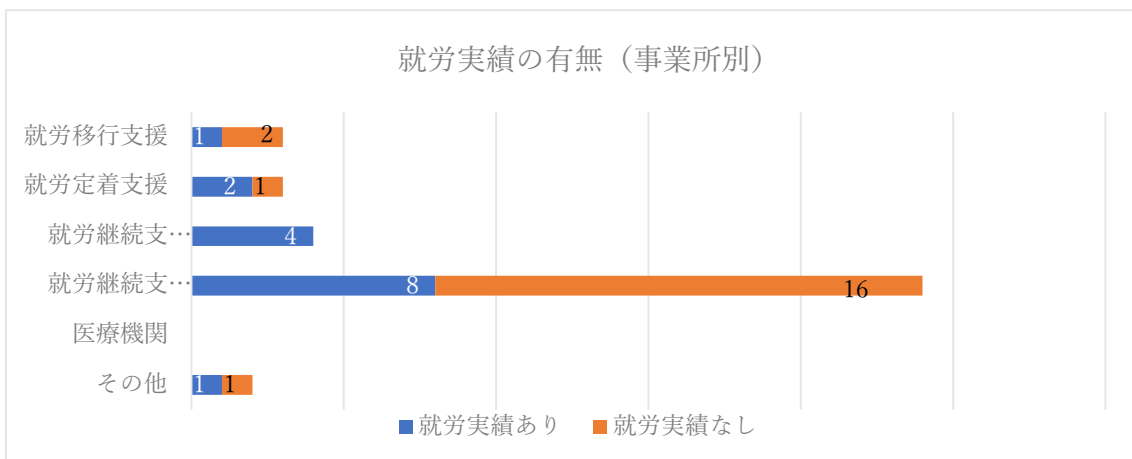
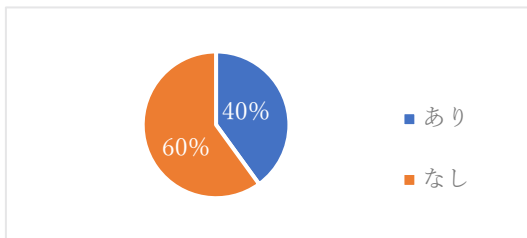
実施日 2023 年 10 月 10 日～31 日

事業所別の回答状況

人口規模	移行	定着	A型	B型	その他	移行+定着
271,747	5	4	9	52		7
回答数	3	3	4	24	2	6
回答率	60.0%	75.0%	44.4%	46.2%	—	85.7%

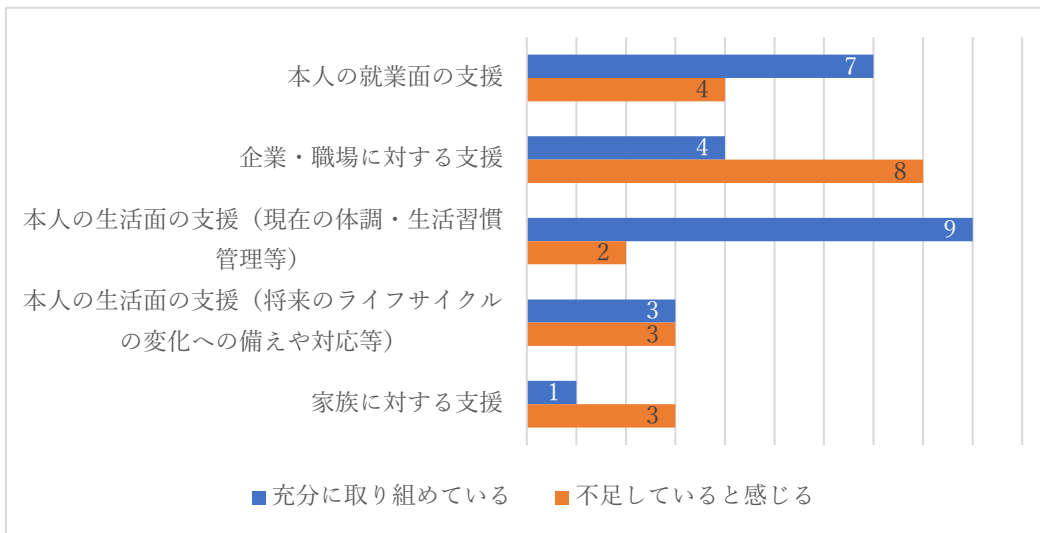
地元の自立支援協議会から調査用紙を郵送していただいたおかげで、回答率は全体平均の 34.3%を上回る 41.7%という結果となった。とりわけ移行支援事業所および定着支援事業所からの回答率は、6 圏域の中で最も高い 85.7%であった。

### 1. 就労支援の実績



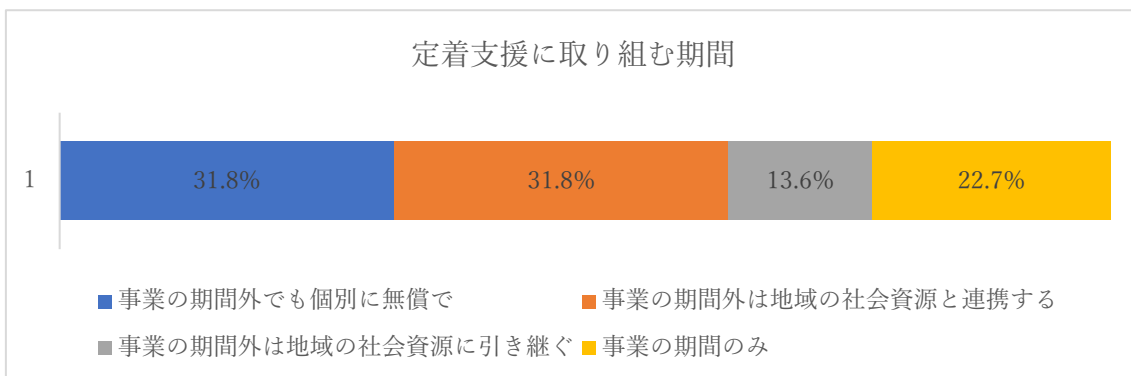
回答事業所のうち、62%は過去 3 年の就労支援実績があると回答している。就労実績が全くない移行・定着支援事業所が存在する一方で、A 型事業所においては、すべて就労実績があるという 10 事業所が回答している。B 型事業所においても回答事業所の半数に直近の就労実績があることから、A 型や B 型から就労へと繋がるケースが一定の割合で存在している。

## 2. 取り組んでいる支援についての自己評価



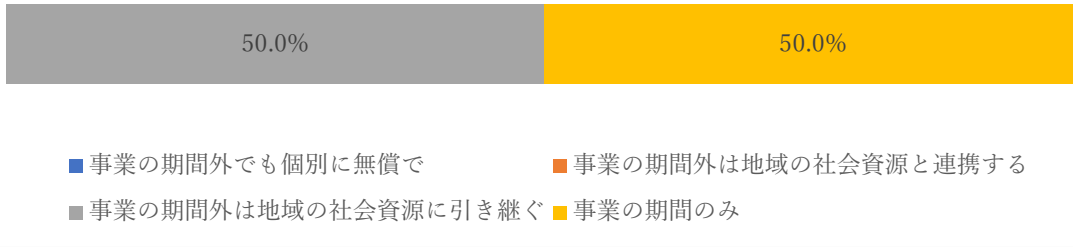
充分に取り組んでいる項目として、本人の現在の生活面の支援、本人の就業面の支援が上位にきているのは一般的な傾向と同じだが、企業・職場に対する支援が不足しているという認識の事業所の割合が、全体平均と比較して非常に高いところが特徴的な結果となった。

## 3. 定着支援に取り組む期間及び連携先支援期間



定着支援を事業の期間にあわせて終了しているケースが2割程度なのは全体の傾向と同様であった。支援を地域の別の社会資源に引き継ぐという回答が最も少ないところに圏域の特徴が読み取れる。

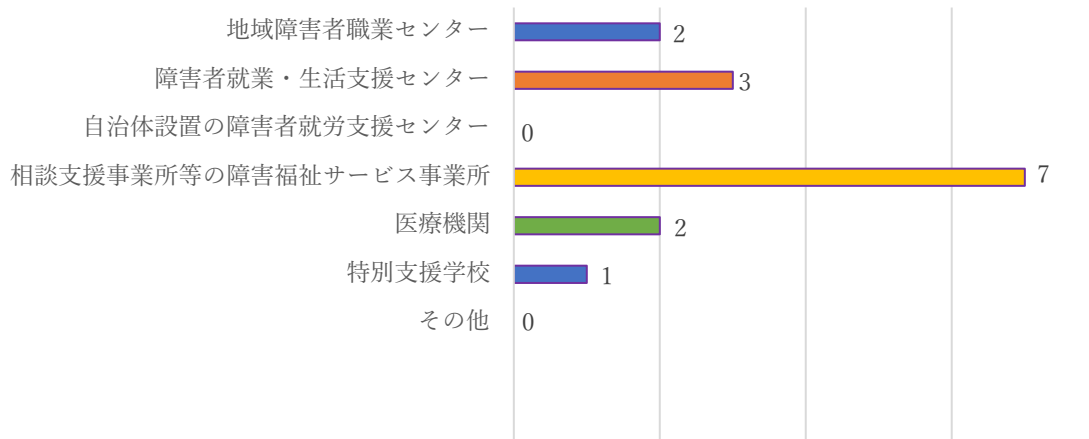
### 移行・定着支援事業所における定着支援に取り組む期間



- 事業の期間外でも個別に無償で
- 事業の期間外は地域の社会資源と連携する
- 事業の期間外は地域の社会資源に引き継ぐ
- 事業の期間のみ

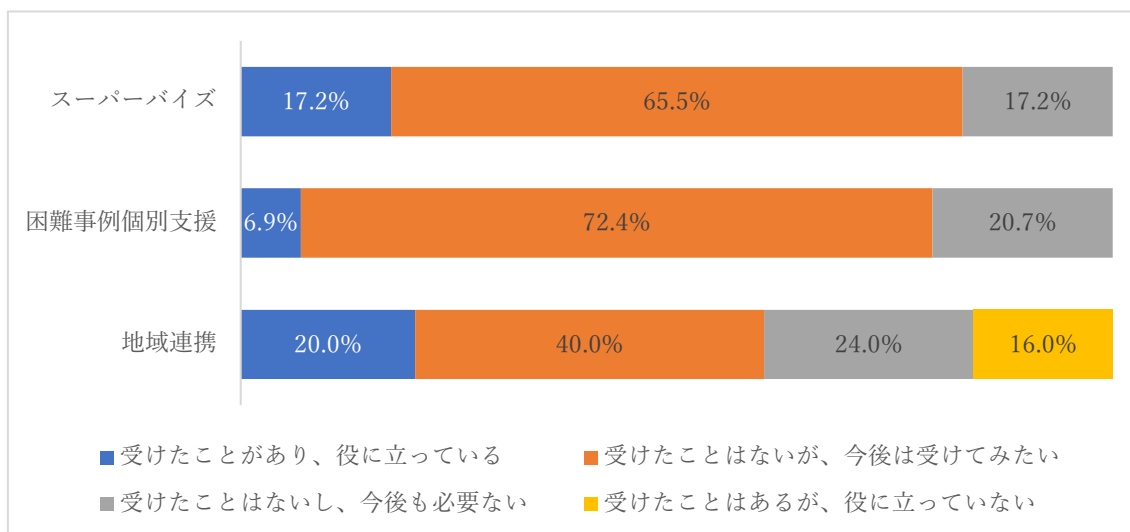
移行と定着支援事業所に特化して集計したものの、回答数が2事業所に限られていたため、データとしてはあまり参考にできない。

### 定着支援で連携している支援機関



連携している支援機関の内訳は、全体の傾向とほぼ同様である。

#### 4. スーパーバイズ・困難事例個別支援・地域連携に関する取組みの有有用度



3項目とも「受けたことはないし、今後也不需要い」との回答が2割程度存在し、過去存在した同名別施設と勘違いされている可能性が推察される。一方で「受けたことはないが、今後は受けてみたい」の割合は3項目とも全国平均以上であり、自由記述に「積極的に関わってほしい」という意見も見られたことから、ナカポツのイニシアチブに対する期待も感じられる結果となっている。

以下、自由記述回答を記載する。

##### 【就労定着支援事業所等に対するスーパーバイズについて】

###### ○ 受けたことがあり、役に立っている

- ・就労した当事者の就労先での様子、移行支援機関職員との関係性などを詳しく知れた。
- ・当事業所の見学や面談への同席を通じ、契約に至ったケースがある。その際、個別支援に対する助言や情報提供を受け、スムーズに利用を開始することができた。

###### ○ 受けたことはないが、今後は受けてみたい

- ・支援力向上のための勉強会等に関心があります。
- ・工賃向上など。

###### ○ 受けたことはないし、今後也不需要い

- ・センターから何の連絡もない。センターは活動しているのか。センターは廃止されたと思っていた。



### 【困難事例に対する個別支援について】

○ 受けたことがあります、役立っている

・サービス担当者会議においてどのように支援していくかを話し合い、支援対象者本人、家族の希望するサービスや制度についての情報提供を受け利用を進めていくこととなった。

○ 受けたことはないが、今後は受けてみたい

・もっとドロ臭いケースワークや支援、事例紹介など知りたい。

・同じような人間関係での悩みで離職する精神障害当事者、当人も一緒に受けられる講習など。

・本人の生活面にかかる課題への個別支援など、連携した形で支援できればと思います。

○ 受けたことはないし、今後も必要ない

・過去に相談したが相手にされなかった。

### 【地域の就労支援機関との連携について】

○ 取り組んでいて、役立っている

・幼少期（15歳未満）からの関わりや、そのネットワーク会議に参加したことがある。学校や保育、教育関係者等からの現状と課題について傾聴し、就労支援の果たすべき役割や道筋をたてるのに役立った。

・私自身がかわりのある精神障がい当事者が1～3年就業できていることはそれで十分な成果であると感じる。どのように表現すべきかわからないが、健常者が定年まで勤めるのに等しいくらいの頑張りを本人がしていると感じるし、支援者側はとて余裕があるようにはみえない体制の中で情報共有して応援している。

・企業様のニーズや各事業所のかかえている悩み等を共有できる。

・他機関との顔の見える関係作り。

○ 取り組んでいないようだが、今後は期待している

・今後参加したい。

○ 取り組んでいないようだが、役に立っていない

・取り組まれているのかもしれませんが、あまり参加したことがありません。

・当事業所から参加したことはないが今後機会があれば参加していきたい。

### 【上記以外で、障害者の就業に伴う生活面の支援力を向上させるために行なっている取組、今後期待する取組】

・家族関係調整まで含めて支援に当たってくれている。必要に応じ社会福祉協議会などと

も緊密に連携してみえる。近くに事務所があることはとても重要と感じる。

- ・利用者さんが選択肢のある事業提供を実施展開。
- ・一般企業と障がい福祉サービス事業所とが繋がれる機会を作っていただきたいです。
- ・当事業所は2012（平成24）年6月に障害福祉サービス事業に着手しましたが、スタートからしばらくの間はナカポツセンターさんとの連絡調整がありましたが、近年は常時の関わりがないところです。今後、定期的な関わりを持たしていただければと思います。
- ・利用者が住む地域に密着した就業先の支援事業者への情報提供。精神の利用者への、地域に密着した求人情報の提供。カウンセリング。
- ・もっと積極的に関わっていただけるといい。当事業所への訪問や、利用者さんとの面談が少なく、支援が中途半端で自然消滅になったケースがある。ご本人の意思を尊重していただいていることだと思うが、就職活動についての説明や導きが少しマイルド過ぎかとも感じる部分もある。
- ・一切受けたくない。
- ・今後も障がい者が金銭面や医療面など総合的な援助を受けられるよう、各関係機関の中心となり連携を促す取組に期待している。

#### **【一般就労に移行した障害者の定着に関わる支援を行う際に、課題を感じる状況や局面】**

- ・就職ができるが、なかなか定着ができない現状もある。どのようにして定着させるのが今後の課題となっては来るが、相手会社もしっかりと担当者を付けてくれるような会社だととてもありがたい。
- ・なかなか6ヶ月続けるのは難しいところもみられる。
- ・各支援機関が一つにまとまらず、マチマチで対応してしまい、当事者が不安になることがある。
- ・家族の理解や協力が受けにくく、企業に無理を言う。
- ・密度の濃い月日を共に過ごしたケース程、ナカポツにつなげにくい。あるいは、関わりギャップにより、支援期間が終了した後もフォローアップが必要なケースもある。
- ・3年以上前に何度も就労されている当事者は人間関係に悩んで離職される。職場での人間関係のフォローがもっと必要。可能なら理解者もしくは支援者が就職先企業で共に働きながら、支援者分の給与を就労継続支援の収入に繰り入れながら付きっきりで一緒に働く期間を設けるなどできないか。
- ・当法人の繁忙期に無理のないように仕事に取り組むこと。
- ・関係機関との通常からの連携が充分とは言えず、本人や就労先企業等からの相談等に当事業所として個別に対応している状況にあります。例えば、本人の生活面にかかる課題に対し、ナカポツセンターさんと連携することが適切と感じる場面がありました。
- ・一般企業側の障がい者への理解度、サポート面の手厚さを増やす支援があると、もっと働きやすいのではないか。いざ一般就労へと挑戦される方々は障がいを隠して（言うとは雇って

もらえない、との考えをお持ちの方もみえます) 就労される方が多いため、継続が難しいのではと感じる。

・事業所として全力で応援して出したとしても、企業でのやりとり等が目に見えないので、その部分がうまくいっていないと感じる時があります。

### 【その他自由記述】

・雇用定着のための「準備」がいかに大切か、もっと周囲と認識やその支援についてなど、高めあいたい(準備支援の重要性)。

・支援に関わる人材とそれを確保する予算が少ない。職員給与や利用者工賃に留意しているものの、若い人に来てもらえない。授産作業の取引先から、障がい雇用に伴う補助に、当事者を支える分の人件費まで考慮されていないとなかなか踏み切れないと聞いたことがある。大規模調査によく登場する結果と同じことを身近で聞き、説得力があった。障がい者や高齢者が働く姿をみて考えることは多くの人にとって自らの将来に直結しているのでは。趣旨を外れるのを覚悟の上でもう一度。人を信頼し生かすことにお金を使い、疑心暗鬼による紛争準備の軌道修正が必要。もうもたない。グーグルフォームは回答しやすいが、一晩寝て頭を冷やしての加筆修正ができない。

・企業に事業所リストが流れ、常に就労できてB型の作業が需要できる社会の仕組み。

・当事業所で一般就労に移行される方々は、相談支援の担当者と本人とで進めたり、本人が勝手に決めていくパターンが多かったが、定着に関わる支援機関を、利用者様にも情報提供していきたいと思います。一般企業様が障がいを持たれる方の理解を深める機会、障がい者雇用先が増えてほしいと感じます。

・一般就労に移行した後の支援(企業の中での活動環境、生活支援)にどこまで関わって下さっているのか、障害者の求める程度が少ない方の場合はどうやって関わっているのか、その場合の支援が足りているのか、気になります。

・地域で働く障がいを持つ方の仕事の質が適切であるのか、権利侵害はないのか、という点で気付ける体制が必要かと思う。ただいだけで良いという雇用で、本人のスキルアップや良い生き方に繋がらない環境が見受けられ、福祉サービスから離れたその後の課題が、これから表面化してくるのではないかと感じている。企業が障害者雇用に成熟できるような働きかけも必要かと思う。

## なら中和障害者就業・生活支援センターブリッジ（奈良県）

配布 80 事業所 回答 20 事業所 回答率 25.0%

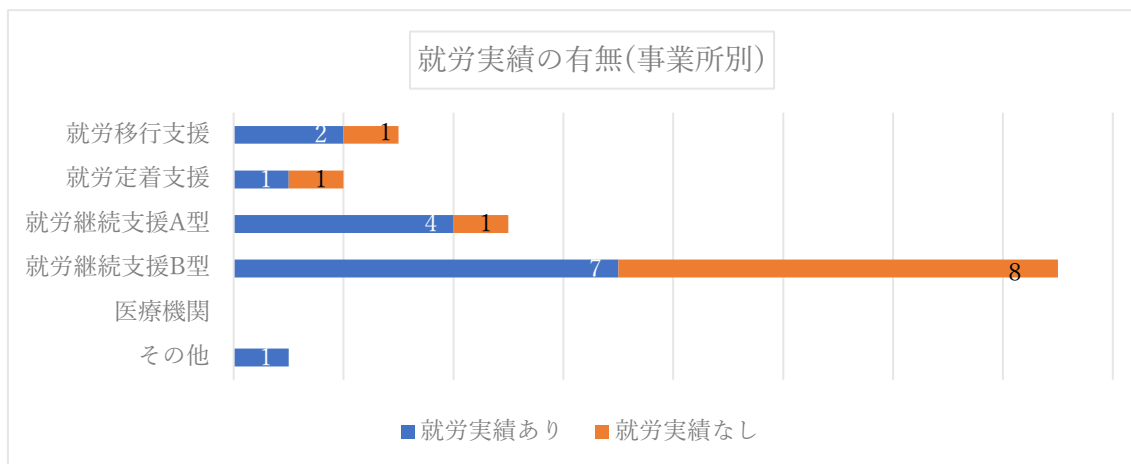
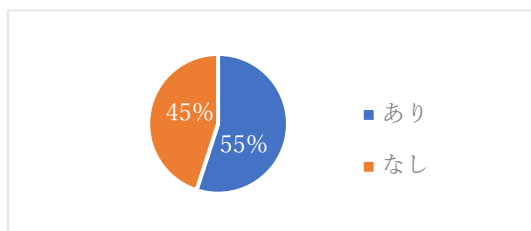
実施日 2023年9月11日～10月16日

事業所別の回答状況

人口規模	移行	定着	A型	B型	その他	移行+定着
380,000	9	5	19	55		14
回答数	3	2	5	15	1	5
回答率	33.3%	40.0%	26.3%	27.3%	—	35.7%

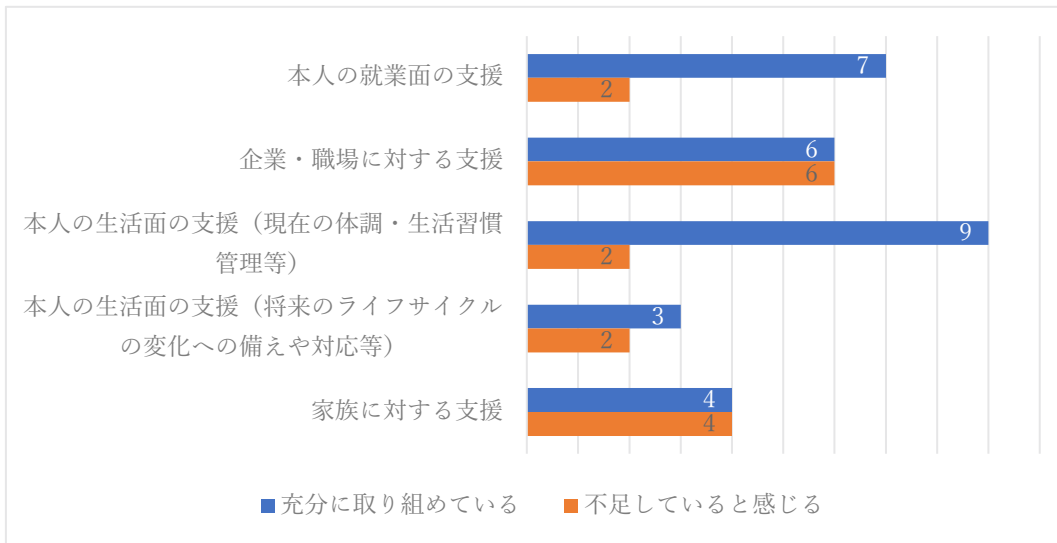
中和ブリッジの回答率は25.0%で、今年度調査全体の回答率34.3%を下回る結果となった。ただし、移行支援および定着支援の回答率は35.7%と微増している。

### 1. 就労支援の実績



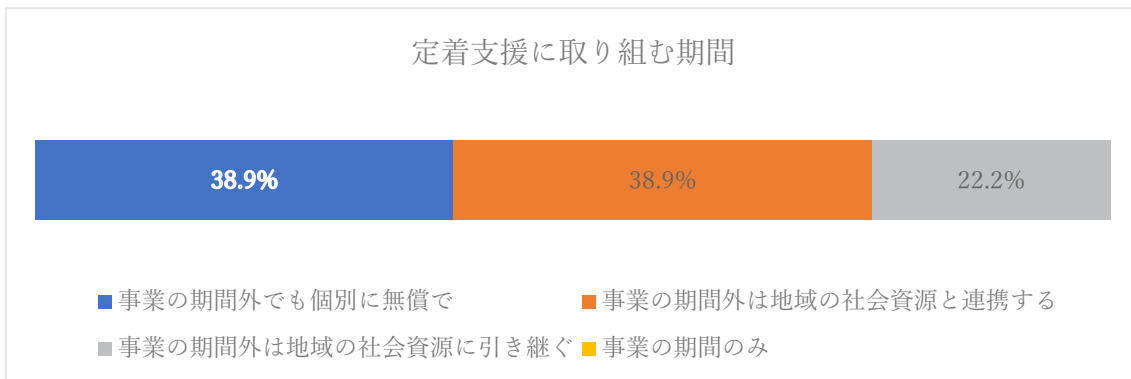
回答事業所のうち過半数の55%が、過去3年間の就労実績があると回答している。就労実績が全くない移行・定着支援事業所が存在する一方で、A型・B型の継続支援事業所から就労へと繋がるケースも一定の割合で存在している。

## 2. 取り組んでいる支援についての自己評価



本人の就業面及び現在の生活面の支援には充分に取り組んでいる、との回答が多数を占めるのは、全体の傾向と共通している。一方で、長期的な視点での生活面の支援や、家族に対する支援、企業への支援に対する自己評価が、プラスマイナスほぼ同数なのは、本圏域のみに見られた特徴的な結果である。

## 3. 定着支援に取り組む期間及び連携先支援期間



定着支援を事業期間のみで終了するとの回答は皆無で、回答したすべての事業所が何らかの支援を継続的に行なっていることがわかった。これは圏域特有の回答結果であり、前項の支援項目ごとの自己評価にも通ずるものがあるかと推察される。自法人独自で支援に取り組み続けるとの回答の割合も、全圏域中最多であった。

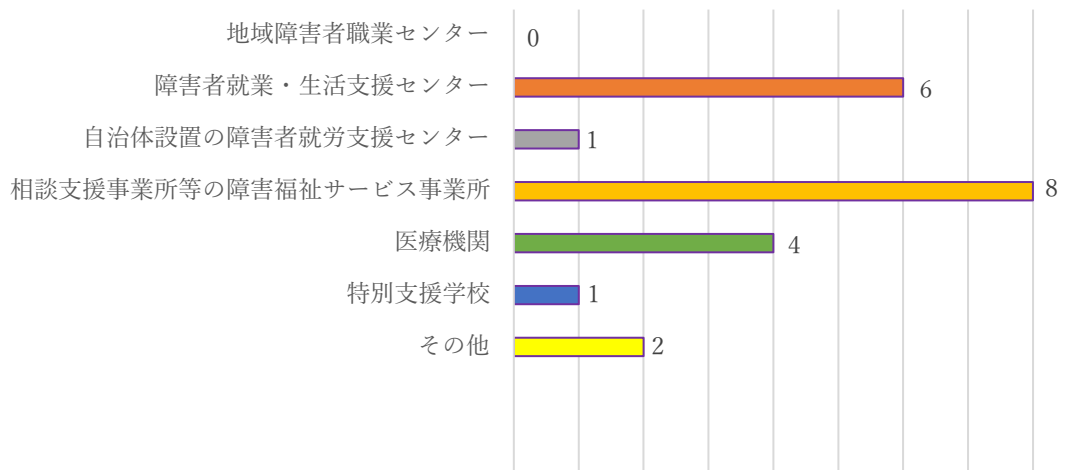
### 移行・定着支援事業所における定着支援に取り組む期間



- 事業の期間外でも個別に無償で
- 事業の期間外は地域の社会資源と連携する
- 事業の期間外は地域の社会資源に引き継ぐ
- 事業の期間のみ

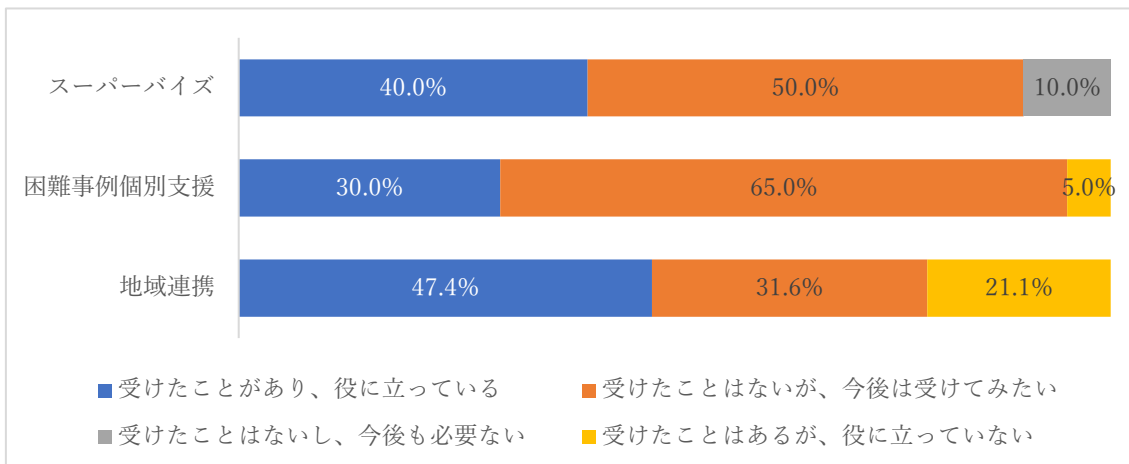
移行・定着支援事業所だけに特化して集計すると、すべての事業所が自法人単独で、もしくは地域内の他機関と連携して支援を継続しているとのことで、回答事業所に限って言えば、引き継ぎ（手放すこと）はせずに（よくもわるくも）抱え込んでいる様子が見て取れる。

### 定着支援で連携している支援機関



連携している支援機関に関する回答数の順序・割合は全体の傾向とほぼ同じだったが、地域障害者職業センターとの回答はゼロで、地理的な制約もあってか、定着支援の連携先として職業センターが十分機能していない状況が推察される。

#### 4. スーパーバイズ・困難事例個別支援・地域連携に関する取組みの有用度



3項目とも「役に立っている」「今後に期待する」との好意的な回答の割合が全体平均より高く、回答をした事業所とは一定の信頼関係が築けている現状が理解できる。自由記述には、すでに開催している連携会議の内容についての要望など、具体的で詳細な意見が多数あり、地域特有の支援ニーズを絶えず察知していく重要性も示されている。

以下、自由記述回答を記載する。

##### 【就労定着支援事業所等に対するスーパーバイズについて】

###### ○ 受けたことがあり、役に立っている

- ・退職を希望されている方について、職場での話し合いの場に同行していただいた。
- ・就労9年目の方は常に辞めたいと仰っていた。理由は些細な事でしたが、都度個別面談をしていただき、ブラッシュアップをして、今も元気に通勤されています。
- ・勉強会が役に立ったと思います。他事業所の活動の様子などを聞けました。
- ・相談など利用者に丁寧にフォローしている。
- ・一般就労を希望されている利用者に対し企業の紹介、面談の同席後に一般就労へと結びつくことが出来、その後のフォローアップもお願いできた。

###### ○ 受けたことはないが、今後は受けてみたい

- ・当事業所では就労に向けたノウハウが十分ではありませんので利用者様の就労へのサポートと一緒にいただきたいです。

##### 【困難事例に対する個別支援について】

###### ○ 受けたことがあり、役立っている

- ・ご本人は企業に対しての不満や困りごとをワンストップ出来ずに、親や知人に漏らしてい

た。企業との困りごとについて、又は親御さんへのアプローチも含めて、就ポツ担当者が支援していただき、本人のストレス発散を他の福祉サービスを使いリフレッシュしてもらっていた。

- ・利用者本人様への理解。
- ・支援対象本人の相談相手になってくれているので、心理的な安定につながっていると思います。

○ 受けたことはないが、今後は受けてみたい

- ・今後、困難事例が発生した場合は相談してみたい。
- ・事業所内で解決が難しい事案について、解決に向けた幅広い意見をいただきたい。

**【地域の就労支援機関との連携について】**

○ 取り組んでいて、役立っている

- ・福祉施設体験会の開催。
- ・勉強会により就労への情勢、利用者への対応等、有益な情報をいただいています。
- ・就労系の事業所との会合などの参加。

○ 取り組んでいるようだが、役に立っていない

- ・仲間内の会議に成り果てている。本来必要な連携はなされていない。そのため、弊社は独自で動く考えを主軸にしている。

**【上記以外で、障害者の就業に伴う生活面の支援力を向上させるために行なっている取組、今後期待する取組】**

- ・ナカポツに限らず、実行力に欠ける集まりが多く、実戦に欠けるように感じる。主役は利用者であり彼ら彼女らが活躍できる場を弊社は提供していく考えである。
- ・個人のニーズに合った支援。
- ・期待する取り組みとしては、障害者雇用に積極的な企業の情報提供や、就労支援関連事業所の周知広報をより一層期待します。
- ・当事業所は就 B があるものの、企業開拓や利用者向けの企業セミナー等出来ていない。今後専門家にご教示頂き、就労につなげていきたい。

**【一般就労に移行した障害者の定着に関わる支援を行う際に、課題を感じる状況や局面】**

- ・一般就労に移行した時点で、弊社の行う支援は完了と考えます。
- ・状況の把握。
- ・障害の症状、特性を本人が自覚できていない場合は決してうまくいかない。
- ・事前に職場実習や見学を行えない企業さんへ就職をされた際は、現場職員さんとの関係性



構築や障害への理解が深まっていない場合があり、当人さんが職場に馴染むまでに人間関係での課題を感じやすい傾向があると感じています。

- ・クローズでの就労の場合、介入が難しい。
- ・自社で雇用したので、特にうまくいかないと感じることや課題はない。うまく成長していくように支援していく。
- ・通勤に関する問題（公共交通機関を利用はするが最寄り駅から職場までが遠いなど）。
- ・通所されている利用者の対応に時間をとられ、一般就労に移行した利用者のフォローに十分な時間をとれていない状況。

### 【その他自由記述】

- ・それは、その支援の立場にある機関がすべき事。その機関の数が、地域に足りてるのか、足りていないのか。そこを適正に判断すべきだと考える。
- ・障害を自分のものと理解認識させることが第一。就労させることが先決のような支援では絶対に失敗する。行政にしても、この手の委託事業所は現場ではほとんど機能していないし、その存在すら知らない。自分の所の事業所内の活動のようなものと理解している。
- ・ナカポツセンター様の支援がなくてはならないものだと実感しております。いつもご尽力いただき感謝しております。
- ・ナカポツセンターの実践例や企業との連携状況等を情報共有できたら。また企業が求める人材や企業の障害者雇用に対する取り組み等をもっと知る機会があればと思う（障害者雇用の実績が少ない企業の声も聞いてみたい）。
- ・終業後の細やかなフォロー体制の構築が必要だと感じられる。定期的な就業先への訪問やモニタリング等を行うことで問題点を見出すことが出来ると思う。その期間も短期ではなく中長期の取り組みが必要だと思う。
- ・他事業所の支援事例の共有などはとても役にたつので、そのような勉強会は広くおこなってほしいと思います。
- ・企業側（就職したところ）の上司はもちろん、現場の人との情報共有をできる環境にしていきたい。

## 障害者就業・生活支援センターブリッジ（沖縄県）

配布 76 事業所 回答 16 事業所 回答率 21.1%

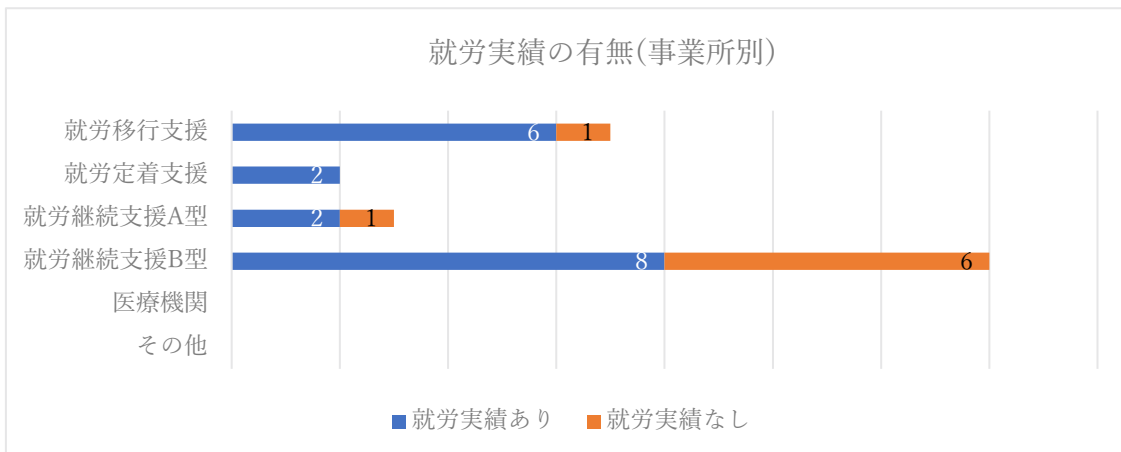
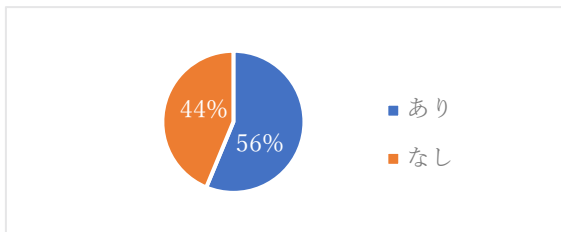
実施日 2023 年 9 月 11 日～29 日

事業所別の回答状況

人口規模	移行	定着	A型	B型	移行+定着
280,000	16	3	20	68	19
回答数	7	2	3	14	9
回答率	43.8%	66.7%	15.0%	20.6%	47.4%

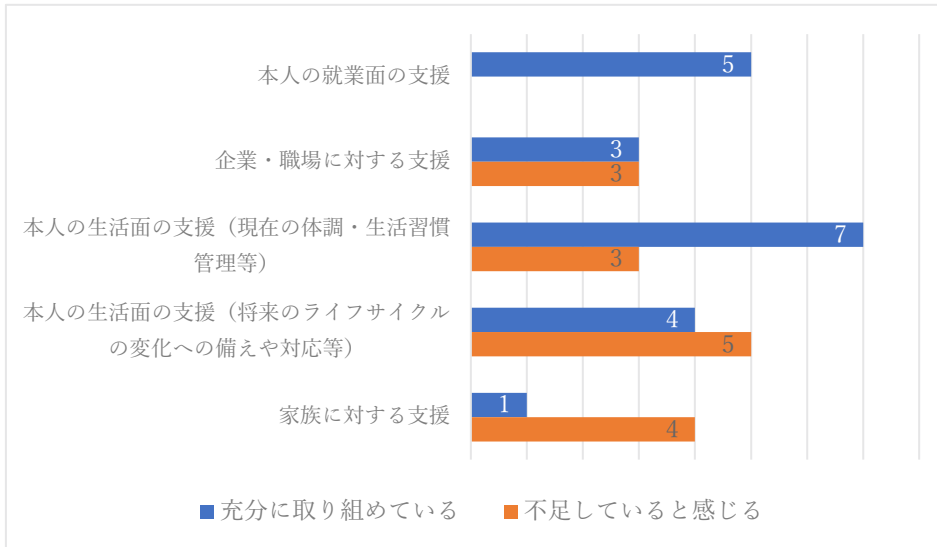
回答率は 21.1%で、今年度調査全体の回答率 34.3%を大幅に下回る結果となったものの、移行および定着支援事業所からの回答率は 47.4%で、全体の平均値とほぼ同等であった。

### 1. 就労支援の実績



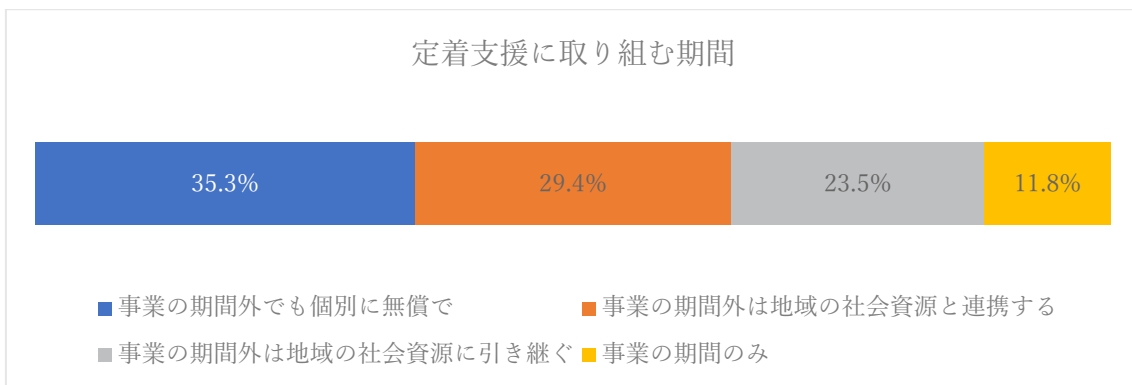
回答事業所のうち、56%は過去3年の就労支援実績があると回答している。就労実績が全くない移行支援事業者が存在する一方で、A型・B型の継続支援事業所から一般就労へ繋がるケースもある。

## 2. 取り組んでいる支援についての自己評価



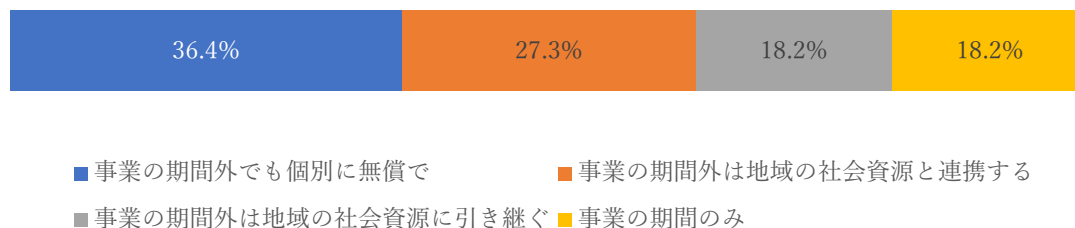
充分に取り組んでいる項目として、本人の就業面についての支援、また、本人の現在の生活面の支援が上位にきているのは全体の回答傾向と同様である。一方で、家族に対する支援が不足しているという自己評価は特に多かった（全体平均値の2倍の比率）。

## 3. 定着支援に取り組む期間及び連携先支援期間について



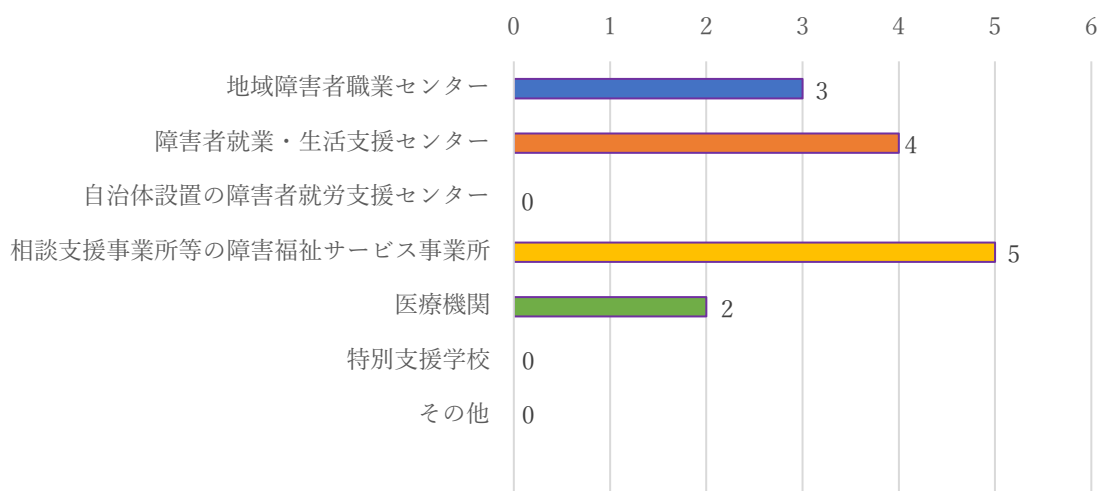
昨年度・今年度の調査の平均値と比較すると、定着支援事業の期間のみで終了するという回答の割合は約半分で、連携や引き継ぎをしながら支援を継続させているケースが非常に多いという地域の特徴が読み取れる。自事業所内で抱え込みながら個別に無償で支援を行っているケースも3分の1強ほど存在している。

### 移行・定着支援事業所における定着支援に取り組む期間



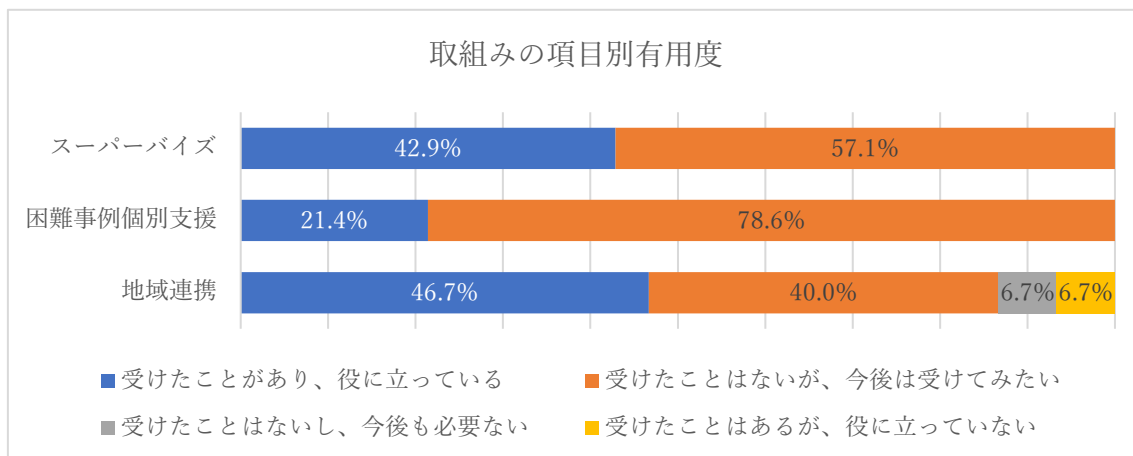
移行と定着支援事業所だけに特化して集計してみると、事業の期間で定着支援を終了する割合が増加するが、大まかな傾向は全事業所の場合とさほど変わらない。

### 定着支援で連携している支援機関



連携する機関としては相談支援事業所が最も多く、ついでナカポツセンターと続くのは全国的な傾向と一致している。職業センターとの回答が他圏域より比較的多いのは地理的な要因の影響も一部あるかと思われる。

#### 4. スーパーバイズ・困難事例個別支援・地域連携に関する取組みの有用度について



各項目の有用度において非常に好評価の回答が寄せられており、すでに受けたことがある事業所からの役に立っているという回答率の高さが目立つ。意識調査回答事業所からは、今後の取組みに対する期待度も圧倒的である。

以下、自由記述回答を記載する。

##### 【就労定着支援事業所等に対するスーパーバイズについて】

###### ○ 受けたことがあり、役に立っている

- ・ 就労移行支援事業所では、対応が難しい時に間に入り、サポートを受けた時は非常に助かりました。また、就労支援に対して、利用者の情報共有することによって、スムーズに進むことが出来ます。
- ・ 企業同行、本人との面接に入ってもらい、今後の支援の展開について、ジョブコーチ支援の利用の仕方等アドバイスを頂いた。
- ・ 企業が困ったケースとして、障害（進行性の難病）によりマッチングが厳しくなってきたので、ナカポツさんに定着支援に参入していただいた。
- ・ 勉強会やセミナーに参加したことがあり、今後も勉強会等の企画・開催をして欲しい。

###### ○ 受けたことはないが、今後は受けてみたい

- ・ ナカポツセンターが行っている実際の取り組みの事例などを取り扱った勉強会などがあれば参加してみたいです（特に困難事例の検討会など）。
- ・ B型からも就労を目指していく方がいるので、その際に連携し、企業への対応、助言と当事者へのアドバイス支援の方向性のアドバイスを受けてみたい。
- ・ 勉強会や情報交換などの交流会を開催してほしい。

### 【困難事例に対する個別支援について】

#### ○ 受けたことがあります、役立っている

・就労移行支援では、対応が難しいケースになった場合に、相談出来る場所があるので助かっています。

#### ○ 受けたことはないが、今後は受けてみたい

・自閉症の度合い（拘り等が強い方）が企業就労にて職員さんの負担になっていた。そのことから、2年後の定着に向けて取組を教えて欲しい。  
・事例を通しての研修（事業所で実際あった事例）。

### 【地域の就労支援機関との連携について】

#### ○ 取り組んでいて、役立っている

・相談支援専門員のモニタリングで、情報共有や出来ることの確認をすることで、本人へのサポートがスムーズになる。  
・就労部会の主催する就労ワーキングの集いでは他の就労支援事業所の支援方法などを知ることができ、大変勉強になりました。  
・お仕事フェアの参加は利用者への就労の視野を広める機会となるので、とても役に立っている。  
・現在、借入金がある方の支援をしている所で、研修を通して得た知識を用いて支援に活用させて頂いています（家計簿をつけています）。

#### ○ 取り組んでいないようだが、今後は期待している

・以前行っていたが、また積極的に実施していきたい。  
・コロナの影響で、関係機関の開催はなかったが、今後は情報交換を取り組んでもらいたい。  
・地域に貢献できる取り組みなど。

### 【上記以外で、障害者の就業に伴う生活面の支援力を向上させるために行なっている取組、今後期待する取組】

・就労支援施設を利用している人の、合同企業説明会や面接会。  
・必要に応じて関係機関が対応して頂けるので、助かっています。今後も、本人の困りごとがあった場合に、一緒に考えて支援出来れば助かります。  
・当事者にどのような仕事があるかの情報提供を行い、一般企業に繋いだ事例等を教えて欲しい。一般就職した方々の余暇や居場所づくりも出来たらいいと思います。  
・B型や就労移行が多いのでA型だけの情報交換できる会議。

### 【一般就労に移行した障害者の定着に関わる支援を行う際に、課題を感じる状況や局面】

- ・こちら側は支援しているつもりだが、現状の確認をするために連絡するがそれが本人のプレッシャーにならないか考えてしまい、連絡が取りづらい。
- ・就職して、初めはやる気があるが、徐々に怠けが出てくる場合がある。・職場の人事が変わると本人が働きづらくなることがある。
- ・家族のサポートが得られないと生活面やモチベーションの維持が難しくなる。
- ・長期的な就労ができず、概ね半年で出戻りがある。
- ・施設を中途退所した利用者がその後一般就労に移行した際の支援。
- ・障がい者本人の能力と企業の求める能力や作業量などの把握とすり合わせが難しい。

### 【その他自由記述】

- ・弊社は、一般就労への送り出しは本人の要望があれば就職活動をするために出勤の調整等をするが、現状一般就労を希望する者が少ないことや、いざ面接等をして本人が希望する。業界に就けない等、行政の考えとのギャップの幅があると考えられる。そのため、就労継続支援では弊社のように本人が一般就労を希望するのであれば、支援していくことが本来あるべきあり方と考える。
- ・本人の意思を尊重し、サポートするためには、1つの事業所に対応することが難しいことがあります。チームとして協力出来る環境づくりが大切だと考えております。今後も、本人の利益になるようにチームで支援をしていきたいと思っております。

## 7. 事業報告セミナー

### 7.1 目的

本調査事業の取組内容について広く周知、啓発するために、障害者就業・生活支援センターの職員、就労系障害福祉サービス事業所の職員その他就労支援機関の職員、行政、教育機関の職員、障害のある人を雇用する企業関係者等を対象とした事業報告セミナーを開催した。

### 7.2 開催方法と参加者

#### 7.2.1 開催方法

日時 令和6年2月28日(水) 13:00~17:00

形式 オンライン(ウェビナー)

配信会場 TKP 東京駅カンファレンスセンター 会議室 2B

#### 7.2.2 参加者

申込 455名(ナカポツの職員165名、その他290名)

参加 479名(内訳の詳細は不明)

#### 7.2.3 プログラム

セミナーのプログラムは以下の通り。



## 【プログラム】

13:00 開会（司会） 事務局 小澤 公嗣  
主催者挨拶 代表理事 藤尾 健二  
事業委託者挨拶 厚生労働省 社会・援護局 障害保健福祉部 障害福祉課 古田 詩織氏  
事業概要説明 理事 鈴木 康弘

13:25 事業報告

○ 報告Ⅰ「就労定着支援事業所等に対するスーパーバイズの在り方について」（進行：小澤）

【群馬】 障害者就業・生活支援センタートータス \* 【青森】 障害者就業・生活支援センターみなと

【沖縄】 障害者就業・生活支援センターブリッジ \* 【埼玉】 障害者就業・生活支援センターCSA

助言・提言 沖縄大学 島村 聡氏

< 14:20~14:30 休憩 >

○ シンポジウム「地域のネットワークの連携を就労支援の体制にまで深めていくために」（藤尾）

【三重】 津地域障がい者就業・生活支援センターふらっと \* 【静岡】 障害者就業・生活支援センターぼらんち

【茨城】 水戸地区障害者就業・生活支援センター \* 【千葉】 障害者就業・生活支援センター香取就業センター

< 15:25~15:35 休憩 >

○ 報告Ⅱ「地域の就労支援機関等との連携の在り方、個別の支援の関わり方について」（酒井）

【北海道】 石狩障がい者就業・生活支援センターのいける \* 【鹿児島】 あいらいさ障害者就業・生活支援センター

【奈良】 なら中和障害者就業・生活支援センターブリッジ \* 【徳島】 障害者就業・生活支援センターわーくわく

16:25 助言・提言 埼玉県立大学 朝日 雅也氏

16:55 閉会挨拶 理事 野路 和之

セミナーの告知については、参考資料9.6「事業報告セミナー案内フライヤー」を、当日の映写・配布資料については、参考資料9.7「事業報告セミナー映写・配布資料」を参照のこと。

### 7.3 参加者アンケート結果

回答 166名（ナカポツの職員84名、その他82名）

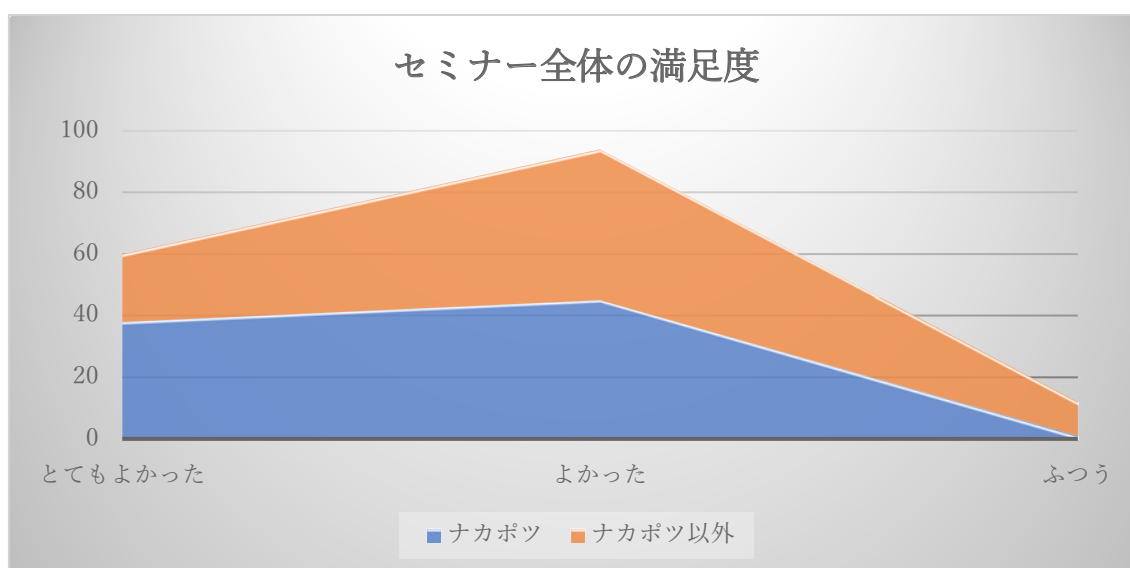
#### ○ セミナー全体の満足度

とてもよかった：60（ナカポツ38・ナカポツ以外22）

よかった：94（ナカポツ45・ナカポツ以外49）

ふつう：12（ナカポツ1・ナカポツ以外11）

あまりよくなかった：0



#### ナカポツセンターの参加者「とてもよかった」38回答の自由記述

- ・センター規模が異なっても、他のセンターの取り組みに挑戦できる可能性を感じた。センター規模や、職員のマンパワーの中で、工夫して取り組みを行っていきたい。
- ・基幹型就ポツの動き方や地域連携の成功例が参考になった。
- ・基幹型として様々な取り組みを知れました。
- ・いろいろな取り組みをあらゆる角度からコンパクトに知ることが出来た。
- ・日々の業務の課題や目標を明確になった。
- ・他のセンターの取り組みを知ることができた。
- ・各地での共通した課題など聞くことが出来た。情報量が多い。
- ・県外の中ポツの状況等を聞く機会が無いので、とても有意義でした。
- ・集中力が切れずに最後まで傍聴できた。
- ・気づきや学びが多かった。
- ・各センターがどのような課題を抱えているのか、どのように動いているのかわかりやすい

内容でした。

- ・圏域人口の少ない地域の発表が多かったが、今後の活動に参考になる活動を多数聞いた。
- ・コンパクトに纏められた発表で分かり易かった。
- ・持っている課題に対して生かせるヒントがあったから。
- ・同じ就業・生活支援センターの実践事例なので、自センターと比べながら具体的に考えられたことがとても良かった。「鏡」という言葉があったが、他センターを見ることで、逆に自センターのことが客観的によく分かったところが多かった。
- ・各センターの特色、サポートするナカポツセンターの連携が指導的・受講的立場ではなく、対等に学びながらモデル事業に取り組んでいたことに共感を得た。
- ・関わる事がないセンターの実情が知れたことや、島村先生、朝日先生のまとめが参考になった。また、ナカポツの在り方を再認識する機会となった。
- ・全国各地のセンターの取り組みを一度に聞くことができ、しかも基幹型センターの在り方という興味のある話題だったため参考になった。
- ・さまざまなセンターの取組をお聞きすることができたため。
- ・それぞれのセンターの現状や取り組み、協力センターとの関わりなど、どれも刺激を受ける内容ばかりであった。地域関係機関やナカポツ同士の連携など、自身のセンターの弱点を振り返る良い機会となった。今後、地域でのセンターのあり方について、地域の声を聞きながら連携強化していきたいと思う。
- ・全国のナカポツセンターでの地域の特性に応じた工夫ある取組を知ることができたから。
- ・具体的な実践内容が聞いてとても参考になりました。
- ・センター毎の困りごと、圏域センターの取組み、解決に向けた進め方など確認できたこと。
- ・他センターの力も借りながら互いに学び合える環境が大切だと感じられたこと。
- ・ナカポツに求められている内容に対して具体的にどうすれば良いのかが分かる内容であった。
- ・今後、取り組むべき課題に対するアイデアの参考になった。
- ・各センターの取り組みについては、自センターでも行っている内容も含まれていた。そのため、話を聞いて自センターの取り組みに自信が持てたと同時に、まだまだ足りない部分も気づかされたため。
- ・他センターの状況や取り組みを聞くことが出来て、学びになった。
- ・ナカポツの役割について、どの事業所も同じ方向を見ていることが分かった。
- ・現在当センターが抱えている課題に対して大変参考となる内容であったから。
- ・各センターの取組を通して、課題や活動の方向性について共有できたから。
- ・他のナカポツの取り組みの違いを知ることができ、良い刺激を受けたためです。
- ・朝日教授と島村教授の助言・提言も非常に勉強になりました。内容の濃いセミナーでした。有難うございました。
- ・他県のナカポツの状況が良く分かった。

- ・定着支援事業所との関係作りについて学べたこと。
- ・取り組みと併せて成果も知ることができ、実践されたことについてイメージを持つことができた。
- ・最初の事業概要説明で「ナカポツのことはナカポツ同士のピアサポートで！」という合言葉があり、実施センターと応援センターとがピアサポートしながら報告をするという斬新なセミナーにて、報告・シンポジウムと、大変分かりやすい内容でした。
- ・気づきや一歩踏み出すことの大切さを学びました。
- ・すぐに取り入れられそうなものばかりだった。
- ・自分自身の熱量をあげてもらえた感じがする。基幹型の役割が良く分かった。
- ・他のセンターの様々な取り組みがよくわかり業務に生かせる。

#### **ナカポツセンターの参加者「よかった」45回答の自由記述**

- ・ネットワーク構築について考える機会を多く得たから。
- ・当センターの運営で取り入れられる視点があったため。
- ・地域、関係機関との連携ができてこそその就ポツの役割が発揮できることを改めて認識させられました。
- ・各センターの報告について、とても参考になりました。
- ・各センターの実際の支援の状況から、新たな取り組みがそれぞれで、大変参考になりました。
- ・もう少し時間があるとよかったです。もっと詳しく聞きたいと思いました。
- ・スーパービジョンの在り方について知る事ができた。
- ・参考となる取り組みの話が聞けた。
- ・他のナカポツの取り組み、姿勢を知ることができてよかった。
- ・全国の就業・生活支援センターの取り組みを知ることが出来て良かった。
- ・ふだんは聞けない様々な就業・生活支援センターの声が聞けました。
- ・地域や人口の大小にかかわらず、地域に応じたナカポツセンターの在り方を模索する必要があるという一貫したテーマを見出すことが出来たため。
- ・仕事面に於いて参考になる点があったこと、気づきがあった事は当然ですが、なかぼつセンターは全国規模で活動していると改めて感じる事ができ、仕事に対するモチベーションに繋がった。
- ・所属するナカポツ以外の活動実態などを知ることは、自らを客観視することに通じると思うから。
- ・各センターの取組としては理解できたが、ナカポツの基幹の役割としては不明確な点がある。
- ・それぞれのモデル事業の内容で、当センターでも課題だったり話題として挙がっているこ

とと同じだったりしたので、とても参考になりました。

- ・他圏域の取り組みを知ることができた。
- ・地域におけるスーパーバイズの役割について少しイメージに繋げることができた。
- ・地域特性はそれぞれですが、就労支援事業所との連携づくりについて、様々な取り組みを知ることができたため。
- ・各センターがタグを組み、取り組まれた内容についてそれぞれお話を聞くことができ良かったです。とても参考になりました。
- ・各モデル事業などについて知れた。
- ・他センターの取組を知れたこと。
- ・各センターの現状と取組の過程、成果を聞いたこと。
- ・数値目標の達成度や事業の進め方に関してもマンパワーを理由にすることが多いが、自分の考え方に捉われすぎないようにナカポツ同士が協力していくことや他のナカポツからも学びを得ることで前に向けると感じた。
- ・基幹型機能としてどのように動くべきか事例を聞くことができて良かった。
- ・各事業所の取り組み等、具体的に知ることができたため。
- ・センター間でペアを組んで取り組んでいたため、ピアスーパービジョン等の役割を構築できていた。
- ・各地域での活動について発表があったので。
- ・地域の実状に近いセンターの取り組みが聞けたため。
- ・他センターの取り組みを聞いて参考になった部分もあった。
- ・地域における定着支援での他機関を巻き込んでの支援について、取り組みや方策、登壇者のエネルギーを感じることができました。
- ・ネットワーク形成について今後必要と感じており、関心があった為。
- ・色々な取り組みを知ることが出来て今後の参考になると思った。ナカポツ同士で関りを持つことは色々な面で必要と感じた。
- ・各地域のナカポツの圏域や取り組みがわかりやすく良かった。
- ・ネットワーク構築の重要性や、日々の支援の再確認ができました。
- ・いろいろな地域の状況を聞くことができた。
- ・各センターの様々な取り組みが聞けたため。
- ・後半の時間が足りなくなったので、勿体無い感が残ってしまいました。
- ・他のセンターの取組について知る機会を得て刺激になったから。
- ・就業・生活支援センターとして、求められる役割や取組について学ぶことができた。
- ・他ナカポツセンターの取り組みを知ることができた。
- ・実施センターと応援センターのペア取り組みは参考になりました。
- ・法人組織を動かせる気がしないため。
- ・事業所利用者の意識向上と利用者を増やす取り組みとしてとても参考になりました。

- ・資料が発表とリンクしており聴きやすかった。
- ・地方ごとの様々なやり方がわかったので勉強になりました。

### ナカポツセンターの参加者「ふつう」1回答の自由記述

- ・これからの基幹型について具体的な話が聞きたかった。

### ナカポツ以外の参加者「とてもよかった」22回答の自由記述

- ・ナカポツ側の話の内容に関しては興味のあるもので、地元でもこんな熱い人たちがいればなと思われました。
- ・どんなことを行っているのかなど知ることが出来た。
- ・ナカポツというシステムがよくわかるセミナーでした。
- ・ナカポツの活動や支援の大きさに感銘を受けました。
- ・ナカポツ事業、全国の福祉圏域の実情を知ることができた。
- ・福祉事業所として、ナカポツさんがこのように連携を重視して取り組んでくださっている事を再認識し、安心して支援にあたることができると感じました。
- ・関係性の構築について参考になりました。
- ・様々な取り組みや地域連携など、全国の事例報告が聞けたため。
- ・他地域のナカポツの取り組みや地域の規模など知ることが出来ました。応援センターという仕組みがあることで規模が違ってもそれぞれに合わせた取り組みを考えられることは強みになると感じました。
- ・障害者就業・生活支援センターの基幹としてのネットワーク構築という役割を、様々な地域事情がある中、どのように実践しているのか、お話をお伺いしたかったので、大変、参考及び勉強になりました。
- ・ナカポツセンターの役割は知っていましたが、各センターで様々な取り組みを知ることが出来、勉強になりました。各センターの発表でつながる事を意識され、重要な事だと改めて実感できましたし、日々の移行支援業務でさらにつながりを構築していかなければならないと思いました。全国各地で社会資源に差はありますが、つながる事や利用者支援の為に様々な行動を起こしていることに変わりではなく、就労支援機関の立場からは関係機関をもっと活用していかなければならないと思いました。今回のセミナーは移行・定着支援にとって大変勉強になりました。
- ・事業所は三重県の（社福）聖マッテア会のお隣の関ヶ原です。一度お伺いしたいと思い、また奈良県橿原市の中和障害者施設の方たちのお話の内容も良かったのと、わたしは大阪生まれで奈良の田原本町の黒田に住んでいましたので懐かしく思いましたので、ぜひお二人にお会いしたいです。

- ・立ち上げて3年ほどの事業所です。全国の多くの地域で、特徴のある活動を作り上げている方々がいることを知りました。とても力になりました。
- ・事業所ごとの様々な取組にはそれぞれの地域の特色が感じられました。地域との強いつながりがあることを実感できたことが大変勉強になりました。
- ・企業の求人率が多い中、企業への稼働が進むために、ナカポツの重要性を改めて学習しました。一層関係機関との交流を維持していきたい。
- ・事業所単独ではなく共同での取り組みは双方にメリットがあり非常に有効な活動だともいえました。
- ・基幹型として更なる取り組みにトライしている姿に感銘を受けた。他地域の実態について知る良い機会となった。(自分の地域より人口が少ないが資源は多いなど)
- ・他の地域でのナカポツさんの活動の様子を知ることができた。自分の事業所とナカポツさんとの連携などについても考えさせられた。
- ・各センターの強みを生かした事例を聞くことができた。
- ・他地域のセンターの活動状況や、福祉サービス事業所との連携など詳しい説明が聞くことができ、当地域でも更に連携を強化できるのではないかと感じました。
- ・B型の職業指導員という立場で初めて参加させて頂いたが、とても身近な話題に感じて全体的に解り易く共感できる事が多かった点。
- ・都道府県ごとに違った取り組みや状況があり勉強になった。

#### ナカポツ以外の参加者「よかった」49回答の自由記述

- ・各センターとも色々な想い、考えをお持ちで興味が沸きます。
- ・実際に実感出来ないので考えだけで終わらないように、当事業所でも協力出来る部分は協力を惜しまないよう心掛けたいと思います。ナカポツセンターの努力が分かった。
- ・色々なパターンのナカポツの動きを知ることができ、私の地域のナカポツとの動きの違いや参考になる考え方が多くあったため。
- ・事例が具体的。
- ・自身が所属する地域以外のナカポツさんがどんな事を考えて日々の支援をされているのかを聞きたかったため。
- ・全国のナカポツの支援や取り組みを知ることができて良かった。
- ・身近な地域以外の状況や取り組み方、考え方を知ることができた。
- ・地域による違いが知れた。
- ・資料がわかりやすかった。
- ・ナカポツの活動や取り組みがとてもよく分かったので。
- ・時間、構成ともに簡潔だった。
- ・様々な視点からのアプローチがあることを知れた。

- ・他県のナカポツセンターへ視察やその後の交流が良い取り組みだと思いました。
- ・現在ナカポツさんとの連携がなく、今後の関わり方について考える機会になりました。
- ・全国の中ポツの雰囲気を知ることができた。
- ・取り組みを知ることができたため。
- ・ナカポツを知る機会になった。
- ・地方の小さな会社が成長するには個性を努力にかえるという考えが一緒でした。
- ・バイザー・バイジーの関係性や相互協力体制の進め方など勉強になりました。また、離れた地域での協力や情報交換により地域性でできることの可能性を強く感じることもできました。
- ・ナカポツセンターの事業について詳しく知ることが出来た。
- ・様々な環境の中でも共通する思いが多い事を学びました。
- ・多様な取組事例から、具体的な取組を参考にこれからの動きを検討できると思う。
- ・現状を把握することが出来た。
- ・地域ごとに応じたナカポツセンターの役割について深く知ることができた。
- ・各ナカポツセンターの取り組みが聞けて良かった。
- ・ナカポツの役割と実態がよくわかった。
- ・ナカポツについて正直それほどB型ではかわりがないと思っていたので勉強になった。
- ・様々な取り組みの実践を知ることができたので。
- ・ナカポツの業務内容を知る事ができました。
- ・様々なナカポツの取り組みを聞くことが出来たため。
- ・共同での取り組みで広がる繋がり素晴らしさを感じました。
- ・上下関係ではなく、ともに助け合う関係性を学べたから。
- ・地域の基幹型としてどのように活動し、仲間を増やし、コミュニティを作り上げたのか。また、誰もが動き始めがある中で「憧れをやめて、行動した」「まずは行動してみよう」といった姿勢がとても印象に残った。
- ・地域の支援が企業の支えになり企業の支援力をつけるというお話を頂けて、目の前の支援だけでなく、社会を良くしていく視点が持てたからです。
- ・全国の事例を伺えてよかった。
- ・地域の取り組み方がよくわかった。
- ・ナカポツセンターの視点が良く理解できた。
- ・障害者就業・生活支援センターについて詳しく知る機会を得ることが初めてだった為、大変勉強になりました。
- ・多くの方が“顔が見える関係”の重要性についてお話しされていたことが印象的でした。地域の他資源と連携していけるよう、また、日々の支援の質を高められるよう、身が締まる思いとなりました。
- ・地域ネットワークの構築や就労支援センターとしてのあり方（役割）について、進めてい



かなければと思いながらも進んでいない現状があり、参考になりました。また、他センターの活動を知る機会もなかなかないので、よい機会を頂いたと感じています。

- ・内容や事業について自分も体験したいと思いました。時間がおしてカットがあったのが残念でした。
- ・応援センター、実施センターとの連携で障がい者福祉の輪が広がり、知恵を出し合って成長していく姿がとてもよかったです。
- ・就労定着支援事業所から、ナカポツとの連携について考え悩むところもありますが、今回のセミナーでナカポツからの様々な視点や取組、役割を聞いて良かったと思っています。
- ・ナカポツの実態が分かった。
- ・様々な取り組みを知ることができた。
- ・就労定着におけるの努力と工夫が学べた。
- ・スーパーバイザーの考え方を知ることができました。
- ・皆さんのお話がとても分かりやすく、興味深かったです。
- ・なかなか普段、就業・生活支援センターの考え方や活動を知る機会がないため。
- ・ナカポツセンターの事を知らなかったので、勉強になりました。

#### ナカポツ以外の参加者「ふつう」II 回答の自由記述

- ・定着支援の細かい内容が聞けなかった。
- ・他県支援センターの現状は、当事業所にはあまり必要でなかった。
- ・事業への取り組みがよく理解できた。
- ・時間が長く、集中力が続かない。前半は面白かったが後半にいたっては飛び飛びで説明だったので心残りだった。そしてあまり人数の多くない事業所なので拘束される時間が長いのは業務的に困った。
- ・資料の字が多かったのが気になりましたが、内容については私たちが目指しているもののヒントになることも含まれており、参加して良かったと思います。
- ・開始して最初の方は視聴できなかったので、事業報告をされているものが、そもそもなんの目的でされた取り組みなのかが理解できなかったので、報告を聞いても頭に入らなかった。
- ・初めての参加であり、また他事業の報告であったため共感やイメージできない部分があったが、他事業所との繋がる場を持ち情報交換などが重要であると感じた。
- ・自分自身がまだ働いて日が浅い為、理解までたどり着けなかった。
- ・参考になるような内容があまりなかった。
- ・お互いを称賛し合っている。問題に対しての課題→方策→結果と言う明確さが無い。

## ○ 特に印象に残った取組

### ナカポツセンターの参加者からの回答

- ・推進力の原動力について学べる部分が多かった。(ぼらんち)
- ・茨城：地域資源が豊富な地域ならではの課題がセンター知名度というのは目から鱗だった。奈良・徳島：当事者語り部を直接拝見して感銘を受けた。
- ・沖縄ブリッジと埼玉 CSA の、情報共有しながら、お互いに切磋琢磨してすぐに取り組んでいたこと。
- ・ご発表が良いことづくめではなく、生の声も入っていたように感じられました。
- ・一貫したテーマから、求められる動きに至るまで、満遍なく具体的に触れられていた。(沖縄ブリッジ)
- ・共通した課題が多いところは参考になるし、条件がかけ離れた事業所も興味深い。
- ・自事業所では出来ていない事や行政機関へのアプローチ等が参考になった。
- ・当センターでも実施したい事業などがあった為、また共感できる部分が多かった。
- ・企業交流会を自分たちもしたので今後の参考にしたい。
- ・ナカポツ事業をされている法人と当該ナカポツの活動から、ナカポツがされている活動実態を推測してみることが専門職として興味深く思われるから。
- ・スーパーバイズについての説明が良かった。(CSA)
- ・当センターでも話題にあがった「定着支援事業3年経過後の支援連携」等がとても参考になりました。
- ・興味深い取り組みだった。
- ・のいけるの活動や考え方が非常に参考になった。
- ・福祉サービス支援事業所向けの取り組み、情報交換会や職場体験実習などの取り組みが参考になりました。
- ・聞いていてわかりやすかった。
- ・聞きたい内容が網羅されていました。
- ・目的、課題、結果が明確であった。
- ・根拠があり、納得いく説明だ。
- ・水戸地区：「ナカポツを知らない事業所がある」という状況は、おそらく他センターでもあると思う。「自分たちも同じだ」と危機感を持ってもらえたら、今回のセミナーはスタートラインとして大成功だと思う。その問題にまだ気づいていないセンターがもしあれば、その方が大きな課題。ふらっと：都道府県単位でセンター連絡協議会を開催することは、今すぐにでもできる取り組みだと思う。
- ・当事者、企業担当者を巻き込んだ会議の実施、労働人口の減少のなかで企業が障害を持たれている方で事業所ニーズにこたえるスカウト型支援を行っていた点がとても印象的だった。(CSA)
- ・当センターにない取り組みや理念を感じることが出来、参考にしたい取り組みがあった。

- ・自分たちの知りたい情報が詰まっていた。
- ・具体的にセンターが目的としている内容がよく分かった。
- ・独自の取り組みを自発的に意欲を持って取り組まれている様子が伝わり刺激になった。
- ・自身の事業所が取り組んでいない試みをされていた。
- ・関係したことのあるナカポツであったので、取り組んでいる内容がわかりやすかった。
- ・北海道のセンターの課題とナカポツの役割について発表していただいたこと。
- ・みなとさんの取組の「障害者ステップアップ講座」の開催がとても参考になった。また、ふらっとさんの取組では、B型事業所との「就労」への共通認識が持てるようになるまでのさまざまな取組がとても参考になった。ブリッジさんの取組では「就労移行等情報交換会」、「スーパーバイズの考え方」がとても参考になった。
- ・地域との連携やスーパーバイズという所を自センターでも取り入れていけたらいいなと思いついていました。協議会等に行っていますが、B型等福祉事業所に訪問するというのが興味深かったです。その時どんなことを話すのか等も知りたかったです。
- ・参考になった点：スーパーバイザーとバイジーの対等な関係。雇用を前提としない実習の開拓。働いている人の体験発表会。事業所への意識調査。事業所への訪問活動。
- ・あいらいさの基幹型としてのナカポツの役割とは？規模が小さな圏域、規模が大きな圏域立ち位置は規模によって変わってくる。（他センターが伝えていた圏域にある市町村の社会資源によっても求められるものが異なってくるように思う。）『「継続して取り組んでいくこと」をつくりあげていく』がナカポツに求められているように感じました。
- ・取り組みの変化についての説明がわかり易く、地域の課題を俯瞰的かつ冷静な視点でとらえ、今後の取り組みに活かせる工夫を感じ取ることができました。
- ・良い取り組みをカスタマイズして実施している内容等具体的で良かった。
- ・埼玉 CSA：就労移行の情報交換会、福祉事業所交流会。今後福祉事業所との連携が必要と考えていた為、参考になった。三重ふらっと：グループワーク後の福祉事業所への個別訪問。顔の見える連携が出来るきっかけになると感じた。
- ・ステップアップ講座を興味深く拝聴した。当事者と支援者のニーズや課題の相互理解に役立ち、見通しの立つ支援に繋がれると感じた。
- ・自分のセンターでは取り組めてないような内容があり、今後このような取り組みをしていきたいと思った。
- ・ステップアップ講座が、個人的に取り入れられるといいなと感じました。
- ・実施センターと応援センターのペアサポート活動が良かった。
- ・関係機関の連携の重要性がわかった。
- ・北海道の圏域の広さとそれ故に市単ナカポツがあるという状況に驚きました。生活面のサポートの重要性、面白い取り組みなど学ぶことが多かったです。
- ・説明が簡潔で分かりやすかったと感じました。パワポも見ると側に分かりやすい作り方になっていたと思います。（パワポで発表資料を作成する際の良い勉強になりました。）

- ・沖縄の方の内容、説明、分かりやすかった。もっと聞きたかった。
- ・それぞれの地域やセンターの規模によって状況が違ったり、業務そのものの違いを感じることができた。
- ・バイザーとバイジーは協同関係ということを知れた。
- ・応援センターの取り組みを取り入れ、自身のセンターで実施しようとする姿勢が強く感じた為。
- ・ブリッジさんの『「就職」というキーワードが聞こえてこない』、ふらっとさんのトラウマ『「就労」と思っていない。「居場所」をつくっている』など、就B事業所しかない圏域ではまさに同じです。ただ、現状としてB型事業所からの就労は7事業所で年間1人程度と一般就労は厳しい状況にて、「居場所」にならざるを得ない現状でもあります。また、事業所側の事情として、圏域の人口が少ない当地域では、利用者の1人減は事業所の運営にとっても死活の問題でもあります。地域の課題から難しい状況ではあっても、就B事業所の職員には就労継続支援という意識をもって、支援に取り組んで頂きたいと思います。
- ・他事業所の取組に感銘を受けただけでなく、自センターにいかに取り入れていくかという工夫と、「無理」ととらえず取り組んでいく気持ちに感銘を受けました。(トータス)
- ・ステップアップ講座について。当事者・企業・支援者・・・また、ナカポツの役割という視点からみてもすべてを兼ね備えられる魅力的な取り組みだと感じた。(みなと)
- ・自センターの取組として検討していたからと他府県のセンターとの交流はいいなと思いました。
- ・具体例に感銘を受けた。
- ・基幹型としての役割について改めて考える機会になった。
- ・圏域の福祉事業所の悩みやニーズを吸い上げ、それに寄り添いながら関係作りを行うことで、就労者を掘り起こし、地域の支援力の向上につながったということは大変参考になった。
- ・地域の就労支援機関を巻き込んで活動をされている点で自分たちのセンターの理想を実現されている。
- ・取り組み内容がわかりやすく、当センターの参考になった。
- ・胸が熱くなった。
- ・奈良県：図がわかりやすかった。三重県：課題への問題意識が高い。沖縄県：地域特有の問題点があげられていた。

#### ナカポツセンター以外の参加者からの回答

- ・当事業所は『ふらっと』さんから1番近い就労継続支援A型事業所だと思います。まだ始まったばかりの事業所なので色々不安もある中という事、1番近く時々お話をしている場である事、ナカポツが当事業所に今後どう絡んで頂けるのかという事に興味がありまし

た。津市にはB型が50以上もあるのに、A型が10もない状況です。その10も満たないA型事業所ですが、横のつながりがほぼない状況です。来年度より改定を受けて、各事業所とも大変な想いをするだろうという中で、やはり相談出来る先があるのは強みになる！と思いますので、そこの仲介・中間を期待しています。

・『ナカポツを知らない』という言葉がありましたが、施設での従業者が若年層になると本当に知られていないのが現状です。ここから始めてみよう…のあたりはもっと詳しく聞いてみたいと思いました。知られる為、気軽な相談先になる為、立ち寄れる場である為、また助けてもらえるセンターになる為、どういう行動をしていくのかが楽しみに感じました。香取センターさんから気軽に話そう相談会(?)の話がありましたが、面白そうです。

- ・取り組みが非常に興味があった。
- ・ステップアップ講座に興味がある。(みなと/トータス)
- ・地域によって支援できる体制に限度があるが、他のナカポツでの活動や取り組みを意見交換し、課題への糸口を探す機会となり、取り組み前と後の評価が高まって良かったと思います。
- ・データで理解が深まった。
- ・自分の支援の考えの視野が広がる内容が多かった。
- ・特にみなとさんの横並びの考えはとても好感がもてました。
- ・こんなことがあったらぜひ参加してみたいと思う内容でした。
- ・プレゼン資料の構成がわかりやすかった。(津地域ふらっと)
- ・地域性なども関係すると思いますが考え方などに共感しました。
- ・普段支援での関わりのある事業所のため。(トータス)
- ・就労支援事業所との連携、つながりを大切にしているように感じた。
- ・分かりやすく、移行に活かせる事業や捉えも多かった。
- ・自分の理念と似ていた。
- ・どのセンターの取り組みも素晴らしく参考になりましたが、伴奏型のステップアップ講座や企業や地域への働きかけについてのメリットについて共感できました。
- ・人口も地域も違う中での活動を知ることが出来た。
- ・わかりやすかったです。
- ・スーパーバイズに関して、当法人の若手育成に早急に活かして人材育成にあたりたいと思う部分が多々あった。
- ・奈良県；企業、当事者が主役。徳島県；枠にとらわれない考え方。
- ・時間内に話が終わらないくらい講義されていたのが印象に残りました。
- ・支援の担当制についてや、札幌市の就職者の地域活動支援センターや、企業ネットワーク等参考になる情報を聞くことができた。
- ・徳島は、当事者や事業者の生の声を聞く場を設けたこと、沖縄は、雇用を前提としない職

場体験実習が素晴らしいと感じたし、北海道は、就労定着支援へのナカポツの関わり方が具体的でとても分かりやすい発表でした。

- ・資料がわかりやすく、言葉も入ってきやすかった。
- ・同じ目的をもって話ができる関係性づくり。実行してみる事が大事だとしました。
- ・普段から関わりのある機関だったため。(トータス)
- ・しごと体験「輝きウィーク」ではたくさんの施設が参加されてレベルアップに繋がった話が印象的でした。(津地域ふらっと)
- ・私にとって、話が聞きやすかったです。(沖縄ブリッジ)
- ・ステップアップ講座については、講座+実習と合わせて理解を深めてから実習に入ることが出来るのは良いと感じました。また、いつもの職員とは違う人から話を聞くことや違う環境でアセスメントを取れる機会は有用であると思いました。また、当事者同士の交流会については就労継続支援 B 型のご利用者同士という機会は中々無い為、今後開催していければ良いと思いました。
- ・どこの事業所も、他府県のナカポツ事業と交流を持ち、刺激があったことが一番良かったのではないかと思います。
- ・ぼらんちの「日本一のネットワークづくり」というスローガンが、着実に実現されていることに感銘を覚えたため。パワーを頂くお話でした。
- ・自分の施設の管轄であるナカポツセンターの取り組みを知る事ができ、のいけるさんと関係を構築したいと思いました。上手く地域と連携して取り組みされていると感じました。
- ・資料の内容にしっかり目を通して、振り返りたいと思えた事業所さんでした。
- ・障害者の体験発表会オンラインや雇用を前提とした実習など充実した障害者雇用を知る機会の提供が充実しているため。(CSA)
- ・取り組みの連携が素晴らしいと思いました。
- ・規模の大きさ、横とのつながりの濃密さ。(のいける)
- ・北から南までのペアと近隣県のペアなどがあったりし、どの取り組みも面白かった。また、見えていた課題は共通するものが存在しているのだと感じた。参考になるものが多くあった。
- ・B 型は居場所ではなく就労のスタートとしていく場所との考え、就労に関して前向きな様子が伝わる内容でした。
- ・発表の内容の充実と、魅力的な人柄で聞きどころがたくさんあった。
- ・ふらっとさん、ブリッジさんは現状の悩みや課題が率直に書かれていて、そこに対してどのように歯がゆい思いがあるのかイメージしやすく、発表の内容がスッと入ってきた。みなさんは先進的な取り組みがシステムの的に組み立てられていて素晴らしいと感じた。
- ・殊に地域の福祉事業所や企業等、関係機関との繋がりや繋がり方、考え方、チャレンジの仕方が参考になりました。
- ・どのセンター様からも話されていましたが、まずは動くこと、行動することということ。

横のつながり、上下ではないということをお話されていた事業所さんが多かった様に思います。色んな所に顔をだして、まずは覚えてもらうことが、自分ができる第一歩だなと感じました。あと、ぼらんち夏目様の存在感ですかね。

- ・徳島：当事者、企業、支援者などたくさんの関わりがあることがよくわかる取り組みをしていた。沖縄：スーパーバイズの考え方が分かりやすく説明があった。静岡：最後の言葉に衝撃を受けた。
- ・地域特性の問題が出ており、国内の状況を知ることができた。
- ・就労定着支援事業所からみるナカポツとの連携について考えることができた。
- ・分かりやすかった。参考になる具体例があった。
- ・ふらっと、ぼらんちは、シンプルかつ、わかりやすい資料で印象に残った。取り組みも取り入れられる要素が大いにあると思った。CASと沖縄ブリッジの発表においては島村先生のお話が印象に残りました。
- ・共感できることが多かった。
- ・特にありません。どのペアも同じ報告で変わり映え無い。
- ・スーパービジョンやネットワークの必要性を改めて感じました。
- ・どのペアの取り組みもとても良かったが、特に企業と企業、当事者と当事者、という取り組みが斬新でとても良いと思い、自身の事業でも今後取り組めるなら、是非取り入れたいと感じた点。
- ・石狩：フォローアップ事業が印象強かったです。千葉：物腰が柔らかく、印象が良かったこととナカポツを知らない支援員もいるということをお話されていたため（実際、経験が浅く業務に追われ、研修に参加できない支援員は情報収集ができずに知らないこともあると考えました）。沖縄：就労移行の利用者が0人の地域もあるとのことには驚きました。Bとのパイプになっているという話も印象に残りました。
- ・活動内容が素晴らしい。特にぼらんちさんのお話が楽しかったです。

## ○ ナカポツセンターの基幹型機能についての所感

### ナカポツセンターの参加者からの回答

- ・就労継続支援事業所とのネットワーク構築の意義について再考してみたい。
- ・基本的には障がい当事者との関わり同様、伴走が有効と再認識した反面、事業所・組織ならではのメリット・デメリットの視点を明確にして関わることは一定必要と思った。
- ・我々は市単位の就ポツです。基幹型就ポツの役割は、地域連携のモデルとして素晴らしいと感じた。市単位の就ポツは何ができるのか。もっと存在意義をしっかりと持つために参考になりました。
- ・圏域の事情に合わせて、あくまでも本人さんの心の安定を軸にサポートしていきたい。
- ・「基幹型」とは何か？ 少しイメージを持つことができました。

- ・就業・生活をひとくりにしたあたりに、制度の隙間を埋める感じがあったが、基幹型としても機能できるモデル。
- ・間接的なコーディネートの必要性がどのような支援にあたるか聞きたい。
- ・地域ごとにそれぞれに機能を志向し活動する中で、はじめて基幹型機能が収斂されると思われる。したがって、全国一律に機能について云々するのは時機尚早と思われる。
- ・地域差があり、福祉サービス 0 地域も圏域内に複数ある事から、何を何処まで担うのか不安が大きい。
- ・令和 5 年 12 月に、県内ナカポツ合同（6 センター）で「地域における就労支援について、その在り方や連携を深く考える研修・意見交換会」を行いました。県内の相談支援事業所、支援学校、A 型、B 型、移行支援事業&定着支援事業、ハローワーク、職業センター等に案内を出し、ナカポツスタッフ入れて 180 名の参加がありました。外部講師として移行支援事業所の方の講話をいただいたあと、グループワークも実施しました。狙いとしては、「お互いの文化を知る」として、連携の隙間が生まれる原因がやはり関係機関の役割をお互いに知らないことではないかと思ったので、まずはそこを一緒に考えることができたという話題からの実施です。今回のモデル事業のお話の中にも、地域作りだったり、顔の見える関係作りというワードがあり、とても共感したところです。
- ・基幹＝地域の実情に合わせてという考え方はわかった。
- ・野路さんが言うように持続可能な社会資源であり続けるためにはどうあるべきことなのか？ただ毎年予算確保のために新しい事を何でも引き受ける事ではないと思う。
- ・支援を求める生活課題が多い当事者、彼らを戦力化しようと努力する職場の為、地域の支援力底上げに注力したいと思う。
- ・基幹型の役割を果たすためには、まずは地域や事業所の声を聞くことが大事だと感じました。その上で、地域の実情に合わせて自分たちには何ができるのか考えていく必要があると感じました。
- ・基幹型とは具体的に何をすればよいのか？現在も基幹的な業務は行っていると思われるが？現在の目標設定となっている就職件数、実習件数との兼ね合いは？（減少してもよい？）
- ・基幹型機能についても、ポジティブな空気感をもてるセンターでありたいと思いました。
- ・地域で暮らしている障害者の就労支援の最前線に立っているという自覚と責任、基幹としての役割の具体化、明確化、継続していくこと、大きな意味で言えば、就労を通じた地域づくり。以上のようなことを思いました。
- ・ファシリテーター役、橋渡し役、黒子役といった、主体は主人公である当事者、企業、支援者であることを常に意識し、俯瞰的な視点で必要に応じて適宜介入している役割であることを再認識することができた。
- ・日常業務が拡大することによって、予算はどうなのか、今の業務に負担が増えるのか不安がある。最後の朝日先生がおっしゃっていたように、わかっているでも思考停止しないよう



にと言われて気付きを持った。後方支援と言いながらも、国等役所からはサービス低下しないようにとされているため、どこまでの区切りをしたらいいのか戸惑いはある。

・今回のモデル事業の取り組みで、基幹型のスーパーバイズのやり方の一端を見せて頂いたようで、実際に自分のセンターが基幹型の取り組みをする時の参考になった。また、基幹型を難しくとらえていたが、通常のセンター業務の延長ととらえることができた。

・地域を耕していく、幹が折れないように取り組んでいく必要があると思うが、ナカポツ同士の横の繋がりも各地域によって機能の持たせ方が違っていいことに安心しました。

・改めて地域の課題、ニーズを整理し、地域の特性に合わせて対応していく事と地域の就労支援事業所との連携の在り方について今後も更に工夫していくことが大切だと思いました。また、朝日先生からのお話にもありましたが、ナカポツセンターがこれからも持続可能な事業として実施していくためには、ナカポツセンターに求められる役割が年々増えているため、本当に必要な役割について整理していくことも大切だと感じました。基幹型は必要な取り組みだと感じます。ただ、棚卸しをしないとパンクしてしまいそうです。基幹型というなら、個別のケースはナカポツ独自でもたないようにしないと回らないのでは、と感じました。

・地域性を加味した取り組みを見つけていきたいと思った。意識調査をして、上からではなく同じ対等の立ち場で意見交換したいと改めて感じた。事業所訪問を行っているとの発表を聞き、正直凄いと思った。就労支援部会で協議したり、ネットワーク会議に参加してもらいGWをするくらいしか実施していなかった。訪問については、業務の棚卸、時間調整をして、若手の教育の場としても検討したいと感じた。

・全国のさまざまな地域性がある中で、地域の中で地域特性を踏まえて就労支援のかたちをつくりあげていくのが基幹と言われるものなのかと感じている。類型のようなものがいくつかあると、類型+アレンジでそれぞれのセンターがイメージしやすいと感じた。

・ナカポツとしてのスーパーバイズ機能など、ちょっと思っていたのと良い意味で違ったことは良かった。すべてのことを全力で行うマンパワーはないので、地域の中で求められている部分を強化し、取捨選択も必要と感じた。

・自分たちが引っ張る、リーダー的存在になる必要があるのかと考えていたが、あくまで縁の下の力持ちであり、相手に花を持たせ、かつ頼りになる存在が求められると感じた。

・今後基幹型の役割を担って行く事になると、今の時点で様々な課題がある。一番感じるのは異動などで、今までやってきたことが途切れてしまうことや、各職員のスキルの違いもある。色々な課題に対しては少しずつ出来る事からやっていくしかないのかなと報告を聞いて思いました。

・横の繋がり大切さを改めて感じました。各関係機関のそれぞれの役割を主張するのではなく、それぞれの強みを持ち寄り合って支援に携わることで、質の良い支援に繋がるのではないかと思います。顔の見える関係性づくりには、各関係機関との関わりが持てるナカポツセンターの基幹型機能が大きな役割になるのではないかと感じました。

- ・それぞれの地域特性、課題をしっかりと把握したうえで、オリジナルの基幹としての役割が必要だと改めて思いました。
- ・基幹型機能を有するには、現行を理解し常に個々の評価・調整・思考で当事者の支援が必要であり、企業と当事者の双方向性で良好な関係に努める事などを学んだ。
- ・企業、関係機関との日頃からのつながりの重要性。地域資源の現状把握。
- ・後方支援という言葉がマイナスの意味ではなく、全体を把握する役割があることを実感しました。
- ・地域の就労系福祉サービスとピア的関わり方で繋がり、ナカポツが中心となって共に成長することが「基幹型機能」と把握しました。自分の所属するナカポツは既に先人が就労系福祉サービス事業所としっかりとした関係を構築していますが、圏域も広く事業所数もかなりの数になり、ナカポツが主導してまとめ役をするのはタイミング的なことも含め、色々な点で厳しいかなと。ナカポツそれぞれの地域性の違いが大きく、地域の福祉サービスと連携していないナカポツがあるんだ…という驚きなど、大変貴重な学びになったと思います。最後の朝日先生が言われた「スローガンに思考停止しないマインド」で取り組んでいきたいと思います。
- ・徳島わーくわく様と奈良ブリッジ様の「打ち上げ花火ならすぐできる。継続していけることが前提」という言葉も大変印象に残りました。
- ・まずは、周知活動が必要なのだと痛感した。
- ・基幹型機能の構築は、時間もかかるし信頼関係が大事だと思った。
- ・協同関係を構築するためには、時間がかかっても意図をもって繋がり続ける努力が必要ということを感じました。
- ・地域との繋がりを深めていくことの重要性を改めて実感しました。
- ・当センターでは職員や支援機関に対しての人材育成の面では課題を感じています。ナカポツの基幹型として、総合相談支援センターと協力し、地域の就労支援力の向上のために取り組んでいきたいと思います。
- ・『基幹』という文字に重圧を感じていたが、現状行っていることをより丁寧に磨きをかけることで果たせる役割だと思えることができた。
- ・社会資源が整ってはいるが、継続支援事業所特にB型事業所が多すぎて、ナカポツセンターの周知が難しいので、悩むところではあります。
- ・発表のナカポツほどA型・B型との関係が出来ていないと思いました。
- ・まずは地域の他機関で顔を合わせてお互いを知ることが必要と感じました。
- ・今回のお話を伺い、これまでのスーパーバイズのイメージを改めることができた。
- ・やはり、投げっぱなしすぎる気がすることに変わりはない。
- ・後方支援としての立ち位置を意識していきたいです
- ・定着支援について、なんでも受け入れればいいわけではないんだなと感じました。フォロー期間が過ぎたから今後はナカポツが支援します等、期間が過ぎた後は一切関知しない関

係機関の支援の方向性に疑問が残りました。

### ナカポツセンター以外の参加者からの回答

- ・スーパーバイズを是非相互理解のためにもご依頼したいと感じました。
- ・定着支援の引継ぎの有無自体よりも、お互いの支援の強みを知り合うという事が出来ていない事が現状に感じております。
- ・新参の事業所からは、ナカポツはとても敷居が高い気がしてしまう。ナカポツと連携が図れると良いとは思いますが、繋がる術もない。定期的に各事業所との交流会などがあると良いと思う。
- ・自分の事業所にもこの事業があればと思います。ですが賛同される人の少なく、人員すらいないのが実情です。逆にどうすればこのような機関ができるのか知りたいです。
- ・イメージが先行してしまい。支援を受ける立場（受け身）になってしまっていることが多かったと感じてしまいがちでしたが、もっと気軽に連携を図ることができるようにしていこうと感じました。
- ・はじめで知りましたが、市内には就労支援室という形で、なかぼつ的な支援機関があります。障害者雇用はなかなか難しい状況もありますが、雇用をしない形態の実習など参加しやすい企画を考えて頂き、力をつけていただくに基幹型機能を高めて頂きたいと大いに期待します。
- ・機能が活発化するか否かは熱い思いによると感じました。
- ・決して上からでない、同じ目線でのサポートを長年 CSA さんにご対応いただいております。引き続きよろしく願いいたします。
- ・中ポツが創意工夫のうえ多様な取組で障害者の就労を支える地域社会作りに奔走していることが、本日の講演で知ることができた。ただ、現在自圏域では株式会社がポツセンターに大きく入り込みながら、企業就労はまだ無理だと言わんばかりに、企業から OK があったにもかかわらず、株式会社の運営する就労移行事業所に利用者を集めている状況があることから、中ポツの意識によってはさらに地域の企業就労のハードルだけを上げているようにも感じている。基幹型として中核的に動こうとする動きは怖さがある。
- ・介護の業界から足を踏み入れたばかりなので、大まかな取り組みが理解できました。
- ・ナカポツセンターは、当事者、企業、関係機関のつなぎ役として、就労支援をコーディネーターとする重要な役割を担っている。
- ・発達に課題のある生徒が通う通信制高校の就労を担当しています。障害者枠で一般就労をする生徒にナカポツ登録を勧めその見届けをしています。ナカポツさんが具体的に何をしてくださるかが見えてこず、私が当人との面談のセッティングをしています。福祉の世界に身を置いて3年たちますが、ナカポツ、ハローワーク、相談支援員、進路担当、移行支援事業所…たくさんの機関が関わっていつい誰が段取りをするのか、直接寄

り添うのかが見えず、みんな傍観者になっている気がしています。ナカポツさんには、地域の各機関の明確な役割分担、就労定着への青写真を示して欲しいと思います。

・当事者個人への支援を求めているばかりであったが、スーパーバイズを受けると考え自分芯の課題を整理することが大切であると感じました。企業へのアプローチなど就労定着に関するスキルアップを目指すために連携を深めていきたいと思いました。

・障がい者が長期的に安定した就労に就くための企業側へのアドバイザーで、当事者の相談窓口であると認識している。

・北海道はエリアが広いのでナカポツセンターが重要な役割を担っているとおもいます。地方に行けば移行事業所もなく、ナカポツも遠いといった問題点があります。その中で基幹型はとても重要なスタイルだとおもいます。移行事業の話の中でやはり直Bアセスをとる役割で実際には機能していない事業所が思っていた以上にあることに驚きでした。私が移行支援員なり、移行事業として機能していなかったもので移行事業を活性化させ利用者を就職まで導くことができました。今後の社会の流れで移行や定着支援は重要な役割になってくるとおもっています。今回のセミナーで各センターの話聞くことが出来、今後の業務の参考にしていきたいとおもいます。

・ナカポツセンターの基幹型機能については大変だと思いましたが、やりがいがあると思います。私自身障害者ですが、本当に働けることはいいことです。私は特定非営利活動法人キートスの理事長であり、就労継続支援B型事業所「さちの家」今年の4月で10年目になります。とにかく努力して事業所を大きくしたいとおもっています。

・ナカポツってなんだろう…と、疑問に思っていたひとりなので、一歩前進できました。期日が過ぎてしまったからの申し込みだったのにもかかわらず、受け入れて下さり、感謝致します。ありがとうございました。

・地域ごとの特徴はありますが地域のニーズを知ることは共通で非常に大切なことだと思いました。

・また人口や資源の数によっても基幹の役割の違いがあって当然でそれを知り取り組むことは大切だと思いました。

・木の「幹」なので種をまく事が大切だというお話が良かったです。

・限りある資源をどう活用していくのか、ナカポツセンターの視点で知ることができ、ためになった。

・「後方支援」「黒子役」「ネットワーキング」等の言葉が頻出したが、具体的にナカポツがどのような動きをするのか、地域に存在する就労支援事業所からするとどんな利点となり得るのか知りたいと感じた。地域の特色に応じてナカポツの役割が変わるとというのが新たな気づきとなった。

・市町村事業の障害者就労支援センターとして、ナカポツとどう協働していくか、準じるようにしていくのか、ナカポツの役割が増えるほどに悩ましいと感じます。ただ、関係機関にとっては基幹型機能はとても心強い機能だと感じました。

- ・ナカポツそれぞれの考えや意見はあるが、最終的にみんな同じ気持ちでいると思った。
- ・ナカポツが行う役割も多岐にわたっており、支援が行き届かない、フォローが後手に回るなどのケースもあるのではと感じています。今後さらに支援の幅を広げていくとなると、朝日先生がお話された、「地域で何を目指していくのか、そのために一度棚卸して整理を…」はとても感銘を受けました。ナカポツの連携は重要と考えており、地域の中での支援の軸を示してもらうことで、福祉サービス事業所としてもナカポツに任せると事は任せながらうまく連携していければと思っています。支援が点でなく線でつながるよう取り組んでいきたいと思います。
- ・待っているのではなく、こちらから働きかけをする必要があるとわかった。
- ・考え方、方向性がおおざっぱだが良いと思います。細かい所への支援はどうか分かりません。希望的観測を述べているようで。
- ・ナカポツセンターの基幹型機能が細かい所まで対応できるのか分かりません。
- ・当法人でも、「ナカポツ」を受託しているが、全国の様々な「ナカポツ」のお話を伺うと地域性、規模、知名度等が全然違う事を感じた。なかなか浸透していない地域もあるが、私個人としては、絶対に必要な事業と感じた。
- ・私共の就労継続支援がどうあるべきかなど、色々なアドバイスをいただける機会が増えますように願っております。

## 8. 事業のまとめ

### 8.1 定着支援地域連携の現状と課題について

令和4年度のモデル調査事業報告書において示した通り、今年度事業は、定着支援を担う障害福祉サービスの「地域格差」を前提にスタートした。しかし、公募にて全国から実施センターを募ってみたところ、地域資源の多寡に関わらず、共通して追い求められていたのは、「地域ネットワークの構築」「地域ネットワークの活用」であった。エントリーの動機に多少の違いはあったものの、通底していたのは「地域にあまり周知されていない」「自センターの取組が必ずしも地域に活かされていない」等、地域との「一体感」が充分に感じられていないという課題であった。新たに「基幹型」という役割を求められた際に、全国のナカポツはそれぞれのセンターにおいて「自センターは既にネットワークを構築している」「まだまだこれから取り組まねばならない」等、様々な自己分析・自己評価を行ったと思われる。しかし、昨年度の調査事業の結果を受けて、あらためて自センターの取組を振り返った際、まだ充分ではないと感じたセンターが多かったのかもしれない。今回のモデル調査事業における「就労支援機関意識調査」の結果は、まさに各センターの活動を振り返る機会であり、ナカポツの視点から見た地域における自センターの課題が反映されているといえる。

令和6年4月に予定されている障害福祉サービスの報酬改定においては、就労定着支援事業の実施主体にナカポツセンター事業受託法人が明記されている。本モデル調査事業の結果を鑑みると、地域における役割をしっかりと把握することがまずは重要であり、就労定着支援事業の実施にあたっては十分な検討が必要であろう。

### 8.2 ナカポツに期待される基幹型の機能・役割について

今回のモデル調査事業では、昨年度モデル的取組を実施したセンターが「応援センター」としてサポート役で参画したことで、2年間にわたる実績が積み上がったことが非常に大きかったと思われる。昨年度、自圏域の「意識調査」の結果を受けて自省・考察したセンターが、今年度は応援センターとして事業に関わったことで、実施センターに対してよりの確なサポートが可能になった。結果として、実施センターの取組もより効果的なものになったのではと考える。

このことから、ナカポツが地域で機能するためには「地域を知る」「自センターの地域での役割を認識する」「そのうえで実働する」というプロセスが重要であることが推察される。支援機関同士の連携においては「連携が取りやすい機関」「連携が取りにくい機関」という具合に、日々の業務において自然とカテゴライズされることが多い。結果として「よく連携する機関」と「連携をとらない機関」という差別化が無意識のうちに生まれ、時が経つうちに固定化してしまう。ナカポツが「中立」「公正」を保ち、地域におい

て機能するためには、このような差別化は大きな障害となる。

ゆえに、まず「地域を知る」努力を常に怠らないことが重要になる。地域資源の把握は、自センターの取組を明確にするためにも重要であり、このこと無くして「基幹型」としての役割は成り立たないと言っても過言ではない。

「スーパーバイズ」の取組では「横並び」という言葉がキーワードとなっていた。スーパーバイズというと、つい「上から」という関係性をイメージしがちだが、今回モデル的取組を実施した2センターは、両方とも「横並び」「フラットな関係」が重要だという気付きを得ている。地域の事業所との連携において、フラットな関係からのアプローチはきわめて有効であり、地域全体のレベルアップに不可欠であると言える。また、フラットな関係であることによつてのみ、「相手をよく知る」という能動的な活動につなげていくことが初めて可能となる。

「地域連携」の取組では「やってみる」ということがポイントになっていた。連携を図ろう、ネットワークを構築しようと試みると、とかく「どうあるべきか」「何が必要か」が先行してしまい、なかなか取り掛かれないというジレンマに陥ることが今回の報告でも確認できた。これは、相手をよく知らない、地域資源をよく知らないことから生まれる状況と考えられ、「知る」ことによつてこそ、一歩踏み出すことが可能になる。また、地域からナカポツがどう期待されているかを「知る」ことは、時に不安の払拭や、「やってみよう」という動機づけにもなり、ナカポツの機能そのものの向上に大きく貢献すると言える。

「個別支援」の関わり方・在り方においては、ナカポツが独力で困難事例を解決に導くのではなく、まさに上記「スーパーバイズ」と「地域連携」の取組のエッセンスを活かしながら、必要な支援を地域の資源の中から見つけ出し、役割分担の調整を図り、適切なタイミングで支援を提供できるよう本人と家族に伴走したモデル事例が紹介されていた。

これらを基にまとめると、ナカポツに期待される基幹型の機能・役割は以下のように整理できる。

- ① 地域において関係機関とフラットな関係性を構築し
- ② 地域資源の把握に努め
- ③ 必要な地域ネットワークを構築し
- ④ 地域全体の支援力の向上を目指す役割

これまでに何度も確認してきたように、地域資源の差により取組内容に多少の違いが生じることはあるが、この4点については全国のナカポツに共通した役割であると言える。

### 8.3 地域のネットワークの連携を実効ある就労支援の体制に変えていくための提言

今回のモデル調査事業は、令和4年度から実質2年間の取組となった。当初ナカポツの基幹型の役割は「地域の資源の差によって在り方は様々だろう」という仮説を元にスタートしたが、令和4年度の最初の悉皆アンケートでこの仮説を裏付ける結果を得て、その方向性に沿って「モデル的取組」を検証していった。そして令和5年度は、モデル的取組を自センターの活動に取り入れたいという6センターが、応援センター（令和4年度にモデル的取組を報告した10センターのうち6センター）とペアになり、約半年間活動を共にした。当初は「人口」「地域の社会資源」等の要因をもとに取組を調査・検証することを想定したが、結果として、その差異には関係なく、6つのペアのピアサポートの取組がそれぞれに成果を挙げた。

「8.2」で述べたように、モデル的取組の実践の過程と結果からナカポツに求められる役割を整理したが、これはある意味「出発点」だと言える。すべてのセンターがこの出発点に立ち、そこから地域ごとのネットワークを実効ある就労支援の体制に変えていくには、更なる取組が必要となる。もちろんそれは、関係機関との連携深化の過程で、皆で創り上げていくものではあるが、一方で誰かがコーディネートすることが必要である。その役割をナカポツが担うのか、もしくは地域の他の機関が担うのかを把握・共有したうえで、自センターの位置づけを明確にすることが重要だ。

今回のモデル調査事業において、もっとも有効だと感じたのが、ナカポツ同士のサポートである。ナカポツは全国に337センターあるが、337センターしかないとも言える。都道府県単位では、最多で大阪の18センター、少ないところでは2センターという県もある。受託法人の中にあっても孤立しがちな場合もあり、「情報不足」に陥りがちであると言える。実践経験に裏打ちされた広い視野を持つ「情報源」や、同じナカポツとしての「ロールモデル」を得ることができたことが、今回の事業では大きな成果につながった。「基幹型」という、就労支援において地域の核とも言える役割を担うためには、より多くの情報をもとに事業を展開することが重要である。これは「地域の情報」に限らず、同じナカポツの取組についての情報、「ナカポツとしての情報」も同様であると考えている。

「ゼロからではとてもできなかった。」 2月28日に開催した事業報告セミナーにおいて、複数の実施センターから聞かれた言葉だ。地域でナカポツが機能するためには、より多くのナカポツの取組の実践事例が有効であり、心強い存在になることが確認できた。

全国就業支援ネットワークとしては、ナカポツ同士のネットワークを重要な要素だと考え、これまでも「障害者就業・生活支援センター事業をより深く考えるための全国フォーラム（通称：ナカポツフォーラム）」の開催等を通して、その構築に努めてきた。今回のモデル調査事業は、その重要性を改めてより深く認識する機会となった。より身近なネットワークとして、都道府県レベルのナカポツのネットワーク、近隣県を巻き込んだブロックごとのネットワーク、そして全国規模のネットワークの構築を図り、ナカポツが地域のネットワークの核、地域の就労支援体制の基幹となることを目指していきたい。



令和5年6月27日

障害者就業・生活支援センター 各位

特定非営利活動法人  
全国就業支援ネットワーク  
代表理事 藤尾 健二

令和5年度『定着支援地域連携モデルに係る調査事業』  
モデル的取組エントリーについて（ご協力のお願い）

拝啓 時下ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。日頃は当ネットワークの活動に格別のご理解、ご協力を賜り、厚くお礼申し上げます。

さて、当ネットワークは、今年度も、昨年度に引き続き、厚生労働省社会・援護局障害保健福祉部障害福祉課より、標記の調査事業を受託いたしました。

昨年度の調査事業では、全国10箇所の障害者就業・生活支援センターにご協力をいただき、今後、障害者就業・生活支援センターが、地域の就労支援ネットワークの中で「基幹型」の機能を担っていく際に期待される以下の取組について、多様なモデル事例を示すことができました。

- ① 就労定着支援事業所その他の就労系障害福祉サービス事業所に対するスーパーバイズ（個別の支援事例に対する専門的見地からの助言及びそれを通じた支援の質の向上にかかる援助等）に係る取組
- ② 困難事例に対する個別支援の取組
- ③ 地域の就労支援機関との連携に係る取組

今年度の調査事業では、このようなモデル的取組をこれから実施していこうと考えておられる全国6箇所の障害者就業・生活支援センターにおいて、上記3点の取組のいずれかを実際に実施していただき、その取組過程における課題や地域特有の実情について調査することで、「基幹型」の機能・役割を再整理し、定着支援に携わる関係者と共有することにいたしました。なお、取組の実施にあたっては、昨年度の調査事業にご参加いただいた10センターの中から、タッグを組んで応援していただくセンターを6箇所選定して、二人三脚でのモデル的取組をお願いいたします。

つきましては、このモデル的取組の実施に、8月～12月の約5ヶ月間にわたってご協力いただけるセンターを、下記の通り募集いたします。

- ・「基幹型としての機能や役割については概ね理解し、既に取り組んでいることもあるが、今後より強化が必要だと感じている。」
- ・「就労支援部会等には参加しているが、これまでナカポツ中心になることがあまりなく、今後どのように関与を深めていくか思案中である。」
- ・「昨年度の事業報告セミナーに参加して、自センターでできることのイメージは浮かんだが、職員間の調整や地域の意向の聞き取りなど、まずどこからどのように始めていったらいいかの整理が必要だ。」

といったようなお考えをお持ちのセンターをはじめ、基幹型としてのモデル的取組と一緒に取り組んでいただけるセンターのご応募をお待ちしております。ご不明な点、より詳しくお知りになりたい点などございましたら、下記事務局まで何なりとお問い合わせください。

このモデル的取組実施にご協力いただくことが、全国的な調査結果の共有に留まらず、実施いただいた地域における就労支援ネットワークの強化、ひいては、地域の定着支援対応力の一層の向上に資することを心より期待しております。

ご多忙の折、恐縮ですが、ご協力のほど、なにとぞよろしくお願い申し上げます。

敬具

## 記

全国338箇所の障害者就業・生活支援センターのうち、昨年度モデル的取組実施にご協力いただいた10センターを除く328センターの中から、今年度のモデル的取組実施にご協力いただけるセンターを公募いたします。ご協力を希望されるセンターは、添付のエントリーシートを、7月10日までに提出してください。

ご応募いただいたセンターの中から、地域性および取組実施を応援していただくセンター（昨年度の10センター）とのマッチング等を勘案して、6箇所の実施センターを選出いたします。

なお、モデル的取組を実施していただくセンターおよび応援していただくセンターには、それぞれ規定の謝金および交通費実費をお支払いいたします。

- エントリーシートご提出・お問合せ先  
全国就業支援ネットワーク事務局（担当：小澤）  
E-mail [ozawa@sien-nw.jp](mailto:ozawa@sien-nw.jp)  
TEL 06-4303-3111 FAX 06-6704-7274
  
- 添付資料
  - ・令和5年度『定着支援地域連携モデルに係る調査事業』事業概要
  - ・令和5年度『定着支援地域連携モデル調査事業』エントリーシート
  
- ご参考 【モデル的取組実施の流れ（例）】
  - [7月中下旬] モデル的取組を実施していただく6センター（以下、実施センターという。）と、その取組実施を二人三脚で応援していただく6センター（昨年度ご協力いただいた10センターの中から依頼する。以下、応援センターという。）を選出する。
  - [8月上旬] オンラインミーティング（実施センター・応援センター・ブロック担当役員・事務局）にて、実施計画の打合せをする。
  - [8月～9月] 実施センターが応援センターを訪問し、取組のポイントを学ぶ。同時に、圏域内の就労支援機関意識調査を実施する。
  - [9月～11月] 実施センターが、上記応援センターのノウハウおよび圏域内調査結果の内容を活かして、モデル的取組を実施する。
  - [11月～12月] 応援センターが実施センターを訪問し、取組の進捗や成果を確認・共有する。
  - [12月] オンラインミーティング（実施センター・応援センター・ブロック担当役員・事務局）にて、実施結果の振り返り・総括をする。
- ・ブロック担当役員および事務局は、現地訪問やオンラインミーティングに適宜参加して、取組実施をサポートする。

以上

令和5年度『定着支援地域連携モデル調査事業』エントリーシート

特定非営利活動法人 全国就業支援ネットワーク

圏域の基本情報

都道府県
センター名
ご担当者名
TEL

人口規模	
就労移行支援事業所数	
就労定着支援事業所数	
就労継続A型事業所数	
就労継続B型事業所数	

ナカポツの基幹的な役割として以下のような取組を実施するにあたって、特に課題と感じておられることを、ご自由に記入してください。後日、事務局よりヒアリングさせていただきます。

- ①就労定着支援事業所等に対するスーパーバイズ  
(支援に関するアドバイスの提供や支援力向上のための勉強会開催、面談の同席・企業への同行等)
- ②困難事例に対する個別支援  
(支援対象者本人、家族、企業への対応に苦慮していた事業所の個別事例に協働で支援する等)
- ③地域の就労機関との連携強化に向けた能動的な役割の発揮  
(定期的なネットワーク会議の開催、自立支援協議会就労支援部会等での研修の企画等)


昨年度モデル的取組をされた10センターの中で、ぜひ取組を参考にしてみたいと思われたセンターを2つ選んで、で囲んでください。10センターの取組内容は、下記URLより厚労省HPに掲載されている事業報告書を参照してください。

(報告書) <https://www.mhlw.go.jp/content/12200000/001092346.pdf>

- 北海道：札幌たすく
- 青森県：みなと
- 埼玉県：CSA
- 千葉県：香取
- 千葉県：ピア宮敷
- 静岡県：ぼらんち
- 岐阜県：清流ふなぶせ
- 兵庫県：西播磨
- 徳島県：わーくわく
- 鹿児島県：あいらいさ

その理由を記入してください。


ご協力ありがとうございました。

## 令和5年度『定着支援地域連携モデルに係る調査事業』事業概要

特定非営利活動法人全国就業支援ネットワーク

## □ 事業の目的

地域における障害者の就業に伴う生活面の支援ニーズへの対応力を向上させるため、障害者就業・生活支援センターについて、基幹型の機能も担う地域の拠点としての体制を整備し、地域の就労支援ネットワークの強化、充実を図る。

## □ 事業の内容

- ① 障害者就業・生活支援センターにおける以下3点の取組について、その取組にあたっての課題を分析し、基幹型の機能・役割を整理する。(令和5年6月～7月)
  - 就労定着支援事業所その他の就労系障害福祉サービス事業所に対するスーパーバイズ(個別の支援事例に対する専門的見地からの助言及びそれを通じた支援の質の向上にかかる援助等)に係る取組
  - 困難事例に対する個別支援の取組
  - 地域の就労支援機関との連携に係る取組
- ② ①を踏まえ、これまで①の取組を実施していなかった障害者就業・生活支援センターにおけるモデル的取組を6箇所のセンターで実施するとともに、当該センターが属する地域の就労支援機関に対し、障害者の就業に伴う生活面の支援に係る意識調査を実施する。(令和5年8月～12月)
- ③ ②のモデル的取組及び意識調査の結果を踏まえて、基幹型の機能・役割を再整理し、基幹型としての障害者就業・生活支援センターについて、以下の内容を調査報告書としてまとめる。(令和6年1月)
  - 就労定着支援事業所等に対するスーパーバイズの在り方
  - 個別支援の関わり方・在り方
  - 地域の就労支援機関等との連携の在り方
- ④ 障害者就業・生活支援センターの職員、就労系障害福祉サービス事業所の職員その他就労支援機関の職員を対象としたセミナーを開催し、取組内容の周知、啓発を実施する。(令和6年2月)
- ⑤ 事業の具体的内容・方針を検討するため、関係者・有識者による検討会を開催・運営する。(令和5年6月、6年3月)
- ⑥ 厚生労働所へ委託事業報告書を提出する。(令和6年3月)

「わたしたちのセンターは、地域づくりに向けた  
 “4つの役割と機能を持つ、センターです”

事業所概要		圏域の状況	
所在地	北海道石狩市花川南1条4丁目225 カナオカビル3階	人口規模	420,000
担当者 連絡先	吉田 志信 Tel : 0133-76-6767 E-mail : <a href="mailto:s-yoshida@harunire.or.jp">s-yoshida@harunire.or.jp</a>	就労移行支援事業所数	14
受託法人 実施事業	(社福)はるにれの里 施設入所施設・共同生活援助・生活介護・就労移行支 援・就労継続A型・就労継続B型・相談支援・児童発達支 援・企業主導型保育園・その他	就労定着支援事業所数	9
職員体制	センター長1名(兼務)・主任就業支援担当1名・就労 支援員2名・生活支援員1名	就労継続支援A型事業所数	19
特徴	広域エリアを担当する中で、地域の関係機関とのネット ワークが重要であり、ネットワークを構築・強化・維持 していくことが就労支援においても要となっています。	就労継続支援B型事業所数	81

#### 【ナカポツの基幹的な役割としての取組を実施するにあたって、課題と感じていること】

活動圏域内の就労支援機関については、協力的な機関が多い印象ではあるが、一方で、地域の社会資源として機能していないと感じる機関も散見される。それらの機関に対するスーパーバイズを具体的にどのように進めていくかという点で苦慮することが多い。基幹については、当センターの介入で解決に向けていく手法と、当センターとしては、“地域づくり”をテーマとして活動する中、基幹の役割の理解を目指すために、各種研修会や会議を通じた間接的な介入で、機能の向上を目指しているところであるが、効果を感じる事が少ない。“地域づくり”の視点で、他の地域やセンターの活動から参考とさせていただきたいと考えています。

#### 【あいらいさ障害者就業・生活支援センターさんの取組を参考にしてみたいと思った理由】

主に“地域作り”という視点がある。また、基幹型センターとしての役割を担っているセンターとして選択させていただきました。それぞれの課題等に関して、参考にさせていただければと思います。

## 障害者・就業生活支援センタートータス センター紹介

「わたしたちのセンターは  
人と人とを結ぶことで生まれる【繋がりと広がり】を大切にするセンターです」

事業所概要		圏域の状況	
所在地	群馬県藤岡市下栗須974-10	人口規模	131,533
担当者 連絡先	佐藤 あゆみ Tel : 0274-25-8335 E-mail : <a href="mailto:k-fujisaku@xp.wind.jp">k-fujisaku@xp.wind.jp</a>	就労移行支援事業所数	2
受託法人 実施事業	(社福) かな会 平成10年 5月 法人設立 知的障害者入所施設・生活介護 (3事業所) 就労継続支援B型・グループホーム 基幹相談支援センター・障害者就業・生活支援センター	就労定着支援事業所数	1
職員体制	所長 兼 主任就業支援ワーカー・就業支援ワーカー2名 生活支援ワーカー・生活支援センター 兼 週末活動支援員	就労継続支援A型事業所数	3
特徴	人口も少なく社会資源も少ない圏域ですが、困った時に 相談できる顔の見える関係構築はできています。	就労継続支援B型事業所数	13

### 【ナカポツの基幹的な役割としての取組を実施するにあたって、課題と感じていること】

人口や社会資源は少ないが、評価できる点として圏域内の自立支援協議会（就労支援部会）の部会長を任されており、地域のニーズに応じた研修やイベントの企画はスムーズに取り組んでいると思っています。一方で、関係機関（移行、B型、A型、地活、医療機関等）と連携した就労支援では、課題がいくつか感じられる場面があります。例えば一般企業への就職に繋ぐタイミングにズレがあり、関係機関側は一般企業への就職へ、こちらとしては地活→移行、またはB型→移行と判断するケースも多いです。どの段階で一般企業への就職が可能か、支援スタッフの見立てや支援力向上のために、ナカポツが主体となって研修会の企画が必要であると感じています。また、個別の支援ケースでは、世帯全体が障害者で支援が必要なケースや、攻撃性の強い傾向のあるケース等、困難ケースが増加している傾向の中で、どのような機関とどのように役割を分担しながら支援をしていくことが望ましいか、センター全体の支援力を高めていく、地域とのさらなる連携を強化していく必要性を感じております。

### 【障害者就業・生活支援センターみなとさんの取組を参考にしてみたいと思った理由】

上記に記載しました圏域の状況やセンターの課題の中で、青森県のみなと様は、障害者ステップアップ講座を開催しており、利用者と支援者を対象として就労に対する意識を深める先進的な取組をされているところが、とても参考になりました。

## 水戸地区障害者・就業生活支援センター センター紹介

「わたしたちのセンターは地域機関の活躍をサポートするセンターです」

事業所概要		圏域の状況	
所在地	茨城県水戸市赤塚1-1 (MIOS内)	人口規模	470,000
担当者 連絡先	塩畑 義孝 Tel : 029-309-6630 E-mail : <a href="mailto:shien@mito-syakyo.or.jp">shien@mito-syakyo.or.jp</a>	就労移行支援事業所数	60
受託法人 実施事業	(社福) 水戸市社会福祉協議会 就労移行支援事業所, 就労継続支援A型及びB型, 身体障害者生活支援施設, 知的障害者生活介護通所施設, 訪問サービス事業所, 特定相談支援事業所, 障害福祉基幹型支援センター, 養護老人ホーム, 居宅介護支援事業所, 老人福祉センター, 他市社会福祉協議会事業全般。	就労定着支援事業所数	6
職員体制	所長, 主任就業支援担当者, 就業支援担当者5名, 生活支援担当者2.5名	就労継続支援A型事業所数	15
特徴	平成14年7月から県内1か所目のセンターとして事業を受託(現在は県内9センター), 3市3町を担当している。当初は社会福祉事業団による運営であったが, 平成28年4月に法人合併となり現在は社会福祉協議会による運営となっている。	就労継続支援B型事業所数	90

### 【ナカポツの基幹的な役割としての取組を実施するにあたって、課題と感じていること】

現状としては個別に機関とのやり取りはありますが、基幹的な役割を考えた場合、就労支援機関との連携や、スーパーバイズ機能について強化する必要性を感じております。

### 【香取就業センターさんの取組を参考にしてみたいと思った理由】

スーパーバイズの実際とあり方、その関係性に至るまでのプロセスなど、学ばせていただければと考えております。また、就労支援機関等との連携についてのノウハウも求めており、就労移行支援事業所や普通学校との情報共有の実際についてなども教えていただければと思います。



## 津地域障がい者・就業生活支援センター「ふらっと」センター紹介

「わたしたちのセンターは  
「人」と「社会」を繋ぐ『架け橋』になりたいセンターです」

事業所概要		圏域の状況	
所在地	三重県津市大門7-15 津センターパレス3階	人口規模	271,747
担当者 連絡先	後藤 勇介 Tel : 059-229-1380 E-mail : flat1380@matthias.jp	就労移行支援事業所数	5
受託法人 実施事業	(社福) 聖マッテヤ会 児童養護施設、障害者支援施設、生活介護、指定特定相談、放課後等デイサービス、就労移行、自立訓練、共同生活援助、 (市委託) 基幹相談支援センター、地域相談支援センター、 (国・県委託) ナカポツ3センター	就労定着支援事業所数	4
職員体制	所長(主任就業支援担当兼務) 1名 就業支援担当 4名 生活支援担当 2名	就労継続支援A型事業所数	9
特徴	少し前までは就労移行支援を活用する流れがなかなかできなかった。また就労継続支援事業所の一般就労へ向けた支援の意識は低いように感じる	就労継続支援B型事業所数	52

### 【ナカポツの基幹的な役割としての取組を実施するにあたって、課題と感じていること】

就労定着支援事業所、就労移行支援事業所とは連携を頻繁にさせていただいているが、スーパーバイズを行うような関係性とは違い、横並びの連携する関係機関といった関係性になっています。その必要性がないのであれば、それはそれで良い形なのかなとは思いますが、今後の地域の就労支援力の向上の視点で見ると、新規立ち上げ事業所や経験の長い事業所の新入職員等にナカポツとして伝えられることがあるのではと感じています。またネットワーク会議の必要性を感じていながらも上手く実施できていない状況です。ここは主体的に関わっていただける運営の仕方のノウハウ不足を感じています。

### 【障害者就業・生活支援センターばらんちさんの取組を参考にしてみたいと思った理由】

人口規模は「ばらんち」さんの方が多いのですが、就労系福祉サービスの資源の数が当センターの圏域と近いなかで、様々なネットワーク会議や人材育成に関わる研修をされているので、そのノウハウを学べたらと思いました。

## なら中和障害者・就業生活支援センターブリッジ センター紹介

「わたしたちのセンターは  
主体的なチャレンジを支える地域づくりを目指すセンターです」

事業所概要		圏域の状況	
所在地	奈良県橿原市今井町2-9-19 今井長屋1	人口規模	380,000
担当者 連絡先	青木 孝至 Tel：0744-23-7176 E-mail：tunagu-bridge@true.ocn.ne.jp	就労移行支援事業所数	9
受託法人 実施事業	(社福) 奈良県手をつなぐ育成会 生活介護、施設入所支援、共同生活援助、就労継続A型、 就労継続B型、一般・特定相談支援事業所、奈良県障害者 総合相談圏域支援事業（県委託事業）	就労定着支援事業所数	5
職員体制	就労支援担当者5名 生活支援担当者1名	就労継続支援A型事業所数	19
特徴	<ul style="list-style-type: none"> <li>・当センターは、県内で一番の人口が多い圏域で、年間新規相談者は約90名程度来所されます。</li> <li>・最近の傾向としては、精神・発達障害のある方の相談が増えています。また、今すぐに就労される方よりも、就労系の福祉サービス事業所等につなぐことが増えてきています。</li> <li>・コロナ禍で、就労継続A型事業所にニーズが高まったことにより、就労移行支援事業所が相次いで閉所されています。それに伴い多様なニーズに応えられに状況になっています。</li> <li>・障害者自立支援協議会などを軸としながら、地域の支援機関との協議を行っています。ただ、「就労」に対する関心や優先順位が低く、就ボツと他機関の大きな温度差がある状況です。</li> <li>・企業や中小企業家同友会などの団体と意見交換の場の機会を少しずつ増やしています。ただ、「障害者は身体・知的障がいのことでしょ?」「なんで障害者を雇わないといけないのか?」など、まだまだ障害者雇用について知られていない状況にあります。</li> </ul>	就労継続支援B型事業所数	55

### 【ナカポツの基幹的な役割としての取組を実施するにあたって、課題と感じていること】

いづれも課題ではありますが『③地域の就労機関との連携強化に向けた能動的な役割の発揮』が、優先順位の高い課題と感じています。地域全体が、就労支援に対する関心や意識が低く、個々それぞれで取り組んでいる状況です。障害者自立支援協議会を軸に、ネットワーク会議などの開催や、地域ニーズに即した協働イベントに取り組み、相互理解を深めてきましたが、上手くベクトルを合わせることができず、効果的なネットワーク構築とまでは至っていない現状です。実践されているセンターからこの点について伺いできればと思います。

### 【障害者就業・生活支援センターわーくわくさんの取組を参考にしてみたいと思った理由】

誰であっても働くことにチャレンジされる方のお気持ちを大切にしたいと考えており、そのためにも「就労支援の可視化」（障害のある方・企業・支援者それぞれにとっての）を図りながら、地域の中で仕組み作りを行っています。わーくわく様は、当センターが目指す実践に近い取り組みをされているため、直接ノウハウを受けながら地域に還元したいと考えています。企業とのネットワーク作りや、当事者を中心としたネットワークを構築されているため、どのようにベクトルをすり合わせながら実践されてきたのか、参考にさせていただければと思います。

## 障害者・就業生活支援センターブリッジ センター紹介

「わたしたちのセンターは  
一緒に働き、一緒に考える伴走型センターです」

事業所概要		圏域の状況	
所在地	沖縄県糸満市字賀数406番地の1	人口規模	280,000
担当者 連絡先	國吉 利生 Tel : 098-996-2805 E-mail : jimukyoku@bridge-youwakai.jp	就労移行支援事業所数	16
受託法人 実施事業	(医)陽和会 南山病院(精神科)、就労移行・就労B型、グループホーム、特定相談支援	就労定着支援事業所数	3
職員体制	センター長兼主任就労支援1名、就労支援1名、生活支援1名、就労開拓・定着アドバイザー1名(県)計4名体制	就労継続支援A型事業所数	20
特徴	複数設置として4年前より活動。過密地域から過疎地域まで幅広く観光産業が中心で産業に偏りがある。人口に対して福祉資源が多いが質が問題となっている。	就労継続支援B型事業所数	68

### 【ナカポツの基幹的な役割としての取組を実施するにあたって、課題と感じていること】

就労定着支援事業所は少ないのですが、就職に向けた支援を実施していない就労移行支援がある地域です(直Bのため)。そのため、各就労移行のヒアリングを行い、ともにスキルアップを目指せる雰囲気を作れたらと考えています。圏域各市町の自立支援協議会にも参加をしているが一般就労に向けた話が少なく、B型運営の話題が中心。きちんと就職に向けて支援ができる機関が増えることで、ナカポツへの過剰な負担を軽減できればと思っています。若く少人数のナカポツであるため、負担の配分を考えながら前向きに検討したいです。

### 【障害者就業・生活支援センターCSAさんの取組を参考にしてみたいと思った理由】

CSAさんが実施している就労移行支援事業所等情報交換会は当圏域で目指している姿であるため、参考にできる点が多いと感じています。普通科学校や高等教育機関とも連携ができている点が素晴らしいと思っています。

## 【トータス / みなと】 第一回オンラインミーティングメモ

- ・日時 2023年8月7日（月）13：30～14：45
- ・参加者 実施センター：障害者就業・生活支援センタートータス（佐藤）  
 応援センター：障害者就業・生活支援センターみなと（工藤・カ石）  
 全国就業支援ネットワーク：担当役員（野路） 事務局（小澤・飴野）

### 【内容】

- ・自己紹介
- ・事務局説明（今年度事業の概要・昨年度事業の振り返り）
- ・意見交換
  - 現状：支援機関（特に移行・定着）は少ないが、連携できる事業所はある程度見込める
  - 課題：利用者と支援者の双方を対象にした就労定着に向けた支援フォーマットづくり
  - モデル的取組テーマ：就労定着支援事業所等に対するスーパーバイズの在り方  
 （困難事例に対する個別支援の関わり方・在り方も含める）
  - 応援のポイント：「障害者ステップアップ講座」パッケージの提供、応用実施するにあたってのアドバイス
- ・確認事項
  - 応援センター訪問日程：8/22（火）～23（水）
  - 意識調査配布：9月前半にトータスが直接手渡し配布

## 【なら中和ブリッジ / わーくわく】 第一回オンラインミーティングメモ

- ・日時 2023年8月9日（水）10：30～11：30
- ・参加者 実施センター：なら中和障害者就業・生活支援センターブリッジ（青木）  
 応援センター：障害者就業・生活支援センターわーくわく（佐野・三並）  
 全国就業支援ネットワーク：担当役員（酒井） 事務局（小澤・飴野）

### 【内容】

- ・自己紹介、事務局説明（今年度事業の概要・昨年度事業の振り返り）
- ・意見交換
  - 現状：コロナ禍の影響でA型ニーズが高まり、移行の閉所が相次いでいる。圏域は都市部と過疎地域が混在しており、支援機関により就労に対して温度差がある。自立支援協議会は実施しているが、福祉課が中心であった背景から就労の優先度が低い。企業との接点は少しずつ増えているが、対話する機会は充分には持っていない。
  - 課題：本人の主体的なチャレンジを支える地域のネットワークづくり（就労支援の可視化、企業とのネットワーク・当事者を中心としたネットワークの構築、ノウハウの地域への還元）。
  - モデル的取組テーマ：地域の就労支援機関との連携の在り方に係る取組  
 （困難事例に対する個別支援の関わり方・在り方も含める）
  - 応援のポイント：鳴門市自立支援協議会就労支援部会や雇用支援協会（企業）、語り部の会（当事者）等の企画・運営方法の紹介。他機関と密に連携する際のポイント。ブリッジにて応用実施するにあたってのアドバイス。
- ・確認事項
  - 応援センター訪問日程：9/11（月）～12（火）
  - 意識調査配布：青木氏より圏域市町村から発信していただくよう働きかけ協力を依頼する。

## 【ブリッジ / CSA】 第一回オンラインミーティングメモ

- ・日時 2023年8月9日（水）13：00～14：00
- ・参加者 実施センター：障害者就業・生活支援センターブリッジ（國吉）  
 応援センター：障害者就業・生活支援センターCSA（木全）  
 全国就業支援ネットワーク：担当役員（野口） 事務局（小澤・飴野）

### 【内容】

- ・自己紹介、事務局説明（今年度事業の概要・昨年度事業の振り返り）
- ・意見交換
  - 現状：支援機関はB型が多く、定着支援の資源は少ない。圏域各市町村の自立支援協議会に参加しているものの、B型の運営に関する話が多く、具体的な一般就労の話題に至ることは少ない。人口28万人圏域のセンターで支援員の加配等がなく、少人数体制の運営面で難しさがある。
  - 課題：就労支援ができる地域づくり（地域資源の底上げ）、スーパーバイズに伴う最初の関係構築の仕方（まずはやる気のある事業所にスーパーバイズし味方を作る）、味方となる事業所と連携することによるナカボツだけが抱え込まない体制づくり（過剰な負担の軽減）。
  - モデル的取組テーマ：就労支援事業所等に対するスーパーバイズの在り方  
（困難事例に対する個別支援の関わり方・在り方も含める）
  - 応援のポイント：「就労移行支援事業所等情報交換会」「福祉事業所交流会」の運用の仕方、取組始めの働きかけ方についての情報提供、ブリッジにて応用実施する際のアドバイス。
- ・確認事項
  - 応援センター訪問日程：9/12（火）～13（水）
  - 意識調査配布：國吉氏より圏域市町村から発信していただくよう働きかけ協力を依頼する。

## 【のいける / あいらいさ】 第一回オンラインミーティングメモ

- ・日時 2023年8月9日（水）14：00～15：00
- ・参加者 実施センター：石狩障がい者就業・生活支援センターのいける（吉田）  
 応援センター：あいらいさ障害者就業・生活支援センター（永山・東）  
 全国就業支援ネットワーク：事務局（小澤・飴野）

### 【内容】

- ・自己紹介
- ・事務局説明（今年度事業の概要・昨年度事業の振り返り）
- ・意見交換
  - 現状：協力的な機関も多いが、就労の看板を掲げながらも機能していないような支援機関もある。圏域のカバー範囲が広域に渡り（東京都と同じ面積の圏域）、少数の職員で対応する上で苦慮している。広域エリアを担当するには他機関との連携が欠かせないため、地域づくりに取り組むことで基幹型として質の高い支援を目指していきたい。
  - 課題：地域が繋がれるネットワークの構築・強化・維持と、それに伴う人材育成。
  - モデル的取組テーマ：地域の就労支援機関との連携の在り方に係る取組  
（困難事例に対する個別支援の関わり方・在り方も含める）
  - 応援のポイント：「就労支援事業所連絡会」等の立上げ経緯や運用方法、各種会議を活性化させていく手法の共有。圏域内の支援機関との連携強化の取組みを、のいけるにて応用実施するにあたってのアドバイス。
- ・確認事項
  - 応援センター訪問日程：9/26（火）～9/27（水）
  - 意識調査配布：吉田氏が送付先リスト（5市1町村）を作成、送付方法は別途事務局と調整。

## 【ふらっと / ぼらんち】 第一回オンラインミーティングメモ

- ・日時 2023年8月10日（木）17：00～18：00
- ・参加者 実施センター：津地域障がい者就業・生活支援センターふらっと（後藤）  
応援センター：障害者就業・生活支援センターぼらんち（夏目）  
全国就業支援ネットワーク：担当役員（藤尾） 事務局（小澤・飴野）
- 【内容】
- ・自己紹介、事務局説明（今年度事業の概要・昨年度事業の振り返り）
- ・意見交換
  - 現状：B型が多く、定着支援はナカポツが中心に動いている。圏域内の移行を盛り上げてきた動きの中から徐々に移行の利用も増えつつある。A型B型との連携は少なく、主に市委託の相談支援センターが窓口となっている。個別ケースの連絡共有という意味での連携はしているものの、地域連携とは言い難いのが実情。
  - 課題：地域が繋がるネットワークづくりと、それに伴う年間イベントの企画・運営。
  - モデル的取組テーマ：地域の就労支援機関との連携の在り方に係る取組  
(困難事例に対する個別支援の関わり方・在り方も含める)
  - 応援のポイント：「輝きセミナー」「企業部会」など年間イベントの企画・立案。他機関と連携して運営する際のポイント。ふらっと圏域にて応用実施するにあたってのアドバイス。
- ・確認事項
  - 応援センター訪問日程：8/30（水）～31（木）
  - 意識調査配布：基幹センター（同法人）開催の就労部会等を通じて発信できるよう調整予定。

## 【水戸地区 / 香取就業】 第一回オンラインミーティングメモ

- ・日時 2023年8月16日（水）13：30～14：30
- ・参加者 実施センター：水戸地区障害者就業・生活支援センター（鈴木・塩畑）  
応援センター：障害者就業・生活支援センター香取就業センター（岡澤）  
全国就業支援ネットワーク：担当役員（藤尾） 事務局（小澤・飴野）
- 【内容】
- ・自己紹介、事務局説明（今年度事業の概要・昨年度事業の振り返り）
- ・意見交換
  - 現状：移行事業所数は変わらず（地元の社福・NPOは減少も全国展開の事業者が増加）。支援機関とは個別のやり取りはあるものの、基幹的な役割を考えると就労支援機関との連携やスーパーバイズ機能を強化する必要性を感じている。水戸市内はそれなりに関係構築があるものの、水戸市以外の2市3町ではパイプがしっかり構成ができておらず、新しく関係を作る取組が必要。
  - 課題：地域機関の活躍をサポートできる関係づくり。
  - モデル的取組テーマ：地域の就労支援機関との連携の在り方に係る取組
  - 応援のポイント：定着支援事業所とのやり取りの方法や他市町村の就労支援機関との連携ノウハウを応用実施するにあたってのアドバイス。自法人内で完結しない取組みの工夫。
- ・確認事項
  - 応援センター訪問日程：9月中に事前打合せ、10/6（金）「就業支援者養成セミナー」参加。
  - 意識調査配布：塩畑氏より圏域自治体から発信していただくよう働きかけ協力を依頼する。

## 【トータス / みなと】 第二回オンラインミーティングメモ

- ・日時 2023年10月12日（木）11：00～12：15
- ・参加者 実施センター：障害者就業・生活支援センタートータス（佐藤）  
応援センター：障害者就業・生活支援センターみなと（工藤・カ石）  
全国就業支援ネットワーク：担当役員（野路） 事務局（小澤・飴野）

### 【内容】

- ・応援センター訪問の振り返り（参考になった点）  
ステップアップ講座の有効性を確認できた。  
足並みを揃えて支援を行うためには、本人・企業・支援者3者間の目標の見える化・共有が肝要。
- ・今後のモデル的取組（スーパーバイズ）のポイント  
実習先企業の選定準備（あえて障害者ゼロ雇用企業も候補に入れて検討）。  
圏域内支援機関からの対面での意見収集（現状維持で良いと捉えている事業所にもヒアリング）。  
スーパーバイズは、一緒に実習先訪問をしているとき等、共通体験を通じて横並びの立場で実施する。  
みなとでは人員体制も充足して丁寧なフィードバックができていますが、トータスに取り入れる際は役割分担の調整が必要。地域と連携（交流）しながら支援機関も巻き込んで実施することも検討。
- ・意識調査結果速報の共有
- ・確認事項  
実施センター訪問について 日程：12/26（火）～27（水）  
2月開催事業報告セミナーについて

## 【ブリッジ / CSA】 第二回オンラインミーティングメモ

- ・日時 2023年10月17日（火）11：00～12：00
- ・参加者 実施センター：障害者就業・生活支援センターブリッジ（國吉）  
応援センター：障害者就業・生活支援センターCSA（木全）  
全国就業支援ネットワーク：担当役員（野口） 事務局（小澤・飴野）

### 【内容】

- ・応援センター訪問の振り返り（参考になった点）  
連携の形を福祉事業所の方々と「ともに」つくりあげてきた背景がみえた。参加者の想いを汲み取ることの大切さや、状況に応じて内容を変化させてきたところ。
- ・今後のモデル的取組（スーパーバイズ）のポイント  
圏域内の移行支援事業所の質や考え方にばらつきがあるため、1ヶ所ずつ訪問しながらニーズ調査を実施する。→ 就労支援事業所交流会Ver.0の実施に向けた情報収集。  
実際の運営に向けて、目的の共有からスタートし、周知は段階的に実施していく。  
参加者にとって何か有益な情報を得られることで良い循環にしていく。  
交流会開催の初期段階は事業所のアセスメントをしながら地域を育てることで、後々ハブ機能として動けるような存在を目指す。  
「持続可能な」スーパーバイズ・連携を実現するために、福祉事業所を巻き込みながら「横並び」で共有していく。
- ・意識調査結果速報の共有
- ・確認事項  
実施センター訪問について 日程：12/5（火）～6（水）  
2月開催事業報告セミナーについて

## 【ふらっと / ぼらんち】 第二回オンラインミーティングメモ

- ・日時 2023年10月18日（水）13：00～14：00
- ・参加者 実施センター：津地域障がい者就業・生活支援センターふらっと（後藤・田中）  
応援センター：障害者就業・生活支援センターぼらんち（夏目）  
全国就業支援ネットワーク：担当役員（藤尾） 事務局（小澤・飴野）

### 【内容】

- ・応援センター訪問の振り返り（参考になった点）
  - 明確な目的を持った研修の開催と運営、非公式の場でのやりとりから得られる人と人との信頼関係の強さ。
- ・今後のモデル的取組（地域の就労機関との連携）のポイント
  - いきなり形式的に実施する集まりを作るのではなく、今後のネットワークを作るために「津市でできること」を考える場を検討する（Ver.0から開始）。
  - 同志を見つけ、根回しをする。話の通じる人を見つけて、できることから構築していく。
  - 行政・学校・企業に声かけして、話をする中でテーマを絞ったり、周知をしながら調整・共催へと繋げていき、規模は内容に応じて都度調整する。
  - ナカポツは地域資源がなければ成り立たないため、伝えたいことよりニーズを聞くことを重視する。
  - 会合の最後に求人情報等の有用な情報を共有して、参加して良かったと思えるような工夫をする。
  - 三重の県民性（聞くのは良いが発言には遠慮する傾向）を踏まえて意見収集する。
- ・意識調査結果速報の共有
- ・確認事項
  - 実施センター訪問について 日程：12/1（金）～12/2（土）  
まずはグループワークを通して意見収集する。
  - 2月開催事業報告セミナーについて

## 【なら中和ブリッジ / わーくわく】 第二回オンラインミーティングメモ

- ・日時 2023年10月20日（金）13：00～14：00
- ・参加者 実施センター：なら中和障害者就業・生活支援センターブリッジ（青木）  
応援センター：障害者就業・生活支援センターわーくわく（佐野・三並）  
全国就業支援ネットワーク：担当役員（酒井） 事務局（小澤・飴野）

### 【内容】

- ・応援センター訪問の振り返り（参考になった点）
  - 研修に参加すれば何か得られる、学べることがあるという期待感が感じ取れ、またその仕組みを学べた。
  - 参加者が主体的に発言できる土壌には、長年にわたって積み上げてきた背景があることがわかった。
- ・今後のモデル的取組（地域の就労機関との連携）のポイント
  - まずは「知る」ことから。支援機関だけでなく企業や地域の「知らない」方に向けての発信を強化し、活発に意見交換できる土壌を醸成していく。
  - 当事者に参加してもらうことで発信力を高める。
  - 研修・会議の年間開催スケジュールを想定し、継続可能な長期的な視点で定着化を図っていく。
  - 人員体制に余裕がない場合は、地域内の繋がれるところからまず繋がって協力してもらう。
- ・意識調査結果速報の共有
- ・確認事項
  - 実施センター訪問について 日程：12/13（水）～14（木）  
2月開催事業報告セミナーについて



## 【のいける / あいらいさ】 第二回オンラインミーティングメモ

- ・日時 2023年10月24日（火）13：00～14：15
- ・参加者 実施センター：石狩障がい者就業・生活支援センターのいける（吉田・西川）  
 応援センター：あいらいさ障害者就業・生活支援センター（永山・東）  
 全国就業支援ネットワーク：担当役員（鈴木） 事務局（小澤・飴野）
- 【内容】
- ・ 応援センター訪問の振り返り（参考になった点）  
 参加者の活発な意見交換、個別に事業所訪問しニーズを丁寧に傾聴して地域の声を拾うVer.0の取組。
- ・ 今後のモデル的取組（地域の就労機関等との連携）のポイント  
 各事業所の困りごと等の意見を吸い上げる機会をどのように作るか具体的方法を検討していく。  
 自分たちのセンターができる強み、何から取り組めそうかを検討するところからスタートする。  
 就労支援機関に対するアンケートを年1回継続実施し、ニーズや課題をキャッチしていく。  
 人員体制が潤沢でない場合の地域づくりとして、協力してもらえる事業所を巻き込んでいく。
- ・ 意識調査結果速報の共有
- ・ 確認事項  
 実施センター訪問について 日程：11/20（月）～11/21（火）  
 市委託のセンター等が参加する連絡会議（10名程度の規模）にて、鹿児島の実践の紹介や開設に至る経過等の共有を予定している。  
 2月開催事業報告セミナーについて

## 【水戸地区 / 香取就業】 第二回オンラインミーティングメモ

- ・日時 2023年10月25日（水）10：00～11：00
- ・参加者 実施センター：水戸地区障害者就業・生活支援センター（鈴木・塩畑・宮田）  
 応援センター：障害者就業・生活支援センター香取就業センター（岡澤）  
 全国就業支援ネットワーク：担当役員（藤尾） 事務局（小澤・飴野）
- 【内容】
- ・ 応援センター訪問の振り返り（参考になった点）  
 ナカポツとしての成熟度の違い。丁寧な対応、顔が見える関係性の土壌があった。  
 行政・福祉等、関わる地域の機関の間で約束事のようなものができあがっていた。  
 水戸地区の圏域内で誰がどのように中核としてやっていくのか、課題を再認識できた。
- ・ 今後のモデル的取組（地域連携）のポイント  
 ナカポツに対して何が求められ、何から行なったらいいのかを整理するための意見収集の場づくり（Ver.0の開催から始める）。  
 まずは、ナカポツが何をしているのかを周知をする事からスタート。  
 動き出しながら、圏域でどのような協力体制を構築したいのか検討していく。  
 保守的な県民性だからこそ、顔を見て話す機会を提供する。
- ・ 意識調査結果速報の共有
- ・ 確認事項  
 実施センター訪問について 日程：12/14（木）～15（金） 意見交換会（Ver.0）の実施  
 2月開催事業報告セミナーについて

## 【のいける / あいらいさ】 第三回オンラインミーティングメモ

- ・日時 2024年1月10日（水）13：30～15：00
- ・参加者 実施センター：石狩障がい者就業・生活支援センターのいける（吉田・西川）  
応援センター：あいらいさ障害者就業・生活支援センター（永山・東）  
全国就業支援ネットワーク：事務局（小澤・飴野）

### 【内容】

- ・実施センター訪問振り返り  
「第3回就労支援連携会議」と情報交換会を通じて、参加者の声を直に聞くことができた。  
元々企画はあったものの「やっているつもり」で終わっており、来年に活かす気づきを得られた。  
ナカポツ知っていただく以上に、自分たちが地域の資源・支援機関のことを知らなければならない  
ということに改めて感じた。
- ・意識調査分析シートの共有  
のいけるの機能が伝わっていなかったのかもしれないという気づきや、事業所の困り感との  
マッチングがされていないのかもしれないなどの予測ができ、今後に活用したい。
- ・事業報告セミナーに向けての打ち合わせ（報告資料シラバスの確認）  
当初の課題意識の部分からの変化点を視覚化する。  
のいけるの強みやこれから意識的に取り組みたい点を踏まえて指針を検討する。
- ・確認事項  
事業報告セミナー資料提出：2月5日  
セミナー当日、のいける・西川氏はオンライン参加。

## 【ブリッジ / CSA】 第三回オンラインミーティングメモ

- ・日時 2024年1月11日（木）10：00～11：15
- ・参加者 実施センター：障害者就業・生活支援センターブリッジ（國吉）  
応援センター：障害者就業・生活支援センターCSA（木全）  
全国就業支援ネットワーク：担当役員（野口） 事務局（小澤・飴野）

### 【内容】

- ・実施センター訪問振り返り  
「第0回就労移行等情報交換会」の意義や参加者のニーズを改めて確認できた。  
事前にほぼすべての移行支援事業所に足を運んでニーズ把握に努めたことが成功の要因。  
若年者や生活困窮者など、沖縄圏域の生活支援の実情（世帯支援が必要）を確認できた。  
継続可能な地域連携のあり方を考えるきっかけとなった。
- ・意識調査分析シートの共有
- ・事業報告セミナーに向けての打ち合わせ（報告資料シラバスの確認）  
スーパーバイズに関して「スーパーバイズをするためのネットワークの構築」事例を紹介  
するものの、あくまでも主題はスーパーバイズ・個別対応として伝える。
- ・確認事項  
事業報告セミナー資料提出：2月5日  
沖縄大学・島村先生の動画事前収録は國吉さんをお願いする。

## 【ふらっと / ぼらんち】 第三回オンラインミーティングメモ

- ・日時 2024年1月16日（火）10：00～11：15
- ・参加者 実施センター：津地域障がい者就業・生活支援センターふらっと（後藤）  
応援センター：障害者就業・生活支援センターぼらんち（夏目）  
全国就業支援ネットワーク：担当役員（藤尾） 事務局（小澤・飴野）

### 【内容】

- ・実施センター訪問の振り返り  
「津市を障害者雇用で輝かせる会議」開催のアンケートや声から「こんな場、求められていない？」と不安もあったが、非常に活発な意見交換ができ感動した。後日お礼連絡もあり、実施してよかった。初々しい会議、適度な緊張感があり、これまでの関係機関との地道な連携の成果が出たのではないかと。テーマを絞りすぎずに、ねらいに寄りすぎずに実施したこともよかった。継続が課題。リスク回避を考えすぎているが、まずはやってみることが大事と感じた。
- ・意識調査分析シートの共有  
想定より回答が多かった。モデル取組有用度は予想以上に期待感が高く、聞いてみないとわからないと感じた。
- ・事業報告セミナーに向けての打ち合わせ（報告資料シラバスの確認）  
シンポジウム形式のため、2センターの自己紹介後は、後藤さんの発表を中心に、適宜、夏目さんにコメントをもらいながら進行する。資料はシラバスに沿って作成するが、発表では全てのスライドの説明をするのではなく、メリハリをつけてポイントを中心に伝える。発表の内容にあわせて進行側でスライド表示を切り替える。
- ・確認事項  
事業報告セミナー資料提出：2月5日

## 【トータス / みなと】 第三回オンラインミーティングメモ

- ・日時 2024年1月16日（火）14：30～15：30
- ・参加者 実施センター：障害者就業・生活支援センタートータス（佐藤）  
応援センター：障害者就業・生活支援センターみなと（工藤）  
全国就業支援ネットワーク：担当役員（野路） 事務局（小澤・飴野）

### 【内容】

- ・実施センター訪問の振り返り  
藤岡市就労支援部会＝地域の横の連携がすでにできていることを確認できる機会であった。「ステップアップ講座（トータス版）」に向けて、実施前にアンケートではなく、ヒヤリングとすることで本音での意見を収集。就職者が出ていないB型事業所の機運をどう作るかがポイント。群馬県内の実習奨励金制度としての活用ができないか検討している。トータスが取り組んでいる地域を巻き込んで運用するスタイルを、みなとにも逆輸入できないかという視点で、お互いに学び合う機会となった。
- ・意識調査分析シートの共有
- ・事業報告セミナーに向けての打ち合わせ（報告資料シラバスの確認）  
佐藤さんがスーパーバイズするにあたって大事にしている項目を中心に伝える。スーパーバイズという言葉が一人歩きしないような資料を検討。
- ・確認事項  
事業報告セミナー資料提出：2月5日  
セミナー当日、みなと・力石氏はオンライン参加。

## 【なら中和ブリッジ / わーくわく】 第三回オンラインミーティングメモ

- ・日時 2024年1月17日（水）13：00～14：00
- ・参加者 実施センター：なら中和障害者就業・生活支援センターブリッジ（青木）  
 応援センター：障害者就業・生活支援センターわーくわく（佐野）  
 全国就業支援ネットワーク：担当役員（酒井） 事務局（小澤・飴野）

### 【内容】

- ・実施センター訪問の振り返り  
 「当事者メッセージ会（語り部）」は支援者にはできないメッセージ性があり、当事者の自分らしさを発信できた。全体的にとっても良い雰囲気、徳島とのリモートコラボも共鳴・シンクロしていることも多かった。  
 「障害者雇用企業交流会」と懇親会では、黒子に徹する「わーくわく支援」の疑似体験ができ、事前の準備や調整の重要性を再確認できた。  
 継続展開として、2月17日に徳島にて、働こう会のコラボ企画を検討中。
- ・意識調査分析シートの共有  
 回答率の低さは、アンケートの意図が十分に伝わっていなかった可能性も考えられる。
- ・事業報告セミナーに向けての打ち合わせ（報告資料シラバスの確認）  
 困難事例個別支援についてのスライドを、それぞれ1枚程度作成する。当日の発表は割愛するが、資料として配布する。2月17日のコラボ企画も当日発表に口頭で盛り込む。
- ・確認事項  
 事業報告セミナー資料提出：2月5日

## 【水戸地区 / 香取就業】 第三回オンラインミーティングメモ

- ・日時 2024年1月22日（月）15：00～16：00
- ・参加者 実施センター：水戸地区障害者就業・生活支援センター（塩畑・池田）  
 応援センター：障害者就業・生活支援センター香取就業センター（岡澤）  
 全国就業支援ネットワーク：担当役員（藤尾） 事務局（小澤・飴野）

### 【内容】

- ・実施センター訪問の振り返り  
 「就労連携ネットワーク構築に向けたセミナー」は雰囲気がとても良く、意見交換も想定より活発だった。これまで関わりが薄かった事業所の参加率が高く、期待以上であった。  
 それぞれの就労支援機関の役割を把握できていない事業所も多いことを踏まえ、「ナカポツの役割」という基本を入口にすることを再確認できた。
- ・意識調査分析シートの共有  
 結果については実態を表していると感じた。圏域の人口規模に対して移行支援事業所数が多いのは、B型の定員（総量）規制のようなものが影響していることが考えられる。
- ・事業報告セミナーに向けての打ち合わせ（報告資料シラバスの確認）  
 シンポジウム形式のため、2センターの自己紹介後は藤尾氏中心に会話形式でやりとりしていく。  
 シラバスに沿って資料作成するが、発表ではポイントを絞りながら伝えていく。  
 ※ モデル調査事業をきっかけに茨城県の連絡協議会設立を検討中。
- ・確認事項  
 事業報告セミナー資料提出：2月5日

令和5年9月吉日

〇〇圏域内 就労支援事業所 各位

特定非営利活動法人  
全国就業支援ネットワーク  
代表理事 藤尾 健二

## 『障害者の就業に伴う生活面の支援に関する意識調査』ご協力をお願い

日頃は当ネットワークの活動に格別のご理解、ご協力を賜り、厚くお礼申し上げます。

さて、当ネットワークは、今年度、厚生労働省社会・援護局障害保健福祉部障害福祉課より『定着支援地域連携モデルに係る調査事業』を受託いたしました。

この調査事業は、今後、障害者就業・生活支援センターが、地域の就労支援ネットワークの中で『基幹型』の機能を担っていくにあたり、現状の課題や取組状況を調査、整理して、定着支援に携わる関係者と共有するために実施するものです。

この度、今年度事業のモデル的取組にご協力いただく全国6箇所の障害者就業・生活支援センターとして、貴事業所の圏域を担当されている障害者就業・生活支援センター〇〇〇様が、全国337センターの中から選出されました。

つきましては、〇〇圏域内のすべての就労支援事業所みなさまに、標記意識調査へのご協力をお願いいたたく存じます。下記回答サイトよりアクセスしていただき、9月29日までにご回答いただけますと幸いです。手書き・エクセル入力の場合は、添付の調査用紙を [ozawa@sien-nw.jp](mailto:ozawa@sien-nw.jp) 宛にメール、もしくは 06-6704-7274 へ FAX してください。

ご回答いただいた内容は、すべて統計的に処理を行うため、事業所名が開示されたり、情報が外部に漏洩するようなことはありません。また、当該障害者就業・生活支援センターに対して個別に回答内容を伝えることももちろんございませんので、ご忌憚のないご意見をお寄せいただければ幸いです。

ご多忙の折、お手数をおかけして誠に恐縮ではありますが、ご協力のほど、よろしくお願ひ申し上げます。

## 記

## 1. 意識調査アンケート回答サイト

URL <https://forms.gle/ZsU9nqSppBi9AYti7>

QR コードからもアクセスできます。 ⇒



## 2. 添付資料

- ・就労支援機関意識調査用紙
- ・『定着支援地域連携モデルに係る調査事業』事業概要

## 3. お問合せ先

特定非営利活動法人 全国就業支援ネットワーク 事務局（担当：小澤）

E-mail [ozawa@sien-nw.jp](mailto:ozawa@sien-nw.jp) TEL 06-4303-3111 FAX 06-6704-7274



②定着に関わる支援をする際に連携している機関について（複数回答可）

- 地域障害者職業センター
- 障害者就業・生活支援センター（ナカポツセンター）
- 自治体設置の障害者就労支援センター
- 相談支援事業所等の障害福祉サービス事業所
- 医療機関
- 特別支援学校
- その他（）

自由記載


4. 一般就労に移行した障害者の定着に関わる支援をする際に、課題を感じる状況や、あまりうまくいっていないと感じる場面があれば教えてください。


5. 圏域内の障害者就業・生活支援センター（ナカポツセンター）についてお尋ねします。

**ナカポツセンターが行なっている取組について感じていることを教えてください。**

①個別の支援に対する専門的な助言や、それに伴う支援の質の向上にかかる援助（スーパーバイズの提供、支援力向上のための勉強会開催、面談の同席、企業への同行等）を、

- 受けたことがあり、役に立っている
  - 受けたことはあるが、役に立っていない
  - 受けたことはないが、今後は受けてみたい
  - 受けたことはないし、今後も必要ない
- 役に立った具体事例、もしくは今後受けてみたいサポート等


②困難事例に対する個別支援（支援対象者本人、家族、企業への対応に苦慮していた個別ケースと一緒に協働して支援した等）を、

- 受けたことがあり、役に立っている
- 受けたことはあるが、役に立っていない
- 受けたことはないが、今後は受けてみたい
- 受けたことはないし、今後も必要ない

役に立った具体事例、もしくは今後受けてみたいサポート等


③地域の就労支援機関との連携（定期的なネットワーク会議の開催、障害以外の他の就労機関が開催する催しへの参加等）に、

- 取り組んでいて、役に立っている
- 取り組んでいるようだが、役に立っていない
- 取り組んでいないようだが、今後は期待している
- 取り組んでいないようだし、今後も期待しない

役に立った具体事例、もしくは今後受けてみたいサポート等


上記①～③以外で、障害者の就業に伴う生活面の支援力を向上させるために、ナカポツセンターが行なっている取組、今後期待する取組があれば教えてください。

役に立った具体事例、もしくは今後受けてみたいサポート等


6. 一般就労に移行した障害者の定着に関わる支援全般について、ご意見やご質問があれば自由に記載してください。


ご協力ありがとうございました。



# 令和5年度 定着支援地域連携モデルに係る調査事業 事業報告セミナー

特定非営利活動法人全国就業支援ネットワークは、令和5年度も前年度に引き続いて、厚生労働省社会・援護局障害保健福祉部障害福祉課より『定着支援地域連携モデルに係る調査事業』を受託いたしました。

この調査事業は、障害者就業・生活支援センター（ナカポツセンター）が、今後、地域の就労支援ネットワークの中で『基幹型』としての機能を担っていくにあたり、現状の課題や取組状況の実情を調査、整理して、定着支援に携わる様々な関係者と共有するために実施したものです。

今回、今年度事業のモデル的取組にご協力いただいた、全国6箇所のナカポツセンターの新たなチャレンジ事例を広く共有するために、本事業の事業報告セミナーを、オンライン配信という形で開催することになりました。

この機会に、地域の多様性に応じた、ナカポツセンターの『基幹型』の役割について、そして、わたしたちひとりひとりが、それぞれの立場でできることについて、一緒に考えてみることにいたしましょう。みなさまのご参加を心よりお待ちしております。

**日時** 2024年2月28日（水）13:00～17:00（オンライン配信）

**参加費** 無料（定員500名）

**参加対象者** 障害者就業・生活支援センターの職員  
就労系障害福祉サービス事業所の職員  
その他就労支援機関の職員、行政・教育機関の職員

**お申込み** 全国就業支援ネットワークのホームページよりお申込みください。

<https://sien-nw.jp/>

全国就業支援ネットワーク



受付期間：2024年1月9日～2月23日

## 当日のプログラム（予定）

- 「定着支援地域連携モデルに係る調査事業」概要説明

- 事例報告Ⅰ「就労定着支援事業所等に対するスーパーバイズについて」

障害者就業・生活支援センタートータス（群馬）＊（青森）障害者就業・生活支援センターみなと

障害者就業・生活支援センターブリッジ（沖縄）＊（埼玉）障害者就業・生活支援センターCSA

- シンポジウム「地域のネットワークの連携を就労支援の体制にまで深めていくために」

津地域障がい者就業・生活支援センターふらっと（三重）＊（静岡）障害者就業・生活支援センターぼらんち

水戸地区障害者就業・生活支援センター（茨城）＊（千葉）障害者就業・生活支援センター香取就業センター

- 事例報告Ⅱ「地域の就労支援機関等との連携、個別の支援の関わり方について」

石狩障がい者就業・生活支援センターのいける（北海道）＊（鹿児島）あいらいさ障害者就業・生活支援センター

なら中和障害者就業・生活支援センターブリッジ（奈良）＊（徳島）障害者就業・生活支援センターわーくわく

- 助言・提言（本調査事業 検討会委員）

埼玉県立大学 保健医療福祉学部社会福祉子ども学科 名誉教授 朝日 雅也氏沖

縄大学 人文学部福祉文化学科 教授 島村 聡氏

### お問合せ

特定非営利活動法人 全国就業支援ネットワーク 事務局

TEL : 0 6 - 4 3 0 3 - 3 1 1 1 E-mail : ozawa@sien-nw.jp

# 令和5年度 定着支援地域連携モデルに 係る調査事業

## 事業報告セミナー

特定非営利活動法人 全国就業支援ネットワーク

令和5年度  
定着支援地域連携モデルに係る調査事業

## 事業概要説明

特定非営利活動法人 全国就業支援ネットワーク

## 事業の目的

地域における障害者の就業に伴う生活面の支援ニーズへの対応力を向上させるため、障害者就業・生活支援センターについて、基幹型の機能も担う地域の拠点としての体制を整備し、地域の就労支援ネットワークの強化、充実を図る。

特定非営利活動法人 全国就業支援ネットワーク

2

## 事業の内容

障害者就業・生活支援センターにおける以下の取組について、新たなモデル的取組実施と圏域内意識調査の結果を踏まえて、基幹型としての機能・役割を再整理して調査報告する。

- 就労定着支援事業所等に対する**スーパーバイズ**に係る取組
- 困難事例に対する**個別支援**の取組
- **地域の**就労支援機関との**連携**に係る取組

特定非営利活動法人 全国就業支援ネットワーク

3

## 今年度事業の特色

- ① 前年度実施10センターのモデル的取組内容を**再精査**
  - ・ 10センターの取組の特徴、取組実施に至った経緯や背景要因を分類・整理
  - ・ 10センターの圏域内意識調査の個別記述から、地域の就労支援機関がナカポツセンターに期待する支援ニーズをより具体的に把握
- ② モデル的取組をこれから実施していこうと考えているセンターを**全国公募**
- ③ 地域性および取組実施を応援していただくセンター（前年度実施10センター）との組合せを勘案して、今年度実施6センター（+応援6センター）を**選出**
- ④ 新たに6センターが応援センターとペアを組んでモデル的取組を実際に**実施**、その取組過程における課題や地域特有の実情について**調査とりまとめ**

『ナカポツのことはナカポツ同士のピアサポートで！』

特定非営利活動法人 全国就業支援ネットワーク

4

## 事業実施の流れ

- ・ モデル的取組実施センター公募  
令和5年 6月27日～7月20日
- ・ 実施・応援センター選出  
8月3日
- ・ モデル的取組実施  
8月7日～12月26日
- ・ 圏域内意識調査  
9月4日～10月31日
- ・ **事業報告セミナー**  
**令和6年2月28日**
- ・ 調査報告書提出  
3月29日予定

特定非営利活動法人 全国就業支援ネットワーク

5

## ■ 本日の事業報告

○ 報告Ⅰ

「就労定着支援事業所等に対する**スーパーバイズ**の在り方について」

○ シンポジウム

「**地域の**ネットワークの**連携**を就労支援の体制にまで深めていくために」

○ 報告Ⅱ

「**地域の**就労支援機関等との**連携**の在り方、**個別の支援**の関わり方について」

わたしたちのセンターは  
共に考え・共に実現を  
大切にするセンターです

社会福祉法人かな会

障害者就業・生活支援センタートータス

## 事業所概要

所在地	群馬県藤岡市
担当圏域	藤岡市・神流町・上野村 富岡市・甘楽町・下仁田町・南牧村
受託法人	社会福祉法人かな会 平成10年5月 法人設立
実施事業	知的障害者入所施設・生活介護（3事業所） 就労継続支援B型・グループホーム 基幹相談支援センター・障害者就業・生活支援センター センターは平成22年4月開所
職員体制	センター長 兼 主任就業支援ワーカー 1名 就業支援ワーカー 2名 生活支援ワーカー 1名 生活支援センター 兼 週末活動支援員 1名

### 圏域の状況

圏域全体の人口規模	131,533
就労移行支援事業所	2
就労定着支援事業所	1
就労継続支援A型事業所	3
就労継続支援B型事業所	16
特別支援学校	2
地域活動支援センター	6
精神科デイケア	2



人口も社会資源も少ないからこそ  
できることもたくさんあります

---

- ◇関係機関とは顔の見える関係が築けている
- ◇市町村へ実習奨励金制度の提案
- ◇就労支援部会の機能強化

## モデル調査事業へエントリーした理由

---

関係機関との連携は取れているが、その一歩先を考  
えて、共に考え共に実現できることは何か。

『できたらいいな』を形にするためには、今なにを  
取り組んだらよいか。

昨年のセミナーで障害者就業・生活支援センターみなとさんとの出会いがきっかけに



## みなとさんの『ステップアップ講座』の 取り組み

---

- ・ 本人も支援者も適性を知ることができる
- ・ 座学と実習の組合せで実施
- ・ 就職に向けて企業側からの評価を知ることができる
- ・ 支援機関と同じ視点を持つことができる
- ・ 就職に向けた具体的なイメージ

## 『トータス版 ステップアップ講座』の 実現に向けて

---

青森県八戸市を訪問

ステップアップ講座のノウハウを教えていただき  
パッケージ化されている講座を『トータス版』と  
して実施して行けるよう準備を進めていく。

人口や社会資源の数に違いがあっても、取組めることはたくさんある！！

## ステップアップ講座のねらい ①本人

適性の合う仕事は

必要な準備は

生活リズムの確認

就労意欲



本人の働きたい気持ちは大切にしつつ

他者からの評価を知る

## ステップアップ講座のねらい ②支援機関

普段の様子では  
わからない点を  
講座を通して知る

講座でわかった強みと  
支援が必要な点を  
その後の支援に活かす

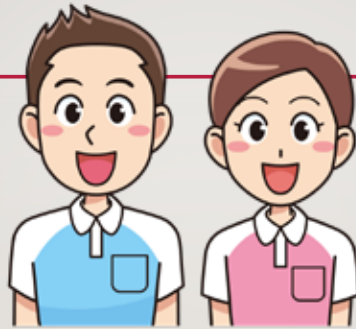


本人を応援したい気持ちは大切にしつつ

就職に向けた支援について  
トータスと一緒に考えていく

## ステップアップ講座のねらい ③企業

雇用経験の豊富な  
企業へ依頼



雇用経験のない  
企業へもアプローチ

障害者雇用の理解促進へ

実習を通して働ける様子を見てもらい  
雇用促進に向けて一緒に考えていく

## ステップアップ講座の 実施スケジュール

- ①圏域内の就労系事業所・医療機関等を訪問（令和6年2月以降）  
必ず対面でヒアリングを行う
- ②ヒアリングをもとに実習先企業へ依頼と座学の準備と会場検討
- ③開催通知を送付（開催2ヶ月前）
- ④ステップアップ講座の実施（令和6年度中に開催）

# 現在の進捗状況

◇福祉サービス4ヶ所へヒアリング実施済  
今後も順次訪問を行う

◇雇用率未達成企業を訪問し、実習の提案とステップアップ  
講座の説明を行っている

## エントリー前後の自己評価

ビフォーアフター自己評価  
(スーパーバイズの取組)



・普段から関係機関との関係性は築けていると思われるが、ステップアップ講座の実施に向けて、ニーズの把握や目的の明確化がより評価できるようになった。

・企業との協働については、ステップアップ講座を通して理解促進や雇用へのきっかけとなるよう働きかけを行っていききたい。

・ステップアップ講座はセンターと福祉サービス等の事業所だけで行っていくのではなく、行政機関も巻き込みながら、地域のステップアップ講座として取組んでいけるよう働きかけた。

## スーパーバイズとは

---

上下関係のもとに形成させるというのではなく

『ともに助け合い』

『ともに補い』

『ともに力を出し合い』

こんな風に思っています

## 日々の支援の中で

---

こんなことを取組みたい、でも時間がない、何から手をつけたらよいか  
わからないなどなど・・・

圏域に足りないもの、必要なものが何となくイメージできていたら

1から作るのではなく、すでに取り組んでいるセンターからノウハウを  
教えてもらったら一歩前進し、実現の近道になります☆彡

# 基幹型として

## 『基となる幹』

幹を太くし (ニーズの把握、目的の明確化など)  
丈夫な枝を増やし (役割分担、日頃の関係性)  
たくさんの葉を広げて (協働の実現)



丈夫で頑丈な幹になれるよう、これからも色々なことを吸収して前進して  
行きたいと思っています。

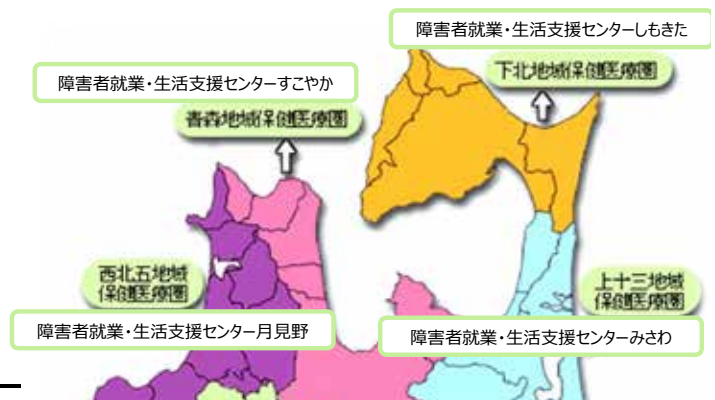
## 令和5年度 定着支援地域連携モデルに係る調査事業



わたしたちのセンターは地域のどなたに対しても  
支援を継続する伴走型センターです

青森県  
八戸圏域

障害者就業・生活支援センター



# 青森県八戸圏域と当センターの概要



基礎情報	市町村	1市6町1村
	人口	311,858人
	手帳所持者	身体 12,866人 知的 3,556人 精神 3,021人
	主な産業	水産業、製造業
関係機関	ハローワーク	2カ所
	就労移行支援	5カ所
	就労継続A型	23カ所
	就労継続B型	62カ所
	就労定着支援	2カ所

## 令和4年度実績

<支援対象者数>

541名

<相談支援件数>

6,521件

主任就業支援担当者 1名 就業支援担当者 3名  
主任職場定着支援担当者 1名 生活支援担当者 1名  
訪問型ジョブコーチ 2名

併設：就労移行支援事業所・相談支援事業所  
地域活動支援センター I 型・市委託相談支援事業所

<就職件数>

32件

<実習件数>

44件

# 昨年のモデル事業の主な取り組み



## ○『障害者ステップアップ講座』の開催

「地域で暮らす障害をお持ちの方の「働きたい」という声を拾いたい・応えたい」

「地域で就労支援に携わる支援者と共通言語を持ち、繋がりたい」

この2つを実現するための方法として講座を始めた（平成22年度～14年間開催）

【日時】 年2回開催 9:30～15:30 8月・1月の“金・土・月・火・水”の計5日間

※コロナ禍では、講義1日、実習3日 計4日で開催

【参集範囲】 圏域内の就労移行、就労継続A・B型の利用者、特別支援学校3年生

【場所】 総合福祉会館（講義）八戸市内の協力企業4社（実習）

【定員】 10名（先着順）

上講座を開催する前には、各機関の連携が不可欠であり、職員が各講義の事業所を訪問し、各講義生

## トータスさんに参考にしてもらえたポイント



「障害者ステップアップ講座 トータスVer.」の実施にむけて

○藤岡市就労支援部会で当センターより「ステップアップ講座」の取り組みや効果について説明

(みなと工藤・カ石が藤岡市就労支援部会に参加させていただき、説明)

→ 藤岡市内のB型事業所の支援者の方々へ、トータスver.の来年度の実施に向けた計画の後押し

○「ステップアップ講座」の全体パッケージ・基本的な枠組み

→ 当センターで使われているステップアップ講座の資料や枠組みを全て提供すべくにより

## トータスさんの取り組みで参考になったこと

○地域の就労支援機関との良い関係性の構築

こんなことに刺激を受けました！

就労支援部会での就労に関する情報共有、先進地視察等を行っており就労支援機関が一般就労へのイメージや支援ノウハウを身につける契機になると感じた。

定期的な集合会議の有効性を感じた。



みなと  
カ石さんの声

○地域の意見を聞き取る、吸い上げる取り組みの重要性

トータスVer.の準備にあたり地域の就労支援機関に対するヒアリングと、その結果に基づいて実習先や講義内容を検討するという計画を伺い、とても刺激を受けた。地域の意見を吸い上げることの重要性を実感した。

→ 当センターでも、今年度2回目のステップアップ講座開催前に、講座運営にあた



## なかぽつの基幹型の役割について



### ○就労支援におけるスーパーバイザーとは…

- ・私達が考えるスーパーバイザーとスーパーバイジーの関係性は「横並び」
  - ・私達が提供できることは、惜しみなく提供する
  - ・私達も教えてもらう、耳を傾ける
  - ・一緒に良くなる方向を目指す関係
- そのために、私たちは「足を運んで」「顔を合わせて」支援をしたい
- しかし、障害福祉サービス事業所数が過飽和している地域となり、開設当初と同じ支援スタイルの継続も難しい状況になってきている
- 「私たちの支援スタイル」に拘り続けることなく、地域の声に合わせて柔軟に変化していくことが必要と感じた

### ○基幹型の役割を果たすために…

沖縄県南部地区  
障害者就業・生活支援センター



「わたしたちは一緒に働き、一緒に考える伴走型センター」  
を目指しています。

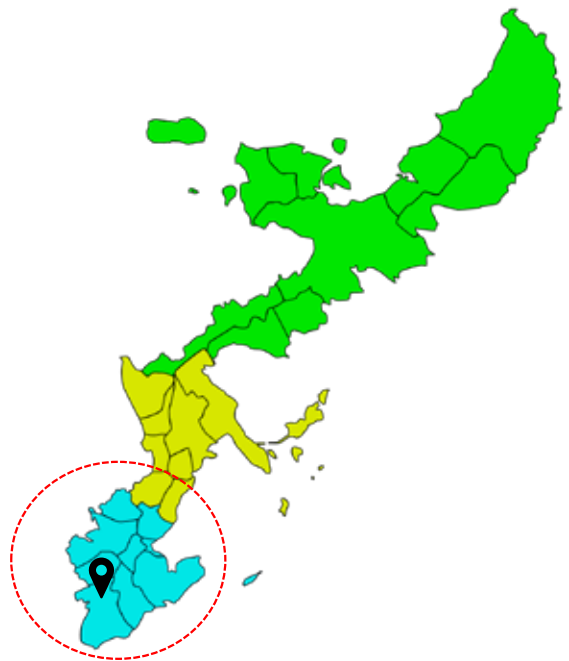


## 沖縄県南部圏域について

ブリッジ：2020年～設置  
母体：医療法人（精神科病院）  
圏域内複数設置（全国4カ所目）  
人口：28万人

特別支援学校卒業生：約20人/年間  
就労移行：16カ所  
就労定着：3カ所  
就労B型：72カ所  
就労A型：19カ所

- 比較的障害福祉サービスが多い圏域
- 圏域内でも社会資源の量と質は地域差が大きい



## 定着支援に対する基本的な考え

【自立支援協議会】

- 利用者確保の話題
- 工賃の向上（販路拡大・福祉祭り等）の話題
  - ➡ 『就職』というキーワードが聞こえてこない
- ナカポツは一人一人に対して丁寧に関わるためのマンパワーが不十分
  - ➡ 橋渡しを依頼したい就労系福祉サービスが少ない

取り残すことがないように『初回相談の介入は可能な限り早期に！』を意識している

課題：ナカポツの“抱え込み”が地域にとって、当事者にとっていいのだろうか

ナカポツの対象範囲が広大だが、マンパワーが限られた中でどうあるべきか模索していた



## 「モデル調査事業」エントリーの動機

- ケースロードが増えることに関われる頻度や質が低下していく
- 就職に向けた支援が地域の機関でも増えることで過度な負担の軽減が図れれば  
➔ 抱え込みにならないように地域を巻き込みながら運営できるようになりたい

### 地域の支援機関の底上げについて

- 各支援機関と共にスキルアップをめざせる雰囲気をつくりたい
- セミナー（イベント事）は届けたいところまでには“届かない”と実感している

### 基幹型として求められることについて

- スーパーバイズの相談があれば対応するようにしているが相談が少ない
- スーパーバイズとして求められるきっかけがあまりない

### 一方で

- スーパーバイズについて、どのように進めたらいいのかわからない
- やりたいことはたくさんあるが、できることが限られている
- 優先順位を気を付けないと余計に苦勞するかもしれない



## 応援センターの取り組みで参考になったこと

### 埼玉県 障害者就業・生活支援センター C S A

- 市長表彰制度を活用した「雇用を前提としない職場体験実習」
- 就労移行支援事業所等情報交換会
- 福祉事業所交流会
- 働く障害者の体験発表会

### 「就労支援機関の連携について考えてみる会～ブリッジさんを囲んで」

#### 【埼玉県央オールスターズ】

- 就労移行支援機関が熱意にあふれていた
- 一緒に取り組める“仲間”を見つけること
- 地域のニーズに寄り添いながら、うまく巻き込むこと
- はじめから完成形を目指さないで、ともに成長しながら変化させていくこと
- 情報交換会の中では企業やハローワーク、職業センターなど他機関にも加わっていただくこと
- 地域のネガティブな面だけではなく、地域のストレングスにも注意を向けること



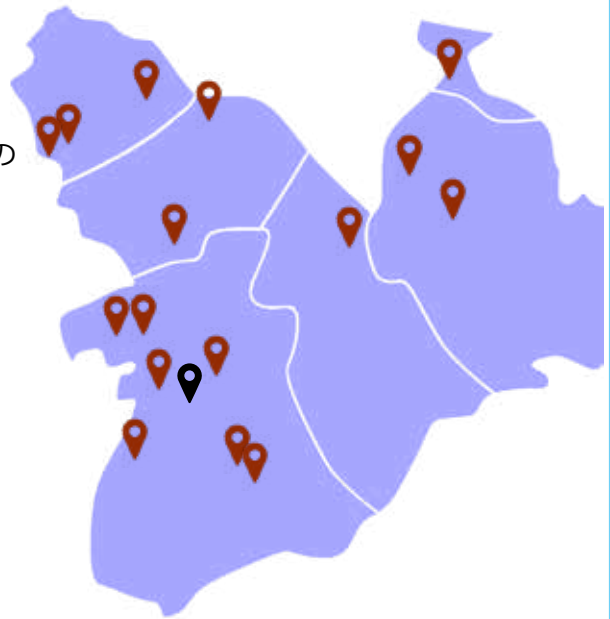
## 埼玉県CSA訪問後の取り組み

### 【就労移行支援事業所へのヒアリング調査】

就Bアセスメントのため（B型の利用を促すため）の  
就労移行があり就職支援として機能していない

就労移行支援事業所 利用者0人の事業所もある

➡ 地域資源啓発の優先度が高い



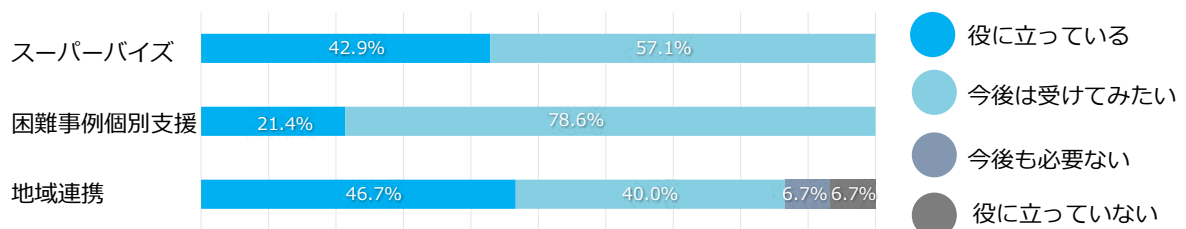
## 埼玉県CSA訪問後の取り組み

### 【各就労支援機関への意識調査】

回答状況 76事業所への配布 回答：16件（21%）

➡ 就職支援・ナカポツとの連携への関心度

スーパーバイズ・困難事例個別支援・地域連携に関する取組みの有用度について



地域全体の関心度が高いわけではないが  
関わりのある就労支援機関からは多くの“期待”が寄せられている

## 埼玉県CSA訪問後の取り組み



ハローワーク  
沖縄障害者職業センター  
就労移行支援事業所 6 事業所

『第0回』は、ナカポツが主体となっているため、『第0回』とした『第1回』以降の実施を皆で取り組んでいくのかを確認したかった

## 『第0回 就労移行等 情報交換会』

### 話題①

職場開拓の難しさ（過疎地における）

公共交通機関の課題（電車やバスがない）

住んでいる地域で希望する仕事が見つからない

『今回のようなネットワーク内で求人情報の共有ができるといい』

『ハローワークにおける未達成企業の指導で求人開拓がなされても、応募者が不在のため進まない案件がある。情報共有できると未達成企業への啓発も取り組みやすい』

『ナカポツ、ハローワーク、障害者職業センターの持っている情報を地域の支援機関と共有して、みんなで取り組むことを目指したい』



## 『第0回 就労移行等 情報交換会』

### 話題②

他機関との連携について

『何をどのように依頼して、一緒に取り組めばいいのかわからない』

『今回のようなネットワークを通じて顔の見える関係づくりが築けると、やりとりがしやすくなる』

### 話題③

支援を行う上での困難さについて

多機能型の苦労（B型運営に追われて個別支援に取り組めない）

就労意欲を育む難しさ（職場見学をするがチャレンジされない方）

就職支援の知識以外の教育、対事業所へのアプローチ、立ち回り方、OJT



## 『第0回 就労移行等 情報交換会』 実施後、アンケート

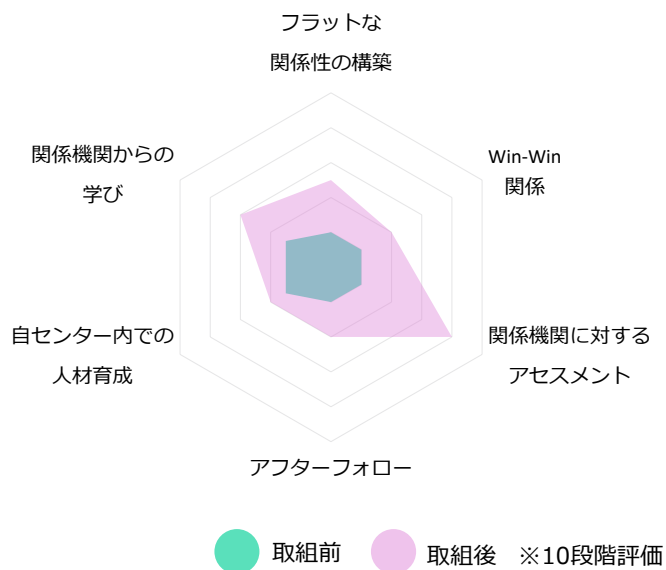
- 継続的な実施は全会一致
- 頻度：年に4回～6回（火曜日、15時～）
- 時間：90分程度
- 内容：求人情報の共有（グループメールの運用）、事例検討会など

『利用者の就職に向けての話は多くできたが、新規の利用者獲得についてあまりできなかつたり、事業所によって話し合いたいニーズが違うと感じた』

『職業センターやハローワークの方、他支援事業所の方と顔合わせする事で、連絡しやすくなり情報共有しやすくなった』



## ビフォーアフター自己評価（スーパーバイズの取り組み）

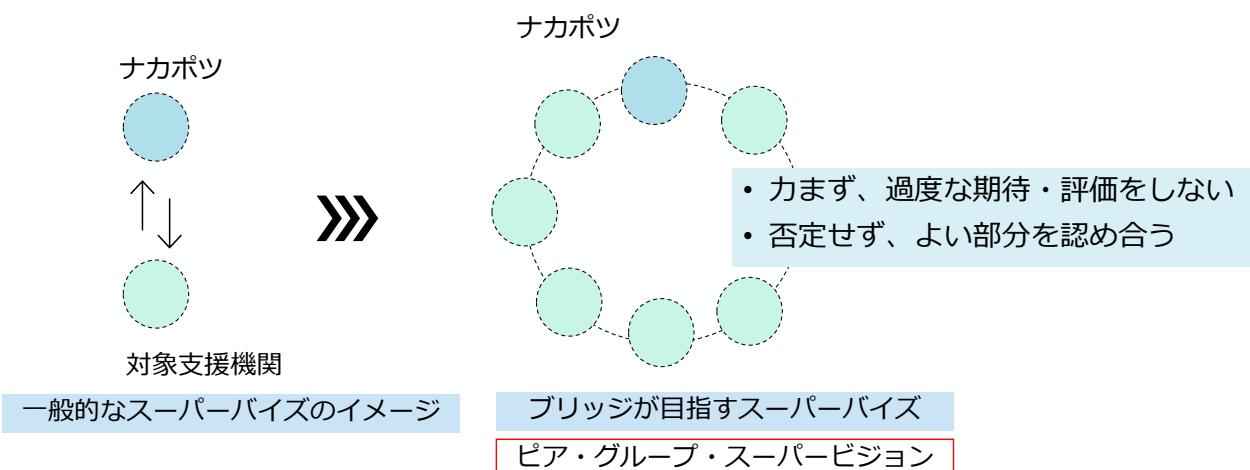


- 関係機関の抱えている課題や方針について理解を深めることができた
- 相談を頂きやすい関係づくり
- 他支援機関も含め相互に相談がしやすい体制づくり

- 目的が明確な情報共有の場
- 定例化 ➡ 関わりの頻度の増加
- 今後は企業の参画を頂きたい



## スーパーバイズとしての考え方



フラットな関係性の中で相互に助言をし合うこと  
 その中で、ファシリテーター的な役割を担いながらグループ全体の“気づき”を促す



## 今後に向けて（基幹型として思うこと）

ナカポツは地域によって役回りが大きく違う。

- 資源がない地域 ➡ 個別支援主体、資源を作る取り組み（自立支援協議会）
- 資源がある地域 ➡ ハブ機能が主体、セーフティーネットワーク（最後の砦）
- 資源があるが質が期待できない ➡ 地域の育成・伴走型支援が主体

一方で就労訓練を望まない方もたくさんいる。  
 素早くニーズをキャッチすること、適切なアセスメントをすることが望まれる。  
 地域資源の課題に取り組むことは、大きな時間と労力が必要かもしれない。  
 しかし、将来への投資であるため必要なこと。

「わたしたちは一緒に働き、一緒に考える伴走型センター」  
 をこれからも目指していきたいと思います。

わたしたちのセンターは、  
「つながろう・ひろげよう」を目指すセンターです。

埼玉 県央圏域

障害者就業・生活支援センター  
 CSA





# 埼玉 「県央圏域」について

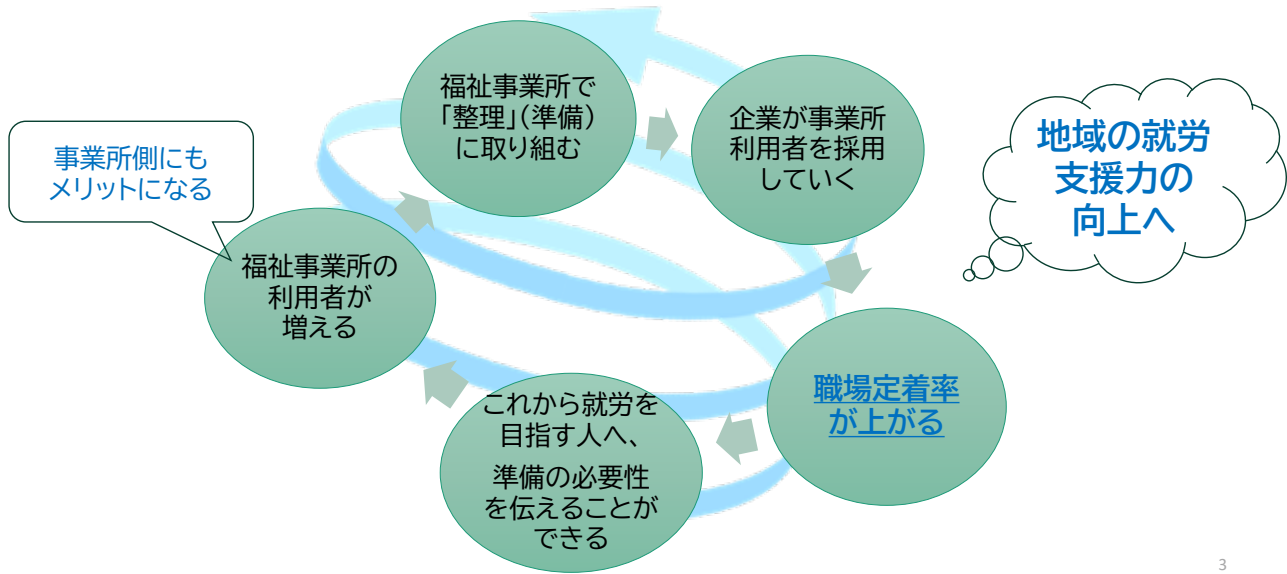
- 圏域の市町村: 上尾市・桶川市・北本市・鴻巣市・伊奈町  
(うち、伊奈町以外には市障害者就労支援センターが設置)
- 圏域の人口: 約53万3千人
- 圏域内: 就労移行支援 **17ヶ所**、就労定着支援 **9ヶ所**、  
就労継続支援B型 **36ヶ所**、就労継続支援A型 **4ヶ所**
- CSA: 平成20年～設置  
(その前年、市委託の上尾市障害者就労支援センター設置)
- 母体: 社会福祉法人あげお福祉会  
(主として精神障害者対象。生活支援センター・就労移行支援・  
就労継続支援B型・生活介護・グループホーム等を運営)

参考: 市町村障害者就労支援センター設置状況



## <以前のCSAの課題から> 福祉事業所を活用した就労サイクルを作れたら...

・就労が続かない  
・企業のニーズに答えられない



# 昨年のモデル事業での主な取組 (地域の就労支援力向上に向けて)

## ①就労移行支援事業所等情報交換会

- ・平成27年度から今年度まで、原則年2回、計16回開催。CSA、桶川市・北本市・鴻巣市障害者就労支援センターと共催。
- ・圏域内(+さいたま市の一部)の就労移行支援・就労継続支援B型をお招きし、[各センターが持つHWIに出ていない求人情報を提供](#)し、マッチングにつなげている。
- ・[「就労者の確保」、「B型等に通う就労可能な方の掘り起こし」、「福祉事業所との情報共有の場」](#)を目的とし、地域の支援力向上を目指している。

## ②市長表彰制度を活用した「雇用を前提としない職場体験実習」

- ・平成21年度に市が制度化した「上尾市障害者職場実習受入企業等表彰制度」を活用し、令和3年度以降、市内2ヶ所の企業で実施。
- ・福祉事業所から実習を希望する利用者を推薦していただき、実習に立ち会う[福祉事業所職員の支援スキル向上](#)も目的のひとつ。
- ・企業にとっては、これまで雇用したことのない障害種の受入を体験。
- ・自信を付けた利用者の就職にもつながった。

4

# 昨年のモデル事業での主な取組 (地域の就労支援力向上に向けて)

## ③福祉事業所交流会

- ・「基幹型としてのナカボツの役割」を探るため、令和4年度初めて企画。
- ・圏域内の福祉事業所(就労移行・A型・B型・就労定着)に声をかけ、[それぞれの事業所の取組や悩みなど何でも自由に話す機会](#)として、2回開催。

## ④<福祉事業所向け>働く障害者の体験発表会オンライン

- ・[ピアサポート活動の一環](#)として、令和4年度から企画。就労移行支援事業所等の利用者・職員が、障害者雇用で働く精神障害者の体験談を聞き、就労に向けた取組に生かしてもらおう企画とした。11事業所・136名の参加。

## ⑤普通学校との情報共有

- ・障害学生や障害が疑われる学生に対する支援や進路指導の状況について、普通科高校3校・大学1校にアンケート調査。
- ・うち「困っている。協力をお願いしたい」と回答された大学と情報交換。
- ・「障害学生は就労経験がなく、イメージが持ちづらい。学生本人が気づきを得て言語化する機会がほしいが、学内では難しい」

5

# 今年度ブリッジさんに参考にしてもらえたポイント

## 上尾合宿＜就労支援機関の連携について考えてみる会(ブリッジさんを囲む会)＞

- 令和5年9月13日、上尾にて開催。ブリッジ國吉さん・7事業所・CSAの計14名参加。
- 「それぞれの立場からナカボツに望むこと」、  
「就労支援機関とナカボツが連携していくには具体的にどうしたら良いか?」、  
「就労支援機関(特に就労系福祉事業所)が“就労支援”を進めていくために何が必要か?」  
…等の意見交換。



→「集合型だけでなく、個別訪問も良いのでは」

「『何に困っていますか?日々どんなことが大変ですか?(→何を求めているか?)』を聞きながら、一人でも二人でも仲間を作るところから…」

6

## ブリッジさんの取組で参考になったこと



### ＜今回のモデル調査事業の中で＞

- 圏域内ほぼすべての就労移行に足を運んでお話を聞き、関係性の構築に取り組まれたこと。  
「一緒にこの地域を良くしていきたい」という気持ち・熱意を伝えられた。
- 第0回情報交換会において、就労移行支援事業所等だけでなく、障害者職業センターやHWといった公的機関もお招きし、地域を共に作っていく仲間として、具体的に、主体的に取り組めることを引き出していたこと。  
就労移行支援事業所同士だけでなく、公的機関とのつなぎ(コーディネート)も行ったこと。

### ＜その他の取組の中で＞

- お話を聞いてみたい方を講師としてお招きし、たくさんのセミナーを開催していること。  
～職業準備性再考、野中式事例検討会、IPS(働くことリカバリー)、超短時間就労、クライシスプラン…
- 年4回ほど、大学の先生にスタッフのスーパーバイズをお願いしていること。
- 障害者職業総合センターの「就労支援のためのアセスメントツール」を活用されていること。

CSAでも  
取り入れられたら

7

# 定着支援地域連携に関する新たな取組

## <福祉事業所交流会…→事業所見学会>

- 福祉事業所交流会＝昨年度は事業所同士で悩みなど何でも自由に話し合う場  
→その中で、「ほかの事業所を見たことがない。見てみたい」との声があったため、今年度の第2回は「事業所見学会」を企画。  
3月に開催予定。見学先は、それぞれ特色の違う3事業所、3日程を設定。

交流だけでなく  
お互いの学びの場に…

## <働く障害者の体験発表会オンライン…→範囲を広げて>

- 昨年度の感想で「男性だけでなく女性の話も」「自分と同じ世代(30代)の話も」「様々な働き方のお話を聞いてみたい」  
→今年度は「障害者雇用で働いている方(男性)」・「一般枠で障害を開示して働いている方(女性)」の発表を企画。  
障害者雇用で働いている方の上司にも発表をお願いした。
- 福祉事業所の利用者・職員向けだが、関心のある企業の方や、大学の障害学生窓口にも案内。

様々な働き方を  
知ってもらおう

8

# ナカポツの基幹型の役割について ～地域のなかでのわたしたちの役割(CSA)

## <地域の就労支援力向上のために> (※福祉事業所等の社会資源がたくさんある地域の場合)

- 「就労定着支援」は何のため？  
→就労支援は豊かな生活の実現のための手段(朝日先生)／就労を通して、本人・地域環境・企業のパワーアップ(島村先生)
- それぞれの役割で共に地域づくり  
→CSAは、個別支援(方向性の整理・福祉事業所等つなぎ・就活支援・定着支援)と 地域に必要な取組。  
福祉事業所は、本人と一緒に整理(特性・補完方法・企業に求める配慮・マッチング)、生活リズム等の準備性、自信の取り戻し…

## 「スーパーバイズ」と考えると…

- バイザーとバイジーは対等。共同で取り組んでいく。
- バイザーの役割・姿勢：バイジーから情報収集・アセスメント、バイジーが自ら気づき解決できるように共に歩む。
- 情報交換会や事業所交流会等 = 「グループスーパービジョン」「ピアスーパービジョン」にもなり得る。

つながろう  
ひろげよう  
目指して

⇒バイジー(福祉事業所等)が自事業所の強み・課題・取り組み方に気づき、前向きに進んでいこうと思えるように、  
コーディネートすること。そしてバイザー(ナカポツ)も学ぶこと。 ⇒ それぞれの力を発揮し合う地域へ

9

# 定着支援地域連携モデルに係る調査事業



津地域障がい者就業・生活支援センター「ふらっと」  
所長 後藤 勇介



## 津地域障がい者・就業生活支援センター「ふらっと」 センター紹介

「わたしたちのセンターは  
「人」と「社会」を繋ぐ『架け橋』になりたいセンターです」

事業所概要		圏域の状況	
所在地	三重県津市大門7-15 津センターパレス3階	人口規模	271,747
担当者 連絡先	後藤 勇介 Tel : 059-229-1380 E-mail : flat1380@matthias.jp	就労移行支援事業所数	5
受託法人 実施事業	(社福) 聖マッセヤ会 児童養護施設、障害者支援施設、生活介護、指定特定相談、放課後等デイサービス、就労移行、自立訓練、共同生活援助、(市委託) 基幹相談支援センター、地域相談支援センター、(国・県委託) ナカボツ3センター	就労定着支援事業所数	4
職員体制	所長(主任就業支援担当兼務) 1名 就業支援担当 4名 生活支援担当 2名	就労継続支援A型事業所数	9
特徴	少し前までは就労移行支援を活用する流れがなかなかできなかった。また就労継続支援事業所の一般就労へ向けた支援の意識は低いように感じる	就労継続支援B型事業所数	52

## 定着支援に対するセンターの基本的な考え

『定着』に大事ななのは『働くための準備』がしっかりできていること

そのために… 『準備支援ができる地域づくり』が大事

これまでに取り組んできたこと

- 法人として就労移行支援事業所の立ち上げ
- ナカポツとして就労移行支援事業に期待することの共有
- 一緒に就労支援の在り方を学ぶ機会をつくる

## 事業にエントリーした理由



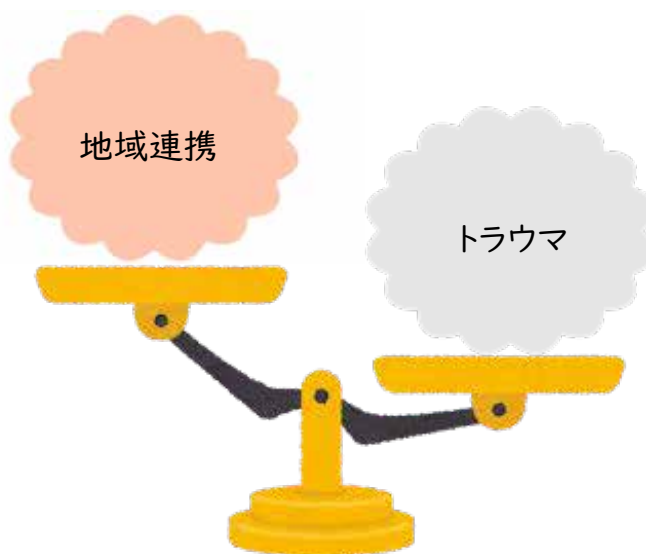
きっかけが必要だと思ったから



「ぼらんち」さんの取り組みに  
感銘を受けたから



就Aや就Bとの連携の必要性を  
強く感じるようになってきたから



## ふらっとが抱えるトラウマ

さかのぼること10年ほど前…  
就労継続支援B型に声をかけ  
「就労支援」に関して意見交換する場を設定



『就労』とっていない。『居場所』をつくっている



何も言えなかった  
対話できなかった…



## 『ぼらんち』さんの取り組みをみて…

「ふらっとがやりたいこと全部してるやん」



## いざ、エントリー!

- 就労定着支援事業所等に対するスーパーバイズの在り方
- 個別の支援の関わり方・在り方
- **地域の就労支援機関等との連携の在り方**



『地域の就労支援ネットワークの強化・充実』



## モデル事業開始時点の状況

- 就労移行支援事業所とケースを通じた連携をしている
- 働き方を整理するなかで就労継続支援A型に繋ぐことがある  
→ 繋いだらそこで切れてしまうことがほとんど
- 働き方を整理するなかで就労継続支援B型に繋ぐことがある  
→ B型通所の方向が固まった時点でナカポツではなく地域相談支援センター(市の委託相談)が中心になり、そこで切れてしまうことがほとんど



関わりがないわけではないが  
個々のケースを「繋ぐ」ということしかしていない……



## あらためて「連携」の在り方を考えてみる

目指すは

『地域の就労支援  
ネットワークの強化・充実』



でも「ネットワーク」ってなに・・・？  
何をすればできる？

## 「ぼらんち」さん訪問

自身のモヤモヤは晴れないまま静岡県へ



- 「志太榛原を障害者雇用で輝かせる会議」への参加
- 情報交換会への参加
- 「ぼらんち」さんの取り組みを教えて頂く  
「連携会議」「支援者向けの研修」「交流会」など



年間スケジュールがビッシリ・・・



## 「ぼらんち」さん訪問を終えて学んだこと

- 主役はナカポツではなく地域を支える支援機関
- 職種が違う人が集まっても同じ目的をもって話ができる関係づくりの重要性
- 考えてばかりでは進まない → まずはやってみることが大事
- 情報交換会の意義
- ネットワークづくり → 何かイベント一つすれば良いというものではない

一つ一つのイベントには開催に至った「課題」と「目標」があるはず

### まずは声を聴こう

ぼらんちさんに敬意をもって  
オマージュさせていただきました

『津市を障害者雇用で輝かせる会議』  
を開催

皆さんが困っていることは何ですか？  
皆さんにとっての「あったらいいな」を教えてください



# 「ぼらんち」さん来襲!



**津市を障害者雇用で輝かせる会議**  
 ～地域で支えるための知恵が広がること～

障がい者の「働き」をみんなで支え合える地域社会をつくるために  
 皆さまの知恵を求め、みんなで一緒に取り組んでいきます。  
 ぜひご参加ください。お申し込みは、こちらからどうぞ!

日時：12月1日(金) 13:30～18:00  
 会場：津市キャリアセンター2F 会議室 (津市大門7-18)  
 内容

13:30	開会
13:35	行政説明「津市の障害者雇用支援の現状」 講師：相川 学 氏 (津市障がい福祉課)
14:05	講演「地域ネットワークづくり」 講師：星田 篤行 氏 (障害者就業・生活支援センターぼらんち)
15:05	休憩 (10分)
15:15	グループワーク
16:15	お茶会
16:30	閉会

情報交換会 「もっと交流を深めよう!」 18:00～20:00  
 場所：(津市若狭町阿 市民館) 津市大門20-13  
 TEL: 099-346-8500 料金 4,550円 (税込)

津市障がい者就業・生活支援センターぼらんち TEL: 099-329-1200  
 津市障がい者就業・生活支援センター TEL: 099-425-6877



All Together  
 オール 津(つ) ギャザー

## たくさんの貴重な声(意見)を頂きました

- B型から企業に何人も就職している。その企業から、もっと人を探しているなどの情報がある。そういった情報を共有できる場が欲しい。地域の資源や現状を幅広く共有したい。
- 今日は障害者就労について情報等を得て勉強したり交流を図りたいです。
- 就労移行事業所ではできない部分や足りない部分をその福祉施設がやってもらえるのか等安心して出せるような信頼関係構築が必要と思う。
- 同じサービスの職員同士での集まりが欲しい。例:津市のA型事業所の職員同士の交流など
- 他の事業所がこういった取り組みをしているのか知りたいためそれぞれのサービスの連絡協議会のようなものが欲しい。
- 就労や自立に向けた生活支援をベースとした勉強会の開催。
- 他事業所の見学 交流ができる=関係づくりができるとより深い話ができる。→気軽な感じのツアー
- 企業からA型などに来てもらう。福祉事業所で働いてもらう姿をみってもらうこの人ならみたいな逆スカウトで就労に繋がる
- ナカポツがA型事業所、B型事業所の声を聴く場があっても良いと思う。
- 働くイメージを持ってない方にイメージを持ってもらえる場。地元で就労している人と企業と福祉事業所を繋ぐ場。

グループワーク記録より一部抜粋

## アンケートより ～ 一部抜粋 ～

- この様な有意義かつ楽しい時間を共有させていただきありがとうございました。
- いろいろな話ができて良かった。
- 意見が反映されて、どうつながったかを知る機会がほしい。
- また このような機会を増やしていただいて参加していきたいです。
- 定期的にこのような機会があると良いなと思った。
- 今後も同様の機会があれば、ぜひ参加したいと思います。
- このような交流の場、定期開催してほしい
- 貴重なお時間を設定していただきありがとうございました。
- このような会議が続いていくといいなと思います。
- もう少し グループワークの時間が欲しかった。
- 今回は第1回目ということで希望があります。ぜひ次に続いていただきたいし、自分ができることがあれば協力させていただきます。良い機会を提供していただきありがとうございました。

継続的な開催を望む声もたくさん

## 圏域内意識調査の結果より

- 就労支援事業所の意識として  
「企業・職場に対する支援」が「不足している」が全体平均と比較して非常に高かった(分析より)

### 【考察】

一般就労へ繋がった実績が少ないことから、一般就労へ向けた支援の経験、ノウハウの積み重ねができていないと思われる  
⇒今後ナカポツがどのように関わっていくか

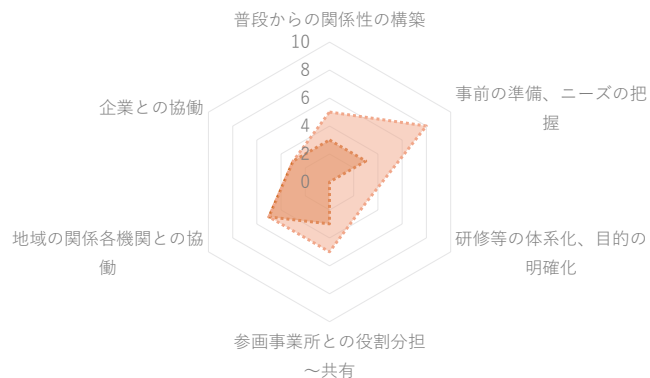
- スーパーバイズ・困難事例個別支援・地域連携に関する取り組みについて  
「受けたことはないが、今後は受けてみたい」が全国平均以上であり(分析より)、自由記述に「積極的に関わってほしい」という意見も見られた

### 【考察】

ナカポツのイニシアチブに対する期待も感じ取れる。良い意味で予想に反する結果であった。怖がらずに積極的に関わっていきたい

(地域連携の取組)

取組前 取組後



今回は「何かを成し遂げた」というよりは、最初の一歩を踏み出すための準備

- どんなにニーズがあるのかは見えてきた。次年度は「関係機関等との協働」繋げていきたい
- また今回のイベントで関係機関との距離が縮まった

気がする

## ナカポツの基幹型の役割について

- 地域の中での自分たちの立ち位置  
支援機関、企業、学校などの潤滑剤に・・・「主役」ではなく「黒子役」
- 定着支援地域連携に関する新たな具体的取組や追加の工夫
  - ・ 様々な機関との意見交換の場を継続してつづけていく
  - ・ 交流の場、研修、事業所見学会等の今回頂いたアイデアを具体化していく

## 同じ悩みをもつセンターに伝えたいこと

---

- とにかくやってみる・動いてみる  
リスクを考えていても きりがなし進まない
- ナカポツ同士の繋がりを大切に  
今回「ぼらんち」とタッグを組んで取り組めたことがとても大きかった  
「ぼらんち」さんの取り組みに刺激をもらい  
「ぼらんち」さんとの対話で背中を押してもらえた

**「わたしたちのセンターは  
『人』と『社会』を繋ぐ『架け橋』になりたいセンターです」**

---

ただ「生きる」だけでなく  
誰もが社会のなかで「生きて」ほしい

「就労支援」を通じて誰もが生き生きと暮らせる地域をつくりたい

『人』と『社会』を繋ぐ『架け橋』となれるように

「ふらっと」も様々な関係機関との繋がりを大事にしていきたい



わたしたちのセンターは

# 「日本一 地域とつながりたい センターです」

障害者就業・生活支援センターぼらんち  
センター長 夏目芳行



## 法人概要

特定非営利活動法人

静岡福祉総合支援の会 空と大地と

～あなたは大切な人です～

- ・ 法人本部・焼津事業所  
焼津の空と大地と（H16～）
  - 就労継続支援（B型） 定員 13名
  - 生活介護 定員 14名
- ・ 島田事業所  
島田の空と大地と（H25～）
  - 就労移行支援 定員 8名
  - 就労定着支援 定員 特になし
  - 生活介護 定員 20名
- ひみつ基地（H29～）
  - 放課後児童クラブ 定員 36名
- ぼらんち（H29～）
  - 障害者就業・生活支援センター

サッカー用語のボランチ(舵取り役)から名付けました。



# 圏域・県内センター概要

・県内センター 8か所

志太榛原圏域 推計人口  
**442,369人** (R5.10月現在)

## 圏域の福祉施設数

就労移行支援事業所	2
就労定着支援事業所	5
就労継続支援A型	20
就労継続支援B型	61



## 県内センターの合同の取組

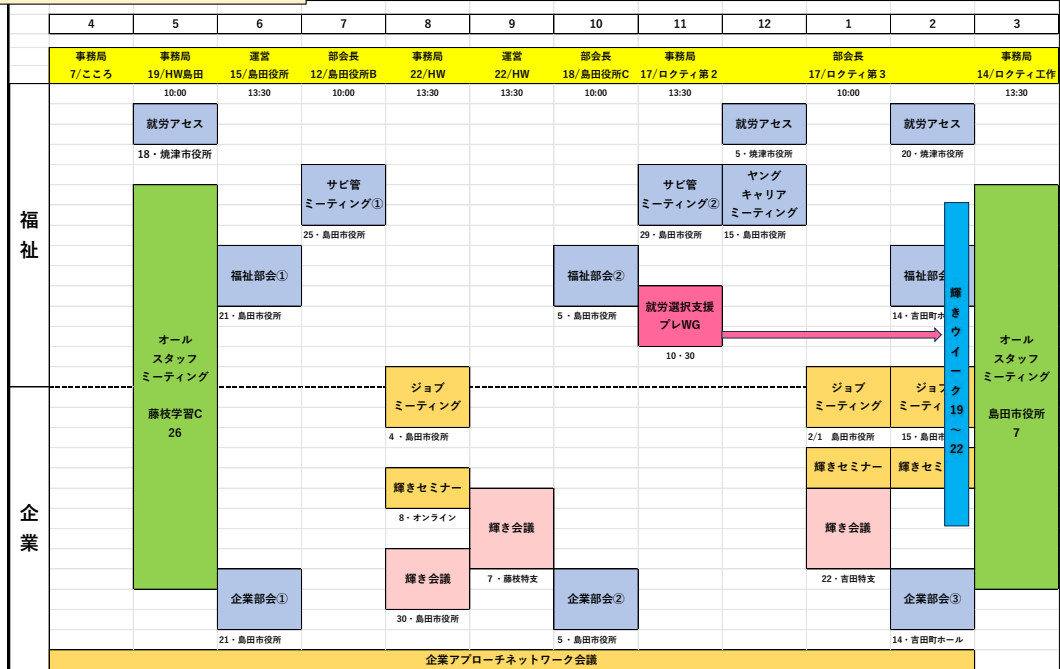
センター長会議	月1回
全体総会（全職員参集）	年1回
職員研修（全職員参集）	年2回

3

# モデル調査事業での取組

※自立支援協議会を有効に活用し、地域連携を図る

令和5年度 就労系会議・研修 年間計画





「ふらっと」さんに参考にもらったこと

### 島田合宿にて

☆「第9回志太榛原を障害者雇用で輝かせる会議」

内容：講演会「バーチャルオフィスツールの活用」

グループワーク「企業同士本音で語ろう」

参加者：企業、行政、学校等 50名

☆「輝き会議懇親会」 18名

☆情報交換

☆企業見学：藤枝テレワークオフィス

～見守り支援員型～



「ふらっと」さんに参考にさせていただいたこと

### 三重合宿にて

☆地域の支援機関との信頼関係

壁のない、気軽に頼みやすい関係

☆行政の障害者雇用への積極的な関わり

ワンストップの構造、駅近の利便性ある環境

地域の核を担うなかぼつ

☆改めて、丁寧に関係を築く重要性

慎重に紡ぐ心のつながりの構築

☆人材確保の仕方

## 新たな取り組みや工夫

- ☆「サビ管ミーティング」年2回 福祉施設への起点会議
    - ・地域の底上げが、お互いを楽にし、確かな就労への近道
    - ・サービス管理責任者の意識を高めることが必須
    - ・昨年1回 を 年2回にし、内容も質の高いものを提供
- 参加者はやる度に増加している

- ☆しごと体験「輝きウイーク」2/19～23
    - ・沖縄「花灯」さんに指導を受け実施
    - ・福祉施設に通う方たちが採用関係なく企業就労体験する
    - ・63社協力のもと、120人体験(34施設参加)
- 当事者も企業も福祉施設もみんなレベルアップ**

## 基幹型の役割について、今思うこと

- ☆関わる人たちのストレングスを意識し、お互いに高め合っていきながら、質の高い障害者雇用を目指していく
- ☆顔と顔を繋ぎ、一步はみ出したお願いができる関係性をいろいろなところでさりげなく結び付けていく

ぼらんちキャッチフレーズ「ぼらんちが笑顔のパスを繋げます」

## ☆最後に

「こんなに面白くてやりがいのある仕事は他にない」と  
なかぼつライフに誇りをもって楽しみましょう！

「わたしたちのセンターは  
地域機関の活躍を  
サポートするセンターです」



社会福祉法人水戸市社会福祉協議会  
水戸地区障害者就業・生活支援センター

## 事業所概要

所在地	茨城県水戸市赤塚1-1 (MIOS内)
受託法人 実施事業	<b>社会福祉法人 水戸市社会福祉協議会</b> 就労移行支援事業所, 就労継続支援A型及びB型, 身体障害者生活支援施設, 知的障害者生活介護通所施設, 訪問サービス事業所, 特定相談支援事業所, 障害福祉基幹型支援センター, 養護老人ホーム, 居宅介護支援事業所, 老人福祉センター, 他市社会福祉協議会事業全般。
職員体制	所長, 主任就業支援担当者, 就業支援担当者5名, 生活支援担当者3名
特徴	平成14年7月から県内1か所目のセンターとして事業を受託 (現在は県内9センター), 3市3町を担当している。当初は社会福祉事業団による運営であったが, 平成28年4月に法人合併となり現在は社会福祉協議会による運営となっている。

## 圏域の状況

水戸市，笠間市，小美玉市，茨城町，大洗町，城里町

人口規模	470,000 (内水戸市 269,000：約57%)
就労移行支援事業所数	54 (内水戸市 44：約81%)
就労定着支援事業所数	8 (内水戸市 7：約88%)
就労継続支援A型事業所数	25 (内水戸市 20：約80%)
就労継続支援B型事業所数	88 (内水戸市 60：約68%)

## 就労支援事業所分布の偏り

圏域の6割弱の人口である水戸市に全就労支援事業所の約75%が、B型事業所を除けば80%を超える事業所が集中している。一方、大洗町においては就労支援に関わる事業所数は0である。

## その他

圏域内に地域障害者職業センターと2か所のハローワークが所在する。県内に市町村による就労支援センター等は存在しない。

## 定着支援に対するセンターの基本的な考え、これまでの取り組み 1

・茨城県内9センターの申し合わせ事項により、主に就業支援は職場の圏域を担当するセンターが、生活支援は居住地の圏域を担当するセンターが支援を対応している。

・個別支援については、就労後1年以内（主に2ヶ月半程度）の登録者を対象とした、在職者交流会の実施。圏域内就労者については就職後、1年間は原則として毎月職場訪問を行うなどの対応を実施。

・水戸市以外の就労支援事業所からはこれまで、定着支援に関する相談はほとんどなかった。（企業を通しての相談はあり）

## 定着支援に対するセンターの基本的な考え、 これまでの取り組み 2

- ・ 就労支援事業所から就職した対象者が「長期支援を要する」場合は、対象者や企業との「スムーズな関係性の構築」を目的として、就労支援事業所の定着支援期間終了の前に約6ヶ月間、又は移行支援期間を目安として伴走しての支援を行っている。
- ・ 1人の就業支援担当者がケースを抱え込むことが無いよう、基本的には個別担当制をとらず、4カ月に一度ローテーションするエリア担当制をとっている。（一部例外あり）
- ・ 企業訪問時は、可能な限り2人体制を取っている。

## 今年度のモデル事業にエントリーした理由

・ 当センターは平成14年に茨城県の1ヵ所目として、ナカポツ事業を受託し、当初は広域をカバーしていたこと。就労支援事業所も豊富であり直ぐにすべての事業所と連携することは困難であった事。また一定の人口規模もあることから就労支援事業所からも含め相談は入っていた事などもあり、圏域内全体（水戸市を除く2市3町も含めた）の就労支援事業所とのネットワーク構築は手つかずの状況であった。

ただし、圏域内の就労支援事業所において当センターの「役割」のみでなく、「存在」自体も把握できていない事業所もあるとの想定もしており、今後の基幹的な役割を考えた場合、**就労支援事業所との連携や、スーパーバイズ機能について強化する必要性を感じていた。**

## 香取就業センターとの訪問交流で 参考になったこと 1

- ・ 就労支援事業所との連携については、担当圏域内に留まらず働きかけている。スーパーバイズについては、ナカポツが中心的な役割ではあるが、「上からと思われると受け入れてはもらえない」こと「利用者対応自体を通じて実施している」について例も交え教えて頂いた。
- ・ 今回当センターの事業対象とする就労支援事業所との関係構築について、**ステップ0**として始める事についてのアドバイスとして、**ナカポツを含めハローワークや地域障害者職業センター等の機関の役割を把握できていない事業所も多い事**を前提とし、まずは「ナカポツの役割」という基本的な部分を入口にする事を勧めを受けた。  
→実施してみてステップに適した内容だったと実感している。

## 香取就業センターとの訪問交流で 参考になったこと 2

・ 香取就業センターには2度伺わせてもらった。初回の事前訪問では、現在実施している事業内容とその成り立ちについても教えて頂き、その事業の多くがこれまで積み上げてきた事業から**ステップアップ**してきたものであった。

また、千葉県では全センターが参加した「千葉県障害者就業・生活支援センター連絡協議会」が存在し、2ヶ月ごとに意見交換や研修、その他各種事業を実施されており、**県内のセンター間での連携**が図られていた。

・ 2度目の訪問で「就業支援者養成セミナー」を見学。広報としては参加者に興味を持ってもらえる内容をテーマに掲げて参加しやすい環境を整えながら、一方で香取就業支援センターとして、参加者に伝えたい内容も裏テーマとして設定した事業となっていた。

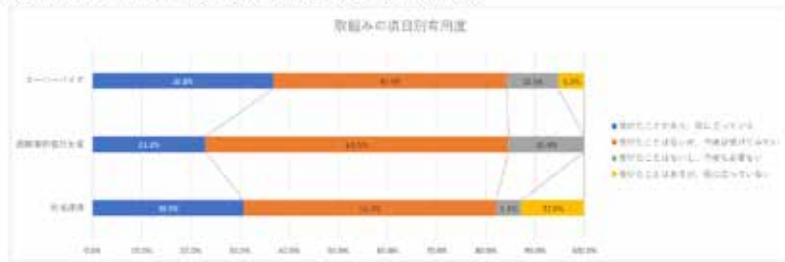
(※当センターではこれまですべてストレートに伝える傾向が強かった。)

# 意識調査の結果より一部抜粋

1. 就労実績の有無で区別した事業所別の回答状況



4. スーパーバイズ・困難事例個別支援・地域連携に関する取組みの有効性について



取組み3項目の中で、スーパーバイズ・困難事例個別支援の有効度は平均並みだが、地域連携については全体平均を下回っていた。尚し、今後受けてみたいという回答は最も多く、今後の期待感を惹き取る結果であった。

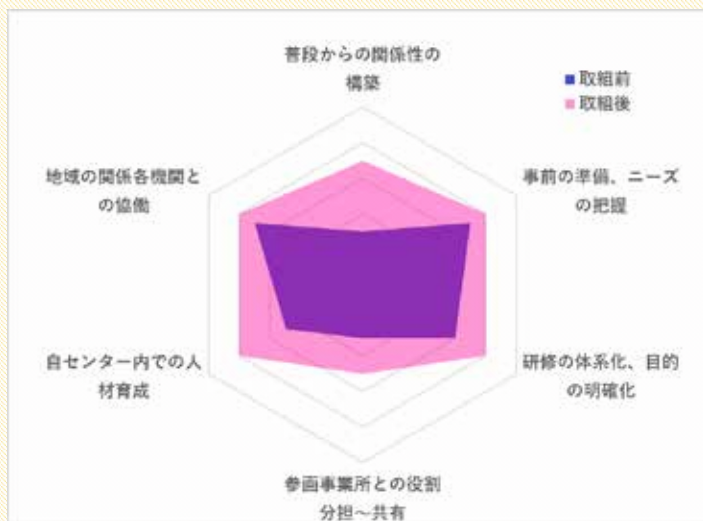
## 意識調査の結果で参考になったこと

・「就労実績の有無で区別した事業所別の回答状況」について、過去3年就労実績のない「就労移行支援事業所」の比率の高さについて、新規事業所の増加のみが理由ではなく、就労継続B型と同様の事業所が現在も多数存在している実情が、改めて明確となった。

これにより「圏域全体の就労支援事業所に対するサポート」について、「就労移行支援事業所の全体」に対する支援よりも「当センターからのアプローチに積極的に反応してもらえる事業所」へのサポートをまずは優先して行うという判断の材料とする事ができた。

・地域連携に関する希望が高い数値を示しており、**就労連携ネットワーク構築**が必要とされていることが確認できた。

## ビフォーアフター自己評価【地域連携】



今回、定着支援地域連携モデル調査事業の取り組みと事後訪問の実施により、圏域内の就労支援事業との連携に関する足がかりは作れたと感じている。一方で役割分担や共有に関しては、これから取り組んで行く課題になる。

就労支援事業所との連携については、関係機関からも取り組みたい課題と上がっていたところを協働することができた。

人材育成については、センター内のみならず、自法人に対してもナカポツの基幹化の方向性を伝えることができる貴重な機会となった。

## ナカポツの基幹型の役割について

### ○地域の中での自分たちの立ち位置について考える事

- ・ **当たり前の事**ですが当事者、企業、就労支援事業所、その他関係機関にその存在と役割を知ってもらえている存在となっていくこと。
- ・ 気軽に相談できる機関であること。
- ・ 時間がかかっても「当事者」「企業」「就労支援事業所」それぞれが障害者雇用についての理解を深めていくための**促し**ができる**伴走者**であること。



## ○定着支援地域連携に関する新たな具体的取組や追加の工夫

- ・香取就業センターの協力を得て「就労連携ネットワーク構築に向けたセミナー」を開催、「障害者就業・生活支援センター（なかぼつ）ってどういうところ？」をテーマにした講話と「就労連携に関するグループワーク」を実施。

今回の事業実施に際しては、圏域内の就労支援事業所、119事業所に案内を郵送し、17事業所22名の参加を得た。（あえて事前に個別の声掛けは行わず）

参加者にはこれまで当センターとあまり**関わりがなかった事業所も3割**ほどあり、また実際に当センターを知らなかった方も複数含まれていた。

- ・開催後、すべての参加事業所への訪問を実施。その中では、**事業所間での個別の交流を行った**という例もあった。
- ・アンケートからは今後の**連携強化を希望**する声が多く、次年度以降も**定期的開催**する方針。また、希望する事業所とは、提供可能な**実習先情報等の共有**を行う事とした。

## ○モデル事業を振り返って感じる事など

- ・担当圏域ごとに、人口規模・社会資源・障害者雇用に関する成熟度等にはそれぞれの違いがある。➡ **地域の特性に応じた対応が必要**

- ・自センターで答えが出ない時には、他センターに相談することも大切。

➡ **圏域の特性等に多少の違いはあっても何かヒントが見つかれば選択肢が増える（または絞れる）**

**協力し合える仲間の存在が大切になるのでは**

令和5年度 定着支援地域連携モデルに係る調査事業

わたしたちのセンターは

『繋ぎ・繋がれるセンターです』



千葉県 香取圏域  
社会福祉法人ロザリオの聖母会  
障害者就業・生活支援センター香取就業センター  
センター長 岡澤 和則

【社会福祉法人ロザリオの聖母会について】

法人本部:千葉県旭市 1952年創立

経営理念:光のあたりにくい人々とともに歩む

実施事業:<https://www.rosario.jp/>(ホームページ参照↑)

※障害者就業・生活支援センターを2センター運営

東総就業センター／香取就業センター



【香取圏域について】

香取市・神崎町・多古町・東庄町の1市3町

人口:10.3万人(2024年2月1日現在)

事業所:就労移行支援 2か所 ※B型との多機能型

就労継続支援A型 3か所

就労継続支援B型 9か所

就労定着支援 1か所



## 令和4年度モデル調査事業での主な取り組み

### 『就労定着支援事業所へのスーパーバイズ』

○8か所(圏域内1か所)の就労定着支援事業所と連携

背景:圏域内の就労移行支援事業所が少ない、就職実績が殆ど無い

相談者が圏域外の就労移行支援事業所を利用後、圏域内の企業に就職

- 就労定着支援事業所との役割分担や企業対応での窓口の一本化  
個別ケースのサポート(企業訪問の同行、職場外面談の同席など)  
就労支援力の向上や就労定着支援のノウハウを共有する取り組み  
(就業支援者養成セミナーや就労定着支援事業所との意見交換会)

## 令和5年度モデル調査事業について

### 『地域の就労支援機関との連携に係る取り組み』

「水戸地区ナカポツさんに参考にしてもらえたポイント」

水戸圏域にはナカポツの役割のみでなく

存在を把握できていない事業所もあるかもしれない…

- まずはナカポツを知っていただく機会の必要性をご提案  
『就労連携ネットワーク構築に向けたセミナー』の開催  
ナカポツの存在や役割を周知+事業所の現状やニーズ、課題の把握  
⇒ アンケートから今後の連携を希望する声

「水戸地区ナカポツさんの取り組みで参考になったこと」

- ・セミナー開催後、参加事業所への訪問(挨拶まわり)
  - ネットワークの構築に向けて丁寧なアプローチ
- ・就労支援事業所の現状やニーズ、課題の把握
  - 寄り添う姿勢、双方向のネットワーク構築に繋がる
- ・就労定着支援の対応(2人1組でローテーション)
- ・茨城障害者職業センターとの連携
  - 地域の就労支援事業所へノウハウを共有されるとよいのでは！

## ナカポツの基幹型の役割について

「新たな取り組みや工夫」

- ・基幹相談支援センターや中核地域生活支援センターとの連携強化
  - 何でも気軽に話そう会(個別ケースの相談や社会資源の共有等)
- ・相談者や家族に地域の社会資源を周知する機会
  - 充実した職業生活や安心して社会生活を送るための交流会

今後:地域包括支援センターとのネットワーク構築

茨城県のナカポツさんとの意見交換会

何のためのネットワーク構築か？連携か？を見失わずに

「地域の中での立ち位置や大切にしたいこと」

- ・顔の見える身近な存在(些細なことでも気軽に聞ける)
  - ・ニーズや課題、状況に応じて柔軟に対応できる存在
  - ・個別支援を丁寧に取り組むセンター(でありたい)  
支援は人の為ならず → 巡り巡って自分たちの動きやすさに
  - ・関わる人と謙虚に向き合い、  
人と人を繋ぎ、助けを求めている人が繋がれるセンター
- 「わたしたちは繋ぎ・繋がれるセンターでありたい」

令和4年度から2年間

『定着支援地域連携モデルに係る調査事業』に関わらせていただき、関係者の皆様をはじめ、本日のセミナーにご参加いただいている皆様に心より感謝申し上げます。

貴重な機会をいただき、ありがとうございました！



わたしたちのセンターは、

## 地域づくりに向けた 4つの役割と機能を持つ、

センターです。

石狩障がい者就業・生活支援センターのいける

センター長 吉田 志信  
主任就業支援担当 西川 香

## 受託法人 社会福祉法人はるにれの里、の紹介



<b>【法人本部】</b>
北海道石狩市花川北1条5丁目171 (TEL0133-62-8360) HP> <a href="https://www.harunire.or.jp/index.html">https://www.harunire.or.jp/index.html</a>
<b>【従業員数】</b>
正職員374名、嘱託職員10名、パート職員88名、グループホーム世話人103名 (平均年齢37.6歳)
<b>【事業運営理念】</b>
①重度自閉症および重度知的障がいをはじめとした発達障がい児・者のニーズに特化した多様な機能をもつ事業運営。 ②いかなる重度障がい者も最終ゴールを地域での自律生活を目指し、地域に溶け込み、地域を支え、地域に支えられる事業運営。 ③社会福祉法人として常に先駆性、開拓性、モデル性と支援ネットワークの構築を目指す事業運営。 ④家族を支え、家族に支えられる事業運営。 ⑤はたらく職員のやりがいを支える事業運営。 ⑥情報の公開、外部評価の導入による地域に開かれた事業運営。
<b>【法人キャッチフレーズ】</b>
一歩先の事業 一歩先の支援 一歩先の組織



**【運営事業】**

■入所支援施設2カ所 ■生活介護事業9カ所 ■多機能型障がい福祉サービス事業（就労継続支援B型・生活介護事業）2カ所・（就労継続支援A型・就労継続支援B型）1カ所 ■就労継続支援A型1カ所 ■就労移行支援事業1カ所（主従） ■障害者就業・生活支援センター事業1カ所 ■児童発達支援センター1カ所 ■相談支援事業6カ所 ■共同生活援助事業2カ所（計34ホーム） ■地域活動支援事業3カ所 ■居宅事業所パーソナルサポートセンター1カ所 ■企業主導型保育園1カ所 ■短期入所1カ所



～住み慣れた地域で生き生きとした暮らしの支援～

当法人は1987（昭和62）年4月、障がい者支援施設（旧知的障がい者更生施設）「厚田はまなす園」を開設以来、石狩市および札幌市において施設・事業所を、各ニーズに対応し開設、運営しています。知的障がい者や自閉症、発達障がいの人たちが地域でその人らしく生活できるよう専門的な支援を行っています。

法人内の就労系支援事業所

～総称して 総合就労支援センターCAP、として運営～



**総合就労支援センターCAP**



<障害者就業・生活支援センター事業>

**石狩障がい者就業・生活支援センターのいける**

障がいのある方の「就労」「雇用」等に関する様々なニーズに対応

－ 5 つ の 事 業 で 「 働 く 」 を 支 え ま す －

※【のいける】は平成21年4月より事業開始。  
 ※【のいける】はアイヌ語で「曲がりくねった道」という意味。「自分の道（人生）として自分らしく歩んでいただきたい…」といった思いから名付けました。

## 法人内の就労系支援事業所

～ 〃総合就労支援センター C A P、が考える就労支援の軸～



「働きたい」「働き続けたい」といったニーズに対して、「働く人材を育てること」、働く障がい者が、「企業の戦力」「企業にとって必要な人材」として評価を得て、社会の中で活躍することを目指しています。



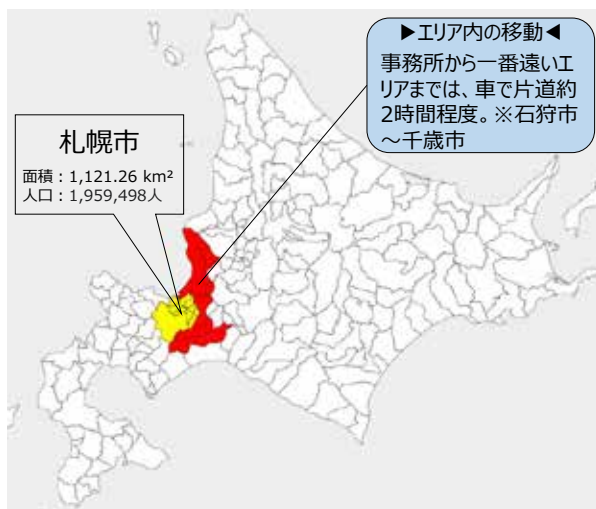
「職業能力は環境が作り出すもの」という考えを持ち、〃能力を育て作り出す、という視点から、障がいのある方の「労働の可能性」を広げる取り組みを行います。



障がいのある方の就労・雇用を通じて「地域づくり」に参画し、働くことに対して、より成熟した環境を目指し、地域の中での役割・機能・責務を認識し、尽力していきます。

## のいけるの紹介

～活動エリア～



- ・北海道は12センターが設置（センター未設置圏域は13カ所）
- ・活動エリアが広域が故に移動に片道3～4時間もかかるセンターも…
- ・北海道は全部で179市町村～就労系事業所がない地域も…
- ・道内ナカボツセンターの持ち回り研修を開催（年2回）

### ▼活動エリア（石狩圏域※札幌市を除く）▼

◇石狩市…	面積：722.42km <sup>2</sup>	→人口：57,777人
◇当別町…	面積：422.86km <sup>2</sup>	→人口：15,351人
◇新篠津村…	面積：78.04km <sup>2</sup>	→人口：2,831人
◇江別市…	面積：187.38km <sup>2</sup>	→人口：118,824人
◇北広島市…	面積：119.05km <sup>2</sup>	→人口：57,138人
◇恵庭市…	面積：294.65km <sup>2</sup>	→人口：70,254人
◇千歳市…	面積：595.50km <sup>2</sup>	→人口：97,827人

**面積：2,419,90km<sup>2</sup> / 人口：420,002人**

### ▼活動エリア内の就労系の社会資源▼

	社福	NPO	営利	他	合計	近隣地域 札幌
就労移行	5	1	6	1	<b>13</b>	67
A型	6	1	14	1	<b>22</b>	124
B型	20	17	38	10	<b>85</b>	545
定着支援	3	2	3	1	<b>9</b>	45
合計	34	21	61	13	<b>129</b>	781



## のいけるの紹介

～北海道における社会資源の変化～



	北海道全体		そのうち札幌		北海道全体	そのうち札幌
	2019年10月	2024年1月	2019年10月	2024年1月	増	減
就労移行	181	144	84	71	<b>-37</b>	<b>-13</b>
A型	239	277	115	129	+33	+14
B型	945	1,289	363	566	<b>+344</b>	<b>+203</b>
定着支援	53	74	35	47	+21	+12

### 【就労移行】

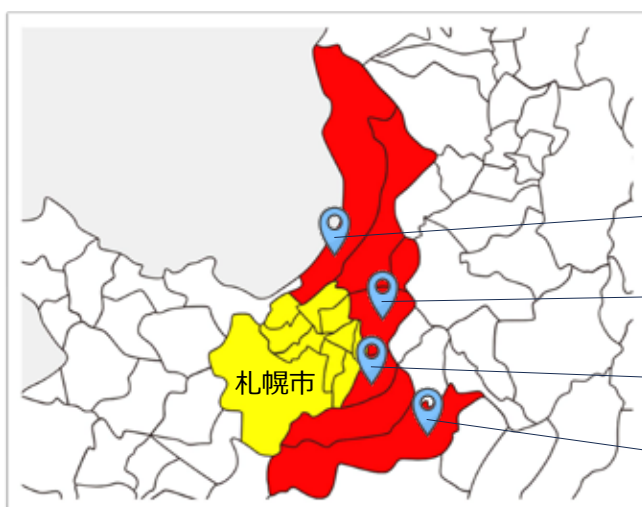
北海道全体で37事業所の減。札幌市以外の「いわゆる地方」の就労移行が大幅な減少となっている。

### 【A型・B型】

共に増加となっているが、B型に関しては北海道全体で344カ所の大幅な増加。そのうち当センターに隣接する札幌市内では全体の約59%も増え、その多くが営利法人で運営している。

## のいけるの紹介

～活動エリアの特徴～



5市1町1村のうち3市（江別市・北広島市・千歳市）において、就労支援を行う市単事業（ナカポツ同様の機能）があり、各事業所と緊密な連携のもと支援にあっている。

石狩市（人口:約57,000人）  
のいける（ナカポツ）

江別市（人口:約118,000人）  
すてら（市単事業）

北広島市（人口:約57,000人）  
めーでる（市単事業）

千歳市（人口:約97,000人）  
やませみ（市単事業）

北海道では、札幌市以外で市単事業がある自治体は珍しく、当該エリアにおいては3か所設置されており、これを強みとして捉え各機関と協同している。

## 定着支援に対する考え方

～関係機関からの就労定着支援のオーダーに対して～

「就労定着支援事業を3年間利用して終わるので、その後の定着支援をお願いしたい。」

「就労移行支援事業を利用して就職したので、定着支援を依頼したい。」

「高等支援学校の卒後の進路は就職となった。ナカポツに相談するように保護者へ伝えていきます。」

上記のような問い合わせ・依頼を受けることがあります。基本的にはケースの状況から関わる必要があるか否かについて判断していきます。

就労支援において、「就職後を見据えた就労支援の視点」が重要であるといった考えの下、基本的には、**関わった事業所がその責任・責務において、引き続き定着支援の軸となって関わっていく必要がある**と考えています。関係機関からの「定着支援の引き継ぎ」を積極的に受けることにより、事業所としての責任が希薄となることが考えられます。（「覚悟を持ってケースを受ける」ということでしょうか・・・）



## 定着支援に対する考え方

～就労支援機関の責務と後方的な関わりへの理解～

- #なぜのいけるの定着支援が必要なのか？
- #本人がのいけるの定着支援を望んでいるのか？
- #今後どのような定着支援が必要なのか？
- #送り出した側（事業所や学校など）は今度どのように関わっていくのか？

### のいけるの定着支援とは？

「就職したからナカポツへ・・・」「3年間の定着支援期間を終了するのでナカポツへ・・・」など、「**期間を終了したから」「時期が来たから**」といった**一律の考え**で判断しないよう、その必要がある場合は、のいけるが**定着支援の中心とならず、後方的に関わる**こととしている。

「**対応に苦慮しているケース」「企業へのアプローチに難しさがある**」など、事業所が抱える課題がある場合、**事業所に対するサポート（機関支援）**を中心に行う。これによって、自事業所でケース事例を積み重ねることで、次ケースの対応ができることを想定し、のいけるとしては**後方的な役割**を意識している。

※厚労省から発出された「就労定着支援の実施について」も根拠としています。

## モデル事業にエントリーした理由

～ 地域づくり、に向けての様々な課題～

- ・コロナ禍で停滞したネットワーク（名刺交換もできない…）
- ・研修機会の減少（主催するも届けたい所に行き届かないことも…）
- ・スタッフの育成（スーパーバイズへの対応・相手に気づきを与えられるように…）
- ・地域の就労支援に関わる人材の育成（就労支援の更なる向上…）
- ・事業所による倫理観の課題（利益供与にあたる事案が多発…）
- ・新たな雇用形態に対する情報収集（雇用代行ビジネス等…）
- ・その他



地域づくりに向けて、障壁と考えられる課題が山積しているため、その解消に向け、より具体的な方略を模索していたところ、モデル事業の募集があった。参考となるモデル的な取り組みを知り、今後の事業運営に反映させたい。

## 応援センターの取り組みで参考になったこと

～鹿児島 あいらいさ、の取り組みから～

### あいらいさ

#### <事業所への訪問活動>

- #事業所ニーズの掘り起こし
- #旬な話題や情報を提供
- #課題の共有
- #アンケートの実施
- #意見交換

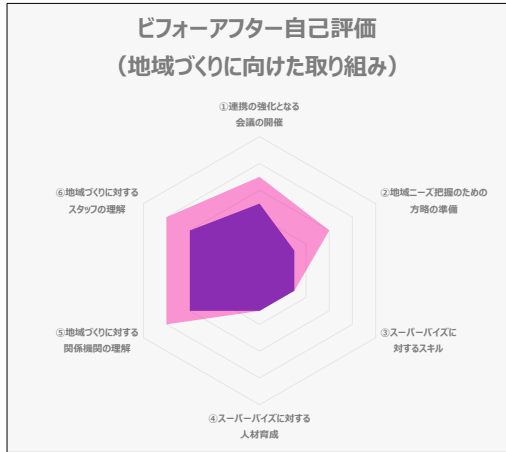


### のいける

我々の役割や機能を知ってもらうこととして、様々な方略を講じてきたが、あいらいさの取り組みと、全就ネットが行った意識調査からも、「**のいけるの存在について意外と知られていない**」「**地域の実情を把握しきれていない**」ことが分かり、この課題に対する攻略の糸口を探す機会となった。様々な方略がある中で、**継続して行うこと、を前提とした方法**を考えていきたい。

## 意識調査の結果から

～「地域づくり」をテーマとして振り返る～



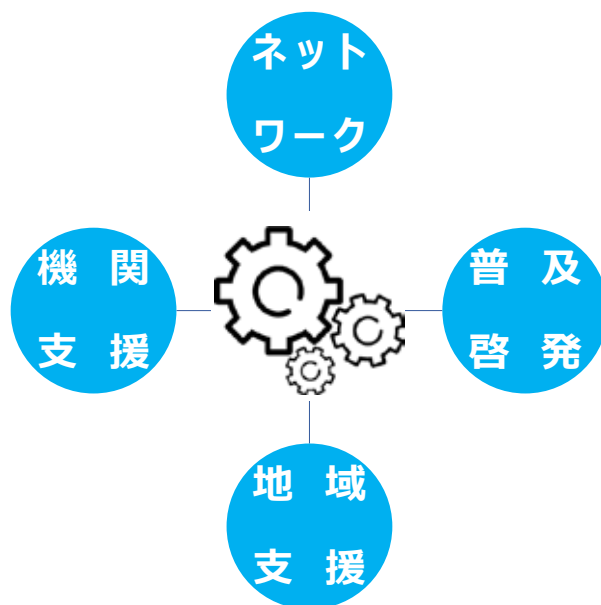
● 取組前  
● 取組後

	振り返り項目	取組前 → 取組後
①	連携の強化となる会議の開催 > 目的を明確にした会議の開催	5 → 7
②	地域ニーズ把握のための方略の準備 > 継続して実施できる方略を検討	3 → 6
③	スーパーバイズに対するスキル > 経験を含めスキルアップのためのプログラムを構築	3 → 3
④	スーパーバイズに対する人材育成 > 人事異動等の課題はあるが目途を持って対応	3 → 3
⑤	地域づくりに対する関係機関の理解 > 変化する社会資源とどう向き合っていくかが課題	6 → 8
⑥	地域づくりに対するスタッフの理解 > のいけるのスタンス(役割・機能)を可視化	6 → 8

※ポイントは10点満点で評価

## 基幹型センターの役割について

～地域づくりに向けた4つの役割と機能～



障がい者就業・生活支援センターは、障がい者の職業生活における自立を図るため、雇用・保健・福祉・教育等の関係機関との連携の下、障がい者雇用の促進及び安定を図ることを目的として設置されています。

開設当初より、「就労支援を通して地域づくりを行っていく」という考えではあったが、様々な変遷の中で、体制が大きく変わった後の2023年度より、改めて「**地域づくり、に向けた4つの軸**」を置くことを整理しています。



## 基幹型センターの役割について

～地域づくりに向けた4つの役割と機能～



### ネットワーク

就労支援をよりスムーズに行うために、関係機関との連携が必須です。地域の就労支援ネットワークの構築・強化を目指します。▶「就労支援や障がい者雇用に関する情報発信・共有」「就労支援に関わる連携の構築・強化」「ネットワークを用いた他領域への展開」など。

### 普及啓発

就労支援や障がい者雇用に関する研修会等の開催を通じて、就労支援のスキル向上、雇用の安定、障がい者雇用に関する理解促進を進めます。▶「研修会・セミナー・勉強会等の企画運営」「地域に向けた理解促進」など。

### 地域支援

就労支援や障がい者雇用に関する有益な情報提供や支援に関する提案等を行います。▶「協議会（自立支援協議会）」「地域の支援体制整備に関する各種会議」への参加。地域作りに寄与する活動など。

### 機関支援

就労支援について苦慮している関係機関、障がい者雇用にお困りの企業へのサポートや提案等を行います。▶「就労支援機関や雇用管理をする側へのサポート」「支援会議への参加」など。

## モデル事業を終えて

～今後の展開～



### ①就労系事業所（移行・A型・B型）に対するアンケートの実施

・地域の実情を把握することを目的としてアンケート（調査）を実施する。`持続可能、な調査内容・手法とすることや回答率を上げる工夫、また、その結果を分析し、地域づくりに反映していきたい。

### ②のいけるの役割や機能について広く周知を図る

・抽象的な活動である `後方的な関りを可視化、し、更に地域への理解促進を図る。

### ③就労支援に係るネットワークを構築

・コロナ禍で低迷した `ネットワークを再構築、し、強化・維持していく。今年度は、スタートアップ会議として「石狩市就労支援ネットワーク会議」を開催し、次年度開催に向けての意見集約等を行った。

### ④地域の強みについて発信

・良事例など `良いところ、にも着目し、 `地域の強み、を広く周知していく。

### ⑤スーパーバイズに対する取り組み

・人材育成に向けた具体的な方略を模索。相手に`多くの `気づき、を与えられる関わり。

## 最後に

～のいけるが考える「地域づくり」とは～



- ✓ナカポツは各地域に点在する支援機関とはならず、「**地域の身近な支援機関**」にはなりにくいです。
- ✓とはいえ、様々な役割や機能を期待されることが多いですが、**限られたマンパワーにも限界**があります。
- ✓地域に目を向けた時に、**就労支援の前線で活躍する機関**も多くあります。
- ✓そして、**これから期待できる就労支援機関も地域には存在**します。
- ✓それらの関係機関が、地域の中で、**更に役割と機能を高めていけるよう、黒子として関わっています**。
- ✓**地方の就労支援の火が消えぬよう**、微力ながら地域を支えていきたいと思ひます。



地域づくりに向けた「**4つの役割と機能**」を活かし、今後も、地域の「**就労支援の前線を支える活動**」を継続していきます!!

※「質の高い就労支援を展開している地域である」といった評価をいただくまで…

ありがとうございました。



のいけるが運営する「**情報提供サイト**」です。

障がい者雇用・就労支援をキーワードとした、各種情報や関連する旬な話題などを提供しています。



<https://www.centercap.org/noikeru/>

のいけるの「**ホームページ**」です。



<https://www.centercap.org/noikeru/about/>

## 定着支援地域連携モデルに係る調査事業報告セミナー

私たちのセンターは  
地域と人が繋がりを続けることをめざしている  
センターです

鹿児島県（応援センター）

あいらいさ障害者就業・生活支援センター

主任就業支援相談員 永山 亜紀

主任職場定着支援員 東 由香

### 法人：社会福祉法人 真奉会

法人  
一覧

ワークショップはやと (本部)	就労定着支援	ワークショップあいら	就労継続支援B型
	就労継続支援B型		生活介護
ワークショップゆうすい	生活介護	生活支援センターほっと	グループホーム
	就労継続支援A型		グループホーム
	就労継続支援B型	児童発達支援センターぼえむ	放課後等デイサービス
	生活介護		児童発達支援
	相談支援事業		保育所等訪問
グループホーム	小規模認可保育園どれみ保育園		
放課後等デイサービス	地域総合支援センター	障害者就業・生活支援センター	
認知症対応型グループホームあもり			相談支援事業

- なかぼつ委託：平成22年4月開所（所在地：霧島市）
- 職員体制：7名（主任就業・主任職場・就業担当3名・生活担当・事務補助）
- 令和4年度実績

登録者数487名 相談件数5044件

就職件数48件 実習件数35件 定着率82.8%

## 圏域の状況について ～基本情報～

- 3市1町（霧島市・始良市・伊佐市・湧水町）
- 人口：23万4,006人 面積：1,371.28km<sup>2</sup>
- 事業所数 昨年から1000人減少

就労移行支援事業所	3か所
就労定着支援事業所	2か所
就労継続A型事業所	16か所
就労継続B型事業所	55か所

伊佐市  
人口：8475人  
移行0・B1・A1

湧水町  
人口：2万3333人  
移行0・B6・A0

霧島市  
人口：12万3980人  
移行2・B26・A7

始良市  
人口：7万8218人  
移行1・B22・A8

## 昨年度のモデル調査事業での主な取り組み

### 【令和5年度の活動状況】

#### ○ 就労系サービス事業所への訪問活動

昨年度より訪問事業所増加（4年度34事業所→5年度40事業所）  
（今年度は活動に賛同いただけなかった事業所も・・・）

#### ○ 就労支援事業所連絡会

2回開催 延べ49名参加。

2回目は集合開催ができ、活発な意見交換ができた。





## 今年度のモデル調査事業での取り組み

★ 実施センター（のいける）による応援センター（あいらいさ）訪問

・ 令和5年9月26日～9月27日

第2回就労支援事業所連絡会に参加・情報交換会



★ 応援センターによる実施センター訪問

・ 令和5年11月20日～11月21日

市単なかぼつ視察・就労移行事業所視察・

第3回就労支援連携会議に参加・情報交換会



## 今年度のモデル調査事業での取り組み

～実施センターに参考にしてもらえたポイント～

★ 訪問活動で事業所のニーズを掘り起こし、活動に活かしたこと

✓ 遠方に住んでいる方で交通手段がない方へ対応してもらえないか？

⇒ 巡回相談をスタート

✓ 就労選択支援について知りたい

⇒ 第2回就労支援事業所連絡会の中で

全国就業支援ネットワーク・藤尾様に講話していただいた

**事業所の声を掘り起こす**

就労選択支援とは？  
他の事業所の取組等について意見交換したい。  
就労支援の課題や情報の共有。等



## 今年度のモデル調査事業での取り組み ～応援センターの取り組みで参考になったこと～

- ★ 面積も人口も小規模な圏域であれば個別訪問も可能だが、人口（事業所数）や面積が広い圏域では個別に訪問することは難しいのでは・・・！？
  - ・市単なかぼつとの役割分担
  - ・市単なかぼつとの日頃の連携や圏域の就労連携会議で情報共有
- ★ 石狩市の取り組み
  - ・石狩市就労フォローアップ事業（2021～）  
就労定着支援事業の利用期間満了後も無期限で定着支援を受けることができる
- ★ 札幌市の取り組み
  - ・就労している方向けの地域活動支援センター

## 基幹型としてのなかぼつの役割とは？

- ★ 地域の中のなかぼつの立ち位置は規模により変わってくる
  - 規模が小さな圏域：社会資源が少ないため圏域全体を直接コーディネートすることが必要
  - 規模が大きな圏域：圏域を地域ごとに分けて地域の主幹となる社会資源との連携で全体を間接的にコーディネートする  
必要に応じて個別ケースに対応する

### みなさんにお伝えしたいこと

- 『継続して取り組んでいくこと』をつくりあげていく
- それぞれのなかぼつの地域性にあった形で活動をすればよい

ご清聴ありがとうございました



定着支援地域連携モデルに係る調査事業 事業報告セミナー

本人主体のチャレンジを応援する地域づくりを  
目指すセンターです  
～定着支援地域連携モデルに係る調査事業～

奈良県  
なら中和障害者就業・生活支援センター  
ブリッジ 青木 孝至

自分らしい  
働きがた・暮らし方について

# ブリッジについて

なら中和

障害者就業・生活

支援センター

ブリッジ

運営法人

(社福) 奈良県手をつなぐ育成会

所在地

奈良県橿原市今井町2-9-19今井長屋1

開設日

平成21年4月

担当圏域

中和圏域【5市2町1村】

(橿原市・大和高田市・香芝市・葛城市・御所市・広陵町・高取町・明日香村)



## ブリッジについて

就職件数	身体障害	知的障害	精神障害	発達障害	難病	高次脳	合計
平成2年	0	23	10	6	0	1	40
令和3年	2	27	7	6	0	1	43
令和4年	2	18	5	5	0	1	31
合計	4	68	31	17	0	3	114

実習件数	身体障害	知的障害	精神障害	発達障害	難病	高次脳	合計
令和2年	1	23	10	6	0	1	41
令和3年	2	13	16	5	0	1	37
令和4年	1	18	7	4	0	0	30
合計	5	54	33	15	0	2	108

令和4年度	身体障害	知的障害	精神障害	発達障害	難病	高次脳	合計
就職に向けた相談・支援	84	437	437	212	0	12	1,011 (その他18件含む)
職場定着に向けた相談・支援	29	840	297	210	0	21	1,447
日常・社会生活に関する相談・支援	3	61	7	8	0	0	95
就業・生活両方にわたる相談支援	54	811	234	203	0	55	744 (その他14件含む)
合計	170	2149	975	684	0	88	3,978

令和4年度登録者数	身体	知的	精神	発達	難病	高次脳	合計
在職中	21	222	50	60	0	0	353
求職中	33	181	183	56	7	12	476
合計	54	403	233	116	7	12	829

## 今回のモデル調査事業について

### モデル調査事業応募の経緯

- ・ センター長としての経験不足
- ・ 地域ネットワーク構築に行き詰り
- ・ 当事者との対話から見えた課題
- ・ 企業との対話不足

### 意識調査で把握できた圏域の現状

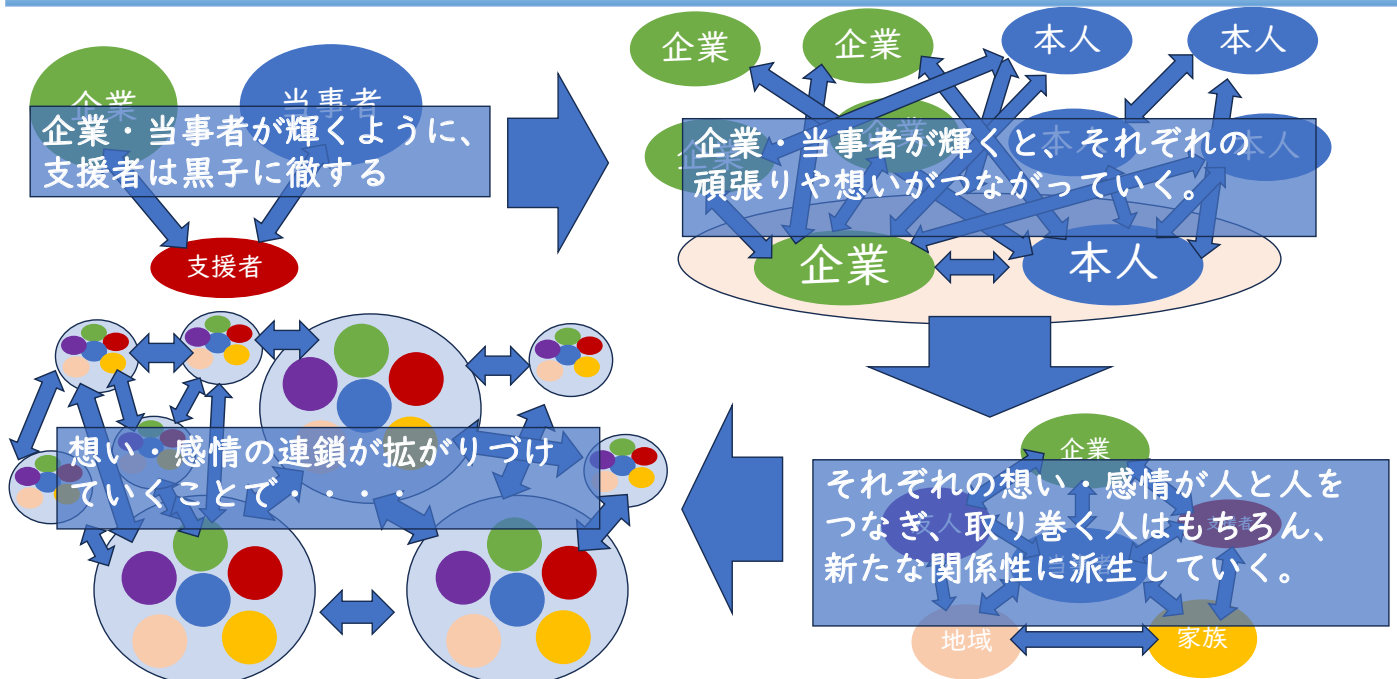
- ・ アンケート回答数の低さ
- ・ 就労継続A・B型事業所からの就職の多さ
- ・ 生活支援の重要性

## 今回のモデル調査事業について

応援センターの取り組みで参考となったこと

- ・ **当事者・企業**が**主役**となるよう、支援者は**黒子**に徹する。
- ・ **当事者・企業**と共に**協働**し、地域づくりを推進している。
- ・ 「**企業to企業**」 「**当事者to当事者**」の重要性。

## 企業・当事者が主役





## ①当事者報告会（語り部） 令和5年12月13日（水）



## ①当事者報告会（語り部）

### 実施目的

- ・当事者同士で、経験や知識の共有、相互に共感し合い、互いに学び合う場。
- ・今後、障害者自立支援協議会に当事者も参画し、より包括的で効果的な地域づくりにつなげる。

### 実践内容

- ・当事者の就労生活における経験や大切にしていることについて語っていただき、当事者同士気づきや学ぶ機会として実施。（支援者も企業も学ぶ）
- ・3市1町（香芝市・大和高田市・葛城市・広陵町）・鳴門市障害者自立支援協議会就労支援部会をオンラインにて会場をつなぎ、各部会から1名ずつ発表。

### 成果と課題

- ・当事者の語り部を通して、当事者はもちろん支援者・企業にとっても気づきや学びの機会となった。
- ・報告された方にとって、自己整理や充実感を得る機会となった。（聴く側も）
- ・当事者が発信するということが、地域にまだまだ根付いていないため、関心が薄かった。

### 今後の実践

- ・当事者が語らい合う土壌が地域に根付くために、継続的に開催を実施。（年3回）
- ・様々な立場の当事者に発信していただき、当事者同士はもちろん、支援者・企業・地域の方々にも、相互理解が深める機会として実施していく。



### 当事者の声

生活が安定することで気持ちが安定していることが幸せであると話されていたのが印象的でした。

・長年にわたり、双極性障がいと付き合いながらも、周囲に感謝の気持ちをもって生きること、すべてのことは当たり前ではないと考えられているAさんはすてきだなと感じました。

・就労に難しさはあるが、就労を続けるということにも難しさがあり、その中で感じたこと、考えたことを聞いたことがよかった。人との出会い、つながりの大切さや、自分のできること、苦手なこと、理解など、就労を続ける上で核となるようなものを聞いたように思う。働き続けないと働く喜びは得られないという言葉が心に残った。

### 支援者の声

二人の話（就労への気持ち・これから）がとてもよかったと思います。当事者が多く参加すれば一般就労へのハードルが低くなると感じた。

・人間関係や自分自身を「障がい者」と受け入れる葛藤を乗り越えた過程を聞くことができて良かったです。誠実な性格な方なのが今までの経験や言葉選びから伝わってきました。お話の中に出てきた「一人の人間として見てくれた」「自分にできることは何かを探す」というキーワードは特に胸に残りました。

### 企業の声

二人のお話を聞いて、企業や地域の方が障害のある方に配慮されていると感じた。もっと企業や地域が歩み寄らなければならないと感じた。

## ②障害者雇用企業交流会 第1回 令和5年12月14日（木）



## ②障害者雇用企業交流会

### 実施目的

障害者雇用において、雇用率の引き上げ、雇用の質など大きな転換期となる今、企業同士が同じ立場で気づき、学び合いながら、多様な働き方について考える機会として開催。

### 実践内容

- ・今年度は、「知る」ことをテーマに開催。
- ・第1回は、障害の重い方の可能性を見出し戦力化を図る雇用管理の立場と「企業to企業」の重要性を発信されている障害者雇用支援協会としての立場からマルワ環境開発株式会社社会長丸山様のご講演。
- ・第2回は、表面的には分かりにくい精神・発達障害のある方の雇用等について、県の委託事業である奈良県精神障害・発達障害者雇用企業サポート事業（D-PORT）の和田様のご講演。

### 成果と課題

- ・障害者雇用＝障害のある方の雇用だけでなく、社内の人材育成・雇用管理という視点を持っていただけた。
- ・障害者雇用などについて悩みや好事例など企業同士同じ立場で意見交換することに価値を感じていただけた。
- ・支援者から周知だけでは、あまり関心を持っていただけなかった。（第1回11社、第2回8社 参加）

### 今後の実践

- ・年間スケジュールを年度初めに計画し、日々の業務等を通して周知していく。
- ・座学だけではなく、企業見学など実際の働きぶりや当事者の方がどのような想いで働き暮らしているのかを知りあう機会として実施。
- ・継続的に実施していくことで、企業が主体となって企業to企業の機会が広がっていくことを目指す。

## 企業の声

障害者は特別な存在ではなく、企業と共に働く仲間として、どう共働できるかを考えるきっかけになりました。

障害者雇用を進めるには「障害者＝仕事ができない」と決めつけるのではなく、障害者の特性・気持ちを熟知した上、マッチする仕事を見つけることが大切であり、この取り組みをマルワ環境さんは実践されていることがわかりました。この取り組みにより障害者はやりがいを感じ、雇用の質の向上につながるのではないかと考えています。

取り組みや社員との関わりがとても参考になりました。任せることやできることを見分けることが大切だと思いました。

とても素晴らしいです。挨拶しなくても良いと言う事には驚きました。

どんな場面でも当事者として、企業の目線、働く人の目線で考えていくことの大切さを感じました。

### ③地域ネットワーク構築（当事者交流会）

#### 実施目的

・障害者自立支援協議会就労支援部会において当事者と共に、“はたらく”“くらす”こと等について意見交換を図り、地域に必要な資源開発などにつなげていく。

#### 実践内容

・部会員事業所（主に就労継続B型事業所）を利用されている当事者を中心にグループワークを開催。（支援機関も参加）  
・「一般就労に対するイメージは？」「将来の生活について」「当事者報告会の話聞いての感想は？」などといったテーマを元に意見交換。  
・グループワークで出た意見を踏まえて、今後の部会活動に反映していく。

#### 成果と課題

・色々な当事者と意見交換を図りたいという当事者のニーズを知ることが出来た。  
・様々な立場、境遇にある当事者同士だから、共感や気づき・納得感を分かち合える場となった。  
・当事者の意見を通して、改めて支援者が思い込みで決めつけていることが多くあることに気づいた。  
・当事者交流会自体が地域になじみがないため、会に参加しづらさがあった。

#### 今後の実践

・当事者が参加しやすい仕組み作りを一緒に構築する。  
・当事者からも周知していただけるように、会が地域の中で定着することを目指す。（通年概ね決まった時期に開催するなど）  
・就労支援部会だけでなく、他の部会などでも当事者と共に意見交換が図れるよう共有していく。

#### 当事者の声

各支援者がどこまで支援してくれるのかわからない（誰に聞いたらどこまで教えてくれるのか）。

・自分には体調の波があるので、「味方」「話を聞いてくれる人」をつくるのが大切という話が印象に残った。

話が遠回りに感じた。ざっくりばらんなイメージを持っていたので、距離感を感じた。日常的な工夫とかのほうがよくかった。

「なんで全部を分かってくれないの？」と思わずに、「この人、半分くらい分かってくれるなあ」と考えるようにしている。分かってもらうために時間がかかることもある。

以前の勤務先が冷凍工場の流れ作業だった。常に一定のペース、常時冷房、短い休憩時間、拘束時間が長いことがしんどかった。相談できる人もいなかった。

将来的には働きたいが仕事ができるのか心配。ストレスから体調不良になることも心配。

## 困難事例の個別支援

### 【就労生活と家族支援】

60歳 男性 精神保健福祉手帳2級（ADHD／アルコール依存症）ご兄弟（次男・三男）と同居

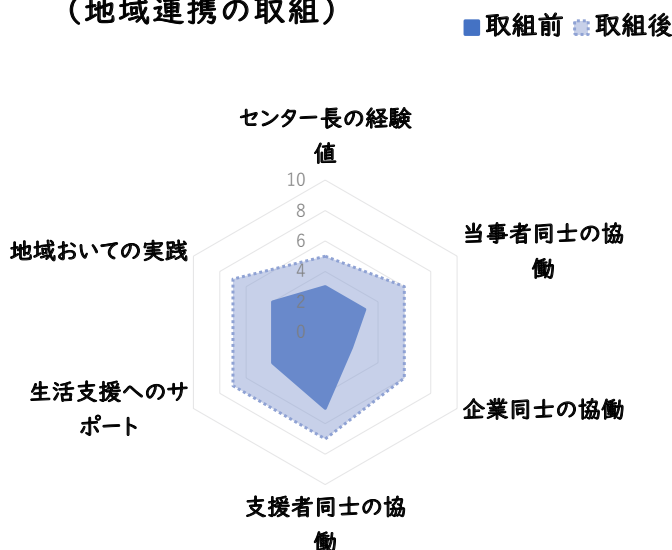
委託相談支援事業所からの相談をきっかけに一般就労に向けた相談を開始。障害者雇用枠で一般就労されるが、勤怠状況が思わしくなくこのままでは雇用継続が難しくなると会社から相談。勤怠状況悪化の要因として、①近隣トラブル（自宅が物で溢れかえっている）②アルコール依存症の自助会活動の維持の負担or重責③兄弟（三男）への支援（長年自宅に引きこもっているため支援につなげたい）といった3つの内容を、本人との面談で把握する。

### 【就ポツとして基幹機能を意識して対応した取り組み】

- ①社会福祉協議会・市議会議員や民生委員の協力もあり、自宅の庭にあった物を撤去し一時的に問題は解決した。家事援助などの福祉サービスの活用に前向きだが、次男が支援を拒否。  
⇒本人との定期的な面談で状況をお聴きし、支援を必要とされたタイミングで対応できる準備をしている。
- ②県内にある自助会が高齢化に伴い閉鎖寸前の為、維持存続のために自身が尽力されている。  
⇒自助会関係者との連携、相談支援事業所や医療機関など、活動周知と存続維持の協力
- ③支援機関などの情報を提供、提案する。  
⇒本人を介して、三男が支援を必要とされるまで様子を見守る。

## モデル調査事業を振り返って

### ビフォーアフター自己評価 （地域連携の取組）



### 【成果】

- ・当事者、企業の推進力。
- ・対話の機会が増加。  
（当事者・企業・支援者）
- ・ポジティブな空気感の醸成。

### 【課題】

- ・周知不足等による参加者の少なさ。
- ・課題性のズレ
- ・実践実績の乏しさ。

## 基幹の役割・定着支援について

・1人ひとりの“納得感” “チャレンジしたい！”などの想いを大切に、“はたらく” “くらす”を自身で主体的に選択できるように、本人の状況を量りながら後押しすることを大切に。

・縦割りの協働ではなく、当事者・企業・地域・支援者と共に、誰もが働きやすい暮らしやすい地域づくりを目指す協働の輪を広げていく。

定着支援地域連携モデルに係る調査事業セミナー

# 私たちのセンターは私らしい人生 (はたらく・くらし)と向き合う センターです



(徳島県)  
障害者就業・生活支援センター  
わーくわく 三並竜人 佐野和明



1.わーくわくについて

徳島県  
TOKUSHIMA

はくあい

わーくわく

わーくわく圏域内  
就労支援機関数

就労移行	17
就労定着	5
就労A	28
就労B	60

①登録者

2023年3月末現在

●手帳別・就業状況別の登録者数

	手帳別				合計
	身体	療育	精神	手帳なし	
在職中	54	507	175	7	743
求職中	3	10	16	0	29
その他	6	62	47	3	118
合計	63	579	238	10	890

よりそい

東部保健福祉圏域（わーくわくの担当エリア）  
の人口 499,093人 ※2023/3/1現在  
（徳島県人口の約71%）

参考資料

①登録者

2023年3月末現在

●手帳別・就業状況別の登録者数

	手帳別				合計
	身体	療育	精神	手帳なし	
在職中	54	507	175	7	743
求職中	3	10	16	0	29
その他	6	62	47	3	118
合計	63	579	238	10	890

②基礎訓練

2023年3月末現在

年度	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度
件数	57件	57件	30件	55件	27件

③職場実習

2023年3月末現在

年度	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度
件数	50件	48件	52件	56件	69件



④就職

2023年3月末現在

	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度
一般企業	78件	72件	68件	63件	64件
A型	27件	34件	27件	23件	31件

精神 25名  
療育 32名  
身体 5名  
手帳なし 2名

就職 → 職場定着



⑤職場定着



身体	療育	精神	手帳なし	全体(平均)
100%	97.4%	92.9%	100%	96.5%

※2021年度就職者の1年経過後の定着率

⑥相談・支援 (支援方法別) 2022年度分 (件数)

	身体	療育	精神	手帳なし	合計
センターへ来所	5	687	62	19	773
電話・FAX・メール等	290	2,824	1,312	58	4,484
職場訪問 (定着支援のほか、職場実習支援含む)	442	5,858	1,704	2	8,027
家庭・施設へ訪問	68	1,172	244	59	1,542
その他(関係機関とのやり取り等)	10	146	50	0	206
合計	815	10,687	3,372	159	15,033

⑥相談・支援 (支援内容別) 2022年度分 (件数)

	身体	療育	精神	手帳なし	合計
就職に向けた相談支援	113	665	484	12	1,274
職場定着の相談支援	502	6,539	1,909	32	8,982
日常生活・社会生活の相談支援	52	1,956	379	82	2,469
就業と生活の両方にわたる相談支援	148	1,527	600	33	2,308
合計	815	10,687	3,372	159	15,033

2.昨年度

定着支援地域連携モデルに係る調査 (取り組み)

PEOPLE

一人ひとりにできた小さなつながりが一番の宝物 = 地域連携の要

- 一人ひとりの支援や小さな繋がり  
の積み重ねを重視する
- 「就業・生活支援」の視点
- 長期的なスパンで伴走する支援

「当事者が学ぶ!そして支援者も学ぶ!」  
地域の活動(鳴門市就労支援部会)

- 語りべ活動
- お悩み解決プロジェクト
- 4名の本人と考える就活P
- 初めての障がい者雇用を支えるP
- よりリアルに当事者が学ぶP

企業ネットワーク・企業が主体となった活動を支える

- 企業による講演活動・情報発信
- 交流会の開催
- 毎月 企業同士の定例情報交換会
- 毎年 従業員表彰の実施

we are people first,

### 3.今年度 「当事者が学ぶ!そして支援者も学ぶ!」語りべ活動



- 働き続けないと働く喜びは得られない
- まず言われた仕事をこなす
- 自己理解と他者理解
- 自己変革・役割・感謝
- 仲間と居場所
- 人との出会いを大切に

- 迷惑をかけちゃいけない気持ち
- 味方づくり
- 理解のむずかしさ
- 配慮を求めすぎない
- 互いに歩み寄る姿勢が大事
- まず支持された通いに仕事を



### 3.今年度 企業ネットワーク・企業が主体となった活動を支える

#### 企業ネットワークが考えたこと

- 障がい者雇用の主人公は、障がい者と企業。
- 障がい者は企業で成長する。企業の戦力・企業の財産になる。
- 障がいのある従業員の輝きは、企業の輝き。
- 「企業」の重要性。
- 「企業」の重要性。



地方の小さな会社が成長するには個性を労力に変えるしかありません。彼らは今、わが社のスペシャリストです。

重度障がいのある彼らは働く喜びを知っている。働く仲間になった。彼らの働き・貢献はわが社の宝。



### 3.今年度 実施センターの取り組みで参考となったこと

- ・「本人主体・企業主体の活動」や「本人・企業の情報発信」を支えることから地域連携をつくろうという想い  
(もう同志だ！仲間だ！コラボレーションだ！)
- ・官民間わず、支援機関とのつながりが強い！！
- ・奈良5圏域のナカポツが定例会を開催。各種研修会の提供も！
- ・官民一体となって支援体制を構築する「はたらく応援団なら」
- ・県と労働局が主体となり冊子(「障害者雇用推進ジャーナルはたらく」)を定期発行
- ・多面的な取り組みの結果、民間企業実雇用率が全国第2位！！



### 4 私らしい働く暮らしや生き方と向き合うために ～基幹の役割や定着支援について～

- 「はたらく・くらし」「私らしい生き方・人生」と向き合うために定着支援は重要
- ナチュラルサポートを重視しつつ、生活環境(家庭、加齢、健康、家計)や会社環境(仕事内容、配置、人員、事業)の変化をさりげなく確認し、ライフステージにおける大きな変化を長期スパンで関わることで対応している。「はたらく・くらし」を長く続けていくことに寄り添える、伴走できるセンターでありたい。
- 「はたらく・くらし」に関するトータルな支援は一人(一機関)ではできない。チーム支援を意識している。ネットワーク(顔が見える関係)だけでなく、フットワーク(足でかせぐ関係)とチームワーク(同じ方向を見る関係)を重視している。
- (基幹のスタンス)ナカポツが中心だと勝手に決めない。だれ(どの機関)を頼りにするのは、本人が決めること。私たちは本人主体を支援したい。
- (基幹のスタンス)主導権争いではなく相手に花を持ってもらうことに尽力

## 5. 今年度の事例(わーくわく)

ハローワークを通じて相談開始。面談の中で、生活が困窮しており、子どもたちの暮らしを優先すると自身の食事をとらないような家計・生活状況であるが判明した。2児(小学生と園児)の子育てや家計を支えながら就職活動に取り組む必要があった。相談支援事業所、ハローワーク、企業、ヘルパー事業所、フードバンクの協力・支援を得て職場実習を行い、今春の就職を決定させた。

### **ポイント:食事や家計を支えながらの就職活動 :子育てと仕事の兼ね合いを支える連携**

- 連携機関
- ①基幹相談支援センター・相談支援事業所(月2回生活面の支援、手続き等)
  - ②行政(週1回、子育て課または福祉課)
  - ③ハローワーク(生活状況に配慮しながらの就職活動)
  - ④企業(家計や生活状況に配慮しながらの職場実習)
  - ⑤家庭生活支援員や母子・父子自立支援員(月1回・子育て支援)
  - ⑥ヘルパー事業所(週1~2回・家事援助)
  - ⑦子どもの居場所活動(週1回利用)
  - ⑧フードバンク(週1回・食材等の提供)

10

## 検討会委員のみなさまからのメッセージ

**(学識経験者)****朝日 雅也 氏 埼玉県立大学保健医療福祉学部社会福祉子ども学科 名誉教授**

2年間の「定着支援地域連携モデル調査事業」(以下、モデル事業)を通じて学んだことを記しておきます。障害者支援における当事者によるピアサポートの意義と効果については異論がないと思いますが、まさに支援センター同士の「ピア」な関係が今後の定着支援を確実にする原動力となることを実感しました。2年目のモデル事業では、初年度の取組み結果を手応えに、おそらく事務局の適切な采配で「相思相愛」のペアの組合せが実現し、まさに当初の想定を超える成果が導かれたものと思います。共に課題解決・改善に向かうピアサポートは、今後の支援センターの主体的な取組みの基盤でもあり、モデル事業の枠は終了しても、地域で、あるいは圏域を超えて、ペア、いや「バディ」として、相互にそれぞれの取組みを客観化しあう機会が広がるものと確信しています。6センターから12センターへ、12から24へと、「倍々」に展開していけば、337センターすべてがカバーされるのもそう遠い日ではありません。

その際には、「基幹センターの役割とは」、「スーパービジョンのあり方とは」、そして「地域連携の望ましい姿とは」といった課題について、従来の固定的な思考の枠組みから一旦解放されていくことの重要性も示唆されました。これまでの業務を落ち着いて見直し、本当に必要とされる役割とは何か…この命題に向き合っていくことが障害のある人の「就業生活」を豊かにするに違いありません。

**(学識経験者)****島村 聡 氏 沖縄大学人文学部福祉文化学科 教授**

今回取り組んだメンター方式のSVは3つの点でヒットしました。教え合う関係ができたことで互いの悩みも気兼ねなく話し合うことができたこと、自分の地域とメンターの地域を比べるために調査を実施してネットワークのあり方を客観的に見直す機会としたこと、何のためのナカポツかについて考えることで自分が行っている業務をゼロベースで見直して必要とされるカタチに組み直す機会としたことです。一方的な希望ですが、もし、全国のナカポツがこのような取り組みをしたなら、相当なパワーアップにつながり、今以上に躍動感のある地域の貴重な就労支援拠点として名実ともに認められるのではと思ったりします。そのような姿も決して夢だとは思えないほど、成果のある事業でした。

今後、就労選択支援といった意思決定支援を伴う、利用者の権利擁護においてもとても大切な業務を担う可能性があります。できれば公的な使命を帯びたナカポツに公正な立場から担っていただければという希望を持っております。今後とも地域の就労支援の要としてご活躍いただければ幸いです。

**(障害者就業・生活支援センター)****野口 弘之 氏 長崎障害者就業・生活支援センター 所長**

「地域の就労支援における“基幹型”とは？」 「ナカポツセンターの“本質”とは？」  
この疑問に対して、ナカポツセンター同士で想いや悩みを共感しながらモデル事業を実施していただき、また想定していなかった新たな気付きや発見につながる等の化学反応が生じる事もあり、ピア（ナカポツセンター同士）が融合し、その効果が存分に発揮されたモデル事業だったと思います。

ナカポツセンターが事業化して20年経過し、制度の変遷と共に働き方や支援ニーズも多様化する中、地域の特徴に応じた就労支援ネットワークの中核としての役割を担うことがナカポツセンターの真骨頂であることを再確認することができました。

今回のモデル事業は、地域連携の指標になると思いますので、ナカポツセンターや就労支援事業所の皆様が参考にさせていただき、地域連携を更にアップデートする機会になるように全国へ拡がることを願います。

本モデル事業に係る取組を挑戦していただいた「実施センター」の方、またそれをサポートされた「応援センター」の方に関しては、普段の業務と併行しながら積極的に取り組み、また報告書の作成も含め、本当にお疲れ様でした。

**(就労移行支援・就労定着支援事業所)****酒井 大介 氏 特定非営利活動法人全国就労移行支援事業所連絡協議会 会長**

厚生労働省の障害者雇用・福祉施策の連携強化に関する検討会の報告書では、ナカポツに求められることとして、『地域の支援ニーズに対し、各支援機関における取組が効果的かつ円滑に実施されるよう、今後、就業支援・生活支援双方における基幹型としての機能も担う地域の拠点として、地域の支援ネットワークの強化、充実を図っていくことも求められるのではないか。』と記載されています。

これを受けて始まった当モデル事業では、ナカポツがその地域で担うべき役割について、自分たちの地域資源や現状をアセスメントし、支援機関あるいはナカポツ同士が連携し底上げを目指したり、新たな資源を創り出したりと、課題を感じながらも普段は中々実現できなかった取り組みを实践する機会となったのではないかと思います。私はこのプロセスと実践が重要な気がします。そして、ナカポツの基幹型としての存在の仕方は、地域の課題や就労支援の目指す姿をよく知っているナカポツの皆さんが判断し、着実に実践することが要となるのではないのでしょうか。

ぜひ、オリジナリティのある取り組みが展開されていくことに期待します！そして取り組まれているナカポツの皆さんもモチベーションと誇りを大切にしてください！

**(就労継続支援 A 型・B 型事業所)**

久保寺 一男 氏 認定 NPO 法人就労継続支援 A 型事業所全国協議会 理事長

令和 5 年度『定着支援地域連携モデルに係る調査事業』に委員として関わらせていただき、非常に勉強になりました。令和 4 年度の調査事業には参加していませんでしたが、それだけ新鮮に感じました。昨年度の 10 センターの中から 6 センターが応援センターとなり、新たに実施センターを公募し選定し、ペアを組んでの取組過程における課題や地域特有の実情について調査することで、「基幹型」の機能・役割を再整理し、定着支援に携わる関係者との共有を約 5 か月間実施するという、大変面白い取り組みでした。2 月 28 日のセミナーで事業報告されたとおりです。

雇用と福祉の連携強化検討会のワーキングチーム「就労支援体系について」で、障害者就業・生活支援センターの機能強化について検討された経緯がありました。私は、当該ワーキングチームに関わった当時より、障害者就業・生活支援センターは、地域の就労支援事業所に、スーパーバイズに係る取組み「個別の支援事例に対する専門的見地からの助言及びそれを通じた支援の質の向上にかかる援助等」を行うべきだと考えていました。

確かに、抱えているケースの増加などの課題は多くあり、現在の業務の整理など取組むべき課題は多いと思いますが、一番重要な使命は地域の障害者就労支援の拠点業務であり、地域の障害者就労に関する情報収集とそのコーディネートであろうと考えています。その意味でも、2 年間の当該調査事業の成果の展開利用を、全国の障害者就業・生活支援センターの団体としての全国就業支援ネットワークの今後に期待したいと思います。

**(相談支援事業所)**

矢野 太亮 氏 大分市障がい者相談支援センター コーラス

ナカポツセンターに「基幹型」としての役割を求める。そう聞いたとき、私は率直に「ナカポツは大変になるだろうな」と思いました。おそらく多くのナカポツセンターの方々が「これ以上、何をどうすればよいのか？」と不安に感じたのではないのでしょうか？

しかし、この調査事業に携わり、全就ネットさんや検討会委員の方々の思いを聞かせていただいたり、モデル事業に協力いただいた応援センター・実施センターの皆様の取り組みを「セミナー」を通して目の当たりにすることで、私の「不安」は、これからの「希望」に変わっていきました。「就労」を通して障害がある方の地域生活を支えていく。それを一人ですようとすると「不安」ですが、チームや仲間と協力して取り組もうとすると気持ちがウキウキとしてきて「希望」に満ちてきます。私は今、障害者相談支援事業を行うセンターとして、自分の地域の連携体制を再構築していくことに胸を躍らせています。きっと近くのナカポツセンターの方も同じ思いでいてくれると思うので、このコメントを書き終えたら、まずは電話でもしてみようと思っています。

**(労働局)****日高 幸哉 氏 兵庫労働局 職業安定部 部長**

雇用と福祉の連携強化の議論から出てきた「ナカポツの基幹型の機能の強化」について、戸惑いや不安の声が多く聞こえてくる中で、当時障害福祉課にいた私自身も、さてどうしたものか、と思案する日々でした。

「基幹型」という言葉がやや一人歩きしてしまい、その言葉だけでは、障害者の就労を地域で支え続けていくために、改めてナカポツに担って欲しい役割は何なのか、ということがうまく伝わっていない状態だったのかなと、今になって振り返ってみると感じます。

そうした中で、何とか活路を見出せないかこのモデル事業を企画したのは、机の上で考えて、役所の立場から「これが基幹型です」と語るより、フィールドワーク的な実践から出てくるものを現場の皆さんに直接見てもらうことで、「基幹型」の姿も形成されていくのでは、という発想からでした。

事業主体となっていたいただいた全就ネットさんと、参加いただいた16のナカポツさんのおかげで、私の想像を遥かに超えて、パワーと魅力の詰まった中身の濃い取組の数々が出てきましたので、それらが今後、各地域においてナカポツの「基幹型」を作り上げていく種（タネ）になってくれることを期待しています。

**(企業)****大滝 容子 氏 株式会社王将フードサービス 人事本部ハートフル事業部 課長**

「なぜナカポツの対応は地域ごとに異なるのか」……ずっと気になっていました。これまで様々な地域で雇用に取り組み、様々なナカポツセンターと関わり合いがありますが、冒頭の問いについては明確な答えをずっと出せずにいました。今回このモデル調査事業に関わらせていただき、地域ごとに社会資源が異なるゆえに、それによってナカポツの機能や取組にもそれぞれ独自の特色があることを知りました。今後はナカポツセンターの役割が更に重要になっていくこと、企業も受け身ではなく地域の実情や個別の案件にあわせて優先順位を見定めていくことを学びました。同じ地域で障害者を支える仲間として、どのようにコラボレーションできるのか、想像をかきたてられるようなモデル的取組ばかりでした。

私たちは障害のある方が活躍人材であると確信しています。企業の立場ですので、これからも雇用を軸として関わりますが、障害のある方を支援する仲間として、ナカポツセンターと協力して活動できることを楽しみにしております。この調査事業を通じて、地域に根づいたナカポツの支援の取組が全国へ広がっていくことを切に願っております。

## 定着支援地域連携モデルに係る調査事業 第一回検討会 議事録

日時 令和5年6月16日(金)13:00~15:00

場所 オンラインによる開催

冒頭 出席委員の紹介および挨拶

議事

○進行(全国就業支援ネットワーク事務局・小澤) 本日は3つの議題を予定しております。まず「議題1 事業の内容・実施方法及び全体スケジュールについて」、「議題2 モデル的取組実施センターの選定について」、「議題3 今後の事業進捗報告について」の3点についてご説明をして、皆さまからのご意見を頂戴できればと思っております。早速、「議題1 事業の内容・実施方法及び全体スケジュールについて」に入っております。最初に藤尾さんから、事業の目的や効果等についてのご説明をお願いいたします。

○全国就業支援ネットワーク(以下、全就)・藤尾 ありがとうございます。では私からこの事業の目的・効果等についてということで、総論的なところをお話しさせていただきます。今回の事業は、昨年度(令和4年度)の調査を経て、今年度は実際に広めるというのが大きな目的になっています。昨年度の調査事業を進めるなかでわかってきたことが本当にたくさんあって、「やってみるとこうなんだな」という気づきが非常に多かったなという感触を持っています。特に地域の資源、実情に合わせた基幹型のあり方が必要なのだというところ、それから、これがナカポツ単体で動くものではなくて、地域資源との連携の中、もっと言ってしまえば、しっかりと仕組みとして機能するような形に持っていくことがとても重要だというところが、昨年度の調査事業の中で、ある程度確認ができたのではないかなと思っております。ですので今年度この事業を進めていく中では、一つは先程来お話がありましたように、昨年度の調査事業のなかで、先行しているセンターが、まだまだそういったところまで届いていないところについてしっかり指南をする。指南というか、同じような目線で事業運営をするようなきっかけをつくるというイメージだと思っております。最終的には、効果のところでは我々がこの事業を通して目指したいなと感じているのは、こういった事業がなくても自走していく、最後はみんなで地域をしっかりつくり上げていこうというような、自走するところまで持っていけないと継続的なものにならないでしょうし、さらに言えば面としても広がっていかないのだろうと思っております。そういった目的を持って、今回全体のプログラムを進めていって、一つでも多くのセンターが気づきを持って、さらにいいものやっぴいこうというところにしっかりたどり着く、そんなきっかけになって、結果的にはそういったセンターが338に限りなく近くなればいいなと思っております。この後、詳細については一つずつご説明をさせていただきますので、皆さんのご意見をいただければと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

○進行(小澤) ありがとうございます。では続きまして事務局から、資料1に基づいて、モデル調査事業の内容・実施方法についてご説明をさせていただきます。お手元に資料1をご用意いただけますでしょうか。一応昨年との比較バージョンということで、昨年と特に違うところを赤い文字にした

資料も添付させていただいておりますので、そちらも比較していただければと思います。この事業全体としては、だいたい6つのパートに分かれて推進していくことになっております。

まず最初が、障害者就業・生活支援センター（ナカポツセンター）における3つのモデル的な取組について課題を分析し、基幹型の機能・役割を整理するというところで、その3つの役割というのが、福祉系のサービス事業所に対するスーパーバイズに係る取組、困難事例に対する個別支援の取組、地域の就労支援機関との連携に係る取組、主に基幹型としてのこの3つの取組についての機能・役割を整理するということになっております。昨年の事業では、まずナカポツセンターの各地域の現状を大まかに把握するというところで、この段階で「全国悉皆アンケート」を実施して、そこで基幹型の機能・役割について整理いたしました。今年度においては、昨年度の調査事業で得られたデータや知見がございますので、その内容を再度精査することで、第1段階の基幹型の機能・役割を整理するということに取組んでいきたいと思っております。

続きまして2番目、ここからがこの事業の本番になってきます。昨年はいった3つの主な取組を、既に先進的、自立的に実施してこられた、いわば模範的なセンターの取組を調査するというところでしたが、今年度いただいた事業の仕様書では、このような取組を実施していなかったナカポツセンターでモデル的な取組を実施するということになっております。今回私どもでは、全国から6箇所の地域で、これまであまりこのような取組を実施してきていなかったセンターを公募して、そのセンターの地域において実際にモデル的な取組に取り組んでいただき、その内容を時系列に沿って調査していきたいと思っております。昨年ご協力いただいた10センターを除く全国328センターから、今年度のモデル的な取組実施への協力を希望するセンターを公募し、応募のあったセンターの中から、地域性とか、それぞれのセンターの成り立ち等を勘案しながら、6箇所を選定することにしております。このモデル的な取組実施にあたりましては、センターにお任せしてということではなく、昨年に発表していただいた10センターのなかから、指導的というか、先ほど藤尾さんからありましたように、一緒になって取り組んでいただくセンターをペアとして選び、全国6ペアで、実施センターと応援センターで取組を実施していただくことになっております。あと当法人の地域ブロックの担当役員と事務局が、都度その取組をサポートすることになっております。そして、このモデル的な取組と併行して、昨年度も同じ圏域内で意識調査というのを実施しましたが、昨年度は、この意識調査が11月以降の実施になり、なかなかその内容を取組に反映するところに至らなかったのですけれども、今回は、圏域内の就労支援機関意識調査を8月～9月に実施し、その調査結果の内容を、まさにモデル的な取組に取り入れていただくという計画をしております。そして、昨年は、既に取り組まれている模範的なところですので、ほぼそちらの取組をこちら側で現地取材をさせていただくという程度でしたけれども、今回は実際の取組を、こちらでも併走しながら一緒に取り組むということですので、センターごとのオンラインミーティングを、6箇所につき3回ずつ（開始時、中間時、終了時）開催して、進捗確認をしていきたいと考えております。この資料の2枚目に「モデル的な取組サポートの例」ということで、6箇所すべてがこのパターンのおりにいかどうかわかりませんが、まず前半で、実施することになったセンターがサポートしていただくセンターを現地訪問していただき、具体事例を通して取組のポイントについて学んでいただき、その際には可能な限り、地域連携の会議や研修会等に見学という形で参



加していただきたいと思っております。前半でこのような取組をしていただいた後に、ここで学んだノウハウや意識調査の結果を活かして、後半に自分たちの地元で、先ほどの3点のモデル的取組を実施していただきます。後半になりますと、今度は指導していただく側、サポートしていただく側の先輩のセンターが、今年度の実施センターを現地訪問していただいて、取組を確認していただいたり、その際に、できれば、そちらの地元の会議や研修会等に参加していただくということを計画しております。先ほど申しましたように、ブロック担当役員や事務局が、このような双方の現地訪問等にも同席したりして、必要なサポートを行っていく予定です。2番目の「モデル的取組と意識調査の実施」というのが、この事業の一番中心となる主な活動になるかと思っております。

この活動を踏まえて、3番目の調査報告書をまとめさせていただきます。昨年度は既に出来上がっているというか、しっかりやっていらっしゃるセンターの報告でしたので、そちらから出していただいたものを、そのまま使わせていただくという形でしたけれども、今回は、一から取り組むというところですので、それぞれの立場からの報告書をいただいたうえで、事務局のほうでしっかりと調査報告書を作成したいと思っております。昨年度はおいしい料理の写真を10種類お示ししたみたいな感じですが、今回はそのレシピも付け加えたような調査報告書にしたいと思っております。

事業の4番目は、昨年度と同様に、ナカポツセンターや福祉サービスの職員、その他行政・教育機関等も含めた事業報告セミナーを開催して、この事業の取組内容の周知啓発を実施いたします。今年度も2月下旬にウェビナーによるオンライン形式でセミナーを開催する予定です。

事業の5番目のポイントは、この事業の具体的な内容・方針を検討するため、関係者・有識者による検討会を開催・運営するということで、その第一回目が、本日この委託事業の内容の検討ということで皆さまにお集まりいただいております。第二回目は、来年（令和6年）3月上旬、この事業の結果の報告、あるいは最終報告書の取りまとめにあたって、皆さまのご意見を頂戴したいと思っております。昨年度は、モデル的取組を実施するセンターの選定というところで、途中で第二回というのを開催させていただき、皆さまからのご意見をいただいて、当初7センターというところが、復活折衝も受けて、最終的に10センターでやることになりましたけれども、今年度については、どのセンター、どの地域で、この取組を実施するかに関しては、昨年度の経験もございまして、ペアを組むということではいろいろな条件もありますので、また、決まり次第ご報告は差し上げますが、その選定のために検討会を開催してお集まりいただくということは、今年度はしない予定でおります。モデル的取組のセンター・地域の選定にあたっては、最終的に確定する前に、委員の皆さまに候補としてお示しをしたいと思っておりますし、それ以外にも、事業が進んでいくにあたっての途中の進捗状況については、適宜メールでご報告させていただきたいと思っております。昨年度は調査報告と事業報告がほぼ同じような形でご提出を差し上げましたが、今年度は、3番の調査報告書と最後の委託事業の報告書というのは、別物と考えて取り組んでいきたいと思っております。3番目の調査報告書は一般公開を前提として、それとは別に委託事業の報告書ということで、厚生労働省へ提出するものは別途作成していきたいと考えております。

ということで、駆け足になりましたが、事業の内容と実施方法について、ざっとご説明をさせていただきました。全体のスケジュールのイメージを、資料2でお示ししております。資料2「事業の全体スケ

ジュール」ということで、まず本日の第一回検討会から始まり、6月・7月くらいをかけて、昨年の事例の精査、基幹型役割の再整理という作業を進めてまいります。今の予定では、6月27日にモデル的取組実施センターの公募を開始し、7月中には実施するセンターとそれをサポートするセンターのペアを確定したいと考えております。実際のモデル的取組は8月から12月の5ヶ月間かけて実施してまいります。まず8月上旬、お盆休み前には、6地区ですべてキックオフのミーティングをしたいと思っております。先ほど申しましたように、9月までには就労機関の意識調査を完了し、その内容を各地域にフィードバックする予定です。10月下旬の折り返しのところで中間のミーティングをオンラインで実施し、12月下旬には最終のミーティングを6箇所で開催する予定です。(令和6年)1月中旬にこの取組の調査報告書を取りまとめ、2月に事業報告セミナーを開催いたします。それを受けて、3月上旬にまたお集まりいただき、第二回検討会でご意見をいただければと思っております。そして、最終的な事業報告書を3月下旬に報告するという、このようなスケジュールを想定しております。

それでは、ただ今の説明につきまして、委員の皆さまから、ご意見やご質問等を頂戴できればと思いますが、朝日先生から口火を切っていただけますでしょうか。よろしくお願いいたします。

○朝日委員 どうもありがとうございました。ご丁寧なご説明ありがとうございます。また今年度もお声掛けいただいたことを心から感謝しております。昨年度は10の事例というところで、最後のセミナーでもそうでしたけれども、今、小澤さんが「おいしい料理10種類」というふうに例えられましたが、本当に一つ一つの取組の奥深さとモチベーションの高さを、セミナーなどでも感じさせていただいて、そのうえで少し全体的な観点からコメントさせていただいたことをよく思い出しました。ありがとうございます。まず今年度の調査事業の性格付けなのですが、私の感想というか、受け止め方でございます。やはりナカポツセンターのいろいろな、特に基幹型としての役割をきちんと展開していくためには、ナカポツセンター同士の関わり合いのなかで進めていくということが大事なので、あまり言葉としては出ていないと思いますが、これはやはりナカポツセンター同士のピアサポートによる展開だということを感じたところです。そういうようなところを、全体のなかで打ち出していくというのもいいのかなど。いろいろな関係するところとか行政機関が、ナカポツのあり方について、もちろん支援したりアドバイスをすることは大事なのですが、大変なことも含めて、同じナカポツ同士で、背景や地域が違っててもピアな関係性のなかで助け合っていくとか、学び合っていくとか、高め合っていくという、そのような調査事業になるのではないかなということを感じながら聞いていたところです。一つ単純な質問で続けてしまっていますか。これから公募をかけるわけですね。それで、実際にはいくつかの、これまでの10事例で関心があるところなどをエントリーしていただくということなのですが、これは受託の仕様書のところは存じ上げないのでわからないのですが、例えばエントリーするナカポツセンターにとってのインセンティブとか、もちろん究極のインセンティブはそこでの課題解決だし、支援力の増強に違いないのですが、何か違う、例えば、どこかに行ったり来たり、遠いところに来ていただいたり、特に指導を受ける、今回参加されるナカポツセンターからすれば、いろいろ行ったりするので旅費もかかるでしょうし、いろいろコストもかかると思うのですが、そのあたりは仕様書上、何か整備されているのかというのが、要するに何がインセンティブかというところでちょっと気になったというか伺いたいのが一つ。もう一つは、これは調査研究

事業をしていくうえで、やはり重要な要素として、ブロック担当役員とか事務局で、その取組について参加して、訪問して、進捗状況を確認したり、いろいろな追加のアドバイスをすることなのですけれども、先ほど松浦さんがおっしゃったように、これがいろいろなところでのモデルとして有効に機能していくために、どうやって指導、もちろん指導という言葉がいいかどうかということはありませんが便利なので、指導を受けるナカポツセンターと、指導するところの関わり合いのなかで、何が変わっていったかという、それはつまずきとか、少し違和感も含めて、何が変わっていった、そのときにどのようなことが効果的だったのかというのを、たぶん当事者同士のピアのところではわかるとは思いますが、それを客観的にどなたかが変容のプロセスをきちんと記録して、それをまた組み立てていくと、まさにいろいろなところに汎用性が高いノウハウとして展開していけるのかなと、そのようなことを思ったところです。すみません。長くなりました。口火といいながら、ちょっとしゃべりすぎました。お許しください。

○進行(小澤) 朝日先生、貴重なご意見ありがとうございました。まずインセンティブと申しますか、費用については、今回の事業予算のなかで特にここに使いたいと考えております。昨年度は現地取材に一日お付き合いをいただくのと、事業報告セミナーの資料をつくっていただいて当日発表していただくということで、それに見合う謝金を10センターにお支払いしましたけれども、今年度は、もう少し取組にかかる時間とか労力もかかるということで、昨年度の4倍ぐらいの謝金を、実施センターとサポートしていただくセンターの両方にお支払いをして、無理のないように、追加の取組で当然時間も取られますし、労力も使っていただきますので、そこのところは一応、そんなに莫大な謝金ではございませんが、ふさわしい金額をご用意しております。そしてご指摘いただいた移動等の交通費は、すべてこちらの予算の中からお支払いをするということで、そこも自己負担等がないようにと考えております。ピアサポートについて客観的な確認が必要ということも、本当におっしゃるとおりだと思います。それで今回は、現地任せにはせずに、3回ほどオンラインのミーティングをしっかりとポイントを実際立たせていくということと、だいたい昨年度の10センターの現地取材を担当していただいたような、その担当役員が、同じく今回も追加サポートで入っていただく予定でおりますので、そこで先生からご指摘があったような、当事者だけではない第三者的な、客観的な視点も踏まえて課題を整理していくことができると、そういうつもりで計画を立てましたけれども、今のご指摘をいただきまして、まさにここがとても大切なポイントだなとあらためて肝に銘じていきたいと思っておりました。藤尾さん、よろしいでしょうか。

○全就・藤尾 ありがとうございます。今先生がおっしゃったように、特に最初にお話しいただいたピアサポートの体制ということなのですけれども、ちょっと話がそれますが、去年実際に調査事業でやった後、千葉の協議会では、あそこで発表したセンターに、今度は県内のセンター向けにやってもらったのですね。県内のセンター向けと申しますが、県内のセンターだけではなくて、そこに関係機関が集まっている調整会議の場で、発表したセンターと、そうではないところも、あれに倣って自分のところのセンターを、「じゃ、あれに倣って評価したら、どういうセンターだろうか」というのを、「私たちのセンターは何々センターです」というので取り組んでもらって共有する場を設けました。冒頭の挨拶でも言いましたが、やはり自走する仕組みに最終的になっていくことを考えたときに、今回の

元々の仕様には入っていないのですが、最初の企画提案のときに入れさせていただいたのですが、やはり県レベルのネットワークの構築であったりとか、他のセンターときちんと情報共有ができて、技術が移転できるような仕組みを、最終的には構築するということまで持っていきたいなと思っていて、それのきっかけになっていったらいいなと考えています。以上です。

○朝日委員 はい。よくわかりました。あと、公募して応募されるところが確保できるといいなという思いと、そのためにも、そこまでいろいろなお配慮をいただいているのであれば、まさにチャンスなので、そういったところがうまくPRされるといいのかなと思いました。以上でございます。ありがとうございます。

○進行(小澤) ありがとうございます。では続けて、島村先生、よろしいでしょうか。

○島村委員 ありがとうございます。3つほどちょっと確認があったのですけれど、1つは、たぶん朝日先生が後段でおっしゃっていた話と近いのかなと思ったのですけれど、これを報告書にまとめていくというのを、僕はどうしても先に画いてしまうのですね。そのときに、どんなことをまとめていくのかなというところが非常に気にはしています。つまり今回は横展開というやつですよ。いわゆる一つのセンターのノウハウを、ほかのセンターに波及させていこうという狙いがある、そのこと自体は僕も非常に納得していて、面白い取組だなと思っているのだけれど、それを横展開したときに、たぶん出てきた課題とかをまとめるイメージをお持ちなのだろうとは思っただけだけれど、課題というだけでは当たり前課題が出てくるだけになりそうな気がしていて、そのときの手法というか、まさに支援する手法、どのように支援していくことによって、どういった効果が得られたとかという、ちょっとした効果測定的なことまで踏み込んでいくのかなというところなどが、私のなかで課題というかポイントかなと少し思ったのが一つです。これが1点目です。もう1個は、前回も参加させていただいたなかで、10センターの報告を見て、あらためて見てみて、3本柱がありますね、スーパーバイズ、困難事例の個別支援、関係機関とのネットワークですけれど、この3つのなかで、10センターが全部3つともフルカバーしているわけではなかったように思うのです。特異なものがあったという感じ。としたときに、A圏域のなかのところは、スーパーバイズができていうところからとて、憧れて、憧れてというか教えてもらいたいなという感じになっていくのかなという、僕の認識が合っているかどうか。3つのポイントを全部やってしまうという話なのか、それともそこに特化していくという試みでいいのかというところの疑問というか確認というのがある、それはそれでどちらでもいいと言えはいいのですが、という確認です。それともう1個は、8月か9月に行く意識調査というのがあって、意識調査というのは、ごめんなさい、どういう意味で、何を目的にやっていくのかというところを、うまく聞き取れていなかったのですけれど、それをまた還元して波及させるということでしたから、何を知りたいか、つまり今回の展開をしていくにあたって、受け手となっている人たちが何を知りたくて、というところをやはり意識調査としてやらないといけなかなというところがある、そこは興味深いのですが、その仮説みたいなものが何かあるのかどうか。以上です。

○進行(小澤) ありがとうございます。それではまず先に事務局のほうからお答えをさせていただきます。まず1点目、横展開をしたうえで課題を見い出して、最終的に手法とか効果についてまとめるというところでございますけれども、これについては、1月に作成する調査報告書というのは、

6地域ごとのそれぞれの課題とか、それに対する対応について、先ほど言いましたように、昨年度よりはもう少し段階的なもの、ポイントに分けて説明したものをつくりたいと思っております。それを、6地域のさまざまなところをさらに勘案したものを、最終的に3月の厚生労働省に提出する事業報告には加えていきたいという二段構えで今年度は想定しております。実は昨年度の第三回検討会で、朝日先生と島村先生からいろいろアドバイスをいただいたのですが、それを最終の報告書になかなか反映することができずに、事務局としては忸怩たる思いがあったのですが、今年度は1月の段階で、各センターの取組の内容をしっかりと分析というか、先ほど言いましたようなレシ皮的なところまでは1月の段階の調査報告書で作り上げて、それをまた比較検討した報告書を、もう一度事業の報告書としてつくりたいと考えております。2点目の3つの取組、これは昨年度にご指導いただきましたように、3つとも平均的にやるというよりも、特に必要とされているものに特化して、場合によっては2つになるかもしれませんし、この3つというのは完全に独立してばらばらということではないので、地域によっては3つともやるところがあるかもしれませんし、6センターのなかでは、この1つのことだけを中心にとすることがあるかもしれません。そこは、ピアサポートのペアをつくるときにも、少しその辺の内容も勘案しながら取組センターの選出をしていきたいと思っております。3点目の意識調査については、基本的には昨年度に行ったのと同じで、こういった取組についてご存じですかとか、役に立っていますかとか、どんなところが、ということの内容なのですが、これも昨年度にご指摘いただいたように、例えばスーパーバイズと言っても、こちらが思っているスーパーバイズと、福祉事業所が感じているスーパーバイズというのは、言葉の意味が通じていないかもしれないので、意識調査をもう少しわかりやすい言葉で具体的に書いて、生の声を拾っていけるようなものにして、地域からナカポツがどう見られているかということをしっかり踏まえたくて、ネットワークづくりとか、困難事例に関わる、あるいはスーパーバイズするということに参考にしていただきたいという、そんなことを想定しております。藤尾さん、補足をお願いいたします。

○全就・藤尾 ありがとうございます。1点目のところは本当におっしゃるとおりで、まとめたもので課題が出てきて、その後どうするのだというのは、ただ課題についてはある程度予測がついているものもあるので、これに関しては、こういった資源としっかりつながっていかねばいけないとか、こういった仕組みにしっかり入っていかねばいけない、中に入らない場合はつくらなければいけない等々、そこは何か想定ができるものと、できなくて新たに見つけたものという分かれ方をしてくるのかなと想定しております。それから2つ目の3本柱なのですが、先ほど事務局からも説明があったように、独立していない、特に去年、私は4箇所調査に回ったのですが、そのとき感じたのが、コミュニティが小さければ小さいほど、すべて網羅している場合が圧倒的にあります。一方で、広がれば広がるほど、どれか1個、もっと言ってしまえば、ネットワークを何とかしようというところに注力しているところというふうに分かれてくると思うのです。これは5ヶ月間の事業のなかでどのようにしてやっていくかということを見ると、特にネットワークの部分に関していうと、調査の時もそうだったのですが、モデル的な取組をしているところの年間スケジュールのなかで効果的なところを見に行くというのが、まず最初のハードルになって、それを今度は自分たちの地域でやるというのを12月までになると、結構タイムスケジュールがタイトで、たぶんこれに取り組むとなると、そこに一点集中になるのではな

いかなという、それでもかなり時間がぎりぎりになるかなと思っています。成果として上げるのであれば、どこか1箇所をしっかりと成果として上げるという視点で取り組んだほうが、効果としては非常に見えやすく、ほかの方々もこれを見て、「うちも取り組んでみよう」という意欲にはつながっていくのかなと感じています。それと3つ目の意識調査なのですが、今お話があったように、どういうふうに見られているのか、ちょっと言葉を換えると、何を求められているのかというところに近いと思うのです。これはナカポツセンターがスタートしてから言われてきていたのですけれども、「センターは法人のものじゃなくて地域の資源だよ」というところに立ち返らなければいけないと考えていて、ここ数年ナカポツのことを、ナカポツのなかだけで考えている部分というのが少なからずあって、ここにしっかり地域の声を入れていく、さらに言うと障害福祉を取り巻く環境も、どんどん、どんどん、裾野が広がっていて、厚生労働省の方、ごめんなさい、言い方はわるいですが、障害福祉と比べると、労働のほうが少し遅れていると思うのです。そうすると、地域課題というのをナカポツだけで考えていると、やはり足りない部分が結構あって、そこに対して地域と連携を取っていくうえで、われわれに新しい視点が入ったりとか、これで一番面白かったのは、「ナカポツは敷居が高い」という回答がやはり多いのです。これは単純にナカポツの敷居が高いのではなくて、たぶん立っている立ち位置とか目線が違うところなので、それを共有するという意味で、この意識調査というのはすごく大きな気付きをナカポツ側に促すことになるのではないかなと思っています、そういった視点で取り組めるといいかと考えています。以上です。

○島村委員 ありがとうございます。今の藤尾さんの説明でよくわかったのだけれど、2番目の話は、例えば札幌なんかあったけれど、あれを真似するところは絶対ないと思う。だから結局真似ができることというのは限られてくるのだなというのは、ちょっと直感的に思っていたので、となると、ある程度できる圏域も絞られていくなという印象があって、そのうえで、かつできる事業も当然限られていくのかなという印象があって、そういう意味で絞ったほうがいいというのは、僕も全くそう思います。逆にこちら、それぐらい仕掛けていったほうがいいかなと。事務局サイドとしても、「絞りなさい」と言っていたほうが安全なような気がしてならないというところ、それをちょっと考えていました。ありがとうございます。

○進行(小澤) ありがとうございます。酒井さん、どうぞ。

○全就・酒井 島村先生、ありがとうございました。1点目の効果をどういうふうに測るのかというところで、事務局内でももう少し話をしないといけないのですけれども、我々のネットワークで10年ぐらい前に、ナカポツの自己評価のシート、自己評価の仕組みみたいなをつくっているのですね。例えば今回モデル事業にエントリーした6センターで、モデル事業をやる前と、全部終わった後に、もう一回自己評価をやってみて、どんな変化があったのかというのを、そこである程度の効果測定ができるのかなと、今お話を聞きながら思っていて、我々でつくった自己評価シートですが、ぜひそれを何か活用できたらなと、今お話を聞いて思いました。

○島村委員 ありがとうございます。やはり「EBPM」と言って、要するに政策評価をデータできちんと取るというところが、今絶対にやらなければいけないと言われているので、たぶん厚生労働省もそれは外から求められてしまうところもあると思うので、そういった使用前・使用後型の評価は、やはり

やったほうがいいかなと思いますので、ぜひ、ご検討いただければと思います。

○朝日委員 すみません。今の議論に関連するので、忘れないうちに発言してしまってもいいですか、度々恐れ入ります。まさにその効果測定のいろいろな手法があって、自己評価を中心として自己点検をして何が変わったかというのもすごく重要だと思います。それから、先ほどの島村先生のご質問にあった圏域内の就労支援機関の意識調査は、藤尾さんからもご説明いただいたように、やはりそれは、イコール今回モデル事業を実施する圏域が、ナカポツセンターに対してどういう意識を持っていたか。本来は、それがモデル事業を通してどういうふうに変容していったかという、そちらを、本当はビフォーアフターだといふとは思うのですけれども、そこが、どうしてもタイミングだとか、問題もあるので、ちょっと考えられるのは、もちろん最初に、ナカポツセンターが地域の就労支援機関からどういうふうに見られているのかという意識を踏まえて、それをモデル事業の後半の実施に活かしていくと、こういうスキームだと思います。それはそれで一つの重要な要素なので、例えばその将来の課題として、そんなに負担にならなければ、当該モデル事業を実施するナカポツセンターさんで、その圏域に同じような意識調査を自ら行うような、そういう可能性も併せて示しておく、それこそ、もう少し中長期に、その取組がどういうふうの評価され、結果的にナカポツセンターのプレゼンスが地域のなかで高まっていくかということになると思いますので、そのように考えるといいのだと思いました。すみません。忘れないうちの発言でございました。

○進行(小澤) ありがとうございます。この事業だけで終わってしまわないように、継続していけるものはぜひ全国にもっと広げて続けていきたいと思いました。ありがとうございます。では続きまして、ナカポツセンターのお立場ということで、野口委員よろしいでしょうか。

○野口委員 説明ありがとうございます。では私のほうから同じナカポツとしての感想と、一つ疑問点がありますので、その2つをお伝えさせていただきます。まず感想なのですが、ナカポツは社会資源とか地域の特徴もさまざまな中、今回の事業で、私自身も基幹型としてやれているという自覚もありつつも、ほかのセンターの取組を聞くと、あらためて認識できたこともありますので、ナカポツとしては、よい意味で非常に刺激があって、相乗効果も高まって、全体的なナカポツの支援とか質が高まればと思っているところです。特に以前は、実習とか、就職とか、相談件数とか、こういった実績が求められていましたが、数年前から、コーディネート件数とか、ネットワーク件数という、基幹型としての件数も求められているようになりますので、そのきっかけがたぶんこれではないかと思っております。もう一つ、一方で疑問になったのが、資料1にありますように、6センターを応募ということで、取組が実施していなかったナカポツセンターが今回は対象になりますけれども、「していなかった」というところがちょっと疑問になりまして、マンパワーとか人材不足のところなのか、そもそもノウハウとか経験が浅くてしていなかったのか、この理由がどうなのかというのが非常に気になったところです。ただいずれにしても、取組はこれからですが、横展開していったら、全体的なナカポツの支援の質が高まるように、障害者雇用も数値だけではなく、雇用の質が問われるように、支援の質も問われる時代になってきたと思いますので、ぜひ、今後の事業も期待を大きく持って、楽しみにしておきたいと思います。以上です。

○進行(小澤) ありがとうございます。藤尾さん、よろしいでしょうか。

○全就・藤尾 ありがとうございます。おっしゃるように、できていない理由、もっと言ってしまえば、一番考えたくないのは、法人の理解がないとか、いろいろな理由があって思うような動きができていないという場面があると思うのです。ただ、去年のモデル調査事業をやった後、問い合わせが非常に多くて、近隣でも茨城のセンターは、今年度に入って、千葉のほかのセンターの見学に行ったり、あるいは今度の千葉の協議会の定例会を見に行きたいというふうに、「きっかけがあれば動くんだな」というのを今回実感しました。それでも動けないということが今度見えてきたら、次の手は打たなければいけないのかなとは思いますが、現段階では、やりたいけれどもどうしたらいいかわからない、あるいは急にこの立場になってどうすればいいのだろう、なかなか周りに聞けない、というところがターゲットになってくるのではないかなと思っています。ご指摘いただいたように、うまく動けていないということには、さまざまな要因が複合的に絡んでいる場合があるので、この場合のことは、また今後ネットワークとしても検証していきたいなとは思っています。ありがとうございます。

○進行(小澤) ありがとうございます。では続きまして、酒井大介委員、よろしく願いいたします。

○酒井委員 はい、酒井です。ありがとうございます。私は今年度から委員として参加させていただくのですが、だいたいの流れも承知しました。何か感想めいた話になりますが、ナカポツが中心となって地域の就労支援の底上げをしていくというのはとても大事ですし、この事業がそのきっかけになればいいなとも思います。そのなかで、私は就労移行支援の立場ですが、私たち就労移行支援とか、あるいは地域の就労支援機関が底上げをされていくというか、ナカポツの連携をもとにしていくわけですけれども、今回の取組のなかでも、実際スーパーバイズを受ける側の意識調査もされると今お聞きしましたが、受け手側の評価といいますか、そういうことも積極的に拾っていただければなど、そういう支援を受けてどうだったかという具体的な評価も受けていただければなど思いました。以上です。

○進行(小澤) ありがとうございます。では続きまして、継続支援A型・B型のお立場で、久保寺委員、ご意見、ご感想、ご質問等お願いいたします。

○久保寺委員 私も今回から参加させていただいて、内容については事前に見ておいたことと、今回の説明を受けまして、だいたい把握できたとは思いますが、実は冒頭に言いましたように、私のところもナカポツセンターもやっていて、かなり忙しくしているのを承知しています。個別のケースに追われて、とても基幹型も担うということができるかどうか、現場の代表と話をしたときにそんな話が出てきています。昨年度にモデル事業をされて今年度ということなのですが、昨年度との違いを、すみません、不勉強で申し訳ございません、その違いをもう一度説明を、基幹型ということに絡めるのかどうかということをご説明をいただきたい。それから、A型・B型の立場とすると、定着支援ができましたので、ナカポツセンターに相談をおんぶに抱っこみたいところが少し軽減されるのだと思うのですが、私はそこら辺もよくわからないものですから、どういうふうにお考えなのかをお聞きしたいという、その2点です。すみません。お願いします。

○進行(小澤) ありがとうございます。藤尾さん、よろしいでしょうか。

○全就・藤尾 ありがとうございます。昨年度との違いに関していうと、昨年度はあくまでも調査だ



ったのです。モデル的取組、これは先ほど久保寺さんが、「基幹型」というキーワードをおっしゃっていたのですけれども、「基幹型のあり方というのは地域資源によって変わるよね」というところをお示したのが、去年のモデル調査事業になります。なので先ほど事務局の小澤さんから、「おいしい料理を並べた」というような言い方をされたのですが、出来上がっているもの、こういったあり方もありだよ、Aパターン、Bパターン、Cパターン、Dパターンみたいな形で、地域の資源量によって基幹型の役割が変わるというところをお示したのが去年の調査事業です。今年度に関しては、これを広めていくというのが主な目的になっていて、昨年度実施したモデル調査事業で、「この取組をうちもやってみたいな」とか、「うちの圏域でこれができたらいいな」というものに手を挙げていただいて、二人三脚で、手を挙げたセンターの地域で、去年度モデル的に取り組んだものを実際にやってみようというのが今年度の事業です。ですから、去年は調査してパターンを確認する、今年はそれを広めていくというのが大きな違いになっています。冒頭言われていた、「忙しいなかで」というところは、まさにその通りだと思うのです。これは、ちょっと事業とずれてしまうかな、大丈夫かな。「忙しいなかで」というところに関していうと、それは、本当に日本全国のナカポツで、皆さんが異口同音に言っているのですけれども、一方で忙しくなくなるにはどうすればいいかという、やはり地域の資源力の向上だと思うのです。地域全体で支えていく仕組みをどう築いていくかというところなので、「周りとしっかりと連携を取って、そこを軽減していきましょう」という動きに、どこかでつなげていきたいというのが、この事業のなかの、私のなかでは1つの目的だと思っています。その横の情報共有が、おそらく県内のナカポツであったり、もっと言ってしまえば、県内の支援機関との連携のなかでできるのではないかなと思っています。先ほど定着支援事業ができたから軽減されているのではないかなというようなお話しがあったのですが、これは、実際に移行支援事業所から、定着支援事業ができる前と後で比べると、就労直後の登録というのは本当に激減したのです。最近では、移行から、「就職したからお願いします」というのはほぼない。逆に、「間もなく3年が終わるので登録してください」という、こちらは激増しているのです。だからある意味、ずれたという考え方、定着支援事業の3年間によって、登録するタイミングがずれたというケースが結構な数があるかなと思っています。もう一つ、ここで定着支援事業の方々とは共有をしておかなければいけないと思っているのは、3年間にどういう支援をしたかによって、我々が受けるバトンというのは変わってくるのです。これはこれまでも課題になっていましたが、就労定着支援事業はあくまでも障害福祉サービスで本人の支援をしてお金が発生する。一方で職業リハビリテーションにおける我々の就労支援というのは、いかにフェイディングしていくかという、就労の現場では、です。もちろん生活支援がフェイディングしていくわけではないのですが、いかに就労の現場でフェイディングしていくところがポイントになっているので、ここのずれが、3年間で結構がちがちにずれてしまっているパターンというのも少なからず見受けるのです。このあたりは大きな課題だと思っていて、今回の就労定着支援事業のなかの、例えば、スーパーバイズであったり、困難事例であったり、こういったなかでこういったふうに物差しを合わせるという言い方はちょっと違うかもしれないのですが、「こういうところを目指していきましょうね」ということを一緒に考えながらやっていけるというのは大きなポイントになるのではないかなと感じています。何となくご回答になっていればいいのですが、よろしく願いいたします。

○久保寺委員 ありがとうございます。

○進行(小澤) よろしいでしょうか。では続きまして、労働局のお立場で、日高委員からよろしく願いいたします。

○日高委員 すみません。ありがとうございます。既にここまで昨年度の事業をやっていたなというのを振り返りながら、2年目はこういうふうに進めていけるといいだろうなと思っていた形を、まず事業の概要として用意をしていただいていると感じましたし、各委員の皆さま方からそれについて、「もうちょっとこうできるんじゃないか」という前向きな話とか、ご指摘も含めていただいた点も、本当にその通りだなと思いながら、まずは全体としてお聞きしていました。それでちょっと感想めいた話にはなるのですが、私のほうでいくつか思ったことをお話しさせていただくと、昨年度の事業は、基幹型と言われたときに何をやればいいのかということがまずよくわからない、というところがたぶんスタートラインで、「だいたいこんなことをやればいいんだな」ということが、何となく皆さんに理解をいただけたというところが到達点だったのかと思って、それはすごく大きなワンステップだったかなと思っています。今年度は、何をやればいいのかは何となくわかったけれど、「じゃ、どうやってやればいいのか」、具体的にやり方というのは何なのかというのがまだわからない状況だと思うので、そこがわかるようにしていく。今年度の事業が終わった後には、自分たちでやっていけるセンターができるだけたくさん出てくるというのが、この事業が一番目指すところなのかなということを感じています。そのなかで先ほど酒井さんから、「過去につくった自己評価のものを使ってみようかな」という話がありましたけれども、やはりどういう変化があったのかということ、正味5ヶ月間という短い事業期間のなかではありますが、自分たちの外側、地域の各機関の変化ということもそうですし、欲を言えば、自分たち自身の変化もどうなのかということも含めて、こういうところが変わったとか、あるいは変えていかなければいけないということがわかったとか、ぜひそういうところも光を当てていただければなと思いました。あとは細かい話にもなるのですけれど、一つ事業の中身のなかで、最初の項目で、昨年度の事業の精査、再精査というところも書いていただいて、これも非常に大事なことで、2年続けてやっていただけるからこそその要素かなと感じて、非常にありがたいなと思っています。概要のなかにも、そのエッセンスは書いてあったかなと思っていて、取組実施に至った経緯や背景要因等を総合的に分類できているとあって、まさにこのとおりかなと思うのですが、各10センターはそれぞれいい取組をしていただいている、それは本当にいろいろな経緯があって、あるいは個々の職員さん、スタッフさんの力もあってということだと思うのですが、何でこれができていったのかということが、先ほど話した、次の、「今やっていないところがどうやってやればいいのか」のヒントにすくなるはずなので、単純に何がされていたかとか、どんな数字的な成果があったかとかという部分だけではなくて、「なぜ」みたいなところを、昨年度の振り返りのなかでもできるだけ掘り下げていただければなと思いました。あとは一つは質問で、応援センターを担っていただくところが去年の10センターのなかから適宜選ばれるのかなと思うのですが、これは今の段階で、「そういうことをやっていただく可能性がありますよ」みたいなことは承知をいただいているのかなというところが一応気になりました。あとは、昨年度もやったようなセミナーを2月にやっていただく、これも事業の中身として非常に重要というか、広げていくための取組としては一つ大きなものかなと思っています。昨年度のセミナーも

本当にいいものだったなど。業務の都合でリアルタイムできちんと聞けなかったのは非常に申し訳なかったなど思っていたのですけれど、振り返って見ても、すごくよかったなど思っています。ただ今年度は中身も違うというか、取り組む各センターの出自も違ってくる、性格も違うということもありまして、取組方も若干違うので、今度検討会をやるのは最後になってしまうので、ちょっと先の話ではあるのですが、どんなものにしていこうみたいなのが、もしイメージがあれば、去年の違いかも含めて、ちょっと教えていただければなど思いました。すみません。それぐらいです。

○進行(小澤) ありがとうございます。では、まずご質問の点ですけれども、昨年度ご協力いただいた10センターは、事業が終わって最後に個別にお話をしたときに、「もし来年度もこのような調査事業があったときには協力させていただきます」と、すべてのセンターからご快諾をいただいております。そのうえで、「今回はこういった企画でやっています」というところで、個別に4センターには既にお声がけをさせていただいております、おそらくここは行列ができるのではないかなというところを中心に、そこはすべてご快諾をいただいております。それ以外の6センターについても、個別にこの企画について細かく説明はしていませんが、ご協力いただくことには承知していただいております。そして、事業周知のセミナーについてですが、今のところはまだはっきりとした企画があるわけではないのですけれども、前はどちらかというと、各自がそれぞれの立場から発表をしていただいて、配信会場には3つのセンターだけが集まっていたらいいシンポジウムをしていただきましたけれども、今回はペアで実施するということがありますので、極力単独の発表というよりも、掛け合いで深め合えるような企画ができればという、まだそのくらいの漠然とした案しかございません。藤尾さん、いかがでしょうか。

○全就・藤尾 ありがとうございます。今ご指摘いただいたものが、たぶん両方にかかってくるのかなと感じたのですけれども、実際に何でできているのか、できているところとできていないところがあるのかというのが、1層、2層、3層ぐらい層に分かれているような気がしていて、表面的にはこれだけ資源があるからだよとか、2層目に入ってくると、そのなかで仕掛けをしたからだよとか、その先に行ってしまうと、ひょっとしたら法人の理解であったりとか、キーパーソンがいたからとか、どんどん、どんどん多岐的に、深さによっても変わってくるのかなと思うのですけれども、逆にそこを、今ご意見をいただいたので、これから事務局とも相談をしますけれども、ペアで出してもらって発表してもらってセミナーではあるのですが、そこを整理した形で発信ができると、ひょっとしたら今皆さんからご意見をいただいている、「なんでできたのか、どうすればいいのか」というところが、より具体的に、実際に取組内容まで含めて発信ができるのかなと感じています。かなり難しい作業にはなると思うのですが、そういった視点を持って、事業報告セミナーに向けて準備をしていただければなど感じました。まだまだこれから練っていく最中なので、ご意見ありがとうございます。

○進行(小澤) ありがとうございます。日高さん、よろしいでしょうか。

○日高委員 わかりました。ありがとうございます。目線はそんな感じですがすごくいいかなと思っていますので、おっしゃっていたような、掛け合いというか、やりとりというか、「大変でしたね」みたいな話もちろん含めて、皆さんに共有していただければいいのかなと思います。

○進行(小澤) はい、ありがとうございます。昨年も障害福祉課のご協力をいただいて、広く周知

をしていただいたおかげで、行政とか教育機関の方にも参加していただきましたので、今年度も福祉系事業所に限らず、もう少し幅広くナカポツの存在とか、活動を知っていただく機会ということで、オンラインですので定員がありませんので、できるだけ多くの方に参加していただくような企画にしたいと思っております。では、最後になります。大滝委員、ご感想、ご質問等よろしくお願いたします。

○大滝委員 はい。いろいろお聞きして、いろいろなことを思い出していたのですけれども。私たちも労働者だけではなく企業もサービスを受けられるとか、支援を受けている立場であるのですけれども、最初ころ障害者雇用を初めてやったときというのは、私も、現場で一緒にやる人間も、初めて障害者雇用をした素人しかない集まりから始めたところだったのです。そのときに支援機関の方に本当にお世話になって、初めての子育てのような状態で、「今日は泣いたんです、熱が出たんです、元気がないんです」みたいなのを、「どうしたらいいですか」というのを、結構こまめにやりとりして、サポートしてもらったなというのを思い出しました。ただわからないことが多くて、不安だから聞くのですが、徐々にやりとりをして、「あ、この子ってこういうタイプなんだな」とか、「こういうことがあったから、こんなふうに卒園したんだな」とか、いろいろなことがわかると、相談がなく自分たちで解決できるということがすごく増えていったのです。なので、企業もただ与えてもらうだけではなく、ともにつくと、よりよい支援サービスになるのかなとか、これからつくろうという仕組みが安定するのかなというところは、まず感じました。私自身、今、特例子会社が、当社は埼玉と京都にあって、それ以外も店舗の採用で、特に大阪とか、奈良とか、滋賀とか、こういったところで重点的に雇用しているのですけれども、初めての地域にお邪魔するときとか、雇用を広げるときに、ハローワークとか、ナカポツさんとか、学校さんとか、いろいろなところを回っていくのですが、全然反応が違うとか、こういうことはここがやるんだというのが、頼るところがまた違うなというのは、実際すごく感じてきました。なので、地域によって全然違うし、相談が、ここはできるけれど、ここはできないなというところは思っていました。今でも福祉サービスというか、どこまで誰が何をしてくれるかというのは、今でもまだわからないところがあるのですが、そういったところがクリアになっていくと、もっともっと積極的にやろうという会社さんも多いのかなと思っています。で、今回の質問なのですが、去年のモデルケースに対して、さまざまなナカポツさんが手を挙げて参加されるということだったのですけれども、それぞれチャレンジするナカポツさんの先には、労働者の方と企業があると思うのですね。この企業というのも、選ぶことで成功事例というのもつくりやすい、失敗事例も必要なのだとは思いますが、やはりやってみようと思うのは、成功事例を示すというほうが、やってみようと思うのかなというところは思ったので、わかりやすいとか、誰でもできるというところをつくるために、企業も手を挙げるとか、どんなふうを選んでいくのかなというところは、ちょっと気になりました。で、何をすると失敗かとか、どんなふうに変えると成功かというところが企業の視点でも伝わると、さらにナカポツさんに対しても協力的に動くとか、仕組みづくりになっていくのではないかなというところは感じた次第です。すみません。ちょっとまとまりがないのですが、よろしいでしょうか。

○進行(小澤) ありがとうございます。貴重なご意見ありがとうございました。昨年度の10センターの選定にあたりましては、当然ご本人に対する支援の実績はもちろんなのですが、これは検討会のときに朝日先生が、「支援の双方向性」ということをおっしゃって、やはり雇用する側の企業も

取り込んだ、企業の協力を引き出すことができるような取組ということも、選定のなかの条件に挙げさせていただきましたので、10センター全部とは言いませんが、そのうちのいくつかのセンターは、そういったことを選定の基準にさせていただきました。おそらく今回は、あまりこういった取組をしていなかったセンターというのは、もちろん企業とのそういう関係性というのは非常に希薄で、あまりそういう実績がないところかなとは思っていますので、そこも含めた先輩センターとのコラボレーションで、そういったところも学んでいただければなということは、とても期待しております。大滝さんのように、全国のいろいろなナカポツセンターとお付き合いがあって、同じナカポツでも極めて多様だということを感じておられる方のご意見もぜひ反映しつつ、この事業を進めていけたらなと思っております。

○大滝委員 ありがとうございます。

○進行(小澤) 藤尾さん、いかがですか。

○全就・藤尾 ありがとうございます。今回、今のモデル的な取組とはちょっとずれるのですけれども、冒頭つくらせていただいた企画提案のなかに入っている全県的なネットワークの構築、要は千葉で言えば、千葉のナカポツセンターの協議会に当たるのですけれども、こういったものの役割のなかにも、関係機関との情報共有・意見交換・協議というのが入っているのです。これは何かというと、やはり一センターが一企業とやりとりをしても、「あんたのところはやってくれるけれど、あんたのところはやってくれないよね」みたいな、今まさに大滝さまがおっしゃったように、「センターの差があるよね、やり方も違うよね」という状況ができてしまうと思うのです。ところがそれを、横のつながりがあって、「こういう支援が必要だね、こういったあり方がいいよね」ということが、ある程度平準化されていると、そういうことを企業とのお付き合い、あるいは連携のあり方ということができて、企業というのは、一圏域でとどまらないではないですか。一つのセンターを相手にするわけではなくて、例えば、千葉県にある企業でも、千葉のなかの何圏域かのナカポツとの連携というのが発生するので、そういったときに齟齬がないようにということで、今ナカポツセンターも、企業体との意見交換とかをやるのです。こういったものが、一方でこの事業のなかで、ネットワークを構築するなかにも落とし込めていけるといいのかなというのは考えています。これは今回、実際に企画提案のなかに入れさせていただいた大きなポイントの一つになっていますので、ぜひ今いただいたご意見なども参考にしながら進めていただければなと思っております。ありがとうございます。あと、ぜひ千葉にも王将がありますので、ぜひ寄っていただければ、うちの近所にもあります。よろしく願いいたします。

○大滝委員 はい。千葉も大きい店舗がありますので。ありがとうございます。

○進行(小澤) ありがとうございます。では、今まで委員の皆さまからのご意見と、事業者からの回答も踏まえまして、委託元の松浦補佐、いかがでしょうか。ご意見、ご感想等いただけますでしょうか。

○松浦委員 皆さま、それぞれのお立場から、貴重なご意見、ご指摘をいただきまして、ありがとうございました。私としても冒頭のあいさつのところで、「目指すべき何か指針のようなもの」というようなことを申し上げたのですが、皆さま、いろいろな言い方をされていたかなと思います。レシピだったり、支援の手法とか、どのように進めていけばいいかという着眼点は似ていたのかなと感じました。今回、昨年度のいい取組のところを再分析していただけますし、新たに10センターが、まだできてい

なかった6センターを支援していくなかで、取り組み方というか、プロセスの部分が浮かび上がりやすいのかなと思いますので、そこをポイントとして整理して、年度末までにまとめていけると、この事業はすごくいいものになるのではないかなと、すごく楽しみな気持ちでおります。実際に進めるにあたっては大変だと思いますが、ぜひまた皆さまの協力もいただきながら進めていければと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。ありがとうございました。

○進行(小澤) ありがとうございます。佐藤専門官もよろしくお願いいたします。

○佐藤委員 ありがとうございます。私も皆さまのいろいろな議論の観点を拝見して、一つ付け加えるぐらいでしかございません。一つ小さい話ですが、動き出してペアが決まっていく段階になりますと、おそらくそれぞれ別の地域のナカポツの皆さんが顔を合わせると、ないとは思いますが、こういった取組に手を挙げていただくので、そんなことはないと思うのですが、例えばその地域に対するダメ出しというか、あそこがいけない、ここがいけないとか、ないと思うのですけれど。当初もしかしたら、そういう批判に終始したり、あるいはダメ出しに終始したり、あるいは今回いろいろ教えてもらう立場のセンターが、「いや、うちって、こんなによくないですよ」みたいな、卑下するようになってしまうと、ちょっともったいないなと思います。時間も限られているので、そういった周囲の条件は、地域ごとで当然ばらばらなので、そこを踏まえて、ペアになったセンターがどうやったらいいかなという前向きな議論からスタートが切れるように、最初の大きな方向付けができてスタートを切れると、限られた時間のなかで建設的な意見が集められるのではないかなと思っております。いらぬ心配かもしれないなと思いつつのポイントでした。受けていただく、これから取り組むセンターの皆さまについては、先ほど最後のセミナーをどうするみたいな話もありましたが、今回は本当に教えてもらう立場なのだけれども、終わったならば、おそらく事業終了後、地域に戻ってから、今度はむしろその方が牽引役になっていただくよりいいなと思いますので、スタートからではありますが、「地域に戻ったら、今度は自分たちが教える側かな、引っ張っていく側かな」みたいな意識も持ちつつ意見を聞いていただくと、より吸収も早まるのではないかなと思った次第です。以上です。

○進行(小澤) ありがとうございます。では1番目の議題、「事業の内容・実施方法及び全体スケジュールについて」は、検討をここまでにしたいと思いますが、もし何かございましたら。

○朝日委員 一つだけ。

○進行(小澤) はい。お願いします。

○朝日委員 時間がないなかで申し訳ございません。ありがとうございます。今の議論にも関わりますが、これまであまり実施していなかった6箇所のナカポツセンターさんに協力いただくので、ナカポツセンター各位で、藤尾さんから出される文書で、「あまり実施していなかった」ところを選ぶというところで、変な言い方ですが、あまりやる気がないところが、それこそ、それにも手を挙げないということかもしれませんけれども、やはりそこで、先ほど動機付けとかインセンティブというお話しをしたので、このあたりの表現が、意味合いとしては、やりたいと思っても、いろいろな諸般の事情で、必ずしも十分に実施していなかったのですよね、べつに実施してこれなかったのが悪いので、悪いところは手を挙げてくださいという意味ではないというニュアンスの文章でもいいのかなと。そのためには、これを変えないとしても、それははっきり言ったほうがいいのだということであれば、このままにし

て、参考資料2-1ですが、やはり調査事業の主体者側が、ノウハウを具現化して広げていくのだという論理だけではなくて、参加してもらうと、結果的に参加した当該センターと、その圏域におけるナカポツセンターの役割や就労支援の輪がもっと確実に広がっていくという、そういうプラスのインセンティブ、プラスというか、そういうような声掛けがあってもいいのかなと思いました。私はたぶん結構メリットは大きいと思っているので、みんな手を挙げていただけると思うのですが、やはりマッチングというか、ペアリングがすごく大事なので、そこら辺で、ある意味、志があって、先ほど佐藤さんがおっしゃったように、自虐で、「やっぱりうちは駄目ですよ」というのを口に出されてしまうのではなくて、そこは前向きに取り組めるというところをうまく表現していけるといいなと思いました。すみません。以上です。

○進行(小澤) ありがとうございます。今ご指摘いただいた点も含めて、次の議題2のなかで、「モデル的取組実施センターの選定について」というところで。

○朝日委員 ごめんなさい。申し訳ないです。そこでしたね。失礼しました。

○進行(小澤) はい。そこにもつながっております。参考資料2-1・2-2・2-3という、この内容をこの検討会で議論いただいた上で、本日ご欠席の矢野委員のご意見もいただいて、6月末くらいに発信をしようと思っていたところです。今、朝日先生からご指摘いただいたところは、私どものなかでも少し議論があったところで、どういう発信の仕方をするのかということですので、今の先生のご意見のように、発信の案内の文書とか、エントリーシートについて、ご意見等をいただきましたらありがたいと思います。実は、昨年の事業報告セミナーに当ネットワークの会員でないナカポツセンターが参加されて、「セミナーがとてもよくて、自分たちもあなりたい」と言って入会していただいたセンターが2センターございまして、そういったところも含めて、ちょっと可能性を信じて、「やる気はあったのだけれども、どうしていいかわからなくて、でも、ぜひやってみたい」というところは、少なくとも6センター以上は手が挙がると、こちら側は勝手に期待をしているところなのですけれども。ただ、やはり呼び掛けの仕方は、本当に丁寧にやらないといけないなどは感じております。今、朝日先生から早速ご意見をいただきましたが、ほかの委員の皆さま、協力をお願いの文書とか、エントリーシートについて、もう少しここは工夫したほうがよいというようなことがございましたら、ご意見をいただけますでしょうか。ここはランダムにご意見をいただければと思いますがいかがでしょうか。事前の打ち合わせで、厚生労働省のほうからは、エントリーシートに昨年の事業報告書を参照するURLも記載するようにというアドバイスをいただきまして、事業報告セミナーに参加しなかったセンターでも、興味を持っていただけるように、という改良はしております。日高さん、お願いします。

○日高委員 すみません。ありがとうございます。あまり私がしゃべると、元課長補佐が、「こう書いて」というみたいな感じになりそうで、ちょっとあれなのですけれど。先ほど朝日先生がご指摘いただいたポイントは、私もここはキーだと思っていたので、そこが議論になるのは非常に有益だなと思いつながらお聞きしていて、小澤さんからもご説明がありましたが、一旦つくった段階でも議論があったという感じだったのですが、ほかのポイントで、例えば、参考資料2-1・2-2・2-3のなかで、事前の調整でURLという話が出たというのはありましたけれど、この辺を、今日の方で話してもらえたらいいなと思っていたような部分というのは、例えば、ほかにもあつたりしますか。何となく去年、こうい

うやりとりをしたときには、「それは検討会で話してもらえばいいかもしれないですね」みたいなやりとりをしたような記憶もあるので、もし、何か思っているものがあつたらお示しただけると、皆さんがご意見を出しやすいかもしれないなと思いました。

○全就・藤尾 小澤さん、今、日高さんから言われたように、どこか集中的にということであれば、1丁目1番地は、「あまり実施していなかった」という表現のあたりなのかなという気がしますね。どこまでこれを、例えば、モデル的取組に手を挙げたいと思っているセンターという形にするのか、能動的な形にするのか、それとも、この形で残すのか、逆に、やっているところが手を挙げてくる可能性もあるというも、確かやりとりのなかにあつたような気がするし、「さあ、どうしましょう」というのは、ぜひ、この場で皆さんからご意見をいただいたほうがいいかなと思うのですが、いかがですか。

○進行(小澤) はい。おっしゃるとおりです。仕様書では、「あまり」もなく、「実施していなかった」だけだったので、それを「あまり」と付けて優しくしたのですが、それでもちょっと足りないかも。島村先生、よろしいでしょうか。

○島村委員 「これから、この取組を実施しようと考えている」という表現でいいのではないかなと。してこなかったというよりは、「これから取り組もうと考えておられる事業所」でいいのではないかなと。そういうふうになれば、同じことではあるけれど全然違うかなと。

○進行(小澤) はい。ありがとうございます。そこに、先ほど朝日先生がおっしゃったような、「これは、ただ基幹型の役割を再整理するとかではなくて、地域で必ずフィードバックがありますよ」ということも、一言付け加えて。

○朝日委員 そうですね。実施者側の論理だけではなくて、「受けてくださるところは、当然その圏域も含めて何かプラスになるはずですよ」というのは、添えてもいいのかなと思ったところです。

○進行(小澤) ありがとうございます。応募が殺到しすぎて選定に困るのもちょっと、それはうれしい悲鳴ですけれども。日高さんからアドバイスをいただいた点なのですが、差し当たっては、6センターの選定と、最初のキックオフのミーティングまでをしっかりとやって、後は手を離れてからは、今日ご指摘いただいたようなところをきちんと確認しながら、ずれないように見守っていきたいとは思っているのですけれども、ほかにも、そういったあたりの着眼点でアドバイスをいただけましたら、ここは忘れないようにとか、ここは押さえておくようにというのがありましたら、ご自由に、6センターの選定に限らずご意見をいただければと思いますが、いかがでしょうか。特段、今日のところはよろしいでしょうか。それでは、今いただいたアドバイスをもとに、案内文書のほうは、もう一度作成して、矢野さんのご意見も聞かせていただいたうえで、6月末までに、メールにはなりますが、もう一度皆さまにもお示したうえで、発信をしていきたいと思っております。エントリーシートのほうも、特段よろしいでしょうか。これは、あくまで最初に提出していただいたものをもとに、去年のエントリーと同じように、事務局のほうで、電話・メール等で詳しくヒアリングをしていきますので、最初のエントリーはすごく簡潔な内容にしてはいますが、よろしいでしょうか。

○日高委員 すみません。一つだけ。ごめんなさい。エントリーシートそのもの話ではないのですけれど。ちょっと議論が戻るようで恐縮なのですが、例えば、基幹型的な役割・機能に関して、去年、最初に全体の状況をアンケートしたときにも、「過去にはちょっとやっていたけれども、うまくいっていな



くて今はやっていない」とか、「今やっているんだけど、実際はうまくいってなくて、ほとんどやれていないのと同じような状態」みたいな、完全に全くやったことがないという意味で、もちろん今までやっていないということもあって、「実施していません」というのにもレベル感があるなど、そういうところも意識をしていたなというのを思い出して、その辺のことまで全部想定して、「あまり実施をしていなかった」を、先ほど島村先生からご提案があったような、「これから実施したい」と変えていくというのも一つありだなと思いつきながらお聞きしていたのですが、一言で言い尽くすのはすごく難しいなという感じがちょっとしています。これは、実際手を挙げるかどうかというのは、たぶんナカポツ自身としても、当然検討があると思うのですけれど。ところによっては、場合によっては、法人のなかで一応きちんと思意思統一というか、決を採るとするか、ある意味、法人の偉い人に相談しなければいけないこともあり得るのかなということを想像すると、やはりわかりやすいほうがいいし、「うちは、これに合致しているのでやりたいです」と説明しやすいほうがいいのかなと思ったときに、例えば、こういうイメージのセンターですとか、こういう状況のセンターですみたいな、何か例示が2つか3つぐらいあるとわかりやすいのかなということを少し思いました。もし過去にはやっていたけれどとか、ちょっとはやっているのだけれど、実際はうまく回っていないとか、そういうところも範疇に入れていいという判断なのであれば、そういう例示を入れるのもありかなと思います。以上です。

○進行(小澤) ありがとうございます。では、ここのところに、そういう2~3のケースを付け加えた形で一度作成してみたいと思います。

○全就・藤尾 すみません。今、日高さんが言われたところは、「なるほどな」と思って聞いていたのですけれども、そもそも基幹型の役割を自分たちができているのか、これでいいのかということからスタートしているので、そういう意味でいうと、今お話しいただいたように、自分たちのところがやれているのか、やれていないのかという判断が付かないところも、少なからずあるのだろうなどは感じましたので、「ゼロか100かで言ったら、ゼロじゃないよな。でも、100にはほど遠いな」とか、いろいろなパターンがあると思うので、今お話しいただいたように、いくつか事例を挙げるというのはいいなと思いましたので、ちょっと相談してやってみましょう。ありがとうございます。

○進行(小澤) では、「議題2 モデル的取組実施センターの選定について」というところは、一旦今いただいたご意見やご指摘等を踏まえて、少し案内文書等も手直しをしていきたいと思っております。配布する前にまた皆さまにお示ししたいと思っております。では、最後、「議題3 今後の事業進捗報告について」ということで、この先、現段階では、次の検討会は来年の3月になってしまいますので、事業の進捗のたびに、中間の報告をメール等で差し上げたいと思っております。今申しましたように、まず取組センター選定の案内文書を発信する前に、一度最終版をお示ししますし、また、7月末までに6センターがこちらで内定した時点で、また、皆さまにお示しをしたいと思っております。基本的には6センターで予算と体制を組んでいます、場合によって、プラス・マイナス1くらいがあるかもしれませんが、そのようなときにはご相談させていただくこともあるかもしれないと思っております。そして、その後は、実際の取組の中間ミーティングが終わったところに、進捗状況をまたご報告させていただく予定でおります。それから、事業報告セミナーのある程度素案が固まったときにも、こういった形で開催する予定であるということもお示しさせていただきたいと思っております。そのよう

に適宜事業の段階ごとに報告させていただき、皆さまからの貴重なご意見をいただければと思っております。この点につきまして、ご意見等はございますでしょうか。よろしいでしょうか。それでは、一応本日予定していた議題についての検討は以上でございますが、残り少し時間がございますので、お一方ずつ、この事業に対する期待とか、付け加えて申し入れておきたいところがなどございましたらお願いしたいと思います。では逆の順番で、大滝委員からよろしいでしょうか。

○大滝委員 そうですね。私自身、障害者雇用を立場的にしなくてはいけないというところから、今は人材としてすごく広がりがある世界だなというのは思っています、だから、どんどん深く関わっていているのかなという思いがあるのですけれども、先ほども話したと重複するのですが、与えてもらうではなく、私たちが工夫してこんな手法ができたとか、そういうのは企業のなかにもたくさんあると思っています、まだまだ出ていない、結構自分たちのなかで当たり前だと思っていたものなどもたくさんあると思うのです。そういったところを、少しでも今回の事業のところに、私たちだけではなく、ほかの企業さんたちも出るような形でいい仕組みというところに繋がると、ナカポツさんにとっても、働く方にとっても、企業にとっても、いいものになるのかなと思っていますので、私自身もそういう意識で参加したいというのはあるのですが、企業の意見が届くようなものになってほしいなと思います。以上です。

○進行(小澤) ありがとうございます。では日高委員、よろしいでしょうか。

○日高委員 ありがとうございます。そうですね、今日の皆さんの議論を聞いていても、メンバーを見たときから、昨年度以上に、一回りも二回りも充実した形で、この事業を回していただけるのだろうなという想像をしていて、今年度はそのイメージどおりの展開になってきそうで、本当にありがたいなと思っています。自分がこういう形で関わらせていただくのも、今日参加させてもらって結構面白いなと思ったので、ちょっと言い方は不謹慎かもしれませんが、ぜひ楽しみながら、この事業を展開していかれる様子を、1年間見守っていければなと思っています。なかなか障害福祉全体で見たり、就労支援全体で見ると、ナカポツの基幹型ということのほかにも、昨年障害者雇用の法定雇用率の話もありましたが、本当に取り巻く状況が大きく、昨年の法改正、前の検討の段階から大きくここ1~2年で変わっていくという状況にあるなかで、基幹型ということだけではないナカポツのあり方だとか、より一層の働き方、企業に対する貢献度をどういうふうにしていくのかということに、一つ大きくつながっていき得る、そういう取組になるのかなということは、昨年度以前からも感じていましたので、本当にこういう素晴らしい皆さんにご協力いただきながらできるというのはありがたいなと思いますので、引き続きよろしくお願ひしたいと思います。今日はありがとうございました。

○進行(小澤) ありがとうございます。では久保寺委員、よろしくお願ひいたします。

○久保寺委員 ナカポツセンターの機能が強力になって、かなりの指導的立場をしていただけるのは、一般就労に結びつく影の力になるのではないかと、私個人的には前から思っています、今回の調査事業が、モデルとして本当に機能できるようなものがお示しできればありがたいなと思います。大変でしょうけれども、よろしくお願ひします。

○進行(小澤) ありがとうございます。酒井大介委員、お願ひいたします。

○酒井委員 今日は出張先からのアクセスで、あまりうまく話ができませんし申し訳ありませんでした。基

幹型はこれから求められている役割ですが、あまり敷居が高いというか、「こういうセンターだからできるんだ」というような形にならないように、どんなセンターでも取り組めるのだというような、最後、そういう結論というか、事例が示されればいいなと思っています。楽しみにしています。

○進行(小澤) ありがとうございます。では野口委員、お願いいたします。

○野口委員 今日本当に皆さんのご意見が、私も非常に参考になり、勉強させていただきました。ありがとうございます。ナカポツは先駆的な取組をしているところ、それを学ぼうと前向きにきているところ、様々だと思います。ナカポツもニーズが多様化していて、基幹型の役割としても求められていますが、やはりナカポツの横のつながりですね。今、全国就業支援ネットワークも、確か6割ぐらいが入会していると思いますし、だから全国のアンケートを採っても、あいにくアンケートの回答率も、たぶんそこまで高くないというのもあるので、まだ足並みがそろっていないというのが現実としてありますので、ぜひこれを、これもたぶん知らない人も多いと思いますので、モデル事業で横展開していくにあたっては、あわせて、まだまだ浸透していないナカポツにも、ぜひ発信をしていくように、私も努めていきたいと思っています。今日は皆さま、本当にありがとうございました。

○進行(小澤) ありがとうございます。では島村先生、よろしいでしょうか。

○島村委員 ありがとうございます。先ほど野口さんがおっしゃった点、僕が感じている点と野口さんの考えと近いなと思うところがあって、それは、ばらつきかな、それぞれ意識が全然違うなという、沖縄などを見ていると感じるときがあって、いい・わるいという感覚ではなくて、やはり地域の状況に相当翻弄されているというほうが近いのではないかなと思うのです。アンケートを採ったときにも出ていたのだけれど、地域のなかの社会資源、つまり就労移行や就労定着が少ないという意見が、かなりのパーセンテージ、110件ぐらいから寄せられていたと思うのです。そういった環境にかなり左右されるというのが、ナカポツセンターの宿命みたいなものだろうと思うのです。全国一律に配置されたせいなのですが、だからこそ、このことをどう打開するかというのが、すごい大事な点なのではないかなと。地域の实情に合わせた手法をしっかりと身につけていって、そこを何とか社会資源を興しながら、「友達を作りながら」という表現が一番近いかもしれないけれど、やり抜けていくのかということなのかと思います。僕が先ほど今回のやり方はいいなと言ったのは、それを横展開するという、お互い同士で広げようとしているという点が、非常に評価できる点ではないかなと思います。そういう意味で協力できたらいいなと思っていますので、よろしく願います。

○進行(小澤) ありがとうございます。今年もよろしく願います。では最後に朝日先生、よろしいでしょうか。

○朝日委員 ありがとうございます。冒頭にお話ししましたように、今回の調査事業のキーワードとして、「ナカポツのことはナカポツ同士で、ピアな関係で、お互いを高めていく」と、このコンセプトはすごく大事にしていっていただくといいなと思いました。で、ちょっとスケジュール的なところで、2月の下旬に事業報告セミナーがあって、まさにペアとなって取組されたところが、そこで生の声でご報告して、事務局としては、それまでの関わりのなかで全体を俯瞰することがあると思うのですけれども、2月下旬のセミナーで、横並びで6ケースを見たときに、そこにかなり共通するものが、もしかすると、さらにそこで抽出できるのかなということ、3月の報告には時間は短いのですが、これは、やはり非

常に重要なタイミングで、先ほど日高さんがおっしゃったように、私も、その部分は楽しみにしていますし、また、その場面で私なりに貢献できればと覚悟を決めたところでございます。どうぞよろしく願いいたします。

○進行(小澤) ありがとうございます。よろしく願いいたします。では、もう一度委託元からも一言ずつお願いいたします。よろしいでしょうか。

○松浦委員 皆さま、ありがとうございました。今回ナカポツの基幹型の機能・役割を整理するだけに留まらず、ナカポツ同士の連携とか、地域の就労機関との連携とか、そういうところも深まっていて、既にナカポツは地域になくはならない存在にはなっているかと思うのですけれども、この事業を通じて、さらにその存在感が増すようになればいいなと感じております。1年間よろしく願いいたします。ありがとうございました。

○佐藤委員 ありがとうございます。私も伝えたいところは、すべてお伝えしたところでございます。おそらく今、「基幹型」というキーワードに対して、ナカポツの皆さんが、期待もあるし、不安も感じながらというところはあると思いますので、「どうしていけばいいだろう」と不安を抱えているセンターの方々に、今回の取組が一つのきっかけであったりとか、いろいろなアイデアを出す一つの種になるといいなと思っております。どうぞよろしく願いいたします。

○進行(小澤) ありがとうございます。では、実施事業者のほうからも一言ずつお願いします。

○全就・酒井 今日はお忙しいなかありがとうございました。それぞれのお立場で、本当にさまざまなご意見を聞けて、この事業は今日からキックオフですが、すごく深められたのかなと思います。あらためて考えてみると、ナカポツセンターという一つのセンターのことを、企業の方とか、さまざまな支援機関とか、行政とか、これだけさまざまな立場の人たちが、ナカポツのあり方について、さまざまにご意見をいただけるというのは、やはりそれだけ求められているものとか、期待されていることがすごく大きいのだなということ、皆さまからのご意見をお聞きしながらあらためて思いました。先ほど朝日先生が、「ナカポツのことはナカポツで」とおっしゃいましたが、10年前に自己評価シートをつくったときも、やはりナカポツのことは自分たちできちんと自分自身で評価をして、見直していくことが必要という、そういう意識でつくった自己評価なのですけれども。今回の事業を通して、あらためてナカポツとしての自覚を、それぞれのセンターに促すということになるのかということ、今日はあらためて感じました。今年度もどうぞよろしく願いいたします。

○全就・藤尾 皆さん、お忙しいなか今日はありがとうございました。ナカポツに対する期待もさることながら、この事業に対する期待も高いのだなということをあらためて痛感しておりまして、身が引き締まる思いであるとともに、日高さんが言われたように、「しっかりと楽しむ」という言葉がぴったりかどうかという、何とも言えないのですけれども、でも、やはりこの事業を前向きに、やりたいようにしっかりとやっていくということが、僕らが責を全うすることになるのかなと思いますので、そこをしっかりと意識していきたいなと思いました。それと、先ほど野口委員や島村先生から、「ばらつき」という言葉がありました。これは、そもそも全国就業支援ネットワークの今の大きな課題でもあって、ナカポツセンターの平準化であったりとか、しっかりとそこを担保していくというものに、この事業はまさしくアジャストしているというか、これによってその仕掛けを仕掛けていくとてもいい機会を、逆に我々が

ただいていると思っています。そういった意味では、今酒井さんから話がありましたが、「自覚」という言葉もですけれども、成果が見えない、1件いくらの世界ではないのが我々の仕事であるので、逆にどこにその成果を求めていくのかという思いを、それぞれのセンターが持てるような、まずそんなきっかけにできたらいいかなと思っています。ぜひこの1年間、皆さんにはご意見、あるいは見守っていただきながら、成果のあるものにしていきたいなと思いますので、よろしく願いいたします。今日はありがとうございました。

○進行(小澤) ありがとうございました。それでは、本日は急な日程の設定にも関わらず、お忙しいなかご参加いただき、また貴重なご意見を数々賜りまして、誠にありがとうございました。本年度も引き続きどうぞよろしくお願いいたします。ではこれにて、第一回検討会を終わりたいと思います。どうもありがとうございました。

○参加者 ありがとうございました。

#### 検討会録画を視聴しての意見

○矢野委員

「議題1 事業の内容・実施方法及び全体スケジュールについて」

前年度モデル事業として協力いただいた実績のあるセンターが、伴走型で課題を抱えているセンターに取り組み方法を伝えていくとの内容は非常におもしろいと感じました。好事例の取り組み発表を聞いてそれを自事業所で活かしていくことも大切ですが、伴走型で共にセンターとしての課題を解決していく方がより取り組みやすいと思います。また、この事業が終わった後もペアになったセンター同士の関わりは続いていくでしょうし、これを機に同業種間の連携もさらに進んでいくことを期待しています。基幹型となり、ただただ業務が増えていくと感じているセンターも多いことと思います。しかし、基幹型としての役割を担うことで、地域の就労支援事業所のサービスの質が向上したり、企業との好連携につながったり、個別支援に関わることで相談支援専門員を含む多くの機関や資源とつながり、多職種連携が生まれてきたりと、実は今までよりセンターのスタッフもやりやすくなるのではと感じました。報告の際はスタッフの働き方にどのような変化があったかを知りたいと思っています。

「議題2 モデル的取組実施センターの選定について」

先生方のご意見にもあったように「あまり実施していなかった」との記載より「これから実施したい」との記載の方が前向きで参加しやすいと感じました。ただ手を挙げるセンターが多くなるでしょうから選定は難しくなりそうですが。

## 定着支援地域連携モデルに係る調査事業 第二回検討会 議事録

日時 令和6年3月15日(金)15:00~17:00

場所 オンラインによる開催

### 議事

○進行(全国就業支援ネットワーク事務局・小澤) 皆様こんにちは。本日はお忙しいところありがとうございます。時間になりましたので第二回「定着支援地域連携モデルに係る調査事業」検討会を始めたいと思います。開会にあたりまして全国就業支援ネットワーク代表理事の藤尾よりご挨拶申し上げます。よろしくお願いいたします。

○全国就業支援ネットワーク(以下、全就)・藤尾 はい、皆様改めましてこんにちは。お忙しい、本日に年度末の大変お忙しい中、検討会にご参加いただきましてありがとうございます。早いもので、昨年スタートしたモデル事業ですけれども、もう既に事業報告セミナーも終わり、最終的にこれから報告書をまとめる、それに向けた最後の検討会ということになりました。今回の調査事業を通じて、私達としては、もう何か全国就業支援ネットワークとしては、これを受託した中でいろいろなものが見えて、我々の中に積み上げるものというはある程度もうできてきたんですけれども、一方でこれは今回厚生労働省から受託した事業ですので、しっかりと成果としてどういったものを上げていくのかという、皆さんからご意見をいただきながら進めていきたいなと思っていて、そういった意味では第二回検討会、とても重要な検討会になりますので、是非ご参加いただいている皆様から忌憚ないご意見をいただきまして、最後に向けて進めていきたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

○進行(小澤) 藤尾さん、ありがとうございました。それでは第二回といいましても、第一回目から9ヶ月経っておりますので、改めまして委員の皆様をご紹介差し上げたいと思います。

### ・参加者自己紹介および挨拶

○進行(小澤) それでは早速ですけれども、事前に配付いたしました議事次第に沿って進めさせていただきますと思っております。本日は主に4つの議題についてご説明をした後、委員の皆様からご意見を頂戴できればと考えております。まず最初の議題「調査事業の実施状況について」は事務局の方からご説明をさせていただきます。資料1「調査事業の実施状況」というA3のペーパーをお配りしておりますがお手元にご準備いただけますでしょうか。「令和5年度定着支援地域連携モデルに係る調査事業実施状況」というA3の資料でございますが、この資料の左下の方に事業の全体スケジュールということで、ここまでの流れを簡単に記載しております。まず昨年の6月16日に第一回検討会ということで、今年度事業の流れですとか進め方につきまして委員の皆様方から貴重なご意見をいただき、この事業がスタートいたしました。そのときにご意見をいただいたモデル的取組のエントリーの仕方ですとか選考の仕方について、皆様からの貴重なご意見に基づいて、6月

27日から今年度の実施センターの公募を開始いたしました。当初は7月10日まで応募を受け付けていたのですが、中国・四国ブロックから問い合わせ・申込みがなかったものですから、7月11日に中国・四国ブロックに再度この取組について周知の一斉案内を差し上げました。結局残念ながら、中国・四国ブロックからは申込みはございませんでした。全国から9センターから問い合わせ・申込みをいただき、その中から当初の計画通り6つの実施センターと、ペアとなって推進の協力をさせていただく応援センター6つを選考いたしました。8月3日に今年度の実施センターと応援センターを最終的に選出いたしまして、早速その翌週8月7日からモデル的取組の実施をスタートいたしました。上の方の実施状況の一覧表にありますように、今年度はまず1回目のミーティングで顔合わせをし、今年度の事業について説明をした後で、実施センターが応援センターを訪問する。それが終わってから第2回目のミーティングを実施し、続いて今度は応援センターが実施センター訪問する。最後に第3回ミーティングで取りまとめる、と大まかにこういった流れで事業を進めてまいりました。それと同時に、昨年度は圏域内の意識調査というのを事業の後半で行ったのですが、意識調査の結果を今年度の実際取組に少しでも反映させようということで、昨年よりはかなり前倒して、9月から圏域内の意識調査を約1ヶ月間かけて実施しております。一覧表にも書いてありますが、三重県の津地域ふらっとさんだけが、ここは地元の自立支援協議会より郵送していただくという手順になりましたので、調整と準備に時間がかかりまして10月の意識調査実施となりましたが、それ以外のところはほぼ9月中に意識調査を実施いたしました。この取組の結果を先月2月28日、事業報告セミナーという形で全国に配信をさせていただきました。そして本日の第二回検討会に至っていると、大まかな時系列の流れはこのようになっております。藤尾さんの方から補足で今年度の事業についてご説明お願いします。

○全就・藤尾 はい、ありがとうございます。令和4年度のモデル事業を受けて、今回初めての取組ということでペアでの取組をしたんですけれども、やっぱり紙になかなか移せない部分はこの後の事業報告セミナーのところでもお話をするんですけれども、紙になかなか載ってこない部分を、結構我々現地に足を運んだ者には見えた、とても有意義な機会だったかなと思っております。またそのペアで取り組むこと自体がやはりとても大きなポイントになっていたとっていて、この後の事業報告セミナーでもあったんですけれども、どのペアも異口同音に、やはりハードルが高いと思っていたところを後ろから教えてもらえて取り組むことができたとか、あるいは自分たちがやりたかったことをやっているセンターさんの支援が受けられてよかったとか、あるいは基幹型としてスーパーバイザーって何やるんだっていうところに悩んでいたところがとてもクリアになったとか、様々なお話をいただいたので、本当にこの今回の事業のあり方というのが、手前味噌になりますけれども、取組の内容としては非常に良かったのではないかなと思っております。この後皆さんからもご意見いただきながら、さらに深めていきたいなと思っております。補足になっているかわからないですけれども、以上が印象になります。

○進行(小澤) ありがとうございます。先ほどちょっと駆け足でご説明をしましたがけれども、皆様のお手元に事前にお配りしています参考資料1というのが、それぞれの6ペアで実施した3回のオンラインミーティングの内容ということになっております。第1回目が実施センターと応援センター、担当

役員、事務局の初顔合わせでしたので、自己紹介した後に今年度事業の概要と昨年度事業の振り返りについて共有をさせていただき、初回の応援センターへの訪問日程、それから意識調査送付先リストの作成といったことの打ち合わせを第1回ミーティングで行いました。応援センター訪問が終わった後の第2回ミーティングでは、その応援センター訪問の振り返り、それを受けての今後のモデル的取組のポイントの共有、意識調査結果の共有、これは速報ベースですけれどもこの後の取組に反映をさせていただくということでお示しました。そして次の実施センター訪問予定と2月28日の事業報告セミナーについての確認を行いました。その後、実施センター訪問を終えまして、最終第3回目のミーティングでは、実施センター訪問の振り返りと意識調査結果の詳細の分析、そして2月28日のセミナーの準備といった内容で、各6組それぞれミーティングを実施しました。それでは、事業の実施状況についてのご報告はここまでとなりまして、事業報告セミナーと意識調査結果の内容につきましては、この後議題の2と3でまた詳しく扱わせていただきますけれども、ここまで事業全体の流れにつきましてご質問でありますとかご確認していただきたいことがございましたら自由にご発言の方よろしく願いいたします。ご発言よろしいでしょうか。はい、それでは早速次の議題2「事業報告セミナーの開催について」に移っていきたく思います。今年度の事業の一番大きなイベントになりましたけれども、先月28日に事業報告セミナーを開催いたしました。参考資料2の案内フライヤーを全国のナカポツセンター、そして障害福祉課から様々な関係機関へもご案内をいただきまして、定員500名のところ、定員に近い参加申込みをいただきました。実際の配布資料につきましては、容量が大きいために以前にお示したフォルダの中に格納しております。そして今回、参加者アンケート、これもかなりの量になりましたけれども、事前に皆さんに配布させていただいております。では事業報告セミナーの内容につきまして、改めまして藤尾さんの方からご説明よろしく願いいたします。

○全就・藤尾 はい。まずは当日足を運んでいただいた委員の皆様、またその後ご視聴いただいた皆様に御礼申し上げたいと思います。ありがとうございます。島村先生、ご無沙汰というお話ですが、僕らは一方的に拝聴していたので、そんなにお久しぶりのイメージが実はなくて、あのビデオメッセージも本当にありがとうございます。先ほど小澤の方からもあったように、参加が479名ということで非常に多くの方にご参加いただきました。厚生労働省の方から各都道府県自治体にしっかり発信していただいて、私も千葉県で、メーリングリストでしっかりと障害福祉課の方から回ってきたのを見てありがたいなと思い、この参加者の数に驚き、この後皆さんも目を通していただいていると思うんですけども、アンケートに反映されているように、ナカポツセンターのことが知れてよかったというようなアンケートがあり、非常にありがたい限りだなと思いました。事業報告セミナー自体は2月28日に13時～17時、オンライン配信ということで開催をしたんですけども、登壇者の方には今年度は全ての方に会場に足を運んでいただいて、リアルからの発信ということで開催をさせていただきました。実際には3つのグループがそれぞれのペアで発信をしてもらい、最初のグループはスーパーバイズについて、それから2つ目のグループはシンポジウム形式となっていますけど、どちらかというと同じような発表なんですけど、少し突っ込んだ話を私の方から質問させていただく形で発信をさせていただくと、より身近にこの事業を感じていただいて、お互いのやり取り、いいことばかりじゃない



だよっていうところも身近に感じていただければなという、そんな内容だったかと思います。また3つ目のところでは地域の支援機関との連携ということで、アンケート結果を見ると、やはり地域連携のあり方というところで悩んでいるセンターが実は結構あるんだということが、今回の事業報告セミナーの反応を見て痛感したところです。実際にモデル事業でペアを組んだところでも、応援センターに倣った部分っていうのはそこが非常に多かったんですね。地域でどう連携取っていくんですか、地域のネットワークをどう構築していくんですか、っていうところが多かったんですけども、これは応援センターと実施センターの間だけではなくて、日本全国のナカポツセンターで同じような悩みを抱えているところがこれだけあるんだなという、とても大きな確認になったのではないかなと思っています。また島村先生と朝日先生からいただいた提言、そのインタビューの内容はとても参考になったというアンケート結果も非常に多くて、そういった意味でいうと今回のセミナー自体がナカポツセンターのみならず、地域ネットワークのあり方がどうあるべきなのかっていうところに少し踏み込んだ報告セミナーになったのではないかな、受け手側からしたらなっていないかなと思いました。またナカポツセンターはかねてから言われている基幹型のあり方というところをどのように捉えるのかというところ、我々はどちらかという目論見としては、資源が違う、地域が違う、そんな中でどうあるべきかというところにとどまっていたんですけども。むしろ今回のアンケート結果を見ると、実際に今回のセミナーを聞いた方たちからすると、何も自分たちが引っ張っていかなくてもいいんだとか、黒子であり皆さんの縁の下の力持ちでいいんだなっていう、また別な視点での、何かずっと落ちた部分があったようで、そういった回答が多かったこともとても新鮮というか、私はどちらかというとそのイメージがあまりなかったもので、そういった意味ではすごく新鮮であり、いろんなあり方を模索するいい機会になったのではないかなというふうに思っています。これは事業報告セミナー、今回の事業をちょっと離れた立場から見て、我々全国就業支援ネットワークがこれまで活動している中で、ナカポツセンターに対して発信してくる内容、本来これやってこなきゃいけないのかなってちょっと思うところがあって、今後こういったことをどのようにこの全就ネットとして継続していくかっていうことの新たな課題というか宿題をいただいた報告セミナーにもなったのかなというふうに思っております。これがこれで終わることなく今後も何らかの形で継続して行って、朝日先生も言われていたように、ナカポツセンターのことはナカポツセンターで、というところを今後もうまく進めていければなと、そんなふうに感じたセミナーでした。雑駁ではありますが、以上で報告の方は一旦終わりにしたいと思います。ありがとうございました。

○進行(小澤) はい、藤尾さん、ありがとうございました。それではこの事業報告セミナーにつきましては、委員の皆様お一人お一人からご意見・ご感想等をいただけたらと思いますけれども、また例によって、朝日先生から口火を切っていただきまして、当日会場にもご参加いただき、貴重なご助言、ご提言もありがとうございました。よろしく願いいたします。

○朝日委員 はい、ありがとうございました。島村先生の、あの動画のところのタイミングが、ブリッジさんたちのあの話が終わって「ハイサイ」って言ったところがうまくあってですね、島村先生も言っていたけど、当日リアルで出てらっしゃるんじゃないかなと思うぐらい、いい感じでマッチしていたことを今さら思い出させていただいたところです。ありがとうございました。アンケート調査も拝見をして、

ある意味課題と言うんでしょうか、ナカポツセンター関係、就労支援に関わる人たちのやっぱり関心の強さというのを改めて感じたところでした。それでこのモデル事業の実施をペア、私はもうタッグを超えてもっとバディみたいな表現をしてしまいましたけれども、遠距離恋愛だとか、そのようなぐらいの思いの中で実際に展開してきたというところをベースにお話をさせていただいたところでした。それで藤尾さんの最初のご挨拶にも関わるんですけども、多分こういうモデル事業に関わったりそれを取り巻く関係者にとっては、本当にそこでのポイントが見えてきていると思うんですけども、やっぱりそれを全国に横展開していく、でもそれも中央からの指令ではなくて地域ごとの事情で展開していく、そういうような発信というのがきつと求められるんじゃないかなってことを強く思いました。たまたまの役回りで最後に全部聞いてお話をさせていただく機会を得られたので、そのような観点で強調させていただいたところで、地域ネットワークはみんな違ってみんないいみたいなパクリのお話をしてしまいましたけれども、やっぱり困りましたねとかではなくて、無ければ無いなりに、マイナスであればマイナスなりに始めるってところがすごく大事で、そっちのベクトルを向けていくということに、各ナカポツセンターの皆さんが基幹、あるいは基幹でないとしても目指していくということが常態化していくと、日本の就労支援はもっと良くなるんじゃないかなと思いつつ聞いていたところでございます。この間と同じようにちょっと急なフリだったので、冗談ですけど、まずはちょっと一言口火を切る形でお話をさせていただきました。どうもありがとうございました。

○進行(小澤) ありがとうございました。では続きまして、島村先生、本当にビデオ出演ありがとうございました。

○島村委員 はい、失礼。僕もそんなに考えてなかったんだけど、当日面白いのは西表島にいたんですよね。それで出られなかったんだけど、学生連れて卒業旅行で行って、本当に面白いんですけど、そこってB型が1ヶ所だけしかないわけね。唯一あるだけマシなのかもしれない、国立公園だから何か建物も建てられないしね、そんな中にもっと驚いたのは利用者さんが1人だけいたのよね。それがね、小浜島から来てるんですよ。皆さんちょっと意味がわかりにくいかも。西表島のちょっと横に小浜島っていうリゾートアイランドがあるんですね。昔ヤマハリゾートって言ってたところなんだけど、そこにいる利用者さんが女性の方1人だけがポツンといらっやって、もう午前中でほとんどの人は帰るんですよと、昼から残ってるのはこの人だけですよって言って支援者が説明してくれたんだけど、これが本当に石垣が離島とすれば、さらに西表という離島があって、その先の離島なんですよね。離島の離島の離島からの働きたいっていう希望というのをこういうふうにかけているっていう現実を学生が見たのは非常に価値があったかなと思うんだけど、本当に日本ってそういうぐらい落差があるということですよ。僕たちの仕事で、働くを形にしようということなんだよねと。その中で本当に雇用という形になればそれはそれでいいなと思いつつも、いろんな形で働くを支えないといけないっていうのが現実にあって、沖縄のナカポツセンターって、実は八重山列島を管轄してるところっていうのもそれが当たり前の姿なんですよ。言いたいことは何かっていうと、実はナカポツセンターの役割を改めて考えようっていう機会になったんだらうと思っていて、朝日先生が最後の方でまとめて言っておられた棚卸して話されていましたよね。あれね、すごく僕も実は最近取り組んでるんですけど、ある社協さんの棚卸しをやっているんですね。今まで当たり前にやっていた仕事を一度ちょっと違う

かもっていうぐらいの観点で見直してみても、実はこんな軸を立ててたんだけど、例えば縦軸に本当にその組織がやらないといけないというミッションっていう軸を作って、縦軸に。横軸に地域ニーズが高いか低いかっていう、そういう横軸を引いて、縦軸横軸でやっぱり左の上に行くっていうのは、もう絶対やんなきゃいけないことだよって、右下に行くやつはいらないよねって話になると、それで仕事を整理しているんですよ。やってみると多分ナカポツセンターも同じこと言えるんじゃないかと思うんだよ。基幹型だって言われた瞬間に従来型と基幹型ってどうなんだろうっていうことを一度考え直す必要があって、そのために何を捨てるっていうと、ちょっときつい言い方かもしれないけど、本当は捨てるんだよってことで、その社協でも実は仕事を1人当たり 2,000 時間ってというのが労働時間として普通の、そこから休み引いていったら 1,800 ぐらいじゃないですか。1,800 収まってないんですよ、1人当たりの労働時間が。しかもそれは非常勤でやっているのね、とんでもないよねって、そんなんで新しい仕事できないよねって言って、まず仕事を捨てさせたんですよ。1,500 時間まで落ちましたよ。300 時間浮いたから300時間で新しいことやろうって言って、今やっている最中。似たようなことが多分あるんじゃないかと。その今回の機会をうまくそういうふうに振り向けて行って本来のナカポツセンターの姿っていうのをもう1回見つめ直してみようじゃんっていう、そういういい機会になったのかなって僕なんかは捉えています。だから朝日先生が本当に奇しくも言ってくれた棚卸しは素晴らしいなと思っています。はい、以上です。

○進行(小澤) ありがとうございます。では続きまして、ナカポツセンターの立場で野口委員、よろしいでしょうか。

○野口委員 私も実はオンラインで入らせていただきました。本当に皆様どうもありがとうございました。私もやっぱりナカポツセンターの立場なので、本当に今回、小澤さん、事務局でのペアの相性もいいですか、抜群だったと思うんですよ。人口規模とか取り組む内容で組み合わせもされたと思うんですけども、このところでのペアの相性が本当に良かったと思います。なのでもうほとんど全国のナカポツセンターも人口規模とか、地域の特徴とか、社会資源も様々な中で、本当にベクトルがあちこち行ってですね、今回の取り組む内容でナカポツセンターの業務を整理できたきっかけになったと思います。特に今回モデル事業の特徴は、ナカポツセンター同士で、応援センターと実施センターで組むという本当ピアサポーターの、ピアカウンセリングのようなイメージがあって、メインは取り組む内容ですけども、それ以外に新たな発見とか、想定していなかった気づきというのも見受けられたってことも聞いているので、そういった点では本当に朝日先生、島村先生がおっしゃるように、全国にこの取組が広がっていくと、さらにナカポツセンターが活性化していくんじゃないかと思っています。けれど一方、さっきおっしゃるように棚卸しですね。はい、もう何でもかんでもナカポツセンター、今厚生労働省と労働局の方がいらっしゃる中で恐縮ですけども、何でもナカポツセンターってやっぱり業務が多岐にわたっているの、そこは少し懸念をしているところです。けれど本当に今回の取組は非常に参考になったと思いますので、ぜひ全国の方に発信をしていきたいと思っています。はい、以上です。

○進行(小澤) はい、ありがとうございます。では続きまして、移行・定着のお立場で酒井委員、よろしいでしょうか。

○酒井委員 移行・定着の立場で、という立場で物事を考えてなかったの、すいません、私は当日のセミナーにも途中までですけども行かせてもらって、今日残りは全部見られなかったんですけど、最後ちょっと参加できなかったところの動画も視聴させていただきました。まずはこの応援センターの方が手を挙げてくださって初めて成り立つ今回の取組だったと思いますし、本当に忙しい中でここまでコミットされています。そこにまず本当に敬意を払いたいなというふうに思いました。いろんな方の取組発表を聞かせていただいて、改めてやっぱりその基幹型という、ナカポツセンターとして基幹型で何をするのかというのは本当に皆さん模索されている、まだそういう段階なのかなというふうに思いました。あとはアンケート、この後、多分アンケートとか意識調査のお話もお聞かせいただけると思うんですけど、あれ見てもやっぱりその地域の事情、地域の状況でいっても福祉サービス事業所、結構やっぱり就労支援の実績が無い割合というのもやっぱり今も非常に高いんだなって改めて就労系事業所の中でもあれだけ就労支援の経験がないという事業所があるのかなというふうに思ったんですけども。そういう中で基幹型がどうするか、全ての地域の事業所に対してサポートしていくのは現実的に難しいような気がしますし、ネットワーク会議の報告とかも当日ありましたけれども、こう刺激を与えていく、まずはそういうところからスタートなんだろうなど。その刺激を与える中で、非常に刺激を受けて意欲的になる事業所さんに対して、どう一緒にスーパーバイザーしたりとか、伴走的に支援を行ったりとか、そういうことを積み重ねていながら基幹型の役割ということを整理していくのかななんて、勝手に話を聞きながら当日そう思いながらちょっとたくさんありましたけれども。お世話になりました。ありがとうございました。

○進行(小澤) はい、ありがとうございました。では続きまして、相談支援事業所の立場から矢野委員、よろしいでしょうか。

○矢野委員 矢野です。そうですね、私もリアルタイムでは参加できなかったの、後日動画を見せていただいたんですけども、大体最近見るときって結構倍速で見たりとかするんですけども、今回ちょっとそのリアル感を感じたかったの、もうそのままの時間、3時間半から4時間ぐらいあったと思うんですけども見させていただきました。正直な話めちゃくちゃ面白くてですね、すごくいい取組だったな、セミナーだったなというふうに思ったのが率直な感想です。やっぱり基幹型になるっていうと、きっとナカポツセンターの方たちってこれ以上忙しくなるのかとか、何をしなきゃいけないのかとか、すごく不安に思われたんじゃないかなというふうに思うんですよね。ただ、やっぱりああいう形でセミナーでモデル事業の方とか応援センターと実施センターの取組とかを見て、こういった形ですればいいんだなってのがすごく自分的なイメージでは、僕はナカポツセンターではないんですけどもすごくイメージできて、自分だったらこれから地域の中でこういう役割を担っていくのがすごくわかりやすかったです。やっぱり基幹ってなるとどうしても自分たちが地域のその就労系の事業所に何か助言をしなきゃいけないんだとか、何か解決していかなきゃいけないんだとかいうふうな形で思ってたかなというふうに思うんですけど、きっとそんな感じではなくて、あの応援センターと実施センターもともに協力しながらやってる、あれがきっとナカポツセンターと就労系の事業所が協力しながらお互いのいいところを発揮しながらやっていくというふうな、本当にモデルとして皆さんに伝わったんじゃないかなというふうに思いました。なので、今回のセミナーをきっとまだ見ていない就

労系の事業所もちろんあるだろうし、ナカポツセンターもきっとあると思うんですけども、何とかこういった形で取り組んでいくんですよっていうのを今後も見せていけたら、それぞれの地域でいいものが作っていきけるんじゃないかなというふうに思いました。以上です。

○進行(小澤) どうもありがとうございます。では続きまして、労働局の立場で昨年に引き続いて事業を見守っていただいていますけれども、日高さん、よろしく願いいたします。

○日高委員 はい、日高です。私も労働局の立場で話すちょっといろいろ話づらいかもしれないので、昨年度までは2年間、障害福祉課でこの事業のまさに立ち上げも担当させていただいて、本当にセミナー聞きながらその当時のことも含めていろいろ思い出しながら、私もちょっとリアルタイムではお聞きはできなくて、今兵庫の方に東京から単身赴任で来てるんですけども、東京の家に帰りながら新幹線の往復で楽しく聞かせてもらいました。本当にスーパーバイズっていう切り口、それから地域との連携ネットワーク作りっていう切り口、本当に切り口を設定はしつつも、地域の中で自分たちが何をやっていくことが必要なんだろうなっていうことを本当に真剣に取り組んで、それぞれのセンターがそれぞれのセンターなりのやり方で、またあのバディという言い方も朝日先生からありましたけれども、応援もしてもらいながら取り組めたっていうのは、本当に2年目のこの事業やってすごくよかったなということですね。1年で終わらなくてよかったなっていうのを本当にすごく感じました。やっぱり昨年度の1年間事業、最初のまずセンターにやっていただいて、そこでもセミナーをやっているんなアンケートとかもあったり、基幹型のことは何となくおぼろげに少しわかってきたとか、思ったのとは違ったっていうことまでとりあえず理解できたいな、ちょっと最初やっぱり基幹型になったときに、それこそ唐突だったこともあって、それこそ全就ネットの皆さんも含めて結構皆さんすごく構えた状態からスタートしたところから、去年はそこがちょっと半歩ぐらい、ようやくみんな真剣に自分たちごととして考えていけるかなっていうステップに上がったぐらいだったかなっていうふうに、今振り返ると思っているんですけども。この2年目の事業をやっていただいて、やっぱり1年目にやったセンターと比べても、やっぱりそれまではなかなかちょっと取組に手が出せなかったとか、過去やってみようとしたけどどうもいかなかった苦い経験があったとか、そんな話も発表中にありましたけれども。そういうなかなか取り組みづらいついて元々感じていたようなセンターさんの地域の中でもやっていけるんだっていうことを見せていただいたので、やっぱりそれが後でアンケートのご紹介もありますけれど、本当にたくさんの人たちを勇気づける、そんな形に繋がったのかなというふうに思いながら聞いていました。いくつか印象的だったことは本当にたくさんあって、全然私も頭がまとまっていなくてですけど、例えばスーパーバイズって言ったときに、どうしてもこの事業のそのテーマの一つでスーパーバイズっていうのも正直この言葉をここの場面で使うのもなかなか意味が捉えづらかったりするんでなかなか難しいなって自分でも思っていたんですけど、それをこの場面で言うときのスーパーバイズとはどういうやり方なのかっていうのをすごい噛み砕いて2つモデルがありましたけれどもやっていただいて、セミナーの中でも説明もしていただけてすごく貴重だったなというふうに思いました。あとは元々、千葉のナカポツセンターで県の連絡協議会をやってらっしゃるっていうのが、やっぱりそういう取組を参考にされて、三重の方とか、あと茨城でも始まりましたなんて話も出ましたけれど、やっぱり他のやってることをまず真似してみるとか、最近ハローワークの界限では真似す

るんじゃないってパクるってみんな言って、特に関西の方ではなんか真似して徹底的にパクリみたいな感じでやってるんですけど、やっぱりそういうのってすごく一から自分たちだけで考えて何かを生み出していくことよりもやっぱり効率的にできますし、どこかでうまくいってることっていう、うまくいってるなりの理由もあったりするのって、やっぱりハードルを下げてまずやってみようっていうとやっぱりそういう視点はすごく大事だなと、自分たちのハローワークの仕事にも照らしながら改めて痛感しましたね。あとはちょっと後半の方で出てきていたナカポツセンターがやっぱり意識調査やってみてこんなに知られてなかったんだとか。そういうある意味どんな地域にでも意外とあるあるみたいな話とか、やっぱりやってみただけで過去うまくいかなかったっていうのもきっとまあどこかでも同じような経験されているようなこともあるんだろうなというのも感じた中でも、そういうのがどうしても悩んで悩みすぎてなかなか結局動けないみたいなことが多いのかななんて思ったりするんですけど、ペアがいたっていうこともあって悩んでたってしょうがないんだからまずやろうよみたいな。こう背中を押せて、実際に自分たちでできると思ってなかったことができたとか、そんな部分もあったり、後は自分たちばかりがこう支援者としてやらなきゃいけない、助けなきゃいけない、頑張らなきゃいけないってだけじゃなくて、自分たちも助けられる部分もあるし。あと何かこういうのも出てたと思うんですよ。何か支援は人のためならずみたいな。もちろんその方のためにやるんですけども、結局巡り巡って自分たちのメリットがあるって、なんかそういうことに気づけたっていうのもすごく大きかったのかななんて思っています。ということで全然まともにはないんですけども、本当に良かったなと思って聞かせてもらいましてありがとうございます。

○進行(小澤) はい、どうもありがとうございました。では、お待たせしました、企業の立場で大滝委員、よろしくお願いします。

○大滝委員 はい、ありがとうございます。まずこの間の皆さんの発表を聞いていて、私は今年から参加して、今回から参加しているので全体のものは知らなかったんですけども、とても羨ましいなっていうのを見ていてまず感じました。昨年の調査事業からこんなふうになりたいな、こんなこと取り組みたいなっていうのをそれぞれのナカポツセンターさんが思われて、マッチングというかペアが決まって、まずは自分たちの地域ってどんな地域なんだろうとか、自己評価っていうところをしながらも、相手の取組を知って今後こんなふうになりたい、こんなところを目指したいって思っていく、あの熱量というんですかね、その一生懸命さとか勢いというところに、とても今後期待できるなというところをまず感じました。私はいろいろな地域で障害者雇用をしてきてはいるんですけども、様々な地域でナカポツセンターの方とも関わり合いがあるんですが、本当に地域によってナカポツセンターって様々だなと、その実態って何なんだろうっていうのは今でも思っているところがあるんですけども、先日の発表を聞いてそれぞれ地域の資源が異なるとか役割が異なるということはよくわかりました。ただ、うまくいく地域と、なかなか支援してもらえないとか、うまくいかない地域とあるんですけど、ここは何をしてくれるのかなって自分自身も受け身だったんじゃないかなというのも聞いていて感じました。その結果、結局いつもの雇用の方法、採用の方法しか今できなくなっているところもあって、皆さんのように新しいやり方っていうのを今後もっと増やしていかなきゃいけないなという刺激があったんですけども。今日何度か皆さんのコメントからも出てきている棚卸しという言葉がありました。



それぞれの地域ごとにこういう形になっていくと、なんかすごくいいなと思いつつ、こうなってほしいなと思いつつ、あの会場をあとにしてます。最後に、やっぱり今回ナカポツセンターさんのこの基幹が、雇用と福祉の連携強化の中で私の印象では先陣を切ってくれてたと思うと、多分それは日高さんたちが先にそこをちゃんと仕掛けてってくれたというか、何か雇用と福祉の連携強化の中でアセスメントの就労選択が一番後に来ると思うんですけども、ナカポツセンターさんが基幹としてのところを進みつつ、来年、再来年、もう来年でいいですね、来年から基礎的研修が始まり人材のところに向かって、そしてアセスメントのところは令和7～10のところであったときに、何か結果的にそこがみんながちゃんと融合していくというか、3つのポイントがあったとしてもテーマがあったとしても、そこは全て雇用と福祉の連携強化の中でこういうところを目指そうねっていったところに何かみんなが繋がりがあえると、それがそこに対して今回のセミナーというかこの2年間のモデル事業が先陣を切ってくれたような印象で見ました。本当に楽しかったです。私から以上です。

○進行(小澤) どうもありがとうございました。では実施事業者の立場から、委員の皆様からいただいた意見も踏まえて、ナカポツセンター部会長の野路さん、いかがでしょうか。

○全就・野路 私も最後の朝日先生の棚卸しという話は非常に共鳴共感して、そのお話を聞きながら、今回あの協力センターは全国のセンターのうちの3%ぐらいなので、他のセンターがどう見てるのかなっていう感じは正直聞きながら、特に人口の多いところのセンターとかははどう思ってるのかな、わりかし今回人口の多いところは少なかったんで、そういったところは正直気になってはいました。ただ大事なナカポツセンターのあり方として、地域を俯瞰で見て、地域のアセスメントをした上で、地域の福祉事業者はどうなってるのか、自治体の考え方はどうなってるのか、企業や産業はどうなってるのかと、そういったことをみんなで障害者雇用の制度が変わっていく中で自分たちの地域資源アセスメントした上でそこに見合った形に合わせていくというのが、やっぱりナカポツセンターの役割であり、基幹としての役割。そこをずっと追いつけなくちゃいけないんだなっていうところは、どのセンターも皆さんそういった視点でやっていて、足りてないところは他からも上手く学んでいくというような、そういったところで共通のプラットフォームとしては、全国のセンター全部同じではないな、あるわけではないんですけど、そういうプラットフォームとしてはわりかしできているという、稀な事業ではないかなっていうところがこのセンターの事業、ナカポツセンターの事業としては面白いのかなということも改めて思われました。ただその中で、今後複雑な福祉サービスの中で経営体制にこれからさらにコールアップしていくとどうなっていくのかなっていうところは今回のセミナーの中では出ない形でやってきてるので、多分どこかで聞いているナカポツセンターの方とかはちょっと悶々としてる、してる方もいらっしゃるんじゃないかなと。それでいいと思うんですけどね、考えていくっていうことで、その機会を考えるきっかけとなるセミナーとなったということでは非常に良かったんじゃないかなということも改めて気付かされました。以上です。

○進行(小澤) ありがとうございます。酒井さん、お願いします。

○全就・酒井 はい、もう皆さん、たくさん意見言われてるので、もうだいたいあれかなと思いますが、今回本当に元々基幹型っていうところからスタートして2年間やってきて、ある程度それぞれの地域に応じた基幹型っていうのが今年度させていただいて見えてきたかなとは思いますが、ただまだ16



センターですので、これを地域ごと各地域の337センターにどう展開していくかっていうのは、それは全就の課題かなっていうふうには思ってます。今回やっぱりそのバディとか、ペアでやったってことがすごく良かったなって本当に思ってます。一つのセンター単独では多分絶対できなかったことがペアでやることによってお互いいろんな気づきがあったっていうのと、どこかのセンターが「懂れるのはやめましょう」っていうのをを出してくれてましたけど、やっぱり自分たちも自ら実践するっていうところ、そういう思いを全部のセンターにどう思ってもらってのが大事なかなと思うんです。337センター様々ですので、やっぱり自分たち自身も、その懂れるっていうか、そのモデルとなるセンターに近づいていきたいとか近づいていこうっていう、何かそういう思いを各センターが持ってもらってことがすごく大事なかなっていうふうには感じました。あと棚卸しっていうところでは、先ほど島村先生が捨てるものは捨てるって言葉をおっしゃって本当にそうだなと思いつつ聞いて、捨てるっていうことは地域に渡していくっていうことだと思うので、何を地域に渡していけるのかっていうところを各センターはしっかりと見極めていくっていうことが大事なかなと思います。あと今回、でもそれぞれのセンターの感想で、やっぱり仲間がいて、仲間がいてくれるのが嬉しいとか広げていけることが嬉しいみたいなこともあったので、やっぱりそれぞれのセンターそれなりにいろいろしんどい思いをしながらやって、でも一緒にいる仲間がいる、仲間の存在ってのがすごく今回のモデルで浮かび上がったのかなって思ってますので、何かそういうものをどう今後全就として繋いでいくかっていうのは考えていかなければいけないなというふうに思いました。はい、以上です。

○進行(小澤) はい、ありがとうございます。直接この事業報告セミナーとは関係ないんですけども、昨年のセミナーを受けて2つのセンターが全就に入会してくださって、しかも今回の実施センターにエントリーをしてくださいました。北海道ののいけるさんと、さきほどあった「懂れるのをやめましょう」と言われた群馬のトータスさんです。そして、今年のセミナーを受けてまだ半月ですけども、2つのセンターから発表されたセンターに弟子入りしたいという、そういう申し出があったというのも事務局も聞いておりますので、まさにこのセミナーがセミナーだけで終わってしまうのではなくて、これをきっかけに次のアクションに繋げていきたいなということを思っていたところです。ここの「事業報告セミナーの開催について」というところで、最後藤尾さん、まとめていただけますでしょうか。

○全就・藤尾 はい、皆さんありがとうございます。貴重なご意見たくさんいただきました。実は千葉で平成19年に厚生労働省のモデル事業で、地域においてナカポツセンターがどうあるべきかみたいなのを昔にやったんですね。そのときもやっぱりネットワーク、地域に必要とされるセンターじゃなければいけないってのがあったんですけども、何か今回モデル事業やってやっぱり同じなんだなっていう状況が一つわかったということと、逆に言うと平成19年からこれまでの間で、それがまだ成し遂げられてなかった。この後に意識調査に繋がるんですけども、自分たちはこうやるんだばかりで何か地域の中でどういう役割なのかっていうことを本当に改めて考える機会になったので、同時にこれ見ていただいた各ナカポツセンターの方がそういった視点で考えていくことが必要なんだねと。あの発表になった水戸の、もう本当に大御所というか、あの地域で最初からやってるところで、自分たちのところで何でも完結できちゃうんですっておっしゃっていたんですね。そこが違うんだよって、やっぱりどっかで気づいて、どっかでその地域の中の一部なんだ、その中で何をやるのかって

う、今回の機会が本当大きな一歩になっていただきたいなと思ひまして、いろいろなセンターがそういった気づきを持っていただけると、本当にさっきの棚卸しも断捨離も、周りがある初めて可能なことです。自分たちで全部やんなきゃいけないんだってという環境の中では断捨離もできなければ棚卸しもできないので、そういった意味でいうと、本当に今回のセミナーをここで絶やすことなく、皆さんからいただいた意見もまたこの後反映しながら次に繋げていければなと思ひます。本当にありがとうございました。

○進行(小澤) ありがとうございます。それでは議題2の「事業報告セミナーの開催について」は、一旦ここで終了させていただいてよろしいでしょうか。では引き続き議題3の「就労支援機関に対する意識調査の結果について」に移っていきたく思ひます。参考資料3の1と2「圏域内の就労支援機関に対する意識調査の依頼状」「調査用紙」というのを9月、そして1ヶ所だけ10月ですけれども配布をさせていただきました。この調査項目につきましては全て昨年度の意識調査と全く同じものをお配りさせていただきました。その結果の方を資料として「分析シート」ということで皆様にも事前に配布させていただいております。第2回ミーティングのときには、意識調査の速報ということで、主に自由記述のところをそっくりそのまま実施センターの方にお返しをしまして、地域からこういう声があるということを知っていただいた上で、その後の応援センターを受け入れてのモデル取組に活かしていただき、第3回目のオンラインミーティングの時にこの分析シートを各センターにお配りいたしました。この分析シートはどちらかというとその圏域の状況だけではなくて、今回参画していただいた6つの地域の全体平均と比べてどんな特徴があるかということ、一つずつ項目ごとにコメントを載せさせていただいて、自分たちの圏域の特徴、実際合っているところと意外だなというところと両方あったようですけれども、それをお示したのとなっており。一応こんなふうに簡単にまとめたものを事業報告書にも掲載していきたいと思っております。個別の内容につきましては時間の都合で説明は割愛させていただきますけれども、こういった内容で意識調査を実施し、分析し、各センターにフィードバックしましたということで、この件につきまして、委員の皆様からもしご意見等ございましたら、ご自由にお願ひできればと思ひますが、いかがでしょうか。また朝日先生にまず無茶振りしてしまってもよろしいでしょうか。

○朝日委員 はい、ありがとうございます。先ほどのセミナーのときにも少しお話をさせていただきました。要はいろいろな関係機関がナカポツセンターをどういふふうに見ているかといったところにも関わっていく重要なデータになろうかと思ひます。ただそのときに必ずしも十分に知られてるからそれでいいというだけではなく、やっぱりそこでどういふような役割を果たしていくかという、こういったアンケート調査っていかこれは今回モデル事業のため、事業があるのでできていますけれども、日頃からちょっと客観化して、みんなネットワーク会議とか集まればそんなに厳しいことは言わないでしょうけれども、ちょっと客観化して、どういふふうに関係を期待してるかみたいなのところというのは、データとして抑えていくことがすごく大事だということと、さっき言いましたようにそれが仮にネガティブでもマイナスでも、それはむしろチャンスだということから出発点にしていく、その気概が必要かなというふうに思っていたところ。以上でございます。

○進行(小澤) はい、ありがとうございます。島村先生、いかがでしょうか。意識調査のこの分析等

につきまして。

○島村委員 はい、今回國吉君がやってたやつ。ブリッジの一番最後の方にあると思うんだけど、これなかなか面白かったです、正直言って。沖縄の特殊性ももちろんあると思うんだけど、彼のいるこの南部っていうんだけど、沖縄本島の南の方っていうのは、やっぱり特異な地域だなというのが改めて明確になったかなっていうところがあって。就労移行率が悪いって彼言っていましたよね。ゼロって事業所があるんだって話もしていて、それはある程度僕も知ってはいたけれど、数字で出すっていうか明確にすることの意義っていうのはあるし、それを逆に地域の中に認識してもらう。数字で出したものを見たっていうのはあんまりないんだよね、正直言うと。圏域ごとに見るとかって特にないので、それは非常に僕はこれ今後も続けたらどう？って思っちゃいましたね。藤尾さん苦笑いしてるけど。いや本当に自分の現実を知ることっていうのは本当に基本的なことだよなって思って。それによって彼は何か仕掛けとして、つまりそこに突っ込んでいって話をしようということできっかけになったので、これも本当に良かったし、実を言うと沖縄もA型がすごい高い。多分日本一高いと思うんだけど、これで今度A型が数字から外されて雇用率がガーンと下がるっていうことがもう明確にわかっている地域でもあるから、もうそれが出てきた瞬間にいやあそうだよなっていうことが多分起こると予想はしているものね。やっぱりそれだとナカポツセンターの役割ってどうだったんだって言われかねないので、ちょうどそのときにこれを出してもらって本当に良かったっていうのは正直なことですね。そんなことはやっぱり続けられたらいいよなって思うけど、以上です。

○全就・藤尾 島村先生ありがとうございます。結構これ勇気いるんですよ、取る側からするとよくある、さっき朝日先生もおっしゃられたようにネガティブなものもたくさん返ってくるんで、それに対して、いや知らないだけだろうって思いがあったりとか、いろいろなものがかけて巡るので、何かこれをちゃんと受け止める、やっぱメンタルをしっかりみんな持って進めていくっていうことも一方で必要なのかなっていう。だから今回本当発表いただいた中でも、見たときに愕然としたセンターも結構いるんだらうなっていうのは正直あるところで、それ前提で何かこうやっていく、そこから活路を見出していくっていうような発信の仕方であれば、今お話いただいたように、みんなどんどんこれやっていこうよっていうことができたらいいなと思いながら今お話聞いてました。これと真摯に向き合うってことはとても大事なことだと思ってますので。はい、ありがとうございます。

○進行（小澤） はい、ありがとうございます。ちょっと時間の都合で、あとお一方、日高委員、昨年のこの調査項目の検討から携わっていただきましたので。昨年度は来た結果をそっくりそのままセンターにお返しするだけだったんですけども、今年度は一応全国平均との比較みたいなコメントもつけて今回フィードバックをさせていただきました。今藤尾さんがおっしゃったように、ちょっと厳しい結果のところもあったんですけど、もうそこは応援センターの方が、去年私達もぼろくそ言われてたよっていうようなフォローをしていただけたので、これを真摯に受け止めるという場を作っていただいて、こういう形でフィードバックをしたんですけども、昨年からの流れも踏まえてコメントをいただけたらと思います。

○日高委員 はい、ありがとうございます。本当にそうですよね。結果を見てある種ショックを受けるっていう、あのセミナーのときにも実際におっしゃってたセンターさんもありまして、今藤尾さんとかお

話をいただいた通りだと思うんですけど。でも瞬間はショックだと思うんですけども、でもやっぱりこうだったんだ、どうしなきゃいけないんだろうって考えるためには、そこは逃げずに見なきゃいけないっていう部分があるのかなど。ちょっと自分たちの話をするとハローワークも毎年度毎年度満足度調査って求職者と求人者に対しての毎年度やって、でも割とどうしても自分たちでアンケートを配ってるんで、目の前で大体満足って答えてくれそうな人に渡しちゃうとか、やっぱりそういうことがどうしてもあるんですけど。今回この地域に対して聞くっていうのは圏域の中にある事業所に全部ちゃんと配ってやるっていう形で本当に何が出てくるかわからない状態でやるっていうことにすごく価値がある。思ってもみないものが出てきたものもやっぱり自分たちが強くなるための素材になるんだっていう、そういうこともこれまた報告書にも入れていただけたと思うんですけど、もうこれから何かもし自分たち独自にこういうのやっていこうとかっていうふうを考えていただけるセンターがあるときに、あらかじめこういう結果が出るんだっていうのを知っていればそこまでショックを受けずに済むかもしれないですし、こういう分析をしていただいたっていうのは本当にこれも2年目の進化だなというふうに思いますので、本当にありがたいなと思って拝見しました。以上です。

○進行(小澤) ありがとうございます。ではこの議題3の意識調査につきましてはよろしいでしょうか。委員の皆様よろしいでしょうか。それでは、本日の一番重要な議題です。「事業報告書・調査報告書作成にあたっての留意事項について」ということで、委員の皆様からのご意見をいただければというふうに思っております。資料5の「事業報告書の構成(案)」で、これは目次の段階ですけども、事業報告書の1番から7番までは昨年同様、この事業の内容につきまして主に時系列に沿って報告をさせていただきたいというふうに考えております。問題はというか、大切なのは8番のところですね。「事業のまとめ」というところで、一応まだ仮で、「定着支援地域連携の現状について」と、「ナカポツセンターに期待される基幹型の機能・役割について」、そして最後はまだテーマは仮ですけども、「地域のネットワークの連携を就労支援の体制にまで深めていくための提言」といったところで、このまとめのところが調査事業の肝になるのかなというふうに思っておりますが、まず藤尾さんの方から、とりあえず叩きというか現時点でこんなことを想定しているというご説明よろしいでしょうか。

○全就・藤尾 はい、ありがとうございます。このモデル事業を通して得たものをしっかり形にしていこうというのがとても大きなミッションだと思っています。そういった意味でいくと、まずは地域からどう見られてるのかというアンケート結果をまずは踏まえた調査の方ですね、ヒアリングを踏まえた上で、しっかりと今の話にもありましたけれども、今地域がどうなってるのかっていう、我々がどういう位置にいるのか、そういったことをしっかりと把握をした上で、次の段階として先ほどのネットワークの構築できているところであればそれをさらに有効なものにしていく、あるいはないところであればそれを構築していくという、この段階でおそらく自分たちがゼロから始めるのではなくて、いろんなところから情報を得たり、場合によっては近隣県のセンターから応援を得たり、あるいは今であればネットもあるんでそういったものを駆使してこのネットワーク構築を図っていく。次の段階として、これ当日に朝日先生が言っていただきました棚卸しをして、断捨離をして、地域の基幹型を考えていくと。最終的になる形というのは本当に地域地域になると思うんですけども、そこに至るまでの過程っていうのはおそらく同じになるんだろうなっていう気がするんですね。それをうまく落とし込めればいい

など思っていて、そこをそのような流れでやっていくという方向で、皆さんから、いやここをもっとこうした方がいいんじゃないのかというご意見があればこの場でまずいただきたいなっていうのが第一です。よろしくお願いいたします。

○進行(小澤) はい、ありがとうございます。それではここは全ての委員の皆様からご意見をいただければと思っておりますが、先ほどとは逆の順番で、企業の立場の大滝委員から、この調査事業の事業報告にこういった視点とかこういった内容をぜひ含めて欲しいとか、こういうことを期待するといった、もう本当に自由な忌憚のないご意見をいただければと思います。よろしいでしょうか。

○大滝委員 はい。ちょっと気を抜いて聞いていたのでびっくりしてしまいました。そうですね。先日の発表もそうでしたし、今回のアンケート結果も思ったんですけども、こういった視点を企業はまだまだ持っていないなということを感じました。私は王将フードサービスという会社の中で働いている一従業員なので、店舗を出店するとか、そういったところを考えている人間ではないんですけども、事業を起こすときとか支店を出すときに、売上げとか工場の位置とかそういったところで企業は作っていくので、その社会資源とかその地域のサービスっていうところってというのは全く普段知ることがないんですね。私は今回こちらに参加させていただいて聞いていてもまだまだ知らないことばかりだなというのを改めて今日感じています。ただ、障害者雇用がこれだけ活発に行われている中で、地域の資源とか、どんなふうになり立っているのかっていうところを知らないで雇用を進めるとか、定着を進めるっていうところには企業の限界があるんだろうなということも感じました。ですので今回の取組をやっぴりもっともっと企業の方にも伝えていただきたいというのと、いろいろな予算の関係もあるんだと思うんですけど、今回地域を飛び越えての関わり合いということで成功事例がたくさん生まれていってますので、この中にぜひ企業を交えて、さらに深くとか広く取組ができないかなって。そうすることで、私もセンターの成功事例っていうだけではなくて、企業がこういった課題を持っていて、その中で取り組んだらこんなふうになんか上手くなりましたっていうものはぜひ聞いてみたいなと思ってるし、そうすることでもっともっと身近に感じられるのではないかなというので、ちょっと漠然とですけども何とか企業も巻き込んだものをもう少し、もちろん応募者の障害者の方もそうですけども、広くできないかなというのは感じました。はい、以上です。

○進行(小澤) 事例の中でも企業は企業、当事者は当事者みたいな取組ですとか、企業に協力していただいた雇用を前提としない実習ですとか、そういった地元の企業を巻き込んだ取組の事例がありましたので、そこはしっかりと報告書の中にも含めていきたいと思っております。ありがとうございます。続きまして日高さん、よろしいでしょうか。

○日高委員 はい、すいません、ありがとうございます。私もちょっと油断してました。そうですね、その事業のまとめのところが、今年度だけのまとめというよりは2年間やっていただいたことのまとめを多分集約をしていただくような形になるのかなと思っていますし、現状と基幹型の機能・役割についてというのを改めて書いていただいて、その上での提言というものを、少し事業の一つの得られたものとして出していくっていう、そこは非常に大事なポイントなので、ちょっと私は今自分が障害福祉課を離れてしまっているのである意味、何を提言されても何でも言ってしまうので、ちょっと無責任なところは、すいません、あるんですけど、やっぱり実際セミナーの中で実際に取り組まれたセンターさ

んが感じた実感であるとか、あとやっぱりナカポツセンターの立場で参加をいただいているような、セミナーを見ていただいた方のアンケートの自由記述、それからやっぱりナカポツセンターではない方が、地域の関係機関としてナカポツセンターのこともある程度知ってる方もいれば、あまり知りませんでしたっていう方も当然含まれていると、いろんな立場の人が含まれていると思うんですけどやっぱり多少なんかよくわかってないんだろなっていう意見が含まれたりはしますけど、でもやっぱりよくわかってもらえていないからこそ出てくる意見にも耳を傾ける必要があったりすると思いますので、ここの提言の部分もちょっと何か抽象的な言い方で大変恐縮なんですけれども、何か内輪で考えた提言ですみたいな感じに見えないもの、ちゃんとこのモデル事業のやっぱり大事なコンセプトの一つにどうやって地域を知って地域と繋がっていくか、最近私も自分のハローワークの仕事の中で繋がるっていうキーワードは本当に今の時代にとっても必要だなど思いながら口酸っぱく県内各ハローワークに言ったりしてるんですけど、なんかそのちゃんと地域と繋がっていくための提言なんだなっていうことを、ナカポツセンターの方々はもちろんそうですし、この事業報告をそのナカポツセンターじゃない人たちに読んでもらったときに、要はナカポツセンターの内輪の何か基幹型っていうのをどうしていくかっていうのを内輪でやってるんでしょって思われなような、そんな視点から多角的に語っていただくような、そういうこと言うとなんかすごい壮大になりそうで怖いんですけど、ちょっと無責任ながらそんなイメージのものになると、やっぱりもっとその2年間やった価値が上がると思いますし、あとやっぱりモデル事業としてはこの2年目で終わりになると思うんですけど、冒頭藤尾さんがおっしゃっていただいたことを私はすごく嬉しくて、全就ネットとして宿題をもらったような感じで受けとめるって言っていただいて、これ本当に大変この分野のことを真面目にいつも考えていただいている全就ネットさんだからこそ言えることだとも思うんですけど、やっぱりモデル事業やってセミナーとかもやって報告書作って終わりにしないでいただければ、本当にこれはもっともっと事業やった価値があったっていうふう感じられるというふうに思いますので、何か今後そのナカポツセンターの基幹型っていう形を一つ看板にしてじゃないですけども、元々これから地域のためにナカポツセンターっていうのが効果的に役割を発揮していけるようにするためにいろんなプロモーションじゃないですけども、やっていくそのときの材料として、報告書は結構分厚いものにはなっちゃうと思うので報告書自体をなかなか読んでもらうことは難しいかもしれないですけども、この提言のそこだけ抜粋しても例えば地域の人たちに伝えていくのに役立つような、何かそんなものになるとすごくいいなって思ってます。はい。以上です。

○進行(小澤) ありがとうございます。藤尾さん、今日の高さんの提言を受けて。

○全就・藤尾 はい。盛りだくさんだなと思いながら伺ってましたけど、でもおっしゃるように最後に言っていただいたところは結構ポイントだなと思っていて、ここ読んだら全体がわかるっていうことはとても大事なのかなと思ったので、その視点をしっかり持ってやりたいなと思いました。またナカポツセンター以外の人を読んだときにどう捉えるかっていう視点も、今回アンケートで比較的好意的な回答が多かったんですけども。とはいえ、これでナカポツセンターがどんなところわかりましたっていう回答が多かったのも事実なので、そういった面も含めてこの提言がナカポツセンターの内輪ものにならないようにっていうのも、視点としては重要なのかなと思いましたので。はい、ありがとうございます

ざいます。

○進行(小澤) はい、ありがとうございます。そして日高さん、去年は事業報告書一本ということで、あの分厚い報告書だったんですけども、今回は厚労省に提出する事業報告書とは別に、一般公開用のもうちょっとダイジェスト版の調査報告書というのも作る予定になっておりますので、そちらの方で今おっしゃっていただいたような内輪ではない地域の人にも見ていただいて恥ずかしくないような内容をピックアップしていきたいというふうに一応考えております。ご提案ありがとうございます。

○日高委員 ありがとうございます。すごくいいと思います。はい、もうぜひ販促グッズじゃないですけど、ナカポツセンターをみんなに知ってもらう素材として、ぜひぜひご活用いただけるとすごくいいと思います。

○進行(小澤) はい、ありがとうございます。もう藤尾さんのハードルがどんどん上がってますけれども。続きまして、矢野さんも去年に引き続きですので、事業報告書に含める視点とか内容についてご意見いただけますでしょうか。

○矢野委員 はい。先に言っときますけど全くうまくまとめられる気がしない中で話します。とりあえずやっぱりアンケート、あのセミナーのアンケートを見させてもらったときに僕1個すごく残念だなと思ったのが、意見の中で基幹型のナカポツセンターの役割って何なの?っていうような回答されてる方がいらっしまったのがすごく残念だなというか。いや、あれを見たときに、自分でやっぱりそこを想像しよう、イメージしようっていうふうに思ったんですよね。何が言いたいかっていうと、やっぱりその地域でそこにある地域資源とかによって、若干ナカポツセンターの基幹型のその役割ってのは変わってくると思うので、きっとこの事業のまとめのところでも、この役割とか機能とかっていうのを、これですよっていう言い切るってのはなかなか難しいのかなというふうに思っています。なのでやっぱり今回、応援センターだったりとか実施センターとか、そういうナカポツセンター事業所の成功事例みたいな、この地域ではこういうふうにしたのがすごくハマりましたよっていうところが、まとめに来るといような感じのイメージなのかなというふうに思っています。なので、なかなか難しいなと思ってですね、どういふうなまとめにすると、これを見た皆さんが納得して自分たちはこうしていこうって思うのかってのはすごく難しいんですけども、ただこういう役割ですよっていうのを決め付けて打ち出すっていうのは、なかなかその地域によって異なってくるわけだから、やっぱりこの地域ではこういったナカポツセンターの役割があって、こういうふうにしたのはうまくいきましたっていう、今回のモデル事業所みたいなところの成功事例みたいなのを載せていくと、自分の地域はこんな感じ、同じような規模の地域だから自分たちはちょっとこれを真似していこうっていうふうに見たとき見て取れるのかなというふうに思ったので、成功事例みたいなのを載せていくっていうのがすごくわかりやすくいいのかなというふうに個人的には思いました。はい。以上です。できればまたいろいろお話を伺いたいです。ありがとうございます。

○進行(小澤) はい、ありがとうございました。では続きまして酒井大介委員、移行・定着の立場を超えて、よろしくをお願いします。

○酒井委員 いやあ、もう藤尾さんが大体これ考えてるんじゃないですか。難しいね。今ベースはな

んていうかな、提言までちょっとここわかんないですけど、多分みんなが知りたいのはその基幹型っていうのが結局具体的にどういうことなのかっていうのはその地域によっても違うしわかりにくいところもあると思うんですけども。基幹型の役割の一つに例えばネットワーク構築っていうのがあると思うんですけども、そのネットワークのナカポツセンターが中核を担うなんていうのはもう10年も前、15年も前から、そこってあまり変わってないと思うんですよ。ただその周囲が変わってるじゃないですか。その周囲が変わってる中で、具体的にネットワーク構築のためにどんな視点でどんな取組が考えられるのかっていう具体的なそういう考えられる取組例みたいなのがわかるといいのかな。例えばさっきの意識調査の中で冒頭で話したことと重複するかもしれませんが、10年15年前と比べて、やっぱり地域の資源、その中でも就労系サービスだったら、もうあんな人、昔はB型なんかなかったのに、もうこれだけたくさんB型がある中で、就労支援の経験がない事業所もあれだけある中で就労のネットワークをどう作るか、例えばそれはアセスメント一つにとってもそうだし、利用者さんの一般就労への喚起っていうことでのネットワークを構築するっていうことなんかもそうなんだと思いますし、先ほどの企業の方のお話、大滝さんのお話でもありました10年15年前と比べて地域の障害者雇用企業も変わってると思うし、そこで今もやられてると思うし、10年15年雇用率が上がる中で新たにいろいろ取り組まれた事業所もあったり、今から取り組もうとされてる、だからちょっとレベルが違うんだと思いますけども、そういうところの雇用のノウハウ、雇用管理のノウハウの情報の共有をどう構築するかとか、こうやってそれを実際その言葉にしたりあるいは実行するって結構難しいんですけども、なんかそういう具体的にこういうふうに取り組んだらいいのかななんていうイメージがこの報告書を読む方が、例えばの話ですけどもイメージが持てる報告書になれば、みんなすごい助かるんじゃないでしょうか。すいません、こんな回答でした。

○進行(小澤) はい、ありがとうございます。ナカポツセンターの立場で野口委員からも願います。

○野口委員 はい。私もナカポツセンターの立場なので今回のモデル事業の取組は非常に関心高く関わりを持たせていただきました。ですからこの成果物も非常に楽しみにしております。ナカポツセンターの基幹型も地域の特徴も様々ですし、もう障害者雇用とか働き方とか障害の特性も多様化してるので、必然的に地域のニーズも変わってくる中での好結果の基幹型っていう取組ですね。ですから今回その製本ができてモデル事業として全国に横展開して発信していこうと思いますけども、一つの元の資料にはなってくると思います。もちろんそれ以外にも新しい取組とかアイデアもいっぱいあると思いますので、ぜひナカポツセンターも数年前から点検評価調書もできて偏差値も求められるようになりました。なので実績も大切ですし、いろんな取組も求められてるっていうのが今回モデル事業でよくわかったと思いますので、結構ナカポツセンターの立場としては国が求めていること、あと地域が求めていること、いろんなところを加味しながら、目指すべき方法、ベクトルを地域の特徴に合わせて組立てはもうナカポツセンターでしていく、そのための一つの今回指標になったと思いますので、ぜひこの報告書は全国のナカポツセンターに広げていきたいと思ってるんです。以上です。

○進行(小澤) はい、ありがとうございます。



○全就・藤尾 島村先生と朝日先生のお話を聞く前に一旦整理させていただいていいですか。この上に今聞いてしまうと頭がパンクしてるので、すいません、今皆さんのお話を聞いていて、やっぱり去年のモデル事業を始めたときのことをちょっと思い出したんですね。基幹型って地域によって違うから何か類型別にできないだろうかねっていうのが去年モデル事業の確か報告書もそういった形で、こういった地域だったらこういった基幹、こういった地域だったらこういった基幹っていうふうに、確か出していたと思うんですよ。今矢野さんの方からも成功事例とか、酒井さんの方からやっぱり事情にあったっていうところでご意見いただいている、野口さんからも同じような内容で今お話いただいている、今回このモデル事業やってみてちょっと思ったのが、類型の中にまた類型があるねっていう、例えば水戸なんかで言うと、いや移行が60ってすごいなと思ったけど半分以上はB型の規制がかかっているから形だけ移行だよみたいなのところがあって、就労者が出てないとか、さっきの島村先生の話ではもう本当に1人しかこの時間に利用者がいない、そんな中でのナカポツセンターのあり方があるよって、なんかこうまだまだ果てが見えてないっていうのを改めて感じたんですよ。そうなってくると具体例はすごくいいのかなと思うんですけど、類型に当てはめるってやっぱり難しいなって今回更に思ったので、やっぱり皆さんが今言われてる地域把握、これも1回やったからいいよじゃなくてやっぱり継続して行ってその変化に対応していくっていうこと。その中でも自分たちの立ち位置をやっぱり検証していくことがとても大事なんだなというふうに思ったので、今いただいた意見の中で感じたところを一旦お伝えさせていただきます。すいません、お待たせしました。島村先生、よろしくお願ひします。

○島村委員 ちょっと違う角度で話した方がいいかなと思ったんだけど、さっきの話、國吉君の話ともちょっと相通じるかもしれないけれど、いわゆるネットワークかなと思って。ナカポツセンターが作るネットワークって何だろうっていうところを一つ掘り下げたいなと思っています。というのは、実は今この同時の時間帯で障害相談支援専門員の指導者養成研修やってるんですよ。今それ抜けてこっち来てるんだけど、そこで朝に話したのがあって、それ何を話したかっていうと実は相談支援が生活支援のコーディネートをしっかりできない状況がやっぱりあって、それが結局就労支援の定着支援、特に定着支援をする際にネックになっちゃっているという実態があるよ。その負担が全部ナカポツセンターにかかるんだよね。結局ナカポツセンターに投げとけてそういう話になるんだよねって話をしたんですよ。だからこれを簡単に言えば、そういった相談支援であるとか生活支援系の事業所さんとかといったところとの関係作りをどうするんだろうっていう、そういう意味のネットワークっていうところをもうちょっともう1回考えた方がいい。今回のこの事業の中ではその切り込みはそんなになかったかもしれないけど、どう言いますかね、調査の中で國吉君が出してたように案外そこナカポツセンター知りませんが多かったじゃないですか。知りませんっていう、そのB型は知りませんかっていうことがもう普通に言われちゃうっていうのは、やっぱりその基本的なところがまだまだ足りないんじゃないかっていうことに繋がってて、ここはやっぱりそれを踏まえて今後のネットワーク作りとか、協議会なんかを使ったものになると思うんだけど、そういったものをもう少し推進していこうっていうような提言に結びつけてもいいのかなって思いました。はい、以上です。

○進行(小澤) はい、ありがとうございます。朝日先生、よろしくお願ひいたします。

○朝日委員 はい、私もちょっと違う観点からというか、表現をどういうふうに出していくかっていう観点からちょっとだけ述べたいと思います。まずちょっと気がついたのが報告書案の8の「事業のまとめ」のところが今中心に議論されてると思うんですけど、8.3が仮題なので、これからでいいと思うんですが、「地域のネットワーク連携を就労支援の体制にまで深めていくための提言」って書いてありますけども、ちょっとまだ体制を深めるっていうよりは、もしかすると「地域のネットワーク連携を実効ある就労支援の体制にまで変えていくための提言」みたいな方が、深いとか浅いとか高めるとか低いとかっていうよりは何かそういう方がいいのかなと思って、これ今ほとんど思いつきなんですけども、その方が皆さんに刺さるんじゃないかなっていう気がしましたので。実効ある就労支援の体制にまで変えていくための提言だというふうなぐらいの、何とかトランスフォームの思いで変えていくんだっていう、そのような意思があってもいいかなと思いました。それで内容的なところなんですけども、これは先ほどの皆さんのご意見とも一致するんですが、報告書として提言として出すっていうことは、それを受け止める人が読んでいただかないとあんまり意味がないので、そのときの工夫がいくつかあると思いました。モデル事例のところできっと私もバディとかいろんなこと言ってしまいましたけども、やっぱり組み合わせによるところが大きいものの、ちょっとそれを事情を知らない人が見たときに、この組み合わせは何がポイントだったんだろうな。ここがポイントみたいところを、もしかすると事例のこのモデルの取組っていうのはまさに事例でもありますので、この事例のポイントは何かっていう、吹き出しでもコラムでもいいので何かこう添えていくと、あの全部読まなくてもそこが見れるみたいな、そんなような表現の方法があるかなというふうに思いました。それから先ほどから出ているように、例えばこれ指標を示したりそういうような役割で横展開されていくと思うんですけども、チェックリストになっちゃうとちょっとつまらないのかなという、うちのセンターはねとかっていうことではなくて、もう少しアイデア集的な建付けでもいいんじゃないかなっていうことをすごく感じたところです。そうすると、ここからちょっとふざけてるので聞き流していただきたいんですけども、例えばこんな基幹型になりたいとかね、そういうような、あんまり何か何箇条みたいになると、またチェックリストみたいになっちゃうんでどうかなと思うんですけど、こんな基幹型になりたいっていうようなフレーズで引き付けるようなこともあっていいと思いますし、これは本当の冗談で、こんなナカポツセンターは避けた方がいいのがね、ちょっと冗談ですけども、要はポイントがすごくわかりやすく、とりあえずさっきどなたかもおっしゃっていたように、そこをまずちょっと見てね、これを少し深く考えるためには、ちゃんとエビデンスがあるんだとか、モデル事業の裏付けがあるんだっていうところにグイグイと引き込んでいくというような表現・表出の方法もあるかなということでお話をさせていただきました。以上でございます。

○進行(小澤) はい、ありがとうございました。検討会委員の皆様のご意見を受けまして、委託元の鈴木専門官いかがでしょうか。

○鈴木委員 ありがとうございます。皆さんのこの議論が始まる時に私も急いでチェックしてたのが今回のこのモデル事業の仕様書ってどういう書き方・目的とか、事業内容ってあるのかなっていうのをちょっとチェックしました。ちょうど私も次年度に向けて仕様書作ったりもしてたので、なんかその辺の仕様書にける思いだったりとか、もしくは受託する形のこの仕様書を受けたときのエントリ

一の仕方、プレゼンの仕方っていうところがどうだったのかなっていうのを確認してたところです。やっぱり、業務内容の(1)事業内容の中の1番目の丸のところに、ナカポツセンターにおける以下の取組について、取組にあたって課題を分析して基幹型の機能・役割を整理するっていうのが1つ目であって、いわゆるこれが8.2のナカポツセンターの期待される基幹型の機能とか役割についていうところなのかなと思いついて、おそらくそのナカポツセンターの期待される基幹型の機能・役割っていうところが、多分今回のセミナーとか2年間の取組を通じて藤尾さんのお話にもあった通り、それをここですよって示すのが逆に難しくさせたというか、いろんな形が見えてきたがゆえにここっていうのをどこまで取ろうかって悩まれたのかな。なので8.1の定着の連携の現状についてはきっと調査とかで取れたと思いますし、8.3とかのそのネットワークとか体制を深めていくための提言というのはこんな形あんな形、こんな地域でこんなやり方っていうのが出せるので、おそらく私が受託した値としてこの報告書を上げたりするときには8.2にすごく悩むし、おそらくそこにかけてきた時間というか議論してきた時間も意外と少なかったのかな。なので、ここからの時間で多分勝負していくのはこの8.2でここをどう書くか、どう決めるかっていうところが、何か勝負になってくるのかなと思いついて聞いてました。そのときに、きっとナカポツセンターの1丁目1番地って何なんだろうっていう、多分きっとここは外しちゃいけないよねって場所がもしかしたらやっぱりあるかもしれないですし、多分ここにいらっしゃる方たちの、もう本当にナカポツセンターをずっと見てこられた方たちで、やっぱりナカポツセンターってこうじゃなきゃ、こうあるべきだよっていうのがきっとあると思うんですね。そこはそこで、もう何かそういう示し方して、まずはここはみんな絶対外さないでね、ただ、そこには地域性とか社会資源だったりとか、いろんな環境による違いとかもあるからそこは地域ごとのおそらく藤尾さんが言った何パターンかのところはあっても、でも自分たち、やっぱここがまずちゃんとぶらさずにいこうってところを、それが逆にナカポツセンターのメンバーだけでなく他の人たちにも知れ渡っていけば、ナカポツセンターってこうなんだとか、なんかより理解とか繋がりが深まっていくのかなと思ってました。ただこれは本当にこれをどうまとめるのかはすごい難しいところなんですけども、でも何かそこが何らかの形で示していけるといいなと思いついて聞いてました。はい、以上です。

○進行(小澤) はい、ありがとうございます。藤尾さん、いかがでしょうか。

○全就・藤尾 はい、皆さんありがとうございます。今島村先生、朝日先生、鈴木さんのお話聞いていく中で、やっぱり一番大事にしておかなきゃいけないのって何か公平中立のところかなと僕はまずは思っていて、この障害福祉サービスと連携をとっていく中でそこがぶれると、いろんなことがおかしくなるのかなと思ってらるんですね。そういった意味でいくと、さっき島村先生のお話の中にあつた相談との絡みであつたりとか、もっと言うと、自分たちの普段やり取りしてないところをなくしていく努力、やり取りじゃないな、知らないとか、なんかいいところだけとかやりやすいところだけやってる状況っていうのが、いつの間にかガラパゴスじゃないですけども、何かこれでいいんだっていう変なものを作っちゃうのかなと思うので、これは多分調査の中で厳しい意見もらうっていうのに繋がってくるんですけども、やっぱり全ての人たちに対してしっかりと繋がりがながら話を聞くっていう、やり取りをするっていうのがまず大前提になきゃ駄目なんだろうなっていうのを話を聞いてまず思いました。そ

れに関していうと今回ビフォーアフターがいくつかあるんですよ、モデル事業の中に。実際にそれに取り組んでこう変わったとか。なので、これモデル事業やったセンターがOKであればダイジェスト版に何かうちのセンター効果ありましたみたいなのが載つけられたらすごい面白いなって、さっき朝日先生の話聞きながら思っていたんですね。最後鈴木さんが言われたやっぱりどう決めるかっていうところなんですけれども、どうなきゃいけないというのは無理だろうなと思いつつも、どういうことを欠かしちゃいけないはできると思うんですよ。要はこういうことやらないってのはまずくないかっていう、その欠かしちゃいけない取組ってというのは、別に地域の資源がなければ全部やんなきゃいけないわけじゃないんですけれども、少なくともこういったことには取り組んでいかなければいけないよねっていう最低限のものってのはここで共有ができるんじゃないかなと思うので、そこから自分たちの役割作り上げていくんだよってというような方向では、何かうまくまとめられるんじゃないかなって。それがもっと見えたのが今回のこのモデル事業だと思っているので、これやってなかったら嘘だよねとか、これやってなかったらなんか自己満足で終わっちゃうよねとか、そこをうまく入れていけないかなとは思いました。逆にネガティブなことを入れていってしまうと、本当にこれ読んだ人が何で何でこれでいいじゃないか、できないの当たり前じゃないかみたいになってしまうので、そうではなくて、向かうべき方向性でないものを作っていくっていうのを、この起爆剤になる役割っていうのも当然地域によってはあると思っているので、その辺がうまく落とし込めたいかなと。出てないものを作っていくときにはやっぱりネットワークを持ってなければできないですし、いろんな意味でこのネットワークがある前提でこういったことができるよね、こういうことでやんなきゃいけないよねっていうのに何かうまく繋げていけるといいのかなと思いました。できるよねっていうものの中に忘れちゃいけない断捨離の話も入ってますので、何でもやればいいんだよって話ではなくてっていうところですね。確認を取りながらできたらいいかなというふうにお三方の話を聞いていて思いました。ありがとうございます。

○進行(小澤) はい、ありがとうございます。

○日高委員 すいません、今皆さんのお話を聞いていて、ちょっとその手前からいろいろまさに基幹型の機能・役割っていうことを最終的にこの事業の中でまさにこの8.2の鈴木さんもおっしゃっていただいた部分をどういうふうにまとめていくのかっていうところをちょっと自分が考えていたんですけど、藤尾さんも今おっしゃった通り、これが基幹型です、これが機能・役割ですっていう、これですっていう正解はやっぱりなくて、ある意味これさえやってりゃオーケーみたいなことって絶対ないんだと思うので、そこを提示しにいくっていうのはいろんな方のリスクも払うと思うので誤解も生むと思いますし、そこはそうじゃないだろうなっていうところ。何かでもこの事業やったんだから、なんか出てくるはずだよねって思ったときに、やっぱり何でしょうね、最終的に何をやっていくのかは多分地域ごとに違うし、さっき酒井さんも言われたように周りの環境とかいくらでも変わっていくし制度も変わっていくし、ある意味どこまでやったって最終的なゴールこれですって絶対いかなと思うんですけど、なんか課題があることに対してやっていこうってなったときのいろんなフェーズとかプロセスとか、なんか歩む道みたいな、やっぱりこういうことは押さええてやっていかなきゃいけない、これやったら次はこれやっていかなきゃいけない。多分一番最初の一番何でしょうね、スタートラインは地域のことを知ってということなんだと絶対思うんですけど、その知った後に次どうしていくのかっていうところは

いろんな枝分れはあるにしても、こういう階層こういう段階ってきつと含んでいるし実際モデルでやっていただいた1、2年間、あとそれぞれやっていただいた中でやっぱりこういうモデルではこういうちゃんとフェーズを踏んでるよねとか、なんかそういうのってある程度ポイントになるところって、もしかして見えてきてるんじゃないかなという感じはするので、基幹型の機能・役割なんていうのは、What's を書くんじゃないでして How to じゃないですけど、こういうふうなやり方みたいなそういうものが少しでも出せると、少しは整理をしたというふうに言ってもいいのかなというふうにはちょっと感じてます。やっぱりまたきつと何かやらなきゃいけないってなって、また次でもここまで次やりたいと思ってとなっても、そこまでできたけどまた次の課題が見えてきたとか多分ずっとサイクルになって続いていたりもすると思うんですけど、そういうものなんだよっていうことを提示ができないのかなっていうのは少し感じたところです。なんかどうしてもうちの、それこそまたハローワークの話をしてしまうと、すぐ PDCA サイクルとかね、安っぽく言ってしまって何かちょっとそういう安っぽいものにあんまりして欲しくないなっていう気持ちもあったりはするんですけど。はい、そんなところはちょっと思っておりました。あとちょっとすいません、これはちょっと今の議論から外れてしまうかもしれないので申し訳ないんですけど、これは藤尾さんにまたお願い事項みたいになるんですけど、ダイジェスト版を作って出していただく予定もあるっていう話があったじゃないですか。そこで、もちろんいろんなやってみようとかって思っていたけど一つでも二つでも出てきたらすごくいいと思うんですけど、実際にこうやって見ましたよとか、やってみようと思いますみたいなレポートじゃないですけど、なんかちょっと思ったら、いろいろなんかレシピ動画とかあったらその「つくれば」みたいなあるじゃないですか。実際やってみました美味しかったですとか、こんなアレンジしてみましたこれも美味しかったですよとかあるじゃないですか、なんかそういうのって全就ネットさんで集めてみたりとか、その集める呼びかけを要はそのダイジェスト版に最後なんか告知みたいなのをに入れて、何かぜひお寄せくださいみたいな、なんかそんなのってやったらまた広がり繋がりも出てくるのかななんて思ったので、ちょっとこれはすいません、思いつきです。以上です。

○進行(小澤) ありがとうございます。今回提出する3月29日の報告書には「つくれば」はちょっと載せられませんが、その告知は載せるようにというふうに、今いいアイデアをいただけたかと思えます。それで、すいません、先ほど私が説明を端折ってしまっていて、内容の1番から7番までは昨年同様ですと言ってしまったんですけども、実は3番のところが去年は悉皆アンケートの分析ということだったんですけども、モデル調査事業の前段として全就が独自で行った悉皆アンケートというのを書いていたんですけども、今年は前年度事業の分析・再精査ということで、昨年度の10センターのモデル的取組3つのポイントキーワードみたいなものを抜き出して、まずそこを提示しようと思っておりましたので、その際に皆様からいただいたご意見を参考にしながらちょっと書き方は工夫をしたいなというふうに思っております。それから第一回検討会のときに、ピフォー・アフターでちゃんと自己評価しないということを朝日先生と島村先生からおっしゃっていただいたので、今回の事業報告セミナーの中ではリーダーチャートを作っていたかきまして、このモデル事業でどういう変化があったかということをご自己申告していただいたんですけども、その内容もこの事業報告の中には取り入れて、先ほどご提言がありました「うちのセンター変わりました」みたいな、去年の「私たちの

センターはこういうセンターです」というキャッチフレーズに付け加えるような形でやっていけたらなということも今ご意見をいただいて事務局としても気がついたところです。事業報告書、そしてそのダイジェスト版の調査報告書の内容につきまして、本日は時間の関係でご意見ここまでですけれども、メール、お電話等でどんどんアイデアをいただければというふうに思っておりますので、どうぞよろしく願いいたします。それから、先日のこの検討会案内メールでも甚だ勝手なお願いを申し上げておりましたが、この事業報告書参考資料9.8「検討会委員からのメッセージ」ということで、もし可能でしたら委員の皆様から大体400字～500字程度の、このモデル調査事業に絡めて基幹型のナカポツセンターに対する期待とかエールを文章で頂戴できればというふうに、甚だ勝手ながら考えております。ちょっと納期の関係で3月21日に第一稿をいただけると大変ありがたいのですが、ご無理のない範囲でご協力をお願いできればと思っております。様式等は全く自由でございますので、この定着支援地域連携に係る調査事業、そして基幹型のナカポツセンターについてのご意見とかまとめていただくと大変ありがたいです。すいません、ちょっと駆け足の進行になってしまいましたけれども、本日の議題は一応ここまでで終了したいと思います。最後に皆様から一言ずつ、この事業に関わっていただきまして、この後まだ報告書の取りまとめが残っておりますけれども、今後の全国就業支援ネットワークに対する注文も含めてのご意見をいただければと思っております。また朝日先生からよろしいでしょうか。

○朝日委員 はい、ありがとうございます。ちょっと簡単な質問で400字～500字のものは、せめて、ですます調か、である調かどっちがいいか、それもどっちでもいいかです。

○進行(小澤) どちらでも良いです。事業報告書の方は並べて掲載させていただきまして、ダイジェスト版の一般公開用の調査報告書の方にはちょっとコラムみたいな形でページごとにちょっと差し込むようなことを今のところは想定しております。

○朝日委員 はい、ありがとうございました。本当に一言だけ、今日もありがとうございました。いろんな刺激を受けて、私自身が何か皆さんにスーパービジョンを受けてるような感じです。ナカポツセンターのことはナカポツセンターと申し上げましたけども、その中に私も混ぜていただいていることをとても嬉しく思っております。引き続きよろしく願いします。以上でございます。

○進行(小澤) ありがとうございます。島村先生、お願いします。

○島村先生 いやいや、僕も学びになりました。特に今、実は定着の研究事業も並行して進めてるもんだから、ストレートの見合いで、やっぱナカポツセンターがかなり言葉わるいけど犠牲になってるっていう状況が、定着やって出てくるんですね。だから何とかさっき言った棚卸して、楽になってもらいたいっていうか、整理したいなって思いが僕は強いですね。そういう意味では今回関わらせてもらってよかったかなと思ってます。よろしく願いします。

○進行(小澤) はい、ありがとうございます。酒井大介委員、お願いします。

○酒井委員 はい、お世話になりました。ナカポツセンターと移行支援の連携っていうのはもう欠かせないですし、欠かせないんですけども課題もいろいろまだまだあってということで、どう連携していくことが地域にとって有益なのか、一緒にこれからも全国就業さんと一緒に考えていきたいと思えます。ありがとうございます。

○進行(小澤) ありがとうございます。矢野委員、お願いします。

○矢野委員 ありがとうございます。そうですね、とりあえずこのメッセージのところを今年1年間の私の全てをかけて400字にまとめたいというふうに思っていますのでよろしくお願いします。やっぱり相談とナカポツセンターの関わりってのはすごく大事だっていうのも重々承知しておりますので、この先良い連携を図っていきながら、良い地域を作っていきたいと思っています。またいろいろと教えてください。ありがとうございました。

○進行(小澤) ありがとうございます。日高さん、お願いします。

○日高委員 はい、すいません。今日は本当にいろいろと好き勝手なことを言わせていただきましたけれども、ありがとうございます。私元々労働行政をずっとやってきていて2年間この事業も含めてですけれども、障害福祉の業界の皆さんに本当にお世話になって、いつもこの会議もそうですし、この間のセミナーもそうですし、本当にいつも勉強になるし、刺激をもらえるし全国いろんなところに機関があるって意味ではハローワークはもちろんそうなんですが、やっぱりナカポツセンターと日々連携協力をさせていただいてるんですけども、なんかお互いに切磋琢磨しながらじゃないですけども、自分たちもやっぱり今いろんな予算の面と人事の面とか組織の面とかいろんな曲がり角に来ていろいろ難しい状況があるっていうのも結構共通するところもあるななんて、今日改めて感じましたし、そういう中で自分たちは国の労働行政としていろいろ本当にやらなきゃいけないこととか、ナカポツセンターさんの事業の面でももっともっと考えなきゃいけないことが本当にたくさんあるっていうことは常日頃痛感してますので、今日はいろんな話を聞いたことはまた自分の中でもしっかりここに活かしていければなというふうに思ってますし、あとやっぱり一つの現場に出てきてすごく感じるのは雇用と福祉の連携っていう話を私がしたときもその議論がワーツと波が来たところでやらせていただいて、特に雇用側の人たちは、いや福祉とちゃんと連携なんて障害の分野で当たり前やってますよって言うんですけど、いやでもなんか何が足りないんだろうって思ったときに、現場やっぱりわからない部分が正直あったんですけど、私も現場に来て、もちろん連携はしているし、現場の人たちはハローワークの担当もナカポツセンターの人も各事業所の人みんな一生懸命やってるんですけど、でもやっぱり中央で議論してきたときのような、声としての連携をもっと強めてもっと深めていかなきゃいけないっていうところはなかなか現場ではちょっと感覚がまだまだついてないんだなっていうのも、例えば労働局の担当の人たちとか話してもやっぱりすごく感じるんで、そこをどうやって変えていくのかっていうのはちょっと自分の宿題にまたさせてもらいたいと思います。本当にありがとうございました。

○進行(小澤) ありがとうございます。大滝委員、お願いします。

○大滝委員 はい。先ほど日高さんのお話であった真似てパクリっていうのは私もすごく好きなやり方なので、今回紹介いただいた内容はちょっといくつか取り入れて、ぜひうちの成功事例としてもどこかでまたお話できたらと思いました。そのときは、この回からスタートしてるというのは皆さん心の中で思っただけならなと思います。それと今回この調査事業に関わらせていただいて、いい意味でナカポツセンターさんを一括りにしないで付き合っていくっていうことを学ばせていただきました。やっぱりこちらからも受け身ではなくて自分たちの役割は何かなとか、本当に必要なところは助けて

もらいたいし、そういったところをこれから築いていきたいなということは感じました。ありがとうございました。

○進行(小澤) ありがとうございます。では全就の役員でもあります野口委員、お願いいたします。

○野口委員 はい、ありがとうございます。そうですね、ナカポツセンターも20年経過する中で今回のモデル事業に携わらせていただきまして、改めて確かに課題もありつつ、何でも屋っていう表現もされますけども、改めてナカポツセンターの重要さとか、地域の求められる位置づけとか、ある意味やっぱりやりがいを感じているところです。改めてですね、ナカポツセンターは楽しい、やりがいもあるなっていうのを私も就業支援担当者の1人として改めて感じたところです。今回の事業では本当に皆様お世話になりました。ありがとうございました。

○進行(小澤) ありがとうございます。委託者を代表して鈴木専門官、お願いいたします。

○鈴木委員 はい、すごく勉強になりましたし、楽しかったです。はい、何よりもやっぱりこういう皆さんとお話するときが一番元気もらえるというか。なのでまた会えるときを楽しみに、はい、ありがとうございます。

○進行(小澤) はい、ありがとうございます。実施事業者からも一言ずつ。野路さんすみません、短めをお願いします。

○全就・野路 はい、短めだとわかってますけど、爆弾するつもりはないんです。できたら島村先生にその棚卸しシートみたいのをちょっと作っていただいて付録にダイジェスト版に載せてあげたりとか、あとその地域のアセスメントシートみたいな、自分達の棚卸しをするためのシート、またそういったものがあって、且つできたら意識調査、これを同じ調査をデータ共有するから取ってくださいと、同じようにやってみてくださいというふうに自分たちの棚卸しするための、何かその付録みたいのがこの報告書にあつたらですね、ちょっとやってみようかなと。ここでこれがまたこの事業で終わりという形にならないように続けていけたらなというふうに主催者側としても思ってますので、引き続きよろしくお願いいたします。

○進行(小澤) 打ち合わせにない発言ありがとうございました。酒井さんです。

○全就・酒井 はい、ありがとうございました。この事業を昨年と今年度2年間取らせてもらってすごく本当に良かったなと思います。全就はナカポツセンターの団体ではないんですけども正会員の8割はナカポツセンターっていうことをやっぱりナカポツセンター中心にずっとやってきて、ナカポツセンターのあり方を考えるってことをもう20年ぐらいずっとやってきてるんですが、でも、やってきてたつもりでも意外と全然やっぱりできてなかったんだなっていうのを実はこの事業を通して改めてすごく、藤尾さんとも言ってますけど痛感しているところです。本当にモデルを示すのと同時にそれを通してやっぱりナカポツセンターにどう覚悟を持ってもらうかかなっていうふうに思ってるので、福祉サービスの質ってのがすごく問われてます。やっぱりナカポツセンターも337センター様々でやっぱりナカポツセンターの質みたいなことも問われてるので、最終全てのナカポツセンターがどう覚悟を持てるかなというふうには思っています。はい、以上です。

○進行(小澤) はい、では最後に藤尾さん、お願いいたします。

○全就・藤尾 はい、皆さん本当にありがとうございました。今回この事業を通して今酒井さんも言



ってましたけども、確かにわかってなかったなって、2年間の事業の中でもこうだろうなと思ってる想像をどんどん超えてくるというか、ぶっこわしてくるんだなっていうのを本当に痛感したところです。さっき野口さんも言ってましたけれども、こんな楽しい仕事ないよねって、やっぱりみんなが思えるような、そこに向かっていくような報告書にしたいなって、最後はそこに繋げたいなと思ってるんですね。そのためには苦しいって言うのは何か独りよがりなんじゃないのとか、何かもっともっと周りに一緒にやってくれる人いるんじゃないのとか、何かそういうことも含めて、このプロセスを踏んだら今日皆さんからいただいた意見を報告書の中にしっかりと盛り込んでですね、これを読んでこれ取り組んだらこんなにさらに楽しくなったよと、地域良くなったよっていうものに繋がるような、そんなものにしていきたいなと思ったのと、全就としては冒頭宿題をいただいたというお話しましたがけれども、本当にこれをきっかけに我々がどういふふうに活動していくのかっていうことをもう1回、我々の活動自体の棚卸しじゃないですけども、しっかり見直して全国に寄与する取組というのを再度考えながら進めていきたいなということを確認する機会になりました。本当に皆さん一年間ありがとうございました。

○進行(小澤) ありがとうございました。拙い進行で5分超過してしまいましたけれども、お忙しいところ本日はどうもありがとうございました。また大変恐縮ですがメッセージの方のご協力もよろしく願いいたします。それではこれにて第二回検討会を終了したいと思います。皆様どうもありがとうございました。

○参加者 ありがとうございました。

